

血濡少女のヒーロー？アカデミア

夏秋冬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『個性』という超常の力が当たり前の世界で、主人公♀が運命に抗ったり抗えなかつたりする話です。

拙い文ですが、よろしくお願ひします。

目次

| | |
|-------------------------|-----|
| Prologue:1 | 1 |
| Prologue:2 | 7 |
| Prologue:終 | 11 |
| 第1話 血濡少女とPlus Ultra!!! | 14 |
| 第2話 血濡少女と初登校 | 27 |
| 第3話 血濡少女と個性把握テスト | 33 |
| 第4話 血濡少女と「私が来る!!」 | 43 |
| 第5話 血濡少女と戦闘訓練 前編 | 49 |
| 第6話 血塗少女と戦闘訓練 後編 | 55 |
| 第7話 血濡少女と紅さす影 | 61 |
| 第8話 血濡少女と記者と委員長 | 65 |
| 第9話 血濡少女と初めてのUSJ:1 | 72 |
| 第10話 血濡少女と初めてのUSJ:2 | 80 |
| 第11話 血濡少女と初めてのUSJ:3 | 86 |
| 第12話 血濡少女と初めてのUSJ:4 | 94 |
| 第13話 血濡少女と初めてのUSJ:エピローグ | 100 |
| 第14話 血濡少女と初めてのUSJ:EXTRA | 108 |
| 第15話 血濡少女とUSJからの帰宅 | 113 |
| 第16話 血濡少女と体育祭:Prologue | 119 |
| 第17話 血濡少女と体育祭:第一種目 前編 | 128 |
| 第18話 血濡少女と体育祭 第一種目 後編 | 135 |
| 第19話 血濡少女と体育祭 第二種目:1 | 143 |
| 第20話 血濡少女と体育祭 第二種目:2 | 152 |
| 第21話 血濡少女と体育祭 第二種目:3 | 158 |

| | | | |
|------|----------------|--------|-----|
| 第22話 | 血濡少女と体育祭 | 第二種目：4 | 164 |
| 第23話 | 血濡少女と体育祭 | 昼休み | 172 |
| 第24話 | 血濡少女と体育祭 | 幕間 | 179 |
| 第25話 | 血濡少女と体育祭 | 最終種目：1 | 185 |
| 第26話 | 血濡少女と体育祭 | 最終種目：2 | 196 |
| 第27話 | 血濡少女と体育祭 | 最終種目：3 | 208 |
| 第28話 | 血濡少女と体育祭 | 最終種目：4 | 216 |
| 第29話 | 血濡少女と体育祭：最終話 | | 225 |
| 第30話 | 血濡少女とヒーローネーム | | 233 |
| 第31話 | 血濡少女と職場体験先 | | 242 |
| 第32話 | 血濡少女と職場体験 | | 251 |
| 第33話 | 血濡少女とラビットヒーロー | | 260 |
| 第34話 | 血濡少女と苦難 | | 265 |
| 第35話 | 血塗少女と初めてのパトロール | | 274 |
| 第36話 | 血濡少女と保水事件 | 1 | 284 |
| 第37話 | 血濡少女と保須事件 | 2 | 294 |
| 第38話 | 血濡少女と保須事件 | 3 | 304 |
| 第39話 | 血濡少女と保須事件 | 4 | 310 |
| 第40話 | 血濡少女と保須事件 | 5 | 315 |

Prologue : 1

深く暗い闇の中、私は揺蕩う。

何も聞こえない……何も見えない……何も感じない。

ここに居れば安全だ、ここに居れば安心だ。

これ以上悲しむことも、飢えることも、苦しむことも無いのだから。

私はこのまま死ぬのだろうか。

それでいい……それがいい。

私が死んだとしても、誰が悲しむというのか。何が変わるというのか。

明日も明後日も、世界は平然と過ぎ去っていく。

——薄目を開けると、光を感じた。

鈍く、淡く、冷たい光だ。

私は手を伸ばす、今逃せば永遠に見ることのない光を求めて。

私は存外、生に執着があったらしい。

伸ばした手で掴んだものは、銀色の鋭利な光だった。

私はこの日、血濡れの少女化け物になった。

「美亜……本当に決めたのね」

2月末日、立春を過ぎても尚肌寒さの残る季節、ここは閑静な住宅街に建つ熱犬孤児院。

小さな木造二階建ての造りはお世辞にも綺麗とはいえない。旧日本家屋と呼ばれるような寂れた外観をしている。内装も古く歩くと床が軋む程、リビングと風呂場、部屋は6つに加えて応接室が1つある。

その応接室では、来春から高校生になる美亜の進路相談が行われて

いた。机を挟んで対面に座る2人、卓上の紅茶が2人の間に湯気をたてる。

黄金色の瞳に垂れ目で優しそうな顔つき、栗色の髪はふわりと緩やかなウェーブを描きながら腰まで伸びる。常に穏やかな微笑みを絶やさない彼女こそ熱犬孤児院の院長「熱田 美波」。まるで全てを包み込むかのような慈悲深く優しい微笑みを浮かべている。

美波の対面に座る少女、艶やかな濃紺色の髪は腰まで伸び波が唸るようにウェーブを描いている。その白磁の如く白い肌と、幼さを残しながらも人形のように整った顔つきは1歩間違えれば幽鬼のようだ。細身のスタイルと相まって、美しくも精巧な西洋人形のような不気味さを感じさせる。

しかし彼女が確かに生きていると実感させるのは、妖しく輝く紅の眼。意識の強さを反映するように吊り上がったその眼は、見る者全てを蠱惑し深淵に誘うかの如く煌めいている。

今、その眼は美波を捕らえる事はなく所在なさげに机の上の紅茶に向けられている。細身の腕から伸びる指がカップの縁を撫で、言葉を発することを躊躇っている。俯いたその表情からは何も読み取れない。

彼女の名は千染 美亜。10歳で熱犬孤児院に引き取られ、5年間暮らしている。在籍する3人の孤児の中で最年長の美亜は、来年15歳を迎え高校生になる。

「ゆっくりでいいの、私は美亜の言葉が聞きたいから……」

美波はふわりと美亜の横に腰を下ろし、頭をゆっくりと撫でる。この子は普段から気丈に振る舞い、弱さや隙を人に見せることを嫌い、極端に言えば恐れている。そんな美亜がここまで悩み言葉を詰まらせている。

とある事情から学校というものに通った事が無く、それどころかこの孤児院から出た事すら数少ない。それ故に不安や恐ることは仕方のない事だと思う。誰だって未知の世界は怖く恐ろしい。

しかし、彼女にこんな思いを抱かせてしまったのは私達の……私達の所為だ。だからこそ個性を使いゆっくりと暖かさを伝えていく。こ

の熱がどんな時も美亜の気持ちも温め、凍り付いた心を溶かしていくと信じて――

「ああ、決めたんだ……私は雄英高校に行くよ」

美亜が顔を伏せたまま告げる。普段の凛々しい声色と違う今にも消えそうな弱々しい声に、美波は心配になって問いかける。

「そう……雄英ね。あなたがそう願うなら私達は心から応援するわ。でもね、それは辛くて険しい道よ。苦しいこともある、悲しいこともある、上手くいかない事なんて山ほどある。それでも……それでもヒーローになるの？」

顔を上げた美亜と視線が交差する。その眼は確かな決意を携え、先程までの弱々しさが嘘のように紅く燃え上がっている。彼女の眼は普段からルビーのように紅く煌めいているが、ここまで激しく輝いている様は見たことが無い。美波はそれが並々ならぬ決意である事を本能的に感じ取った。

「ありがとう美波さん。でも自分で決めた道だから、私は雄英に行く」「そっか……でも嬉しいわ。美亜が初めて選ぶ道がまさかヒーローだなんて」

ソファアーにもたれ掛かると、安心から思わず大きな溜息が出てしまう。横目で見た美亜の表情が少し不安そうに曇る。やってしまった。努めて明るい表情を浮かべ、空気を変えするように立ち上がる。不安そうに見上げる美亜の前で、軽く手を叩きハツラツと話す。

「そうと決まれば特訓しないとね！雄英高校はヒーロー科最難関、簡単には合格できないのよ。勉強は私が教えるから良いとして……個性とか体力は……ワンちゃんに鍛えてもらおうかしら。一緒に頑張りますよ、あなたの夢を叶える為にね！」

滅多に色を変えない仮面の如き美亜の表情が、少しだけ頬を染めたような気がした。

退室する美亜を見送り美波は1人部屋に残る。再び応接室のソファアーに深く体を預け大きく息を吐く。これまでの様々な出来事が脳裏に浮かぶ。本当に……本当に色々なことがあった。

「雄英高校、ヒーローね……」

さつきまでの私は上手く笑えていただろうか。違和感なく振る舞えていただろうか。

——本心では雄英高校に行つて欲しくない。

(美亜にはヒーローになんかならないで、普通の人生を、当たり前前の幸せを与えてあげたかった。願わくば、今まで得られなかった友達・愛・幸せをありつたけ掴んで欲しい。あの子にはその権利があつて、私達にはそれを叶える義務がある。ヒーローは辛い道だ。誰かのためにその身を投げ打つて、それでも守れないことなど山程ある。それでも笑顔を絶やさず、救えない命の上に立つ覚悟がいる。それに美亜の個性、必ず傷つき苦しむ個性はきつとあの子の心を蝕んでしまう……) 気分を切り替えようと冷え切つた紅茶を飲む。それでも本日3度目の溜息を吐いてしまう。こんなに溜息をつくときと幸せが逃げるかしら、思わず自嘲気味な苦笑いが浮かんだ。

「ソファアもボロボロね、そろそろ買い替えないと……お金無いし無理かな」

美亜が廊下を歩いていると背後から足音と気配を感じた。振り返るとすぐさま強く抱きしめられる。体が密着し、顔に胸が当たって苦しい。

「美亜……!!雄英に行くつて聞いたぞ!ヒーローになるのか?それじゃあ出て行くのか?寂しくなるなあ!ちゃんと風斗とかおりに話したか?風斗なんかずっとそわそわしてたぞ!あいつも生意気だけど、それは美亜のことを心配してるからで——「うるさいわよ」「ぐえっ!」」

頭に生えている犬耳の間に鋭いチョップが落ちる。その隙に腕から抜け出すと、そこには頭を抑える拳士と笑顔でチョップを決めた美波がいた。

「そこは反則だつて、ほんとに痛いんだから!」

「ごめんね、ワンちゃんつてば雄英つて聞いた瞬間に走つて行つちやつたから。あ、これは美亜が危ないな!」

拳士の抗議を美波はクスクスと笑いながら華麗に流す。そしてごく自然な流れで美亜に近づくと、替わりとばかりにギョツと抱きしめてその頭を撫でる。

彼女の名前は 犬千代 拳士、熱犬孤児院の副院長だ。涼やかなつり目、綺麗系の整った顔立ちに腰まで伸びたストレートの黒髪。長身で体つきも引き締まっている。かなり筋肉はあるが人前では決して肌を晒さない。孤児院最年少のかおりですら一緒にお風呂に入るのを断られている。クールビューティーな見た目だが、頭に生えた犬耳ともふもふの尻尾、そしてその熱い性格からチグハグな印象を受ける。

熱犬孤児院には2人以外に職員はおらず、預かっている子供も14歳の美亜と12歳の風斗、7歳のかおりの3人しか居ない。当たり前だが、2人とも学校に通っているので昼は孤児院に居ない。美亜だけが学校に通うことなく家で過ごしている。

血縁関係は全くなく、年齢も離れている。性格もバラバラな皆が住む熱犬孤児院、それこそが美亜の1番大切な人達がいる、1番大切な居場所だ。

「そんなに捲し立てても話しづらいだけよ。雄英高校に行くと言って、寮はないから今まで通りここで生活するの。それにあの子達にだって美亜は自分の言葉で言えるわ、さつき私に言ってくれたようにね」

「うう…ごめんって美波。でも雄英に行くって聞いて、それでいてもたってもいられなくて」

「そこで落ち着いて話を聞いてあげることこそ私たちの役目よ。ワンちゃんは昔からその辺を焦りすぎなのよ」

美波は美亜を抱きしめたまま拳士に小言を言い始める。拳士は美波に頭が上がらないらしい。以前、美亜はその理由を聞いたが苦笑いで濁されてしまった。

「美波さん……………苦しい」

美亜は美波の豊満な胸の中で窒息しそうになったので、腕を叩いて危機を知らせる。ごめんなさいねの声と共に解放され、ふらつきなが

ら大きく深呼吸し肺に酸素を取り込む。包容力があるのもいいがあまりすぎるのも問題だ。

「拳士さん、心配してくれてありがとう」

「どういたしまして！私は心配だけど、でも美亜が決めたことだもんな。全力で応援するよ。個性について悩んだり、勉強もわからなかったらいつでも頼るんだぞ！」

「ワンちゃん勉強苦手じゃないの……」

拳士は満面の笑みを浮かべてエールを送り、美波は呆れながらも微笑んで見つめている。3人は昼ご飯を食べるためにリビングへと向かった。

「ありがとうねワンちゃん、お昼作ってもらって」

「うん！どういたしまして！今日のお昼は炒飯だぞ！」

昼食後、美亜は部屋で1人考える。

（雄英高校に合格する、簡単なことじゃない。トップヒーローを多数輩出する雄英高校、倍率300倍を超えるヒーロー科1の人気校……か。試験は筆記と実技があるんだよな。個性は十分磨いてきたはずだ、きつと通用する。問題は筆記、自力で勉強はしてきたけど流石に学校に行ったことがないのはまずいか？）

ベッドからのそりと上体を起こすと、心底忌々しそうに顔をしかめて呟いた。

「勉強するか……」

Prologue : 2

「かおり、風斗^{ふうと}、私は雄英高校を受けることにしたよ」

夕飯を食べ終わり、リビングで寛いでいる美亜が2人に言った。テレビではタイトなスーツを着たMt.レディ^{マウントレディ}というヒーローが、敵^{ライラン}を拘束する様子が報道されている。

この格好で巨大化は流石に恥ずかしくないか？もしかして世間ではこれが普通なのだろうか。スタイルに自信がないわけではないが……あまり見せびらかしたいものではないな。そんなどうでもいい事を考え始めた時、リビングに声が響いた。

「えー！雄英！凄い！美亜ちゃんヒーローになるの!？」

「大丈夫かよ……」

嬉しそうに目を輝かせるかおりに対し、ジト目で此方を睨む風斗は何やらぶつくさと文句を垂れている。

「雄英高校って最難関だろ、受かるのかよ？美亜、勉強も個性も全然だろうが。顔だけはいいんだしアイドルヒーローでも目指せば？」

「否定はしないが……少なくともお前よりはマシな頭をしているぞ」

「へえ、3個下と比べてる時点で大したことねえな」

「勘違いするなよ、3年前の時点だという意味なんだがな」

「あー！まーた喧嘩だ！いけないんだよそういうこと言うの」

「うるせえ、おこちゃまは黙ってる！大人の話なんだよ大人の!」

私達の言い合いが始まりそうだと察したかおりが、有耶無耶にしようと声を上げる。

熱犬孤児院の日常風景だ。風斗の煽りに乗るのは尺に触るが、最近慣れたものだ。きつと照れ屋なこいつなりのコミュニケーションなのだ。普段はかおりと拳士が騒ぎ、私が巻き込まれて、風斗が呆れながらもなんだかんだ付き合う。そんな皆を美波が優しく見守る。騒々しくて、けれども何処か心地よい。

「昨日だってお風呂で歌ってたでしょ！下手！それに長いの!」

「なっなっ、何聞いてんだ！お前よか短かいだろ!」

いつのまにか2人のどうでもいい口論が始まっている。相変わらず

ずの光景に、面倒くさいと肩を竦める。止めてやらなければ拳士が風呂から上がるまで続きそうだ。

「2人共、雄英高校ってどんなイメージなんだ？」

「雄英高校はねー、すごい！かっこよくてヒーローって感じがするー！」
「んだそれ……俺は悪くないと思うぜ。西の士傑、東の雄英ってぐら
いだしヒーロー科じゃ1番だ。美亜が合格するかは別だけど」

「なんだ、風斗も心配してるだけじゃん！」

「心配してなにが悪いんだよ」

「ありがとう2人も」

私の問いかけにぱつと答えてくれた2人、それでもまた言い争いを始めそうだ。これ以上はやりたくないしやる気も無いので、仕方なく、本当に仕方なく良い感じのことを言っただけで自室に退散する。ちなみにこの2人の言い合いもいつものこと、今回も拳士が風呂から上がったなら仲良くトランプでもするはずだ。

リビングを去った美亜の背中を見送った後、ボーツとした2人は顔を見合わせて呟く。

「今の笑顔はズルいだろ（よね）」

皆が寝静まった夜、美波と拳士は談話室のソファに並んで座る。頻繁に行われている2人だけの飲み会だ。いつもはだらけて寄つかったり、戯れてくる拳士が今日はいつになく真剣な表情をしている事に気付く。

「なあ、美波」

長い付き合いの彼女が何を言いたいかなんて容易に想像がつく。

「美亜のこと？」

「そうだ、あの子を本当に雄英に入れるのか？ヒーローにするのか？」
美波の予感が的中したようで、拳士からは少し剣呑な雰囲気漏れ出している。久しく見せたことの無いその姿に、少しだけ懐かしさを感じてしまった。

「私は応援したい。あの子の決めた道だから——」

「嘘だ。本当は行かせたくないくせに、普通の人生を送らせたいくせ

に。私達が何年一緒にいると思ってる」

私の宥める声色に、拳士の鋭い声色が交差する。此方がそうであるように、向こうにとつても長い付き合いで——きつと本当の想いも見抜かれている。

「あの子が、本当の意味で幸せになるために……いつかは向き合わなければいけないこと、知らなければいけない事だつてある筈だわ」

「そのために雄英に行かせていいと、本気でそう思ってるのか？」

拳士の言葉が鋭くなっている、段々と怒りが抑えきれなくなっているのが分かる。けれどここで引くわけにはいかない。私はあの日決めたのだ、何があつても美亜を幸せにすると。

「思ってる。これは嘘じゃないわ」

「美亜の個性を知っているはずだ！ それにあの容姿！ 必ず目立つぞ、必ず!! その時になってからでは遅いんだ！ ただでさえ露出の多い雄英にいたら、美亜の……美亜の過去が望まぬ形で暴かれるかもしれない。貴方がそれに気づかないわけがないだろう!!」

拳士が力任せに机を叩き、空の缶が床に散らばる。剣呑な声色は次第に涙声へと変わる。

「美亜は強い子だ……それは分かっている。でも……今も時々あの顔を見せるんだ。必死に隠そうとしているんだ、自分の暗く弱い表情を。でも、だからこそ怖い。あの子の本質はまだ変わっていない、私は……美亜のあんな姿はもう見たくない」

思わず言葉に詰まってしまふ。分かっているからだ。ずっとずっとあの子が無理していることも、今もまだ苦しみ続けていることも、私達にそれを悟られないようにしていることも。美亜は強い子だ、だからこそ私はどうしたらいいのか分からない。

「大丈夫、大丈夫よ。美亜は強く賢いわ。きつと私達が思ってるよりもずっと。それにあの子が自分で決めたことを、私達が信じてあげなくてどうするの」

そう言い聞かせながら、悲痛に震える拳士を抱き寄せ頭を撫でる。その言葉は拳士を慰めるためのものだろうか。それとも自分自身に言い聞かせているのだろうか。私はまだ未熟だ、31歳になって、5

年もあの子と過ごしてきてまだ分からない。『慈愛の美波』と呼ばれながら、苦しむ少女一人すら救えない。そんな私だからこそやらなければならぬ事がある。今度こそ、たとえ何を賭してでも。

「私に出来る事は美亜を信じることに、この場所を守ること。辛くなった時、悲しくなった時、全てを投げ出したくなつた時、あの子が帰つて来られる場所はここだけなの。だから、だから絶対に……」

頭を撫でていた右の手に、拳士の手が重なる

「私達だ、美波」

その真剣な眼差しに思わず気持ちが軽くなる。この子はどこまでも真つ直ぐで、ずっと変わらない。その真つ直ぐな目で見つめられると、私達ならなんでもできる気がしてしまう。ふっと笑みが溢れる。でもこの子に似合うのはやっぱり笑顔だ。今はワンちゃんの笑顔が見たい。

「そんな泣き腫らした顔で言われても……可愛いだけよ」

「なっ！」

顔を真つ赤にした拳士としばらく見つめ合うと、堰を切つたように互いに笑い合った。その後の宴会は、いつになく楽しく、夜遅くまで続いた。

Prologue：終

立春を迎え、草花は春の準備を始める。まだまだ肌寒さを残した2月26日、雄英高校受験日当日を迎えた。

美亜が進路相談を受けてから約1年が過ぎた。

(時が経つのは早いな。この1年、人生で一番充実していたかもしれない。美波さんから勉強を叩き込まれ、時には悔しいが風斗にも教わった。あいつもなかなかやるじゃないか)

ベッドから立ち上がると荷物を確認する。筆記用具、受験票、実技用の運動着……忘れ物は無いはず。

(体術、トレーニングも飽きるほどやったな。戦う為の筋肉なんて鍛えてこなかったからきつかった……スタイルを維持する為の筋肉がクソの役にも立たないなんて流石にシヨックだった。それでも少しは走れる様になったし、体術も覚えた。出来ることが増えるたびに拳士さんは泣いて喜んでくれたな)

準備を終え鏡の前で身嗜みを確認する。拳士が張り切って制服を買ってきたため、今日はその制服を着ることになっている。紺色のスカートとブレザー、紅色のネクタイに黒のタイツを履いている。どこかの制服か知らないが中々悪くない。

くるっと一回転すると紺色の髪がふわりと舞う。初めての制服に思わず気分が高揚する。

(かおりは勉強を邪魔してはいけないと、甘えるのを抑えてくれたな。リラックスするらしい香りも頑張つて探してくれたし、何より学校生活について色々教えてくれた。まあ、食べ物匂いはキツかったがな)

香りを出す個性で大惨事を引き起こし、かおりは食べ物の匂いを出すのを禁止された。

「美亜、忘れ物はない？ 受験当日は道が混みそうだからそろそろ行くか。」

ちようど身嗜みの確認を終えた時、ドアの向こうの美波から声がかかる。少し藍色を帯びたダッフルコートを着て、チェックのマフラー

を巻いて防寒も忘れない。よし、と頷いて玄関まで降りると、他の3人が見送りに出てきて応援してくれる。

「この1年沢山教えたな、楽しかったよ。美亜の努力、雄英への思いは本物だった。」

絶対受かるさ、何事も気持ちからだ。だから、もう私も迷わない――Plus Ultraだ！行ってこい美亜!!」

「がんばってね美亜ちゃん！私、応援してるから！いっぱい頑張ってたもん、絶対、ゼーったい合格するよ!!」

「美亜、頼むから怪我だけはすんなよ…無理したら泣く奴が3人もいるからな、うるさくてしょうがないんだ」

「風斗、素直に心配ですって言えばよな。それと私は泣かないぞー!」

「拳士さんは真っ先に泣くだろ。まあいい、それとあんまりかつこ悪いとこ見せないでくれよ。俺らの姉ちゃんなんだから」

「分かってる、必ず合格するよ。行ってきます」

美亜はいつになく想いのこもったみんなに見送られ車に乗る。どうやら柄にもなく緊張していたらしい。助手席に座って落ち着いてから、初めて手が少し震えてたことに気づく。

(浮き足立ってて緊張にすら気付かなかったのか、皆のお陰で地に足が着いたな)

少し頬が火照るのが自分でも分かった。パタパタと顔を仰ぎ、今度は別の感情を抑え込むのに奮闘する羽目になってしまった。

しばらく美波の運転で走り駐車場に車を止める。そこから沢山の受験生と共に少し歩くと、雄英高校の正門が見えてきた。正門とその先にある校舎、あまりの大きさに思わず感嘆してしまう。

「大きい……」

「流石は天下の雄英高校、セキュリティも万全みたい。私はここまでみたいね。私、拳士、風斗、かおり、みんな心から応援している、美亜の合格を祈ってる。大丈夫、必ず合格できるわ。だってあれだけ頑張っていたもの。無理はしなくていいけれど悔いだけは残らないようにね」

「ありがとう美波さん、行ってきます」

震える手を意思の力で抑え、美波と別れて歩き出す。私の道だ。初めて選んだ道だ。決して楽な道ではない。周りにいる沢山の人達が数少ない柢を争って凌ぎを削る。何を緊張してるんだ、こんなところで立ち止まってる場合じゃ無い。そう思えば思うほど、皆の顔が真剣に見え思わず立ち止まる。

——私に、彼らと並ぶ資格があるのだろうか。

「美亜—————」

突如響いた声援。振り返ると、柄にもなく大声を出したせい、それとも他の受験生に見られているせい、顔を真っ赤にした美波がサムズアップしている。

笑えてはいないだろう、それでも心は軽くなる。せめて私らしく胸を張って歩こう。恥ずかしいのを我慢している美波に、小さくサムズアップして歩き出す。

大丈夫、頑張れる。私にはこんなに暖かい家族が応援してくれるんだ。

小さくなってゆく美亜の後ろ姿を見て、思わず涙が溢れる。寂しいからか、それとも不安だからか。違う、きっと嬉しいからだ。離れていく美亜の後ろ姿は相変わらず余裕が無さそうだ。実は誰よりも怖がり、臆病で、自分に自信がなくて、常に虚勢を張っている。そんな美亜も確かに成長しているんだ。美亜が自分の足で歩き出すことが嬉しくてたまらない。

「いってらっしゃい。貴方の未来が^{これから}幸せに包まれる事を願っているわ……」

第1話 血濡少女とPlus Ultra!!!

「あの子も受験生か！」

「モデルみたいに可愛いなー。あの制服、どこの中学だ」

「それに見ろよあの表情、あそこまで余裕そうに振る舞えるか？試験前だぜ」

美亜の耳に聞こえてきた声を、無表情で無視して歩く。いよいよ校門を潜ろうかという時、近くで怒鳴り声が響いた。

「どけデクー！」

突然聞こえた怒鳴り声に、周りの受験生の注目が集まる。美亜も例外ではなく、思わず立ち止まって少し顔を向ける。そこにはツンツンした金髪が印象的な、目つきの悪い男が、見るからに気弱そうな男に絡んでいた。

「あれバクゴーじゃん」「まじ？」「ああ、ヘドロの」「すげえな本物だ！」

周囲からざわざわと驚きの声上がる。金髪の男はどうやら有名な人らしいが、そんな奴知らないし興味もない。そんなことより、早く受験会場に辿り着いて安心したい。気分も乗っていることもあり、この集中力を切らしたくは無い。美亜は彼らを一瞥すると、踵を返して足速に会場へと向かった。

「広い……」

一通り説明を受け試験会場についた受験生から、思わず感嘆の声が漏れる。彼らの試験会場は、一つの都市のような規模の模擬市街地である。これと同じ施設が7つもあると聞いて、誰かが漏らした声に皆が同意する。

試験は単純だ、市街地に現れるロボを倒し、ポイントを集めるだけ。ロボットは3P、2P、1Pと妨害用の0Pの巨大ロボがいる。試験を前にストレッツチするもの、深呼吸をし精神統一を図るもの、皆がそれぞれ準備を行う。美亜も軽く伸びをして、深呼吸をしながら緊張を解きほぐす。

突然――

「ハイ、スタートー！」

プレゼント・マイクの声が、スピーカーから響く。突然告げられた開始の合図に、受験生達は疑問の表情を浮かべる。

「おいおい、実践じゃカウントなんざねえんだよ!!走れ走れえ！」

雄英高校がトップヒーローを排出し続けられる理由、それは数多くある演習施設を利用して、常に実践を意識した訓練を行なっている事が一因となっている。それは例え受験であつても例外では無い。それに対応できるもののみが雄英高校に合格し、ヒーローへの大きな第一歩を踏み出せる。

一瞬、放心した受験生達であつたが、流石は雄英高校を受験する者達。直ぐに気持ち切り替えると、我先にと駆け出していく。美亜を含めた数人が出遅れてしまう。焦って駆け出す出遅れ組の中で、美亜は普通に駆け出した。まるで出遅れがありがたい、と言わんばかりに最後尾を走り、すぐに路地裏へと入って行った。

壁にもたれかかり、息を深く吐いて体の力を抜く。太もものベルトにつけていたナイフを抜くと、躊躇なく自分の左手首を裂いた。夥しい量の血が流れ、地面に紅く血溜まりを作っていく。辺りに血の匂いが立ち込める。美亜は血が溢れる左手首をじつと見つめる。その顔は能面の様に表情が抜け落ち、異様な雰囲気にも包まれている。

痛がるそぶり一つ見せずに、溢れる血へと意識を集める。自分の意識が、深く深く沈み、流れ落ちる血と絡み合う。自分の体すらも、溶けて外に広がっていくような感覚だ。血の一滴まで、意識が混ざり合う。今なら手足のように動かせる、そんな実感が浮かび上がってくる。

「――このぐらいでいいか」

美亜は小さく呟くと、血の流れを操作し手首の傷を止血する。血溜まりから包帯のように血を昇らせると、手首に巻きつけて傷を覆い隠した。

そして、地面に広がった血を全て使い、2つのサッカーボール大の球体を作り出す。2つの球体は、美亜の周りをクルクルと回りだし

た。それを確認すると、満足したかのように大きく頷く。

「準備完了……行くか」

路地裏から出ると、地味な男がロボを前に固まっている。校門の前で金髪ヤンキーに絡まれていた男だ。

美亜が右腕を上げると、球体の一つが鋭く尖っていく。より鋭く、より硬く、確実に相手を射殺すように——血は密度を増す。ロボがこちらに気づく、真っ直ぐに突撃するが既に遅い。

「穿て——血槍」
ブラッドスピア

無造作に腕を振り下ろされる。槍が射出され、寸分の狂いもなくロボの頭を撃ち抜いた。頭部を失ったロボは前のめりに倒れ、美亜の足元に転がった。

「まずはIP」

男——緑谷は倒れ伏した残骸、そして去って行く女子の背中をぼーっと見送る。どこからともなく現れ、一撃で倒して颯爽と去っていった。どんな個性か想像もつかないけれど、あのフアンネルのような槍を操って戦うのか。思考の海に沈みそうになった緑谷^{みどりや} 出久は、残り6分と告げるアナウンスで正気に戻る。No.1ヒーロー、オールマイトから個性『ワン・フォー・オール』を継承した。この一年、最高のヒーローになるために厳しい訓練を行った。それなのに……いざIPロボを正面にすると、ビビって体が動かなかった。そんな自分が情けなくて、悔しくて気持ち焦る。しかし、走って広場へ向かう途中、緑谷は再び足を止めてしまう。そこにはロボの大量の残骸が残されている。そしてその中心を、一本の道が真っ直ぐに通っていた。

「32P！」

（32点あれば十分だろうか。いや……ヒーローたるもの油断禁物！
恥ずかしい成績は残せない！）

飯田天哉^{いいたてんや}の鋭い蹴りが、ロボの頭部を粉碎する。急いで次のロボへと駆け出そうとした時、突如そのロボの頭が貫かれた。更に一体に止まらず、周りのロボが次々と体を数回貫かれ沈んでいく。

「何だ……何が起きているんだ？」

周囲を見渡すと、1人の少女が歩いている。

不思議な少女だ。まるで散歩のように辺りを見回しながら歩く。紺色の長い髪は光を帯びて艶やかに輝き、横顔は人形のように美しくかった。吊り目がかかった赤い眼は、意志と自信の強さを感じさせる。そして彼女が手を振るうと、宙に浮かぶ2本の赤い槍が周囲のロボを次々と貫いていく。その表情には、喜びも疲れも感じられない。ただ吸い込まれるほど綺麗な紅の眼が煌めいていた。

「いったい何点取れば良いんだ」

彼女の凜とした声が聞こえたので、興味本位で聞いてみることにした。

「ぼ、俺はいま32Pだ。君は何Pだ？」

「ん……ああ、私は今ので40Pだ。なる程、協力感謝する眼鏡君」
尊大な物言いだ、何故か不快感を感じない。彼女の雰囲気は驚くほど合っているし、一方的に話しかけてきた自分に、しっかりと感謝の言葉を述べる辺り礼儀正しさも少しは無いわけではないだろう。

それに、こちらを向いた彼女は余りにも美しかった。

「流石雄英高校だ、上には上がいる！僕もまだまだ頑張らなければならぬ！」

32Pで合格できると思っていた。しかし目の前の彼女はなんと40P、しかもそれを何ともない様に言っただけ。これが全国のヒーロー科でトップに位置する雄英高校か。決意を新たに、Pを稼ぐためもう一度エンジンをかけた。

「おいおいあのガールやべえな!!もう43点かよー！」

「凄いですね。あの年で個性を手足のように使いこなしている、見事です。」

マイクと13号が、モニターの1つを指刺して注目している。相澤はモニターを見てため息をついた。目の前で右腕を振り上げる3Pロボ、今にも振り下ろさんとした腕をその少女は根元から切り裂く。そのままもう一本の槍で、頭を横から貫き行動不能にする。

この時点で43P、確かに中々の点数だ。だが次々とロボを倒す少

女の顔からは、何一つ感情が感じられない。喜びも、疲れも、高揚感すらも。

「性格破綻者か、めんどくせえ……」

そう呟き、美亜がB組に行くことを願った。

試験開始から8分が経過し、美亜はビルの屋上から辺りを見渡していた。自分の個性は索敵には向かないため、こうしてロボの集まっている場所を探す必要がある。正直かなり疲れた。元々体力がない上に、序盤からかなり飛ばして個性を使いロボを倒してきた。初めて実戦をしたからか、はしやぎ過ぎた気がする。息が上がって上下する肩を、大きく深呼吸して整える。汗ばんだ肌に、冷たい風が心地よい。

「はあ……後2分か。流石にもう大丈夫だろう、早く終われ」

ロボ探しに飽き、珍しく青空でも眺めようかと頭を上げる。

突然、見上げた空に、轟音を伴って山のようなロボが現れた。この試験最大の関門、妨害用OPロボ。その余りの大きさに上げた頭をそのままに茫然としてしまう。

「いくらなんでもやりすぎだろ……」

総工費2400億円、実にこの国の軍事費の5%を占める国防設備の要であり、非運用時には各国家機関に貸し出されるほどの代物、これこそがOPロボの正体だ。間違っても高校入試で使っていない代物ではない。

「まじかよー」「やり過ぎだろ！なんでもありかよー！」「あんなのどうやって作ったんだ!!」

受験生は皆、一目散に逃げていく。戦ってもOPの上、あの大きさでは倒そうなんて方に一つも考えられない。

美亜はそんな受験生を見下ろしながら、自分も逃げようと考えた時に気づく。ロボの足元に女の子が倒れている。瓦礫に足を挟まれ、立ち上がれないようだ。倒れたときの衝撃で、意識が朦朧としている。

「まさか——逃げられないのか？あのままではロボに潰されるぞー」

美亜は強く舌打ちをすると、考える間もなく血槍を操る——そして右腕を切り飛ばした。

「おい！やべえぞあのガール！何してんだ!!」

受験生達のOPロボへの対応に皆が注目していると、マイクの叫び声が響いた。相澤が端のモニターを見ると、右腕から鮮血を吹き出している美亜が写っていた。

「何があったのあの子？」

「ワカンねえ！気付いたらこんなんになった！」

慌てたミッドナイトが、リカバリーガールに連絡を取る。いくら実践を想定してるとはいえ、あの出血量はまずい。放っておけば命の危機になりかねない。

「——待て。まさか……ブラド、お前の『操血』と同じ個性か？」

「確かに、俺の個性も血を自在に操る。それに、コスチュームがなければ血を流す必要がある。同じ個性かもしれんが……いや、しかし……」

個性『操血』を持つブラッドヒーロー「ブラドキング」。

下顎から突き出た牙と、左頬の十字傷が強面を強調する熱血ヒーローだ。ブラドはコスチュームの管に血を伝わせ、籠手から放出することで戦っている。そういったカラクリが無ければ、自分から血を流して戦うだろう。

ブラドキングの発言に、教員達も納得したように他の画面を見始める。個性であれば、あの自傷行為に納得がいく。操血ならば失血死の恐れも無いだろう。だがブラドだけは目が離せなかった。

(それにしても……あの体格である出血量、動けなくなってもおかしく無い筈だ。クールな外見とは裏腹に、良いガッツを持っているな)

飛び散る鮮血が右手に集まり、次第に形を成す。血の糸が繊維のように何本も絡み合い、鋭い爪を備えた巨腕となった。腕は赤黒く、まるで血管のように真紅の線が走る。

美亜は何度か拳を握って感覚を確かめると、髪を翻しビルから飛び降りる。重力に従って落下しながら、壁に向かって腕を振り抜き爪を突き立てる。ガリガリガリツツと壁を切り裂き、勢いを殺しながら落

下を続ける。壁が抉れ、粉塵が舞う。着地を決めた美亜は、巨大ロボ目掛けて一目散に駆け出した。

(――クソッ！間に合わない！たどり着く前に潰されるぞ！)

焦る気持ちを抑えながら次の手を考える。実際には安全装置が働き、潰す直前で止まるのだが……それを美亜が知る由はない。

無数の策を考えては潰し、考えては潰し――

「SMAA――SH!!」

爆音と共にロボットが正面から叩き潰され、後ろに倒れていく。衝撃波が美亜の髪を揺らす。あまりにも常識から外れたその光景に、逃げていた受験生達も唾然として立ち止まった。

「あれは……さっきの地味男か？なんてパワーと跳躍力だ……」

凄まじいパワーに唾然としつつも、倒れてる子に血腕を伸ばし瓦礫から助け出す。女子を地面に寝かせ、地味男と倒れてゆくロボを見上げて気付く。

(あの地味男……落ちてないか？もしかして超パワーで飛び上がっただけか！まずい！)

再び駆け出そうとした美亜に、助けた女子から声がかかる。

「あの人落ちとる！できるなら私を投げて！助ける!!」

「――どうなっても知らんぞ！」

突然の提案に、一瞬放心してしまった。だが何か策があるのだろう、であればやらない手は無い。巨大な血腕で女子を鷲掴みにする。腕の伸縮を生かして大きく振りかぶり、全力で腕を振り抜いて投げた。

一直線に飛ぶ彼女は、地面スレスレで緑谷に触れる。その瞬間急に落下が止まり、一瞬ふわりと浮いたかと思えば、力を失ったようにドサリと落ちた。しかし、肝心の自分の投げられた勢いを殺せず、地面を転がって擦り傷を作ってしまった。

(触ることで物体を浮かせる個性か……自分は浮かせないのか?)

美亜は倒れ込んでいる2人に近づき、思わず顔をしかめる。それほどに緑谷の状態は悲惨だった。落下の衝撃は打ち消せたはずだが、両足はへし折れ、右腕も紫色に腫れている。ロボを殴り倒した際の大跳

躍に、体が耐えられなかったようだ。いったいどんな個性を使えばこんなことになるのか。女の子は、全身に擦り傷を作ってはいるが、目立った怪我は足の捻挫ぐらいだろう。ただ、個性の限界か吐きながら苦しそうにしている。

「せめて……！Pでも……!!」

どう見ても満身創痍の地味男は、左手で地面を掴みながら呻く。
（何だこいつ、その個性ならPを持つロボなど簡単に壊せるはずだろうが。それなのにまだOP……例え巨大ロボを倒しても、合格できないければ何の意味もない。正義感なぞに駆られ、無茶をするからこうなる——）

そんな彼に心底呆れていると、プレゼント・マイクの試験終了宣言が聞こえる。ようやく終わったと悪態を吐きながら、個性を解除する。血が手のひらに吸い込まれていく。血腕の下から、切り飛ばした筈の白磁の肌を持つ美しい右腕が露わになった。

握ったり開いたりして感覚を確かめると、興味を失った様に踵を返してその場から立ち去った。

『最後に我が校の校訓をプレゼントしよう。ナポレオンは言った「真の英雄は人生の不幸を乗り越えていくもの」と!! Plus Ultra
a 更に向こうへ!!』

試験前、説明会でのプレゼント・マイクの言葉が頭をよぎる。途中ですれ違った老婆の視線を感じつつ、美亜は試験会場を後にした。

「美亜、雄英高校から何か届いてるわよ」

試験から数日が経った。その間特に何も無く、穏やかな日常を過ごしている。拳士やかおりは見るからにそわそわしているが、実技は問題なし、筆記の分も補ってあまり有るPを取れている筈だ。恐らく合格しているだろう。神経衰弱で風斗をボコボコにしていると、買い物から帰って来た美波の声が聞こえる。

「そうか……合否発表、今日だったのか」

「あのなあ、流石にそれぐらい覚えとけよ。神経衰弱強いのに大事なことは忘れんのな」

呆れる風斗を横目に、包みを受け取って自分の部屋へと向かおうとした。

「雄英高校？雄英高校って言ったか！合否通知届いたのか!!」

「合格したの！おめでとう美亜ちゃん!!」

庭でバトミントンをしていた2人が慌てて飛び込んでくる。早とちりしているかおりを、風斗が今から分かるんだよとからかう。

皆で見たいとかおりが提案し、断る理由も無いのでリビングに送られてきた投影機を置く。

『私が投影された!!!』

教師だろうか、満面の笑みを浮かべた男が画面いっぱいに投影される。とにかく顔が濃い、彫りも深いしそもそも画風からして何か違う、何故かアメコミテイストである。

彼こそがヒーロー社会の頂点に立つ、不動の人気No.1ヒーロー『オールマイト』。年齢、個性は一切不明だが、圧倒的な実力とそのキャラクターで人気を博す。彼の登場で、それまで増加の一途を辿っていた敵発生率ヴァイランも年々低下、存在そのものが抑止力とされる正に平和の象徴である。

『なんと、今年から私も雄英高校の教員になるぞ!』

『すごい！オールマイトが先生になるの?!』

『おー、豪華だな！良かったじゃないか美亜!!』

かおりと拳士は、突然現れたNo.1ヒーローに興奮してはしゃいでいる。バシバシと肩を叩く拳士の手が痛い。私としては凄い人ぐらいの認識で、そこまでの感動はない。だが、より凄い人に指導を受けられるならそれに越した事は無いと思う。

「テンション高いな……流石は雄英高校。合格発表ぐらい普通にしろよ」

「——意外ね、先生なんてやらないと思ってた」

興奮する2人に対して、風斗は冷ややかな目で見ている。憎まれ口を叩いてはいるが、少しだけニヤニヤしているせいで喜びを隠し切れていない。

『さて！千染少女!!緊張しているかい？そうだろうとも!!!いよいよ君

の合否を発表するよ!!」

画面が暗転しドラムロールが鳴る。No.1ヒーローでもエンターテイナーでも何でもいいから早くしてほしい、そもそもこのテンションで「はい！不合格です！」とか言われたら流石に怒る。

『合格だ！おめでどう!!筆記はまあまあだったが、それを補って余りある実技試験54P！素晴らしい成績だな!!』

やったー！と響いた大きな歓声に、美亜が思わず驚く。声を上げたのはやはり拳士とかおりで、自分のことのように飛び上がって喜び、抱きついてくる。暑苦しいので引き剥がそうとすると、右腕が上まらない。右手を握っていた美波の手に、珍しく力が入っているからだ。

『さらに——実はあの試験には救助ポイントも存在した！みんなが逃げる中で、0Pロボに立ち向かった素晴らしい勇気！救助ポイントが追加で20P、合計で74P!!あと3Pあれば実技試験1位に並んでたぞ、文句なしの合格だ！——美亜少女、それでは雄英で会おう!!!』

そう言い残して映像が切れる。とんでもなく喜ぶと拳士とかおりに、もみくちゃにされていると、後ろから美波が抱きしめてくる。

「——おめでどう。おめでどう美亜……良かった」

「今日はお祝いだな！焼肉だ！焼肉!!かおり！風斗！私に続け!!!」

オールマイトも驚くテンションで、拳士は走り去っていく。焼肉と聞いて慌てて付いていくかおり、俺が着いてくから安心しろ、と言いついて残してやれやれと仕方なさそうに風斗も部屋を出る。かなり不恰好だが、私と美波に気を使ってくれたのだけは確かだろう。

「まったく、変に気を使っちゃって」

クスクスと微笑む美波に、一層強く抱きしめられる。互いの頬が触れ、涙が伝っていることに気づいた。

「お疲れ様、この一年よく頑張ったね。美亜が無事に踏み出すことができ……本当に、本当に良かった。——私、本当に不安だったから……」

涙声を震わせながら、強く抱きしめてくる美波。普段の暖かく頼も

しい姿とは違い、やけに弱々しく見えた。美波には沢山心配をかけてしまった。だからこそ、今だけは少し甘えよう、きつとそれか美波の望んでいる事だから――

美亜は軽く背中を預け、眼を瞑った。美波は驚いたようで、一瞬震えを感じたが直ぐに優しさに包まれる。背中に感じる温もりが心地よい。少しだけ、皆が喜んでくれるなら良かったと思う。こんなにも心から応援してくれる人達を、悲しませる事にならなくて良かった。

「美波――ありがとう」

「実技総合成績出ました」

上位の名前と成績がスクリーンに並ぶ、やはり注目は爆豪勝己と緑谷出久だ。まさに両極端とも言える2人は、雄英高校の教師達に強烈な印象を与えた。

「救助P0で1位とはなあ!!」
レスキュー

「後半も派手な個性を使い続けた、タフネスの賜物だな」

爆豪は、その強力な個性と戦闘能力でダントツのPを叩き出した。驚くべきはその内訳、彼に他者を助ける素振りも微塵も無かった。結果救助Pは0、それでも敵Pのみでトップの成績を残した。実力は折り紙付き、文句無しの合格だ。ただ性格に難ありといったところだろうか……

「対照的ニ敵P0デ8位」
ワイラン

「まさかアレをぶっ飛ばすとは、久々に見たね」

「本当に驚いて血の気が引いたよ。来年の予算会議の気が重いね」
「思わずYEAH! って言っちゃったからな」

緑谷の成績は正に対照的と言えるだろう。敵Pは0、普通ならば合格とは程遠い。ただ、窮地に見舞われていた女の子を、何の迷いもなく救いに向かった。全身傷だらけになりながらも巨大ロボを打ち倒し、まさにヒーローとしての素質を存分に発揮してくれた。そんな対照的な2人に、教師たちの議論も白熱する。

そんな中、教師の1人がある名前を見て声を上げた。

「そういえばリカバリーガール、千染少女の腕は大丈夫だったのかい

？」

「そうさね、すれ違ったときに見たけれど……それはそれは綺麗な腕が生えてたよ、あんた達の見間違いないかい？」

「千染？ああ、あのやばいガールね！おつかしいなあー、あの子の個性は何だ??！」

「あいつの個性はやはり『操血』のようだ、念の履歴書を確認しておいた」

「へー、やっぱりお前と同じだったわけか。手本が近くにあつてラツキーだな、それに期待の後輩ができて良かったな！」

「俺としても手本になれるなら嬉しい限りだ。ただ見た感じだとすでに操作に長けているから、変に意識せず、独自の戦闘スタイルを見つけて欲しくもあるな」

画面には、ビルの屋上で腕から血を吹き出す美亜が映る。

「何にせよ凄い覚悟だな。倒れてる少女を見つけた瞬間、迷いなく腕を傷つけたのか。判断力は素晴らしいが……その冷静さは少し怖いな」

「確かに危なっかしいものを感じますね。彼女も他の生徒達と共に、雄英高校で成長して欲しいです。既に個性の使い方が優れていますからね」

画面の中の美亜が、振りかぶって女の子を放り投げている。その腕は大きく伸び、体の一部のような自然な動きで振り抜かれた。血でできた腕が急増のものでは無く、既に自在に操れる事を証明していた。

「へー、凄いじゃない。あの歳でここまで使いこなせるのね。それこそさっきの爆豪君やエンデヴァーの息子君に次ぐレベルだと思うわよ」

「違うない、相当訓練したんだろう。あまり表情には出ないが努力家なんだろうな」

「そうだ相澤くん。彼女は君のクラスだからね、しっかり見てあげなよ。僕の見立てでは……非常に優秀だけど、同時に脆さを抱えているように見えるね」

そう言つて根津校長は相澤を見る。1人美亜の映るモニターから

目を逸らしていた相澤は、その言葉を聞いて大きく溜息を吐いた。

「なんでブラドが担任のB組じゃ無いんですか……はあ……まあ当然です。教師である以上生徒の面倒は見ます。しかし決して甘やかすなどということはしません。私が見る以上、ヒーローとしての資格がなければ除籍処分にしますが……よろしいですね？」

「勿論だとも、向かないものがヒーローをすることほど辛いことはないからね。僕は君の目を信頼しているのさ」

相澤は面倒臭そうに顔をしかめると、渋々とうなずいた。そしてモニターに映る美亜へと視線を向ける。救出した緑谷が地面に転がり、それを見下ろす美亜が遠目に映っている。表情こそ伺えないが、纏う雰囲気からは、侮蔑・呆れ・嫌悪などの負の感情しか読み取れない。

「——ああ、本当に……面倒くせえ」

小さく呟くと、背もたれに背中を預け、面倒くさそうに目頭を抑えて目を瞑った。その後も周囲では、様々な生徒たちを評価する先生達の声が絶えず聞こえていた。

第2話 血濡少女と初登校

春、多くの人々に新たな人生が訪れる季節。美亜もまた、人生初の学校生活が始まろうとしていた。

犬孤児院の玄関には、美亜を見送るために4人が勢揃いしている。今日は雄英高校の入学式、制服に身を包んだ美亜は緊張の面持ちで玄関に立つ。

「美亜ちゃん！いつてらっしやい!!」

「——いつてら、あんま頑張りすぎんなよ」

「美亜！制服似合ってるぞ、超可愛いぞ！何も心配することはない！どう見ても立派な雄英高校の生徒だ。胸を張って行ってこい!!」

「いつてらっしやい、美亜」

みんなが揃って送り出してくれる。拳士とかおりは腕をブンブン振って、風斗は腕を組みながら恥ずかしそうに、美波は優しい笑顔で手をヒラヒラと振る。私を緊張させないように、普段通りに振る舞うよう努めているのだろう。ただ、喜びが抑えきれていない。慣れない制服に少しだけ違和感を感じながら、美亜はそんな皆に振り返った。「ありがとう皆、いつてきます」

熱犬孤児院からバスで20分、雄英高校正門前に到着した。

雄英高校は巨大な学校だ。広大な敷地面積を誇り、様々な訓練のための演習施設を備えている。正門の向こうに悠々と聳え建う本校舎は、その中でも別格の存在感を誇る。四方から見るとHに見える校舎は、全面がガラス張り、4棟のビルのような校舎の真ん中を渡り廊下が繋いでいる。

クラスは受験組18人に推薦2人を足した20人、1学年につきA組とB組の2クラスに分かれる。どうやら私はA組らしい。そういえば、あの地味男や浮遊少女、32P眼鏡は合格しただろうか。そんなことを考えながら歩いていると、案内の矢印が見当たらなくなつた。

「少し考え込みすぎたな……ここは何処だ?……こんな時こそアレを

使うか」

美亜が取り出したのはスマートフォン、雄英高校はその広大な面積と多様な校舎から、公式地図アプリが出ている。基本的に家に居た美亜は、連絡も固定電話で取り、特段スマホを必要としなかった。高校入学時にも必要ないと断ったが、不安がる拳士と風斗に押され、初めてスマホを手にしたのだ。ちなみに美亜のスマホは地図アプリと、無理矢理入れられたLINE以外全て初期状態、何一つ弄られていない。スマホ本体をクルクル回しながら、位置情報を見て校舎を歩く。彷徨う事10分、なんとか1―Aと書かれた教室に辿り着いた。

(いくら何でも広すぎる。早めに来て良かった)

そんな事を考えながら、異常に大きなドアを開ける。そこには同じように早く着いていた生徒が数人散見される。

「わー可愛い！モデルさんみたい!!」

美亜が教室に入ると、入り口に一番近い席に座る女子から声をかけられる。肌も髪もピンク色、頭にはツノが2本生えてる女子生徒だ。

「私、あしど 三奈みな！よろしくね!!」

「ち、千染美亜だ…」

「可愛いー!!」

グイグイと距離を詰める芦戸に、美亜は思わず後退りしてしまう。近いテンションの拳士なら慣れているが、初対面からこの距離感は苦手なタイプだ。逃がすまいと抱きつく芦戸に、諦めてされるがままになっていると、眼鏡で身長の高い男子が声をかけてくる。

「芦戸くん！彼女が困っているぞ！友情を深めるのもいいが、先に席に着かせてあげるべきだろう」

「んー、そっかー！ごめんね美亜ちゃん！」

カクカクとした謎の動きで注意してくる男子、黒縁のメガネ、きつちりセットされた前髪、真面目そうなヤツだなと考え、少しして思い出す。

(こいつどこかで……ああ32Pの、あの時点でそれだけ稼いでいれば合格して当然か)

「むっ、その顔どこかで……ああ！君は受験の時にいた！やはり合格

していたのか。ぼ、俺は私立聡明中学出身、飯田天哉だ。君は美亜、と呼ばれていたが、名字はなんと？」

「千染だ」

「千染君か！よろしく頼む！」

「千染という名字は嫌いなんだ、良ければ美亜と呼んでくれ」

芦戸に負けず劣らずガツガツくる飯田を残して席に向かう。出席番号は13番、しばらくキョロキョロと見渡して自分の席を探し、座って一つ息をついた。席は窓から2列目、前から3番目とちようど教室の真ん中だ。周りの席は空席である。そもそも自分から話す気がない美亜は、早速頬杖をつき窓の外を眺め出した。

（——ヒーロー科、変な奴しかいないのか……どうしたものか）

クラスメイトが次々と教室に入ってきた。目線だけそちらに向け、その様子をぼーっと眺めていると突然ドアが勢いよく開く。目に飛び込んできたのは金髪でトゲトゲの頭、ネクタイを外して制服を着崩している。目つきが異常に悪く、ポケットに手を突っ込んだまま歩く姿は正に傍若無人だ。

辺りを威嚇するかの様に見渡し、真っ直ぐ美亜の方に向かつてくる。何故か美亜にもやたら睨みを利かせているが、気にせず無表情で目線を合わせる。気に食わなかったのか、舌打ちをして左斜め前の席に座った。片足を机の上に投げ出して座る態度の悪すぎる金髪と、それに耐え兼ねた飯田が目の前で口論を繰り広げている。

（——とんでもないのが来たぞ。まさか雄英にもこんなヤツが居るとは。ちよつと観察してみたい気もするが……流石に煩い）

美亜は口論する2人を黙らせようと席を立つ。その時、ドアが開き知った顔が教室に入ってきた。緑髪の地味な男子と、茶髪ボブの女子の2人だ。試験で一連の出来事を見ていた美亜は、恐らく救助Pで合格したのだろうと考える。何しろあのロボットを破壊したのだ、自分が20Pなら50P以上は貰えたはずだ。

飯田が緑髪の地味な男子に気づくと、何かを話に向かった。思わぬ形で口論が解消し、せつかく立ち上がったのに手持ち無沙汰になってしまった。とりあえず金髪ヤンキーを睨みつつ席に着く。

すると茶髪の女子は美亜に気がついたのか、ニコニコしながら近づいてくる。顔を向けた美亜は、女子の背後の入り口に奇妙な男を見つめる。その男は寝袋に入り、顔だけ教室内を覗く形で廊下に横たわっていた。ドア付近にいた緑谷と飯田が、驚いてわつと声を上げる。その声に、生徒達の視線が集まる。その男はバックゼリーを一瞬で飲み干すと、のそのそと寝袋から出て教室に入ってきた。

「静かになるまで8秒かかりました。時間は有限、君達は合理性に欠くね。担任の相澤消太だ、よろしく」

相澤は無然とした態度で言い放つと、なにやら寝袋の中をゴソゴソ探っている。クラスの皆が未だ唾然としている中、美亜も頭を抱えた。

(何だこいつ……生徒が生徒なら先生も先生か。まさか奇人変人しかないんじゃないだろうか……)

「これ着てグラウンドに出ろ」

寝袋から体操着を取り出した相澤は、それだけを言い残して教室を出て行った。慌てて生徒達も体操着を持って後に続く。

「——ねえ、入試の時助けてくれた子よな？ やっぱりそうだ！ ありがとう！ お礼言えんくてモヤモヤしてたんだあ……私は麗日 うららか お茶子 おちゃこ！ よろしくね」

「ああ……やはりあの時の——美亜、千染美亜だ。気にすることはない、結果的に最善だったからな。あれで私にも救助Pが付いた」

「やっぱり救助P付いてたんだねえ。それにしても千染美亜か……。かつこいい名前だね！ 美亜ちゃんって呼んでもええ？」

「かまわん、好きにするといい」

麗日が話かけ、美亜が素っ気なく返す。そんな会話を繰り返しながら2人もグラウンドへ向かった。

「『個性把握テストオ!!!』」

グラウンドにA組の声が響く。到着するなり相澤が告げたのは、個性の使用なんでもありの体力テストだ。ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50m走、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈

の全8種目を行う。入学式やガイダンスは?というお茶子の質問を、相澤はバツサリ切り捨てる。

「ヒーローになるならそんな悠長な時間はない。雄英の自由な校風は先生側もまた然りだ」

困惑する生徒たちを残して行われたデモンストレーション。死ね!!と暴言を発しながら、凄まじい爆発と共にボールが空を切り裂く。金髪ヤンキー、ばくごう爆豪 かつぎ勝己がソフトボール投げを行い、個性『爆破』を使ってボールを吹き飛ばした。記録は705m、無個性の同世代平均が25mであり、爆豪自身も中学時代は67m、驚異的な記録である。

その光景を見て生徒達が色めき立つ。

「何だこれ!!すげー面白そう!」

「流石ヒーロー科!」

中学の体力テストでは、個性の使用が禁じられていた。他にも、校内での個性発動禁止など、個性の使用には様々な規則が設けられている。一歩間違えれば人を殺せる力である個性に対して国が取った苦肉の対策だ。

これまで雁字搦めにされていた個性を、一切の手加減なく思うように行使できる。これこそヒーロー科、さらにその中でも膨大な敷地面積を持つ雄英高校ならではの。生徒達は一樣に、自分の個性をどのように活かすべきか?記録を伸ばすアイディアはないか?そんな事をワクワクした表情で考え出す。

しかし、相澤は生徒達を鋭く睨みつけ、あきれ返ったような声で告げた。

「面白そう……か。この3年間、そんな腹づもりで過ごす気なのか?よし、このテストでトータル最下位は除籍処分しよう」

騒ぎ立ててた生徒は、冷や水を浴びせられたように静まり、次に抗議の大声を上げた。

「えええええええ!」

「除籍って、入学初日ですよ!いや初日じゃなくても理不尽すぎる!!」「そんな理不尽を覆すのがヒーローだ。雄英はこれから3年間、君た

ちに全力で苦難を与え続ける。『Plus Ultra』さ、全力で乗り越えて見せろ」

それを言われては言い返す言葉も無い。奮起するもの、覚悟を決めるもの、困惑するもの。個々人によって様々な反応が見られる。しかし奮起するものが多いのは流石雄英高校である。

そんな中、美亜は相澤に尋ねる。

「先生、トイレに行ってきたでもいいですか？」

「かまわん、好きにしろ」

入学初日、本来ならば入学式が始まっている時間だろう。今頃は、校長先生のありがたいお言葉でも頂いているはず。そんな時間に突然、A組の命運を掛けた個性把握テストが始まった。

第3話 血濡少女と個性把握テスト

皆のストレッチが終わり、そろそろ始めようかというタイミングで美亜が戻ってきた。しかし、その右腕が先程までと明らかに異なっている。肘上まで赤黒く染まり、白く綺麗な左腕と対照的でより目立つ。そんな異形ともいえる見た目に変化した美亜に生徒達の視線が集まる。

「千染、その右腕はどうした？」

「個性ですよ」

右腕をひらひらと振って答える美亜に、相澤は深くため息を吐く。面倒臭そうに視線を外して第一種目の準備を始めた。

第一種目 50m走

第一種目とあって、皆積極的に自分の個性を使っていく。

その中で輝いたのは飯田だ。個性『エンジン』を使い足から生えたトルクで加速、なんと3秒04の好タイムを叩き出した。他にも尻尾を使ったり、両腕を爆破させることで推進力を生み出したりと、各々の個性と発想力で次々と好タイムを叩き出していく。誰もが個性を使った身体測定は初めて、その記録は中学までと雲泥の差だ。次第に皆の表情にやる気が漲ってくる。

いよいよ美亜の番が訪れた。美亜が体を伸ばしていると、並んで走るカラスの頭部を持つ生徒が声をかけてくる。何となく視線を右腕に感じるが、何がそこまで気になるのだろうか。

「千染といったな。俺は とこやみふみかけ 常闇 踏影だ。よろしく」
「常闇か、よろしくな」

互いに軽く言葉を交わしスタートラインに立つ。号砲が鳴った瞬間、美亜は素早く右腕を前方へと伸ばした。今回は腕を切断することではなく、本来の腕の周りに血を纏わせているだけだ。そのため血量が少なく、4mほどしか伸ばせずに舌打ちをする。

これ以上は腕の形を保てなくなる。そう判断した美亜は地面に爪を突き立て、腕を縮めることで前へと飛んだ。横の常闇も同じように、『黒影』ダークシャドウに地面を掴ませ跳躍している。

結果、千染美亜 7. 02秒、常闇踏影 6. 32秒

やはりリーチの短さ、回転率の悪さでタイムが伸びなかった。それにしても常闇の個性、何やら影のような物を操っていた。ずいぶん自由に動かしていたし、何やら掛け声を発していた気がする。掛け声は気のせいだったかも知れないが、便利で強力そうな個性だ。

第二種目 握力

握力はまるでお手上げだった。考えるのも面倒くさくなってきたので普通に測ってみることにした。入学前に少しは鍛えたしマシな記録は出せるだろう、最下位なんてことはないはずだ。

結果、千染美亜 17kg

因みに無個性の高一女子平均は25kgだ。結構全力で握ったつもりだったが流石に落ち込む。普通に現時点で最下位である。鍛えなければなど考えているとキリキリと何かを回すような音が聞こえる。見ると八百万という女子がなぜか万力で握力計を締め上げている、ちよつと意味がわからない。

結果、やおよろず八百万もも、1. 2t

あまりにも凄い記録に周りから歓声が上がった。果たしてあれは握力なのだろうか？本当に個性ならなんでもありなんだなと美亜は無理やり自分を納得させた。

第三種目 立ち幅跳び

50m走と同じく腕を目一杯伸ばし、縮めることで勢いをつけて飛ぶ。10mは飛んだはずだと相澤の方を見ると見せられた計測機には4. 84mと書いてあった。どうやら腕を地面についたためその地点が落下地点になったらしい。よくよく考えたらその通りなのだ。納得がいかなかったので相澤を一睨みしてから木陰へ休憩に向かった。

結果、千染美亜 4. 84m

第四種目 反復横飛び

木陰で一息つきながら策を考える。個性を使わず普通にやっては、おそらくこのクラスで身体能力最低な私は最下位になってしまう。

右腕に纏わせている血を2分割して両腕に纏わせ、左右に突き立てて交互に伸縮させる。おそらくそこその回数が出せると思うが、見た目が悪い。ぶっ壊れたやじろべえのようにみよいんみよいと跳ねる自分を想像すると悪寒が走る。

結局、この種目も普通にやろうと美亜は結論づけた。

結果、37回

結果を見終え水を飲んで休憩していると飯田の番が回ってくる。飯田の個性は『エンジン』、ふくらはぎにエンジンのような器官が備わっており、爆発的な推進力を生み出す。そんな彼は思いつきり内股にすることでエンジンを外に向け、交互に噴出することで爆速の反復横跳びを可能にしている。

どこからか「行くわよオオオオオオ!!」と聞こえてきそうなその姿に生徒たちは爆笑していたが、それでも当の本人はやり切った清々しい笑顔を見せていた。

第五種目 ボール投げ

個性『浮遊』でボールを浮かせた麗日が?を叩き出し、デモンストレーションと同じように爆豪も700mを出した。

そして回ってきた緑谷の番、皆が心配そうに見つめる。現状は緑谷のダントツ最下位、このままでは除籍になってしまう。

受験で見せた超パワーと直後の大怪我、美亜は緑谷の個性を諸刃の剣的な増強型個性だと考える。それならばこのボール投げが個性を使うタイミングとしてはベスト、あのパワーの全力が観れるかもしれないと美亜も注目した。

そんな緑谷の一投目、ここまでの競技では全く普通の成績だった。しかしこのソフトボール投げでは増強型個性に大きなアドバンテージがある。皆の視線が集まる中大きく振りかぶって投げた。

結果、緑谷出久、46m

余りにも呆気ない。これまでの種目と同じ普通の記録である。しかし様子がおかしい、緑谷は困惑を隠しきれない表情で腕を見ている。

「な……今確かに使おうって……」

「今、お前の個性を消した。入学試験のようにまた行動不能になって誰かに助けてもらおうつもりか？つくづくあの試験は合理性に欠ける、お前みたいなやつが入学できてしまうからな」

困惑する緑谷に、髪をかき上げ鋭い目を露わにした相澤が言い放った。

「消した……そうか！抹消ヒーロー、イレイザー・ヘッド!!」

緑谷の驚きの声がグラウンドに響いた。まったくヒーローを知らない美亜からすると誰？であるが、周囲の反応を見るに今回は皆知っているわけでは無いようだ。

相澤消太、ヒーロー名はイレイザー・ヘッド、個性『抹消』は見た者の個性を消す。アングラ系ヒーローで滅多にメディアや人前に姿を現さないため、知っている者は少ないがかなりの実力者である。

(個性を消す『個性』……成る程そんな個性もあるのか。私の個性とは非常に相性が悪いな、気を付けなければ)

残り後一投と告げられ、緑谷は俯いてブツブツと何かを呟き出した。もしや諦めてしまったのだろうか。全力を出せないで終わるといふのは気の毒ではあるが、入試の時のように怪我をさせる訳にはいかないという相澤先生の立場も理解できる。

「SMASH!!」

しかし、緑谷の放ったボールは遙か彼方へと吹き飛んだ。700m越えの大記録である。緑谷は真紫に腫れ上がった人差し指ごと拳を握り、相澤の方を見る。相澤も思わずこいつ……とニヤリと笑った。皆があまりのどんでん返しに沸く中、怒声と共に爆豪が緑谷に突撃する。

「どーいうことだこらあーワケを言えデク!!てめえ!!!」

瞬時に包帯のような布が爆豪に絡み付き、その身動きを止めた。得意の爆破で吹き飛ばそうとするが何故か個性が使えない。

「まったく、何度も個性を使わせんな。俺はドライアイなんだ。時間ももつたいない、千染準備しろ」

爆豪を視界に入れながら、相澤は呆れたように言って美亜を促す。

緑谷の大記録に安心したのだろうか、先程までの暗い表情とは一旦、満面の笑みで麗日が声をかけてくる。

「頑張つて！あのおっきな手で私を投げた時みたい！！」

「はあ……前のやつが盛り上げすぎだな。あ後はプレッシャーだ」

ぼやきながらスタートの円に立つ。確かに麗日を受験で放り投げたように個性を使えば、かなりの飛距離は出るだろう。ただ今回は血の量あまりに少なすぎる、だから実験ついでにもう一つの使い方を試してみる。右手からすると血を離し、ボールを覆い尽くす。手のひらの上で浮かび上がっているその球体と意識が繋がり、しつかり操作できる事を確認するとそのまま前方へ飛ばした。徐々にボールが離れスピードを増しながら飛んでいく。思いもよらない美亜の個性に声上がる。

「へー、腕が変形する個性とかじゃ無いんだな」

「私もそう思ってた！不思議な個性だね。あれどこまで飛ぶのかなあ」

そんな声を耳にしながさらさら遠くへと飛ばし続ける。一体どの範囲まで血を操れるのかを実験するために飛ばしてみたが、やはり予想通り100mを超えたあたりから徐々に操作が難しくなっていた。ただボールを運ぶだけならなんとかなるが、例えば200m先にある自分の血で槍を作って攻撃するなどの精密動作はとでもできそうに無い。

記録、千染美亜 380m

最後の方はもはや本当に飛んでいるのか、そもそもそこにボールはあるのかすら分からないほど感覚が怪しくなってしまったが、悪く無い記録を出せたと思う。

しかし直後の八百万が『創造』で何と大砲を作り出し、轟音と共にボールは空の彼方へと突き抜けていった。また大記録だ、やはり推薦組というのは優秀らしい。

結果、八百万百、28km

ボール投げ、美亜は麗日、八百万、緑谷、爆豪に続く5位だった。

第6種目 持久走(3km)

3キロを走り切るのは厳しいな、スタート位置で屈伸しながら美亜は考える。周りの生徒にとっては3キロなど容易に走り切れるが美亜は違う。仮に走ろう物ならフラフラになりながらダントツの最下位でゴールする羽目になるのは間違いない。スタートの合図と共に皆一斉に走り出す。先頭を駆け抜けるのはやはり飯田、その後ろを爆豪が爆破でブーストして猛追する。続いて轟や芦戸、尾白など身体能力が高い組が、美亜はその後方を瀬呂や砂藤らと共に走る。美亜は腕の血を地面に落としてその上に乗って滑走していると横で走る瀬呂が恨めしそうな視線を向けてくるが気にしない。

少し走ると後方からエンジン音が聞こえ、颯爽と抜き去られた。飯田が周回遅れにしてきたか?と思っで見ると八百万が原付に乗って走っている、ヘルメットを忘れないのが実に優等生らしい。

「さすがにありや反則だろオ!!」

後ろを走る峰田から抗議の声上がり、美亜も同意して横で走っている上鳴にも賛同を求めた。

「あれはずるいよな?せめて足で走ってほしい」

「いや・・・千染、お前すげえな・・・」

なぜか呆れたような視線を足元に向けられた、意味がわからない。相澤はそんな抗議の声を受け流して許可していた。

結局、美亜はそのまま中位グループで滑り続け、そのままゴールした。

結果 1位 飯田天哉、2位 八百万百 3位 爆豪勝己 9位 千染美亜

第7種目 長座体前屈

ここでは蛙吹梅雨が個性『蛙』を生かして舌を伸ばす。

結果、蛙吹梅雨 1973cm

『蛙』は蛙っぽいことならなんでもできる個性で、どことなく蛙っぽい見た目をしている。後たまにケロケロと言っている気がするが、美亜は流石に気のせいだろうと聞かなかったフリをした。しかし参考に

はする。柔軟には自信があるため限界まで体を倒し、そこからさらに血腕を伸ばした。

結果、千染美亜 460cm

長座体前屈を終えた美亜が木陰で休んでいると美亜の個性に興味を持った生徒が2人話しかけてくる。

「君の個性、便利だね。いろいろ出来そうで羨ましいよ」

「そうそう、その腕にくっついてる物質を操る個性か何か？」

片方は『尻尾』の個性を持つ尾白おしろ猿夫ましろお、もう1人は『イヤホンジャック』を持つ耳郎響香きこうじろう。きょうかだ。美亜は2人に自己紹介を済ませると血をすすると浮かばせて球体にする。2人の周りをくるくる回る球体に感心している。

「そうだな、私の個性はこれを操ることができるんだ」

「いいなあ、応用力高そうで」

尾白のその声に首を傾げる。美亜としてはいちいち血を流さなければならぬこの個性は全く使いづらいものだ。それに普通だったら血を流すために痛い思いをする。こいつはドMなんだろうかとあらぬ誤解を始めた美亜に耳郎から声がかかる。

「それで、結局この液体？物体はなんなの？」

「ああ、これは血だよ。私は自分の血を操れるんだ」

「へー血かあ。なるほどねー…え？血？ええ…」

次の競技へと向かう美亜。残された2人や聞き耳を立てていた生徒たちは少し引いていた。いくらブラド先生がいたとしても彼はコスチュームで血を吸い出している。コスチュームのない美亜はどうやって今個性を使っているのか…

最終種目 上体起こし

30秒で何回腹筋ができるか。すでにこの種目を前に緑谷の最下位は確定していた。特に案もなかった美亜はこの1年の筋トレの成果を試すべく普通にやってみることにした。思ったよりもきつい、無理して最初に飛ばしすぎたせいで後半はバテバテだった。

結果、千染美亜 28回

これで全ての種目が終了した。トータル最下位が除籍となる。集められた皆の中で緑谷の顔は暗く、他の生徒も心配そうに緑谷と相澤を交互に見ている。ソフトボール投げ以外に目立った記録を残せなかった緑谷は間違いなく最下位だろう。

「んじゃパパッと結果発表だ、トータルは各種目の評価点を合計した数、口頭で説明するのは時間の無駄なので一括開示するぞ：ちなみに除籍は嘘な、合理的虚偽だ、君らの最大限を引き出すためのな」

「はーーーーー!!!」

さらつと言われた衝撃の一言に緑谷、飯田、麗日をはじめとした数名が驚きと抗議の声を上げる。美亜の横にいる八百万など数名は気付いていた様だ。

「あんなのウソに決まってるじゃない、ちよつと考えればわかりますわ」

相澤は教室にカリキュラムなどの書類があるから見とけ、と言いつつ残してやるそうに去っていった。皆が啞然としてその背中を見送る中、美亜も同じように啞然としていた。

（なつ：なんだと…、雄英高校の教員ともあろう者が初日から嘘だと！全然気づかなかつた…）

気付いてもいなかった美亜はなんとか声には出さずに心の中で抗議の声を上げていた。

1位 八百万

2位 轟

3位 爆轟

15位 千染

「ただいまぐふつつつ！」

バスに揺られること20分、孤児院に帰宅した美亜に小さな塊が突っ込んできた。何とか受け止めたもののお腹に相当なダメージだ。

「おかえり美亜ちゃん！学校楽しかった!？」

「かおり…私はか弱い乙女なんだ、突っ込んでくるのはやめろ」

「お帰り美亜。おい、美亜は学校初日で疲れてるだろ！負担かけるのやめろや！」

そんな2人を他所に靴を下駄箱にしまつてリビングに向かう。鞆を置いて冷蔵庫から出した麦茶を飲んでると拳士さんがリビングに入ってくる。

「おー、お帰り美亜。どうだ？疲れただろ」

「別に余裕だった、私の心配はいらないよ」

「そうは言っても意外と疲れは残っているもんだからな、今日はしっかり体を休めて明日に備えるんだぞ。」

ところでクラスはどんな感じだ？友達はできそうか？入学式行きたかったなあ」

食卓の机の向かいに座った拳士は矢継ぎ早に質問する、本人は気付いているのか分からないが尻尾がブンブン振れている。

「わかった、そうする。それでやっぱりヒーロー志望のやつは変な奴ばかりだよ。急にキレる奴、無駄に明るい奴、痛い奴とか」

「そっか…まあ雄英高校に行くような子達だ、才能溢れる個性的な子が多いだろうなあ」

そう言つて拳士は困つたような曖昧な笑顔を浮かべた。その後すぐにキラキラした目に戻り、話を聞きたがる。いつの間にか既に横にかおりが、食卓から少し離れたリビングのソファには風斗が座つて聞き耳を立てている。

いつになく浮き足立った孤児院に思わず頬が緩んだ私を見て、拳士も満面の笑みを浮かべた。

「入学式は無かったよ」

「なんで！」

第4話 血濡少女と「私が来る!!」

雄英高校のヒーロー科と言えども高校生として勉強をする必要がある。そのため午前中は必修科目、国語や数学、英語などの授業を行なっている。

雄英高校に通って2日目、A組では1限目の英語が行われていた。「んじゃ、次の英文の内間違っているのは…?」

おらエヴィバデイヘンズアップ盛り上がれー！ー！！」
教室にプレゼント・マイクの声が響く。

そう、雄英高校は教員が全てヒーローなので授業の個性が強い。ただ確かに教員のキャラは濃いのが、授業内容は至って普通なのだ。そのギャップでほとんど皆が普通だ、とかつまらん、と思っていた。(おー、成る程、勉強してる感じするな。)

これが噂の挙手か、確かに飯田や八百万の真面目組以外は誰も手あげないな、かおりから聞いた通りだ。新鮮だな…)

そんな中で美亜は以外と楽しんでた。授業内容やプレゼント・マイクのテンションではなく、学校に通い、集団で授業を受けるとするのは初めての体験でとても新鮮だ。せっかくだし挙手してみるかと右手を控えめにあげる。マイクがおっ！と声を上げてこつちを見た。

「意外なお便りありがとう！千染、アンサー頼むぜ！」

「1だ。容易いな」

「ノー！次！」

おかしいな、絶対に正解してると思ったのだが。成る程4番か、流石真面目眼鏡だ。

2時間目 エクトプラズム先生の数学

「中学ノ復習ダ。コノ問題ヲ答エテミロ」

「√3だ」

「チガウ、次ダ」

3時間目 セメントス先生の現代文

「この時の筆者の気持ちを答えなさい」

「②だ」

「違うよ美亜さん、なんでそんなに自信満々なのかな?」

4時間目 ミッドナイト先生の近代ヒーロー美術史

「このヒーローの名前は?」

「オールマイトだな」

「全然違いわ、ホークスよ。貴方の目には何が写ってるの?」

こうして午前の授業を終えると大半の生徒が食堂に向かった。食堂ではクツクヒーロー、ランチラッシュの作る絶品料理が安価で食べれる。

例に漏れず美亜も食堂に向かう。食堂があるからと美波が気を使ってお小遣いをくれたのだ。ちなみに、毎朝風斗とかおりに弁当を作っているのもう1人分ぐらい難なく作れる。しかし、美亜には大きな問題があった。

(学食というものは誰かと食べると聞いたぞ、まずいな、誘うってどう誘うんだ、そもそも誰を?)

私自身は1人で食べることに何ら抵抗はない、むしろ煩わしくなくて良いと思う。しかし2日目で壁を作りに行くのは流石にまずい、あまり悪目立ちしたくは無い。

「美亜ちゃん!学食?一緒に食べよ!!」

「そうか、いいぞ。一緒に食べようじゃないか」

立ち止まって迷っていると麗日が誘ってくれた。その慣れた誘い方に感心しながら麗日についていくと既に緑谷と飯田がいる。どうやら彼らも一緒に食べるらしい。

4人が食堂に向かう後ろ姿を見て峰田は歯を食いしばる。

「くそー、何だ緑谷!あいついきなり愛嬌抜群の麗日とモデル級の干染を侍らせやがってー!!」

「いや飯田もいるだろ」

瀬呂範太は苦笑いしながら悔しがる峰田にツツコミを入れていた。

美亜は今日のランチラッシュセット、ブリの照り焼き定食を受け取って席に着く。さて、何を話すんだと困惑していると飯田が黒縁メガネを右手で上下させながら話しかけてくる。そのロボットみたい

なカクカクした腕の動きはどうやっているんだ…？

「美亜君！午前中の授業は素晴らしかったな！中学の復習といえどもやはり興味深い、君もそう思うだろう!？」

「どうやら毎回手を挙げて発言していた私が授業に興味を持っていただけと勘違いしているらしい。横で美味しそうに頬を膨らませて白米をもぐもぐ食べていた麗日が笑顔でキツイことを言ってくる。

「そうだよ！全部間違えても諦めないのはすごいよ！」

「麗日、その発言はうららかじゃないぞ」

「そうだ麗日君！例え間違えても復習して今度こそ正解したらいいんだ、何事も最初の一步からだ」

熱心に語る飯田をBGMにして、時折相槌を打ちながら舌鼓を打つ。料理ヒーロー？が作ってだけあってかなり美味しい。特にこの白米は一粒一粒が艶々で、固すぎず柔らかすぎずの程よい炊き方、こだわりが感じられる。

「そういえばあのホークスとかいうヒーローは凄いのか？ミッドナイト先生が新進気鋭のスーパーヒーローと言っていたが」

美亜がそう尋ねると、横で普通に話していた緑谷が急に身を乗り出して早口で捲し立ててくる。

「ええ！千染さん知らないの！ホークスは『速すぎる男』と呼ばれてて凄いいヒーローなんだ！個性は『剛翼』！18歳で事務所を立ち上げて僅か半年でトップ10ヒーローの仲間入り、10代でのノップ10入りは史上最年少で前回のチャートで22歳で遂にトップ3に入ったんだ！あ、チャートっていうのはHERO BILLBOARD CHARTSのことで、過去1年間の……」

「長いぞ緑谷、それにそんな近づかれては食べづらいだろ」

「あつ、ごっごめん千染さん！」

美亜が呆れた表情で言い放つと、緑谷は顔を真っ赤にして手で覆いながら慌てて離れる。

「緑谷くん！素晴らしい知識だ、ヒーローがよっほど好きなんだな！」

「ヒーローオタクなんだね！凄いやん！」

飯田と麗日は何故か感心したように褒め称えている。麗日にそれは褒めているのか？と疑問を抱きつつ付け合わせのきんぴらごぼうを一口食べた。やっぱりおいしい、ホークスは覚えられなくてもランチラッシュぐらいは覚えておこう。

昼休みを終え、午後の授業を待つ教室は浮ついた雰囲気にも包まれている。

午後はヒーロー基礎学。しかも担当はあのオールマイト、ヒーローを目指す生徒たちが浮き足立つのも無理はない。

そして、廊下からあの声が響く。

『わーたーしーがー!!』

普通にドアから来た!!』

勢いよく入ってきたオールマイト、NO1ヒーローの名に恥じない筋骨隆々、威風堂々、明らかに何かが濃い様な気がする英雄の登場に教室のボルテージは最高潮に達する。

「すげえ…オールマイト本当に先生やつてるんだな!!」

「ヒーロー基礎学…ヒーローの素地を鍛えるための科目だ！早速だが今日はこれ、戦闘訓練だ!!」

そう言っただけで掲げたプレートには「BATTLE」の文字、いきなりの戦闘訓練に教室が騒めく。

「そして、そいつに伴って…こちら！

君たちの『個性届』『要望』に沿って作られた戦闘服!!
コスチューム

着替えたら順次グラウンド・βに集まるんだ！」

戦闘服という最高に盛り上がる物が渡され、最高潮かと思われたボルテージは更に上がる。立ち上がってる生徒もいるぐらいだ。

そしてオールマイトは最後に言葉を残す。

『格好から入るってのも大切なことだぜ少年少女!!自覚するのだ!!今日から自分は…ヒーローなんだと!!』

女子更衣室で着替えているとやはりオールマイトの話題になる。

「やっぱり凄いね！オールマイト先生！」

「かつこよかったですわね」

「いやーNOーヒーローは迫力あるね」

そんなことを話しながら横で着替える八百万の戦闘服を見て美亜は思わず声をかける。

「なあ…それは恥ずかしくないのか？胸元が丸見えじゃないか」

「それに脇と脚が丸見え！やばいよそれ！」

「要望ではもう少しお腹にかけて肌が見えていたのですが…布が増えてしまいました。」

芦戸も賛同するように声をかけると八百万は心底不満そうに戦闘服を見る。しかし皆が思う不満とは逆方向のようで、肌を覆われたことに不満を持っている。

八百万の個性は『創造』、強力な個性であるが肌から直接生み出すため服は邪魔になる。

「八百万さんは控えめになったんやね。」

私、パツツパツだよ、ちゃんと要望出せばよかったよ…」

「可愛いと思うよ、ピンクいいよね！」

「そうですね、麗日さんらしくてとっても素敵です。」

そう言われた麗日が照れた様に笑う。麗日のスーツはピンクと黒を基調にしたスーツで、ベルトと手首の球体以外はピチツとしてボデイラインがはつきりとわかる。

それを聞くと今度は美亜の戦闘服を見る。

「千染さんの戦闘服、魔女みたいですよ」

「魔女っていか軍服？だよねー、可愛い！」

「いーなー、美亜ちゃんスタイルいいから本当に似合ってる」

美亜の戦闘服は首までボタンで止めた白いシャツ、腰には胸下まで長さのある漆黒に紅い刺繍の入ったコルセットを正面で留めて巻いている。そこから背中側に生地が続き、肩を覆っていないながら胸の上で合わさり、そこに紅のブローチが着く。肩口からは白磁の様な美しい腕が晒されている。下はピチツとした黒のパンツで、細く引き締まった脚が強調される。

(なんで下半身がこんなパツパツなんだ、まさか制作者の趣味じゃな

いだろうな？それにこんなに黒赤だと胸の白が目立つ…)

皆が着替え終わるとグラウンドに出る。戦闘服を着たからか皆の表情は引き締まっていて様になっている。

そんな彼等をオールマイトの気合いの入った声が向かえた。

『始めようか有精卵共!!!戦闘訓練のお時間だ!!!』

第5話 血濡少女と戦闘訓練 前編

オールマイトが行うヒーロー基礎学、場所は入試の時と同じく模範市街地である。行われるのは屋内での対人戦闘訓練、「敵組」と「ヒーロー組」に分かれた2対2の屋内戦だ。

状況は5階建ての建物、敵が建物内に核兵器を隠していて、ヒーローはそれを無事処理しようとしている。制限時間内に確保テープを巻き付け互いを捕まえるか、核兵器を敵が守り切るか、ヒーローがタッチして回収すれば勝ちとなる。

組み合わせはクジで決めることとなる。

美亜が引いたクジは「E」、コンビは芦戸三奈だ。対戦相手はグルー・P、常闇踏影と蛙吹梅雨だ。

「やった！美亜ちゃんとコンビだ、よろしくね」

「よろしくな芦戸、しかし相手は常闇と蛙吹：厳しい戦いになりそうだ（何でこんなテンション高いんだ。お前が組むのは体力テスト15位だぞ）」

第一戦はヒーロー側緑谷・麗日と敵側の爆豪・飯田の対戦となった。開始早々に緑谷を殺すほどの勢いで攻め立てる爆豪。その戦闘スタイルを知り尽くした緑谷に翻弄されるものの、持ち前のセンスと強力無比な個性で緑谷を追い詰め、建物をぶち抜く程の大爆発を放つ。

しかし、それを利用した緑谷と麗日の起点により麗日が核に触れ、ヒーロー側の勝利となった。

爆豪が暴走、核兵器があるのに暴れ回った第一戦に対し、その後は各々が個性を活かした戦闘が行われた。

特に目立ったのは轟焦凍、個性『半冷半燃』、開始早々に建物全体を凍結させ敵の身動きを奪い悠々と勝利した。

「仲間を巻き込まず核兵器にもダメージを与えず、尚且つ敵を弱体化！」

「何だよあの威力、最強じゃねえか！」

「あれはどうしようも無いわね、轟くん、本当に凄いわ」

「轟つてあのエンデヴアーの息子なんだろう？」

「まじ？エンデヴアーって言えばN02ヒーローじゃん！すつげー」

モニタールームで皆が騒いでいる。ただ、あまりに強力な個性に対策を立てられる生徒はいない。美亜も例外ではなかった。

『半冷半燃』？あれは強いな、液体を使う私にとって天敵にも程がある…

確か個性は遺伝するって聞いたことがある、N02ヒーローの炎にあの強力な氷、片方でも強力なのに、とんでもない掛け合わせで子を産んだな)

ちなみにもちろんエンデヴアーとかいうヒーローも知らないので皆の話に相槌を打って知ったかぶりしておく。流石の美亜でもN02ヒーローを知らないのは雄英生としてあまりにも不自然だと考えた。そもそもホークスを知らない時点で割と手遅れである事には気付かない。

そしていよいよ4戦目、美亜の番が回ってきた。

第四戦 千染・芦戸VS常闇・蛙吹

敵が先に入って準備した後、五分後にヒーローチームが突入してくる。

敵側となった美亜と芦戸はこの時間で作戦を立てることにした。互いの個性が分からない限り上手く連携が取れるはずもないのでまずは個性の確認から行う。

「私の個性は『酸』、体から溶解液を出せるよ！地面を滑ったりして移動できるから機動力には自信あり！ただ量は限界があるし、遠くには飛ばせないの」

「いい個性だな、機動力はこの戦闘では非常に重要になる。遊撃をしてもらおう。」

私の個性は『操血』だ。自身の血液を操作できる、近接は多少戦えるが機動力はほぼ無いから防衛戦しか向いてないな」

「操血…？あーB組のブラド先生と同じだね！いーなー、手本が直ぐ近くにいるじゃん」

「私は別に手本にする気など無いのだが…まあいい、とにかく今は作

戦を立てよう」

芦戸は話しながらしつかりとストレッチをしている。柔軟性が高く引き締まったアスリートのような体、運動神経はA組女子の中ではトップだ。私にもあれぐらいの運動神経があればもつと戦いの幅が増えるのにとじつと見つめてしまった。

しかし時間がもつたいたないと直ぐに気持ちを切り替え、落ち着いて作戦を立てようと周囲を見渡す。動き回るのは芦戸に任せよう、そう考え自分はブレインを務めることにした。

核兵器のあるこの部屋は5階に位置し、入口のある壁と核兵器を挟んだ対面の壁には多数の窓がある。窓から陽の光が差し込み部屋を照らしている。核兵器は私より2回り以上の大きさで、これに触れさせないようにというのは難しそうだ。

色々と策を考えていると、ストレッチを終えた芦戸が軽く伸びしてからよしっ！と気合を入れていた。

「さつき美亜ちゃんも言ってたけど私が遊撃に回るのが1番かも！

うーん、この部屋外に面してるから背面に窓が多いね。常闇くんと梅雨ちゃんの個性なら窓から入ることができるはず…どっちかが窓から入ってくると考えたほうがいいよね」

思わず感心する。活発で人との距離も近い、よく喋るしテンションも高い、勝手に芦戸のことを単純馬鹿だと思っていた。なかなかよく周りが見えているな、それに相手の個性も既に記憶している、考えを改めるべきか。自分がブレインとなるのでは無く共闘しようと思った。

「あの2人の個性…先の体力測定を見るに蛙水は明らかに『蛙』だな、常闇はあの腹から出てる影を操るとかだろう。確かに舌を伸ばす、影に窓枠を掴ませるなどして窓から入れそうだな」

「梅雨ちゃんケロケロ言ってるて可愛いよね！

常闇くんは体力テスト見た感じだとそうだなね…強そうだなあ、かっこいいし」

「とりあえず常闇の戦闘力、蛙水の機動力は驚異だ。この部屋で待ち構えて核を守りつつ2人同時に戦うのはまずいだろう。」

一撃でも核に触れられたらアウトなシチュエーションで乱戦は避けたい。

理想は機動力のある芦戸が4階でどちらかを抑えている間に、私が部屋に入ってきた残りを相手取って制圧することだな」

ここで美亜が懸念していることを芦戸に伝える。

「二つイレギュラーが起きるとすれば、2人同時に窓から入ってくる、2人とも馬鹿正直に正面から突撃してくるの2通りあるな。

核もある以上乱戦はあいつらとつても不可能、流石にやらないと信じたいが…」

「そもそも本当に2人ともが窓から入れる個性か分からないし、もし2人とも正面から来たらずぐ連絡する！

そしたら美亜ちゃんも5階の階段前で待ち構えてればいいと思う！」

「成る程な、窓から来ないのであれば何も核の前で待つ必要はないか。とつとと殲滅してしまえば楽に終わる」

涼しい顔で余裕を見せる美亜に『この子、すっごい自信だなあ…どこから来るんだろう』と芦戸は少しだけ苦笑いした。

5分が経過し、オールマイトから開始の合図が掛かる。

「よし！じゃあ私4階に行ってくるね。

絶対勝とうね！」

「当然だ、負けると考えて勝負する奴がいるか、健闘を祈る」

元気に言い残して芦戸は下に向かっていく。

芦戸に対する認識をふぎけた奴から意外に真剣でものを考える奴に変えながら準備を始めた。

芦戸からの通信が絶えず入っており、順調に所定の位置に着こうとしている。流石の常闇と蛙水も開始早々突っ込んでくることはないか、と予想外の事態にならなかつたことに安心する。

「3階に降りる階段前に到着！今のところ来てる気配は…！」

芦戸から所定の位置、4階と3階を繋ぐ階段前の廊下に着いたと通信を受けていた最中、突如声が乱れる。

「常闇君ッ！一人で突っ込んできたよ、やっぱり影が襲いかかってく

る！」

「おい、1対1で対処は可能か?」

「大丈夫！回避しながら時間を稼ぐからその間に梅雨ちゃんの制圧をお願い！」

まだ姿が見えないから多分窓から！警戒を緩めないで!!」

そう言つて芦戸は戦闘に戻る。

突如階段の下から襲いかかつて来た黒ダークシャドウ影、油断していれば今頃吹き飛ばされていただろう、芦戸は飛び退いて廊下へと交代した。

常闇の黒影は伸縮自在の影のようなモンスターを体に宿し、それを操ることで戦闘を行う。影はその腕や首を伸ばしながら自在に襲いかかってくる。

そんな常闇の猛攻を酸で牽制し、床を滑り、時には壁を滑って回避しながら隙を窺う。狭い廊下では回避するのも一苦労だ。本来なら直ぐに制圧されてもおかしく無いのだが、芦戸の身体能力と個性を使った動きがそれを可能にしている。

(攻撃も防御も凄い、射程も長いし隙がないよー。近づこうとしたら距離を取られるでしょう……)

想像以上の個性の強さに攻めあぐねている芦戸は、とにかく時間を稼ぐことに集中する。

(とにかくここで常闇くんを足止め！そうすれば梅雨ちゃんと美亜ちゃんの一騎打ち、私たちの理想の形に持っていける！)

勢いを増していく常闇の攻撃を紙一重で躲しながら、5階への階段だけは死守する為、酸を吐き距離をとった。

一方美亜は蛙水を迎え撃つために準備をしていた。

戦闘服に袖が無い為、本来なら腕を切り落とすことができるが、見られるわけにはいかないのでとりあえず手首を切ることにする。

血を手を吐いて右手に纏わせ、その人差し指をナイフのように尖らせる。入試ではナイフを所持していたが流石に校内での凶器の所持は許されなかった。その為に見えない口内を噛み切つてナイフを作ることにしたのだ。そしてそのまま左手首を斬り付ける。

鮮血が勢いよく流れ、地面を紅く染め上げてゆく。流れる血を見つ

める美亜の顔には何の感情も宿っていない、ただただ恐ろしいほどに美しく整った無表情が人形の様に貼り付いていた。

第6話 血塗少女と戦闘訓練 後編

「なっ、何やってるの?!」

「うおおお、おいおい不味いだろあれ!!」

モニタールームではいきなり手首を切って血を噴出し続ける美亜を見て悲鳴が上がる。既に地面には半径1mほどの血溜まりができているがそれでも血は止まる気配がない。

八百万や切島など正義感の強い生徒がオールマイトに演習の中止を訴える。

「オールマイト先生止めましょう!あの血の量は尋常じゃありません、あのままでは美亜さんが倒れてしまいますわ!」

「落ち着くんだけ皆!!美亜君の個性は『操血』、血の操作ができるから恐らくは大丈夫だろう!」

昼に食堂で美亜の個性を聞いていた飯田や麗日が焦る皆を抑える。あれが個性だという話や美亜の平気そうな雰囲気から少し落ち着きを取り戻すも心配そうにモニターを見つめている。

(んー、なんか血の量が多くない?気のせいかな…)

そんな中でオールマイトだけ、美亜の様子に違和感を抱いて首を傾げていた。

(芦戸はしっかりと常闇を抑えている。ここまでは1番良いパターン…だが何故だ、何故蛙吹がこない??)

既に試験開始から5分以上が経過した。芦戸は常闇をしつかり足止めしてくれている。しかし美亜は少しずつ疑念を持ち始める。当然この訓練には時間制限があって、それを迎えると敵側の勝利となる。悪戯に戦力をばらけさせ、その上で時間を無駄に使うのは余りにも愚作だ。もし本気で窓から奇襲するにしてももう少し早く来るはず。その方が失敗したときに次の策を打つ時間が残る。

美亜の抱く疑問が大きくなってきたその時、芦戸から通信が入る。

「美亜ちゃん!常闇君が想像以上に強い!黒^{ダイクシヤドウ}影がどんどん大きく、強くなってる。抑え切れないかも!」

「なんだと…？本気を出していなかったのか。とにかくまだ蛙吹が見えない以上、芦戸が突破されるとまずい。なんとか耐える…」

「いや…まさか！芦戸上だ!!」

美亜の声に弾かれたように上を見た芦戸、その目には天井に張り付いている蛙吹が写った。

「梅雨ちゃんっ！天井に貼り付けるなんて!!」

「そんなに名前を呼ばれたら照れちゃうわ」

軽口を叩きながら蛙吹は勢いよく舌を伸ばしてくる、その先には補助テープが付いている。

芦戸は咄嗟に酸を全力で地面に分泌、その反動で後ろに飛ぶことで回避する、その隙を常闇は見逃さなかった。襲いかかってきた黒影ダークシャドウに空中で吹き飛ばされ、なす術なく地面を転がる。階段への道が開けてしまった。

「痛っ…、ごめん美亜ちゃん5階に登られた。梅雨ちゃん壁に貼り付けるよ！今2人がそっちに向かっている！」

常闇と蛙吹は美亜と芦戸の裏をかいだ。窓から突入できる個性を持つ2人を警戒して、必ず部屋に1人は残る。だからこそ2人での正面突撃、派手な常闇に意識を向けさせ、窓から来ると思われた蛙吹が天井から忍び寄って捕縛する。2対1の状況に持ち込んで、一人一人確実に捕縛出来る状況を作った。

想定外だったのは芦戸の身体能力が想像以上に高く、回避されてしまった点。しかし階段への道はこじ開けることができた。

「ケロッ！やったわね常闇ちゃん。」

「だが彼女には悪いことをした、相当痛いはず…しばらくは立ち上がれないだろう。」

だが今は次、千染美亜…個性は分らんが2対1なら対処可能だ」

2人が後ろを警戒しながら核兵器のある部屋に着くと、核の前に美亜が仁王立ちしていた。

「なかなかやるな、裏をかいてくるとは。感心したぞ常闇、蛙吹、だが一步でも踏み入れてみる、私の個性が貴様らを屠る」

踏み出そうとした2人は思わず躊躇してしまう、それほど床には夥

しい量の血が一面に広がっている。濃厚な鉄の香りに思わず顔をしかめながらも警戒を緩めない。

「この個性…なんだ一体…」

「血ね。これは踏まないほうがよさそうだわ。私は壁と天井に貼り付いて核を狙う、常闇ちゃんは縁から血を踏まないように黒影ダークシャドウで攻撃して」

「御意…、後ろから芦戸が来るかも知れん、入り口に立って警戒しておく」

（常闇と蛙吹…冷静な思考だ。この光景を目にして咄嗟に対処できるか…）

「行け！黒影！」ダークシャドウ「アイヨ!!」

入り口に立った常闇が血の縁ギリギリから飛ばしてくる黒影ダークシャドウ、嘴が貫かんとしたその時、美亜は手を大きく上に振り上げる。その動きと連動するように地面から血の盾が出現し、攻撃を弾き飛ばす。

「常闇ちゃんの黒影を弾くなんて、凄い防御だわ」

そう言いながらも横から蛙吹の舌が伸び、核兵器に触れようとしてくる。触れられただけで敵側は負けになるので、これも盾で弾がなければならぬ。あの柱が厄介だ。核の周囲を囲むように4本の柱が立っていて、その間を飛び移って四方八方から舌を伸ばしてくる。

遠距離から2人の猛攻に遭い、防戦一方になる美亜、防ぎ漏らし、負けてしまうのも時間の問題に見えた。蛙吹の舌は速いが威力に欠けるため宙に浮かした盾で防げる。地面から血を吸い上げ、それを宙に浮かして防御に回すことなどか2対1の手数の差をカバーしている。だが問題は常闇、黒影ダークシャドウは威力も高くそして速い。その威力は意識して防がなければ突破されてしまう。

「クソツ、遠距離が2人も！ランダムของทีมでこれは相性悪すぎだろ！」

「美亜ちゃん悪いわね。遠距離攻撃ができる2人でほんとよかったわ」

「血の饗宴…良い技だ、だが俺たちがその守りを砕くのは制限時間より早い」

美亜の悪態に対し、蛙吹と常闇の余裕は崩れない。

もし片方だけでも近接ならば簡単に捕縛出来る。血溜まりに踏み込んできた瞬間に周囲から無数の触手を生やして捕縛テープを巻きつければ良い。飯田程のスピードが有れば話は別だが、それ以外ならば充分対処が可能だ。

しかし今回は双方が遠距離攻撃が可能な個性の上、判断も冷静で決して血溜まりに入ろうとしない。

未だに盾で防ぎ続ける美亜は誰が見ても時間制限による勝利を狙っている。しかしとても防ぎきれれるとは思えない。完全に場を制しているのは、ヒーローチームであった。

モニタールームから見ても大勢は決したように見える。

猛攻は止むことなく美亜に降り注ぐ。対して打開策はなく、盾を作って防ぎ続けるしか無い。ここまで個性を乱用しているのだ、美亜の顔にも流石に疲れが浮かんでいるように見える。

皆2対1でここまで耐え凌ぐ美亜の想像以上に強力な個性や、常闇と蛙水の冷静な作戦について話している。その中で八百万は忘れていたことに気づいた。

「芦戸さん…どうして助けに来ませんの…」

強力な黒ダークシャドウの腕と嘴の猛攻と隙を縫う舌、それらを必死に防ぎ続けて数分が過ぎる。明らかに盾を精製するスピードが下がっており、美亜は肩を上下させ荒い呼吸をしていて苦しそうだ。もう時間の問題だ、勝利を確信した蛙吹はふと美亜の顔を見る。

そこに浮かんでいたのは僅かに口角を上げた美しく不敵な笑み。

次の瞬間、窓から入り口に向かって強力な光が差し込む。

「なにっ！」

光が直撃した常闇の黒ダークシャドウ影は勢いを失って小さくなる。その隙を見逃さない美亜は瞬時に血を腕に纏わせ、常闇に向けて振り抜いて伸ばす。その手の先には捕縛テープが握られている。

「常闇ちゃん！」

蛙吹は咄嗟に常闇を抱えて入り口から出ることで助けようと前に降り立つ……………が

「かかった」

2人の声が重なる。

降り立ったはずの蛙吹はそのまま下に落ちる、血溜まりの下にあるはずの地面がなかった。

「三奈ちゃん、すごいわ」

地面の代わりに開いた穴、張り巡らせていた捕縛テープを体に絡ませながら4階に落ちる。

そのまま地面に落下した蛙吹、目を開けると満面の笑みを浮かべてピースしている芦戸が居た。

「私達の勝利だ(よ)」

「ヒーローチーム2人捕縛、ヴィランチームの勝利!!」

決着を告げるオールマイトの声が響いた。

演習を終えた4人は大した怪我もなかったことから、歩いて皆のいるモニタールームに向かっていた。

「見事なコンビネーションだったわ三奈ちゃん。まさか4階から天井を溶かしているなんて…」

「蛙吹が俺を庇うと予測し俺の前の床を溶かす、その上で千染の血で覆い簡易的な落とし穴を作ったわけか…。それに日光だ、まさか予め入り口に光が差す位置の窓を血で覆うとは。いつ俺の黒影ダークシャドウの弱点に気づいた?」

「芦戸と戦ってた時だ、体力テストの時とあまりにも勢いが違う。4階の廊下は5階の階段に近づく程暗くなっていったからな。それにシャドウって名前だ、いかにも光に弱そうだろ? まあ…それでもあくまで推測でしか無かったが」

「美亜ちゃん凄かったんだよ! 5階に上がってくるなって言われたからびっくりしたよ。よくあの短時間で作戦考えられたね」

「当然だ、戦いは判断力が物を言う。常に冷静さを失わないこと、これに勝る強さはない」

「美亜ちゃんはブレないわね、あと皆私のことは梅雨ちゃんと呼んでくれると嬉しいわ」

モニタールームについた4人を歓声が迎える。口々に作戦の質問や個性の使い方について聞いてくる。

特に美亜の個性に疑問や心配の声が上がったが、美亜は相変わらず表情を変えずに『操血』と答える。これまでの戦闘で一番とついでい程に接戦で見応えのある勝負に皆興奮していたため、適当な言い訳で何とかなかった。

「今回はなかなかいい演習だったぞ！残念ながら敗れてしまった常闇少年と蛙吹少女も相手の裏を描く動きに冷静な対処、ヒーローとしての素質を遺憾なく発揮してくれた!!」

勝利したヴィランチームは特に素晴らしかったな！

芦戸少女！常闇少年の猛攻を耐え凌ぎ、美亜少女に準備の時間を作った、突破を許した後も自身の個性を最大限に活かす動き、見事だ！

オールマイトからの講評は絶賛であった。蛙吹と芦戸は言わずもがな、クールな常闇ですら嬉しさから思わず赤面するほどの高評価だ。そんな中でも美亜は涼しげに腕を組みながらオールマイトの目を見据えて聴いている。

「そして美亜少女、あの2人の猛攻に耐えた強力無比な個性、芦戸少女との素晴らしいチームワーク、そして最後に見せた起死回生の妙策、見事だ、まさにPlus Ultra!最高だったぞ!!」

美亜は表情一つ動かさずまるで興味が無さそうだ。そんな彼女の態度にオールマイトはoh…と肩を落とす、皆が爆笑していた。

こうして雄英高校での濃すぎる初めてのヒーロー基礎学が終わった。

「「ありがとうございます」」

第7話 血濡少女と紅さす影

「千染、少しいいか?」

放課後、帰ろうと荷物をまとめている美亜を相澤が引き止める。

特に急ぎの用が無かった美亜はそのまま談話室へとついに行った。

夕暮れの廊下を2人とも無言で歩く。相澤の右斜め後ろを歩きながら(何のようだ?今日の怪我を心配して…なわけがないか)と美亜は気を引き締める。

「お前の個性、あれは本当に『操血』か?」

座った途端いきなり切り出された展開に、美亜はわざと軽く顔をしかめ、いかにも不満ですといった表情で相澤の目を見据える。

「何故、個性届けには『操血』と書いてあるはずです…:それに実際に血を操っているではないですか(やはり無理があったか、B組の担当が操血の時点で嫌な予感はしていたんだがな、にしても流星に聞くのが早すぎるだろ、デリカシーのかけらも無いのか)」

「単純な疑問だ、『操血』ならブラドのようにコスチュームに何らかの仕掛けを作るはず。にも関わらずお前のスーツはただ着ているだけ。それに余りにも量が多すぎる、あれは成人男性でもぶっ倒れる出血量だ。細身のお前が耐えられるはずがない」

互いの鋭い視線が交差し、美亜はやがて参りましたと言わんばかりに目を伏せて大きく息を吐いた。

相澤の指摘は的確で言い逃れができるものではない、そう判断した美亜は手の内を晒すことにした。

「嘘をついてすみません。私は別に騙そうとしたわけじゃ無いんです、ただ怖がられたくなくって…:せつかく新しい高校生活が始められるのに」

徐々に顔を伏せ両拳を膝の上で強く握る、話終わる頃には肩もわずかに震えている。そんな目に見えて落ち込んだ美亜に相澤は驚き、落ち着かせるよう、自分では優しげと思える慣れない声を出した。

「すまん…:言い方がキツかったか、それについては責める気はない。それで本当の個性を話してくれる気になったか?」

「はい：私の個性は『血』^{ブラッド}です。ほぼ血液操作と出来ることは同じですが、違いがあります。それは体外に流れ出るときの血の増幅です。だから全力を出すにはブラド先生の方式だと太いパイプを繋ぐ必要があつて、それでは機動力が損なわれてしまうんです」

「成る程、だからあれ程の量の血が出せるのか。聞いたことない個性だな：『血』そのものを司る、随分と範囲が広く強力だ。だが自傷は痛くないのか？」

そう聞かれると美亜は顔を上げ真っ直ぐ相澤を見る、そして優しく笑いかけた。

「痛いですよ？でも慣れてますから」

「そうか、それならいい」

夕陽に照らされた表情こそ女神が笑っているかのようだ、きつところの笑顔を普段からすれば、彼女はたちまち人気者になるだろう。

ただ多くの目を見てきた相澤は気付く。紅の眼の奥にドロっとした黒いモノが漂っていることに、背筋が冷たくなるが平穩を装って答える。話は終わったとばかりに立ち上がって美亜は部屋から出て行った。

美亜が荷物を取りに教室へ戻ると、まだほとんどの生徒が残っていた。美亜に気付いた芦戸や何人かの男子生徒が声を掛ける。

「おお！千染じゃねえか、今日の演習マジで凄かったぜ！俺はきりしまえいじろう

切島銳児郎、今皆で戦闘訓練の反省会してんだ！」

「俺はさとうりきどう砂藤力道！個性もド派手でカッコ良かったな」

「美亜ちゃんも反省会参加してよー、アドバイスして欲しいな」

奥を見ると他にも何人かのグループに分かれて話し合っている姿が見える。

緑谷と爆豪、それにあの轟はいないようだ。

「すまないが私は帰らせてもらう。今日は早く寝たい気分だ」

「たはー、お婆ちゃんかよ！アドバイス貰いたいやつみーんな帰っちゃうなー。まあいいや、お疲れ！また明日なー！」

「今日はありがとね！これからよろしく、美亜ちゃん！」

「ああ、よろしく頼む」

断った美亜に対しても皆は嫌な顔一つせず元気に挨拶をして送り出す。

帰路についた美亜はさつきまで黒い感情が渦巻いていた心が少しだけ楽になったのを感じた。

「にしても千染美亜、いまいち掴めないよな、やっぱ表情が変わらないからかね」

「あれがクールビューティーってやつだろ、正直すっげえ似合ってるよな」

「同じ年には思えない！あれはモデル級だぜ！クールな千染がおいらだけに見せる一面：グヘヘ」

去った美亜について早速馬鹿なことを話している瀬呂、上鳴、峰田にため息をつきながら芦戸、常闇が話しかける。

峰田は既に蛙吹によって縛り上げられ、地面に転がっている。

「話してみると意外と感情豊かだよ美亜ちゃん、顔に出ないだけかもね。以外と喋ってくれるし！」

「常に自信があるように振る舞っているのも、己を律するためかも知れん」

関わった2人から高評価を受けているし、とりあえず悪い奴ではないんだらうと納得する。

そもそもこのクラスに爆豪という超問題児がいる時点でどんな奴も可愛く見えるのだ。

横浜市某所、雑居ビルが立ち並ぶ一角、知らなければ誰も気づかないであろう外見のバーの中には3人：いや2人と一匹がいた。

「見たかコレ？教師だつてさ……」

どこか子供らしさを残した声の男が呆れたような声で新聞を放り投げる。その新聞には『オールナイト 雄英の教師に!!』と大きく見出しが載っている。

声こそ子供らしさを残しているが、その姿は異形であった。ただれた病的に白い肌、その体は痩せ細っていて、黒のTシャツと黒のパンツによってよりその白さが際立つ。髪は青白くボサボサで、無造作に

輪郭を隠している。そして何より彼の顔は一つの大きな手首から先がない右手につかまれていた。掴まれているというより自分でついているのだ。さらには両腕と脇、肩にも無数の手だけに掴まれている。

男は心底楽しそうに、そして憎そうに声を上げる。

「なア…どうなると思う？平和の象徴が…敵に殺されたら…」

第8話 血濡少女と記者と委員長

バスに揺られる事20分、ぐつと伸びをした美亜の目には雄英高校の校門が見える。しかし今日は何やら人だかりができて、何事だと思いつつもその正体がマスコミである事に気付いた美亜は、面倒ごと出来るだけ関わらないよう端から校門に入ろうとする。

すると元来の優しい性格故か、振り払うことができずに格好の的となつている砂藤が目に入る。沢山のマスコミからの質問に戸惑いながらも一つ一つ答えようとしている。

あほか、その筋肉は何のためにあると美亜は面白くなさそうに1つ鼻を鳴らすと、正面から堂々と入る。

「おい、邪魔だ。登校出来ないだろ、少しは迷惑というものを考えてくれ。大体朝から「君も雄英高校の新生ね？質問してもいいかしら！」

「私は…邪魔だと言つたはずだ…どけ」

人の話を聞かず、詰め寄つてきた上に凶々しくコメントを求めた記者に対し、紅い眼で鋭く睨みつける。記者が思わず怯み、後ずさつた。そのまま記者の壁を掻き分け、啞然としている砂藤の手を掴み校舎内に入った。

「全く、朝から忌々しい。あいつらの中には常識とか配慮が存在しないのか…」

ブツブツ言いながら大股で歩いている美亜に手を引かれながらも砂藤は勇気を出して「なあ…」と声をかける。

しかし声を発した瞬間、美亜の怒りが自分に向かってきたため、心底後悔した。

「なんだ…そもそもお前もお前だぞ。あんな奴らにビビってどうする！ヒーローにならメディアの10人や20人など軽くあしらえなければ務まらないだろう！」

「だ…だけどとにかく千染さん、助けてくれてありがとう。俺が捕まつてたからわざと気を引くようなことしてくれただろ？それなのに俺は呆然としてしまつてすまなかつた。」

ただ俺が感謝してるってことはちゃんと伝えさせてくれ」

砂藤が眼を見てしつかりと感謝の言葉を伝えると、美亜の怒りの勢いが萎んでいく。未だ引つ張っていた手をぱつと振り解き、小さな声で『わかったなら良い、次は助けんぞ』と言ってそっぽを向いてしまった。

しばらく並んで無言で歩いていると美亜が問いかける。

「そういえば…砂藤、さっきは何を聞かれていたんだ？」

「ああ、オールマイト先生が今年から教師になっただろ？それで授業内容とかどう思ってるかとか色々とな…やっぱすげえよなあー、流石 No. 1だよ」

「くだらん話だ、教員ともあろうものが生徒に迷惑をかけてどうする。みんなを守るヒーローである以前に身近な人間を守ってほしいものだな」

「俺や口田はともかく皆なら大丈夫だろ、あれぐらいは切り抜けられるよ。あ、爆豪とかはヤバそうだけだな…」

茶化すように言って肩を竦める美亜を砂藤がなんとか宥めつつ二人は教室に入った。

仲良さそう（他人目線）に話しながら美亜と登校してきた砂藤は当然峰田に首を掴まれガクンガクンと揺さぶられた。

校門前、愛想悪く記者を追い出し、そのまま戻ろうとした相澤に詰め寄ろうとしていた記者がセキュリティに引っかかり締め出された。校門は鉄の重厚な扉に閉ざされ、記者たちが口々に文句を言う。

その様子を1人の男が後ろから静かに見ていた。

「今日のHRだが君らに…学級委員を決めてもらう。」

「…学校っほいの来たー！！！！」

相澤の言葉に臨時テストか？と身構えてしまった生徒達、しかしその後告げられた突然の学校イベントに沸き立ち、その直後次々と立候補の手が上がる。

「緑谷、学級委員とは何だ、何故皆がやりたがる？」

美亜は横でおずおずと控えめに手をあげている緑谷に聞く。緑谷

は突然美亜に話しかけられたことでびっくりして慌てるも直ぐに説明を始める。

「あつ、千染さん。ヒーロー科だと集団を導く素質が鍛えられるから学級委員は人気があるんだ。えつと…学級委員つて言うのは色々な所で皆を先導したり、意見を纏めたりするんだ。千染さんはやらないの？」

「説明ありがとう緑谷、生憎私は面倒臭いのは嫌いだな。だか…皆が手を上げると言うなら私もあげてみるか、それが協調性と言うものだろう」

よくわからないことを言いつつもすつと綺麗に手を挙げた美亜に苦笑いしつつ、緑谷もさつきより高く手を挙げる。

皆が口々に騒がしく主張していると飯田の声が響き注目があつまる。

「静粛にしたまえ!!責任重大な仕事だぞ…『やりたい者』がやれるのではない、周囲からの信頼あつてこそ務まる聖務…ここは民主主義に則つて投票で決めるべき事案だ!!」

「そびえたつてんじゃねーか!何故発案した!!」

力強く言い切った飯田だが、その右手は天に向かってそびえ立っている。

相澤の時間内に終わればなんでもいいとの鶴の一声により投票が行われた。

緑谷 3 票

八百万 2 票

千染 2 票

・
・
・

緑谷の3票がトップ、ついで八百万と千染が同数となった。男女1人ずつのためこの2人の内どちらかが学級委員になる。自分に2票も入っていることに首を傾げていると八百万が声をかけてくる。

「あの…千染さん、どうやって決めましようか、やはり再投票で「かま

わん、学級委員はお前がやれ八百万」

八百万が突然の展開に目を白黒させてフリーズしたので話を続ける。

「気にするな、私と八百万ではお前の方が適性が高いと思っただけのこと。本気で望んでいる者に譲るのは吝かではない、その代わりやるからにはしつかりとやれよ?」

そう言って少しだけ口角を上げた美亜は思わず同性でも見惚れるほどの蠱惑的な笑みを浮かべた。八百万も例外ではなく、妖しく煌く紅の眼に思わず見惚れてしまう。

「……………っ！は、はい！ありがとうございますわ千染さん！私、貴方の分まで頑張ります!」

（こっ、怖…固まったかと思えば急に喋り出して…まあ、その直向きさは嫌いではないがな）

しばらくフリーズした後、勢いよく顔を近づけて喋り出した八百万に軽く引きつつもその真つ直ぐさに好感を覚えた。

昼休み、退屈な午前の授業が終わり、皆それぞれグループとなって昼飯を食べに向かう。お昼楽しみだなーと思いつつ昨日と同じように美亜を誘おうと麗日は顔を向けた。

「常闇、話したいことがある。よければ昼2人で食べないか?」

そんな長閑な時間に急に爆弾が投下された、美亜が常闇を昼飯に誘ったのである。しかも美亜が赤らんだ顔を逸らしながら照れたように誘うという、普段からは想像もできないような雰囲気醸し出している。

クラス中が驚きに包まれてフリーズしている中、最も唾然としているのは席に座っている常闇だった。

「あつ、ああ…構わないが…」

「良かった、では行こうか」

そう言って常闇と共に足早に教室から出ていく美亜。その2人の背を皆が目で追いつながら見送る。ドアが閉まり、2人が十分に離れたことを確認した瞬間、阿鼻叫喚に包まれた。

「うわああああ、何でだ常闇ー！！」

「あいつ、クールなフリしてやることやってんじゃねえか、裏切り者！！」

「えー、え、ええー、これそう言うことやんな、そういうことやんな??」

「お茶子ちゃん落ち着いて、方言が濃いわ」

「美亜ちゃんって自分から誘うこともあるんだー、意外と積極的？」

「大丈夫ですわ皆さん、2人ともミステリアスでお似合いかと…」

「お似合いとか言うなよー！！」

八百万の精一杯のフォロー？で峰田と上鳴の2人が崩れ落ちる。

「あんたら…会ってから3日よ、ありえないっての」

そんなバカ2人に耳郎は呆れながら突っ込んだ。顔を赤くしてた理由は分からないが、まさか誘うのが恥ずかしくて照れていたなんてことは無いだろう。あの見た目だから今までも引く手数多だったんだろうなーとしようじきちよつと羨ましい。

その言葉を皮切りに皆ぞろぞろと食堂に向かっていく、もちろん話題は美亜と常闇についてだった。

食堂に着いた2人は、常闇がさわらの西京焼き定食、美亜はオムライスを受け取ると空いている席を探す。ヒーロー科の他にサポート科、経営科、普通科の生徒らも集う食堂は非常に混み合っている。常闇はさりげなく横に人がいる席に自分が座り、対面の美亜を横に人がいない席に誘導する。

「ありがとう常闇、君は紳士だな」

「当たり前のことだ、気にするな」

学級委員の事や午前の授業についてなど当たり障りのない会話をしながらご飯を食べる。

しばらくして美亜が本題に入った。

「常闇、お前の個性『黒影』あれは影を自在に操っているのか？」

「話はそれか。近いけれど少し違うな。影は影だがあいつは意思を持ち、自分で行動できる。いわば影のモンスターを体の中で飼っている状態だな」

「成る程…そういう個性もあるのか、面白いな。わざわざ呼び立てて済まなかった。もしあれを意図的に作り出しているなら私の戦い方の参考になるかと思つてな」

「構わない。それにしても千染の個性は『ウウー！！！』」

常闇が何かを問いかけようとした瞬間、食堂に警報音が鳴り響く。周りの生徒はビクツと反応し、辺りをキョロキョロとせわしなく見渡している。

『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外へ避難してください』

「セキュリティ3??おい、セキュリティ3って何だ」

放送によつて繰り返し避難が誘導される。美亜は聞き慣れない言葉を近くの上級生を捕まえて訪ねる。上級生は慌てた表情で早口で説明する。

「校舎内に誰かが侵入したって事だよ！3年間でこんな事初めてだ！」

「侵入者だと?敵か!」

美亜と常闇は正体を掴もうと窓に向かって歩くが、出口に向かおうとする人の波に押し流される。雄英高校に侵入者という前代未聞の事態に皆が軽いパニックになっており、誰もが我先にと向かうせいで押し合いとなつてしまっている。そんな生徒たちに邪魔されたことで美亜の苛立ちが募る。何とか隙間を縫つて、時には押し除けて流されないように耐える。

(クソっ!何だこいつらは、何をそんなに馬鹿みたいに焦っているんだ、この学校にはN01ヒーローがいるだろ!!)

「常闇!私を『黒影』で窓に向かって運べ、上からなら行ける」

「あつ…ああ」

そう言つて常闇の方に顔を向けた美亜の眼は燃え上がるような紅に染まり、常闇はその剣幕に流されるように黒影を出す。黒影は流れるように生徒の隙間を抜けると美亜の体を掴む。

「大丈夫ー!夫!!」

突然出口の上に非常口のような形で張り付いた飯田が叫び、あまり

に意味不明な事態に皆の注目が集まる。

「ただのマスコミです！なにもパニックになることはありません、大丈夫……夫!!」

雄英高校の生徒として、最高峰に相応しい行動をとりましょう!!」
徐々に騒めきが収まっていく、一瞬でも立ち止まった事で事態を飲み込む冷静さが生まれた。飯田の声で皆が安心し、我に帰りパニックは沈静化した。『黒影』に体を掴まれていた美亜もその様子を見てゆっくりと地面に降りた。

「委員長はやっぱり飯田くんが良いと…思います！あんな風にかっこよく人をまとめられるんだ、僕は飯田くんがやる方が正しいと思う」
その後、帰りのHRで緑谷が飯田を委員長に推薦し、皆が賛同、飯田と八百万が改めて1年A組の委員長となった。

(カッコ良かったか？だが咄嗟の機転と大胆な行動力は見事だった。
それにしてもどうやって…美波も万全と言っていた雄英のセキユリテイをただのマスコミが…?)

頬杖を突きながら外を眺めて考えていた美亜は、飯田の熱い挨拶で我に帰った。

教員一同が校門を見ている。

「どうやってただのマスコミがこんなことができる?」

雄英の誇る鋼鉄の雄英バリアがまるで砂になったかのように崩れ去っていた。

校長はその頭脳で最悪の答えを導き出す。

「唆した奴がいるね…邪な者が入り込んだか、もしくは宣戦布告の腹づもりか…」

第9話 血濡少女と初めてのUSJ：1

「突然だが今日のヒーロー基礎学は俺とオールマイト、そして追加のもう1人の先生と共に人命救助訓練を行ってもらおう」

相澤から告げられた授業の内容に教室内が騒めく。口々に喋り出した生徒をひと睨みで黙らせた後、言葉を続ける。

「今回のコスチュームの着用は個々の判断に任せる。訓練所は少し離れているからバスで向かう、以上、準備開始だ」

爆豪との戦闘演習でボロボロになり、まだコスチュームが治っていない緑谷以外は着替えてバスに乗り込む。

美亜は芦戸に手を引かれ、4列シートに座らされた。同じ列に上鳴、美亜、芦戸、飯田の順に座り、対面には砂藤、緑谷、蛙吹、切島が座った。他の皆は2列シートに座っている。バスに揺られながら皆が会話を楽しんでいると、蛙吹が緑谷に問いかける。

「緑谷ちゃん、貴方の個性オールマイトに少し似てるわ」

「でもよ、オールマイトは怪我しねえぞ、似て非なるってやつだ。増強型の個性はシンプルで派手でいいよな！俺の『硬化』は対人では強いけどいかんせん地味なんだよな」

目に見えて狼狽えた緑谷を切島がフォローする。いや、フォローすると言うより本心でそう思っているようだ。そんな切島の話の聞いて、正直に思ったことを美亜は口に出す。

「どうかな、『硬化』も充分シンプルで派手だと思うぞ。それに攻めにも守りにも対応できるといふのは戦闘において充分強みになる。何かに強みがある、それだけでも十分に強個性だろ」

「そうだよー僕もすごくかっこいいと思う。プロにも充分通用するよ！」

なぜか緑谷が嬉しそうに美亜に乗っかり切島を褒め出す。妙にテンションの高い緑谷に少し引きながら、底抜けにいい奴なんだと納得する。

「おつ、美亜もそんな感じに褒めるんだな。もつと優しさと笑顔見せた方がいいと思うぜ！そっちの方が可愛いぞ」

すると横に座ってるものの空気だった上鳴がここぞとばかりに話しかけてくる。横目で瀬呂と共に座る峰田にサムズアップしていたところを見ていたため、わざとため息をついて切り返す。

「ふざけたことをぬかすな、頭に槍の2・3本突き刺してその開いたネジ穴埋めてやろうか？」

（（（悪口が独特…）））

上鳴が「俺褒めたつもりなのに…」と落ち込む中、斜め前から何やら昨日の事を話そうとした砂藤をひと睨みして威嚇する。別に砂藤の為にやった訳では無いし、結果的にあいつが謎の勘違いで私をいい奴だと思っただけだ。

その間に爆豪は切島に『クソを下水で煮込んだような性格』と言われブチギレている。

そんな爆豪と私を交互に見て頭を抱えている八百万は何か失礼なことを考えてそうだな、後で問い詰めてみよう。そんな事を考えながら美亜は目を閉じ腕を組んでシートに背中を預けた。

バスを降りるとドーム型の大きな施設が目に入る。

引率され施設内に入るとそこには広大な空間が広がっていた。

中央にセントラル広場、入り口から時計回りに倒壊、土砂、山岳、火災、水難、暴風・大雨ゾーンと様々な現場を想定した施設が揃っている。

「水難事故、土砂災害、火事etc…」

あらゆる事故や災害を想定し僕が作った演習場、その名も：ウソの災害や事故ルーム!!」

そう説明してくれたのは追加の先生、スペースヒーロー「13号」。宇宙服のようなコスチュームに全身を包み、顔は見えないが災害救助の場で活躍している紳士的で非常に人気のあるヒーローだ。麗日は13号のファンで緑谷と共に歓声を上げている。

「えー始める前にお小言を一つ、二つ…三つ…四つ…」
増えていく小言の数に困惑しながらも生徒は耳を傾ける。

13号の個性は『ブラックホール』。あらゆるものを引き寄せ吸い込むことができ、チリに変える強力無比なものだ。災害現場で役に

立っているが、その個性は人を簡単に殺せる力であると彼は言う。そして一歩間違えれば容易に人を殺せる個性を持つてゐる事を忘れずに、人の為に個性をどのように活用するか学んでほしいと明るく言い切った。

「君たちの力は人を傷つける為にあるものではない、救ける為にあるのだと心得て帰ってくださいな」

13号の堂々として心に響くスピーチに皆が感銘を受け、飯田はブラボー！と感極まって大きな拍手を送っている。

「それじゃあまらずは……」

そう言つて相澤が授業を始めようとしたその時、何か気配を感じて広場のほうに振り返る。その時広場の噴水の前に黒いモヤのようなものが現れ、徐々に広がつて大きさを増していく。そしてそこから、途方もない悪意のこもつた目が覗いた。

「一塊になつて動くな!!」

瞬時に警戒を最大に上げ、声を上げた相澤、突然の状態に生徒は皆反応できずに呆けている。そうしている間にもモヤが広がり、中から悪趣味な格好をした人間が次々と現れる。

「動くな！あれは敵だ!!」

「13号にイレイザーヘッド、先日頂いたカリキュラムではオールマイイトが居るはずですが……」

「どこだよ……せつかくこんな大衆引き連れてきたのにさ、オールマイイト……子供を殺せばくるのかな？」

顔と身体中に手を貼り付けた男から発せられた殺意に塗れた言葉、それによつて皆は気付く、敵の襲撃、とてつもない悪意が自分たちに向けられていることに。

「ヴィラン！バカだろ!?ヒーローの学校に入り込んでくるなんてアホすぎるぞ!」

「侵入者用センサーが反応していねえなら、向こうにそういうことができる個性がいるってことだ、隔離空間に少人数、これは何らかの目的があつて用意周到に画策された奇襲だ……こいつらバカだがアホじゃねえ」

轟が冷静に場の状況を判断する。同じ考えに至った相澤は素早く皆に指示を出していく。

「13号、避難開始だ。学校に連絡を試せ！センサー対策も頭にあるヴィランだ、電波系の個性が妨害してる可能性がある。上鳴、お前も個性で連絡を試せ」

そう言いながらゴーグルで目を覆い、ヴィラン敵を睨み付ける。それを見た緑谷がレーザーヘッドの戦闘スタイルではあの数相手に正面戦闘は危険だと進言する。

しかしそれを相澤はバツサリと一言で切り捨てる。

「二芸だけじゃヒーローは務まらない、任せたぞ13号」

そう言っただけで広場に飛び降りヴィランの軍団に突撃する。ゴーグルで視線を消す事で個性を消されている人物を分からなくする。それによって生じた混乱の隙を使って首に巻いた長いマフラーのような捕縛武器で翻弄する。

「嫌だなプロヒーロー、有象無象じゃ歯が立たない」

首謀者と見られる手をつけた男が首をガリガリと掻きながら、苛立った調子で言う。

その相澤を残し13号と生徒達は出口へ向かうため駆け出す。しかしその前に突如黒いモヤが現れ逃走を防ぐ。そこには確かに二つの光る目があり、個性を持った人間であることを証明している。

「初めまして我々は敵連合、ヴィラン連合 僭越ながらこの度雄英高校に入らせていただいたのは…平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思つてのことです」

嫌に丁寧な、恐ろしい事を述べた敵に生徒達は戦慄し固まってしまう。危険を感じた13号は素早く指先の蓋を外すと、モヤをブラツクホールで吸い込もうとする。その瞬間、13号の前に切島と爆豪が飛び出て敵に爆破と斬撃を喰らわすが裏目に出ってしまった。2人が前に立つ事で13号が個性を使えなくなり、ヴィラン敵の個性を防ぐ術を失ってしまった。

「危ない危ない、生徒といえども優秀な金の卵、私の役目は君たちを散らして、鬻り、殺す」

「美亜ちゃん！」

「おいこいつイカレちまったよ、ギャハハハハハ！」

「さっさと殺そうぜ、気味が悪い」

そう言つて敵が個性を構える。ただ馬鹿ではない、芦戸と美亜の個性を警戒し、無策で突撃するような奴はいない。芦戸とつては好都合であつたが、美亜を庇いながらこの人数を突破するのは絶対に不可能だ。それに相手は戦闘経験の豊富な敵、このままではいずれジリ貧で殺されてしまう。

こうしている間も美亜の眩きは止まらない、明らかに異常な友の姿に焦りが募るばかりだ。

次の瞬間、ギリギリ視界の端で飛来するバレーボール大の岩石を捉え、咄嗟に腕から酸を出して溶解させる。

(やばっ！個性バレたかも！)

「今岩石が溶けた、あの音は熱か？」

「いや、酸だ！昔見たぜ、体から酸を出す個性の奴!!」

個性がバレたせいで、近づかなければ良いとばかりに様々な個性が集中砲火される。飛来する岩、炎、砂鉄や木を次々と酸で溶かすも敵は遠距離で攻撃できる個性で執拗にこちらの疲労を狙い続けてくる。此方はただの生徒2人、それも1人は完全に錯乱してしまっている。焦れば焦るほど撃ち漏らしが増えて体が傷ついていく。

岩が腕にあぎを作り、炎が体を焼き、砂鉄で足から血が流れる。体中が傷だらけで痛み、個性の乱用で目眩が襲う。未だ耐え切れているのは敵が私達を嬲り殺そうとしているからに過ぎず、ただ見ているだけの敵が加われば一瞬で殺されてしまう。

満身創痍で足掻き続ける芦戸を嘲笑する声が周囲から響く。

「ギャハハ！その足手まといを捨てれば逃げられるかも知んねーのによー！」

「ヒーローの矜持つてやつか？馬鹿な奴だ」

「違う！ヒーローの責任とか矜持だとかそんなのは関係ない、私にはそんな事を言える力は無い…それでも、友達だから守るんだ!!」

咄嗟に口を突いて出た叫びに笑い声や呆れた声があがる。生きる

か死ぬかの瀬戸際で、くだらない判断によって美亜もろとも命を落とすであろう自分は馬鹿にしか見えないだろう。まるで駄々を捏ねる子供のように笑われても仕方ないと思う。だけどここだけは譲るわけにはいかない。

中学の時は強力な個性と身体能力の高さで最も強かった。だから雄英高校に入って最初の体力測定で9位に入ったときは悔しさも感じたが嬉しさが勝った。轟や爆豪といった有名人がいるヒーロー科最高峰の雄英高校、その中で9位に入れた。自分はヒーローに成れるんだとこれまでより強く実感した。

しかしその自信は次の戦闘演習で碎け散る。常闇を前に手も足も出ずに終始押され、蛙吹の掠め手を食らった。対して体力テスト14位の美亜が2人を相手取って練り広げた5分にも及ぶ激戦を見た。本当に凄かった、2人からの集中砲火を疲労を色濃くしながらも一つの撃ち漏らしなく完璧に防ぎ切っていた。その時自分は何をしていたか、急いで上に登ろうとしたところを止められて下の階で天井を溶かしていただけだ。

美亜やオールマイトは言ってくれた。常闇を前に互角に戦った戦闘力、作戦を成功させるのに必要不可欠な個性は見事だったと。

だけど思ってしまった、きつと凄いヒーローになるのは彼女のように多を相手取りながらも冷静に作戦を立てられる、広い眼を持って人に指示を出し勝利に導く、そんな類稀な実力を持つ人なんだろうと。

だけどこれだけは譲るわけにはいかない。ヒーローを目指す以上、芦戸三奈である以上、実力が劣ろうとも、自信を失おうとも、殺されそうになろうとも。

苦しんでる人を守る、友達を守る、それだけは失いたくなかった。ここで引いたら、胸を張ってヒーローに成れない気がしたから。

守ってみろよと言わんばかりに美亜へ岩が飛ぶ。もはや意識は朦朧とし、視界は霞掛かっている。咄嗟に酸で守ろうとするが無情にも炎が相殺する。未だ蹲る美亜へと岩が襲いかかる光景がやけにスローに映った。間に合わない、そう思った時には体が飛び出していた。

鈍い音と共に鮮血が舞う。血に倒れ伏した芦戸は滝のような汗を流しながら苦しむ美亜の姿を右下から見上げる。頭に激痛が走り、痛み思わず顔をしかめる、生暖かい液体が地面に流れ出しているのが分かった。

そして美亜の頬に流れ落ちる自分の血を見て、肌白いなあと場違いな事を考えたのを最後に意識を手放した。

頭から血を浴びた美亜の眩きと震えが止まる。

倒れ伏した芦戸に敵から一層笑い声と罵声が浴びせられた。

「本当に庇いやがった！馬鹿だぜあいつ！」

「厄介な奴が倒れた、殺そう殺そう」

「黙れクズ共が………畜生にも劣る路端に転がる犬の糞以下のカスども………そんな奴らが私の安寧を脅かそうとする、許せるものか……」

肥料にもならない脳漿をぶち撒いて大地を赤く染めてやる……!!」

勢い付いたヴィラン達の喧騒に、突如冷水を浴びせるような怨念の籠った声が響く。爛々と紅く煌く狂気の両眼がヴィラン達を殺さんとばかりに射抜いた。

誰一人として目を離す事は出来なかった。

第10話 血濡少女と初めてのUSSJ：2

楽勝だ。

ヒーローの卵、それも雄英高校のガキを殺せる、そう聞いて黒い霧の男に協力した。

俺は殺しの数こそ少ないが大概の悪事は働いてきた。ただ殺さなかつただけで半殺しとなると両の指では数え切れないほどだろう。

それでも相手はあの雄英高校の生徒、1年とはいえどんな個性を持つてるかも分からないので警戒はしていた。

そんな中現れたのはたった2人、しかもこの間まで中学生だったホンモノのガキだ。

さらに幸運は続き、片割れのガキなんて既にガタガタ震えて蹲っている。

「なんだよ、ホントにガキじゃねえか」

「あの年のガキを殺せるのか！いいねえ罫り殺そう」

周りの奴らも騒めき立っている、俺だつてそうだ。あいつらはさぞ幸せに生きてきたんだろう。強い個性でチャホヤされ、親の愛に恵まれ、何一つ不自由ない暮らしをして雄英高校に入ったはずだ。そうじゃなきゃこんなエリートにはなれない。そんな奴らが将来俺らをボコボコにしてヒーローと囃し立てられる。偉そうに説教して、正義を振り翳して暴力を振るう。

気に入らない、殺したい、こいつらが憎い。

そんな気持ちがあつと湧き上がってきた時、たった1人で戦っていた女が綺麗事を叫ぶ。

友達だから救う？やはりエリートのボンボンは馬鹿だ。苦しい生活を知らないからそんな綺麗事を言える、周りの嘲る声の中、憎しみが募るのを感じる。

だからこそ、その友達とやたらに岩石を飛ばす。他の奴らの個性で手一杯の女に守ってみるよとばかりに。

鈍い音が響く。頭から大量の血を流し、その女が地面に打ち付けられた。

「ナイスショット！そろそろウザかったしな！」

俺は周りの奴らからの称賛を浴びながらも啞然としていた。

あの女怖くないのか？頭だぞ、下手したら死ぬんだぞ。エリートつてのは軟弱で保身的でもつとこう……

その時ふと思いつく。

(そういえば……いつら本気でヒーローになりたいんだよな)

昔聞いたことがある、偉業を成し遂げるヒーローは皆『考えるより先に体が動いていた』と言うと。その時は鼻で笑っていたし、話した奴も馬鹿にしていた。今のも所詮友達1人を岩石から守っただけ。この後2人とも殺されるの運命は変わらない。だが、もしかしてそれ……

1人の敵がそう気づいた時には何もかもが手遅れだった。

頭上にひたひたと生暖かいものが降り注ぐ、それは頬を伝って汗と共に地面に吸い込まれていった。

その感触が美亜を深い闇の底から引つ張り上げ、意識が覚醒する。

徐々に眼が開き、ぼんやりと茶色い地面が見える。私の汗だろうか、大量の水分と涙で既に黒く変色している。

俯いたまま目線だけで横を見ると芦戸が頭から血を流し倒れ、傍に岩石が転がっている。

そして周りを取り囲む奴らの煩いほどの罵声と嘲笑が彼女に向けられている。

ここまでくれば流石に分かる。自分は正気を失ってここに連れてこられ、大量のヴィランに殺されそうになっていたのだろう。それを芦戸が身を挺して守った、降り注いだ彼女の血がまた頬を伝う。

ふつつつと黒い何かが体の中から湧き上がる。際限なく湧き上がるそれは美亜の思考を、全身を塗りつぶそうとする。頭の中でガンガンと声が響く、煩いぐらいに響き渡る声で頭が割れそうだ。

(殺せ、殺せ、殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ)

まずい、これはまずい、これは……殺意だ

幽鬼のようにゆらりと立ち上がり、発した声はやけによく響く。爛々と煌く眼は怒りを燃料として燃え盛るように、さらに紅く紅く染まる。

誰かが気圧されゴクリと喉を鳴らしたが、それが自分なのか他人なのかそれすらも分からない。それ程に濃厚な殺意の奔流、それが先程まで怯え切っていた1人の少女から発されている。

「殺す、殺す、殺す…許しを乞い、己が生を恨み、そして死に恐怖しろ…塵殺だ…！」

突如美亜の両腕が肘上から千切れ飛ぶ、ドボドボとあり得ない量の血液が吹き出し一瞬のうちに地面を紅く染めていく。その光景を生み出した美亜の顔は無、能面の様に張り付いた無表情に、紅い眼だけが燃え上がる。

明らかに常人とは一線を画した狂気と濃厚な血の匂いに敵達は怯え、不気味さを感じて後ずさる。際限なく流れ続ける血液が芦戸を避けながら血溜まりを大きく、深くする。

「なつなつなんだよこいつ、ただの生徒だろ!!」

「ガキしかいないって!あいつらそう言ってたじゃねえか、こんな化け物聞いてねえぞ!!」

「落ち着け!ただの恐怖でイカれた生徒だ、ガキなんぞこの人数に敵うはずがねえ、すぐに殺すぞ」

ひとまわり身体の大きい、筋骨隆々な敵が一喝すると怯えた空気が少しだけ和らぐ。この敵は有名な連続殺人犯、被害者を捻り殺す事で有名だ。その狂気的な殺害方法と反対に思考は冷静で強靱な肉体を併せ持っている為、土砂ゾーンのリーダー的存在となっている。

そんな巨漢の声に勢いを取り戻し、皆が殺そうと一歩踏み出した。その時、美亜と芦戸を中心に広がっていた血溜まりの中から無数の触手が生える。その先端はどれも一様に鋭く尖り殺意を持って敵達の方へと鎌首を擡げる。美亜の両腕からは既に血が止まり、両腕が無くなってもなお無表情でゆらりと立つ姿はまさに化け物の様だ。

「ひっ!ヤバすぎるよこいつ!化け物だ化け物!」

「騒ぐな、喚くな、囀るな、今殺す」

濃厚な殺意に目眩を覚える。少しでも気を緩めれば意識を黒く塗りつぶされ、気を失ってしまう。そう確信できるほどに脳が警鐘を鳴らしている。

まるで躊躇や罪悪感を感じさせない声色で告げた美亜は右肩をゆつくりと上げる。振り下ろせばここにいるヴィラン全てが串刺しにされ死に絶えるだろう、だが美亜は躊躇しない。既に思考はこいつらを殺せと決定し、実行する事に何も迷いはない。

「死ね」

その腕が振り下ろされようとした時、誰かが美亜の足首を掴んだ。

「だめ…だめだよ美亜ちゃん…殺しちゃだめ…」

顔だけがゆつくりと下がり、足首を握った人物、芦戸に向けられる。

「何故だ？こいつらはお前にも危害を加えた犯罪者だ、今ここで殺すべきだ」

「殺したら…美亜ちゃんが…美亜ちゃんが無くなってしまいう様な気がするから…」

美亜の怒りに染まった眼を正面から見据え語りかけた。しばらく時間が止まったかの様な静寂が包む、その間も芦戸は決して目を離さなかった。

目を逸らしたが最後、その右手が振り下ろされてしまう、そんな気がしたから。

永遠とも思われるような張り詰めた時が流れ、その目に哀れみでなく悲しみを見た美亜は呆れた様に顔を顰めると大きく溜息を吐いた。徐々に眼が普段の綺麗な紅色に戻り、触手の先端が棍棒の様に丸まっていく。殺意で張り詰めていた空気が霧散していくのが分かる。

「はあ、塵殺と言った手前格好がつかんな」

そう言ってもはや視界にも入れずに無雑作に腕を振り下ろす。触手が暴れ回り敵の頭を、体を殴り飛ばし昏倒させていく。逃げようとする者、果敢に向かってくる者、皆等しく宙を舞った。リーダー格の筋骨隆々な敵も、大量の触手に殴られ抵抗虚しくあえなく昏倒した。

全ての敵を昏倒させた美亜の腕に辺り一面に広がった血液が吸い込まれていく。未だ多くの血は残るものの失った両腕を形成した。

まるで血液が凝固したかの様な赤黒い腕、所々に血管のような紅い線が流れている。

その後仰向けに倒れる芦戸の横にそつと座り込み、何かを躊躇したのち、少しだけ持ち上げていた血の腕を力なく下ろして話しかけた。「芦戸、すまなかつた…私のせいでこんなに傷ついて、本当にすまない」

「大丈夫、大丈夫だよ。今だって私の為に怒ってくれたんでしょ？だから…助けてくれてありがとう」

そう言つて芦戸は満面の笑みを向け手を握った。美亜は目を見開き手を引いて振り払おうとしたが、手を胸の前まで持ち上げられる。「この手も怖くないよ」そう言われた美亜は少し啞然とすると、眩しうに目を細めて初めて見る自然な微笑みを浮かべた。

そんな微笑みも直ぐにいつもの無表情に戻った。美亜は突然後ろを振り向くと背後の山を降りてきた3人に振り向いて話しかけた。

「八百万、耳郎、芦戸を頼む。恐らく誰かが出口まで行つて助けを呼ぶよりはここで隠れた方が安全だ」

「ええ、お二人も無事だったのですね…これは…血?！」

「えっなに、これ敵死んでないよね?！」

そう言つて恐る恐る近づいてくる2人、上鳴は1人遠くの方でアホみたいな顔でウェーイと言っている。

上鳴は『帯電』という個性で体から雷を放電することができる。しかし放電しすぎると脳がショートし、とんでもなくアホになり「ウェーイ」しか言えなってしまう。上鳴の全力の放電によつてなんとか山岳ゾーンでの戦闘を終えた3人は他の生徒と合流すべく最も近い土砂ゾーンへと探しにきた。そこで血液が残る地面、倒れた芦戸と横に座る美亜、そして周りに倒れる大量の敵を見つけた。

2人に芦戸を任せた美亜は血溜まりを操作して移動の準備を始める。まだやらなければならないことがある、そう考えていた。

「どこにいくんですの!?!ここで助けを待ちましょう」

「轟も言っていた、あいつらはアホじゃないと。オールマイトを殺せる算段、そしてそれを確実に遂行できる戦力もあるつてことだ。敵の

中でも後ろで見ていた手の男、そして横に立ってた不気味な筋骨隆々の化け物。あいつらの可能性がある、とてもじゃないが相澤先生一人では対処できない」

そう言い残し、止める声を見送って血流を操作し広場へ滑走する。残された3人は啞然としてその背中を見送った。そんな中芦田は気づいていた、まだその眼の奥に怒りと殺意が宿っていることに。

第11話 血濡少女と初めてのUSSJ：3

血の上を滑走しながら自分は冷静ではないと美亜は思う。それでも止まらない、あいつらの狙いはオールマイトだ。オールマイトが雄英高校にいる以上、おびき寄せることができても尚且つ足手纏いとなる自分達は確実に巻き込まれるだろう。それを許すわけにはいかない、あいつらだけは今ここで必ず殺すべきだ。

遠くから広場を視界に捉える。素早く見渡すとそこにはうつ伏せに倒れ伏す相澤、脳を剥き出しにした巨体の敵がその体を上から抑え右手をへし折っている。やはりあのヴィランが化け物か、だがどうやら指示を出しているのは手の男のようだ。手の男をリーダー格だと判断した美亜は、男の方向に照準を合わせ左腕を後ろに大きく引き絞った。

「個性を消せる、素敵だけどなんてことはないね。圧倒的な力の前ではつまりただの無個性だ」

体中に手をつけた男、死柄木が相澤の向かいに立ち煽る様に笑う。状況は最悪だ。ギリギリで大量の敵を捌きつつ首謀者らしいこの男を捉えようとしたその時、この脳を剥き出しにした筋骨隆々な敵が信じられないスピードで背後に現れ、地面に叩きつけられた。個性『抹消』を使っても力が緩まない、つまりは素の力がオールマイト並にあるということだ。

相澤の戦闘スタイルは個性を消せるという点で圧倒的なアドバンテージを持ち、その隙を突く。しかし相澤の『抹消』は相手に影響する個性であり、相澤の素の戦闘力を強化できる個性ではない。その為ここまで本体が強力だと、個性を消したとしても生身の相澤では歯が立たない。

「対平和の象徴、こいつが改人『脳無』だ」

そう言って勝ち誇った様に死柄木が嗤う。さらに最悪な事に背後の湖の中で緑谷、蛙吹、峰田の3人が衝撃の光景に固まってしまっている。早く逃げろ、殺されるぞと願うも届かない。もし声をあげよう

ものなら、逃げる間も無く殺されるだろう。それ程にこの脳無は強い。

その時、突然死柄木の横に鍵爪の様な巨腕が刺さり、地面を抉った。素早くその先を見た死柄木の目には左腕を縮小させながら、弾丸のような勢いで突撃してくる美亜が写る。再び燃え上がった美亜の眼と死柄木の濁り燻んだ目が交錯する。

(勝利を確信した瞬間！それは人が最も油断する時、今しかない。殺す！今、ここで！)

自身の持つ最高速度で瞬時に死柄木に肉薄した美亜は、その心臓を貫こうと右腕を血槍に変化させる。突き出した槍の先端が風を切る音と共に死柄木に迫る。

「脳無!!」

槍が突き刺さる寸前で脳無が死柄木の前に立ち、抱え込む様に横から槍を両手で掴んで止めた。地に足をついた美亜が押し切ろうと力を込めるがびくともしない。次の瞬間、死柄木が迫る。その手を前に突き出し、掴み掛かろうとしてくる。美亜は大きく舌打ちをすると両腕の個性を解除しその場に血をぶちまける。咄嗟に顔を背け血飛沫を回避した死柄木を蹴り飛ばすと、その反動で相澤の元へ跳んだ。

「なぜ来た…死にたいのか……」

「相澤先生こそ今にも死にそうですよ？せめて第一声ぐらいは、助けに来たことを感謝して欲しいものだ」

なんとか軽口こそ叩いたが内心は焦っている。あの一撃は必ず死柄木の心臓をブチ抜くと思つた、それほどに自信のある最高速度の一撃。あろうことかそれを横から掴んで止めるなど常人のできる技ではない。あの脳無が見せた恐ろしい速度、力、間違いなく自分達とは次元が違う。動悸が荒くなり、汗が頬を伝う。

そこに背後から声がかかる。

「ち、千染さん!!腕が!!」

「緑谷！何故そんなところに」

そこには湖から顔だけを出す緑谷、蛙吹、峰田がいた。両腕が無くなった美亜の姿に驚愕している。まずい、この3人は足手纏いにな

る。この化け物と全力で戦えば個性を晒す事になるし、何が起こるか分からない。そもそも3人を守りながら戦うのは不可能だ。全力で頭を働かせて策を練る。

「3人に頼み事がある」

「碌な事じゃない気がするけど、いいわ」

「蛙吹、相澤先生を運んでできるだけ遠くに逃げろ。緑谷と峰田は蛙吹を守りつつ共に行け、助けに来るまでとにかく遠くへ逃げ続けろ」
「え！でもそれじゃあ千染さんはどうするの!?!」

「私なら大丈夫だ、早く行け!」

何かに気圧されたかのように怯えた3人、しかし我に帰ると蛙吹は舌で相澤先生を持ち上げ湖を泳いで逃走を図る。

去っていく4人が離れた事を確認すると立ち上がった敵を見据える。話している間も油断なく見ていたが、全く動く気配が無かった。それがより一層不気味さを掻き立てる。死柄木は何やらブツブツ言いながら首を掻き巻っており、脳無は不気味に横に佇んでいる。

「ああ、蹴られた、なんの躊躇もなく殺しにきやがった…正義を傘に振るう暴力は気持ちいいか?クソ女……」

「あ?黙れ。正義だのなんだのを語るとは敵の癖に随分な頭をしているんだな。そんな下らないものの為に戦う訳がないだろう」

顔を上げた死柄木と視線が交錯し、向けられた鋭い暴言に苛ついて皮肉で返す。その間にも油断なく特徴を見据え個性を想像する。

(あいつはさっきの一撃を防いだ時、顔につかみかかろうとした。恐らく触れることで発動する個性?脳無とか言うやつは分からん。とにかくすごいスピードと力、単純な力押しが1番まずい)

敵は私の眼を見つめたままなぜか動かない、ありがたく分析させていただくが謎だ。

その時死柄木は、その紅く染まった眼を見て底無しの沼にじわじわ沈められているかの様な不快感と恐怖を感じていた。あり得ないとばかりにさらに強く睨みつけ問いかける。

「お前…なぜ雄英にいる?」

「意味がわからん、何が言いたい」

答えながらもじわじわと体内から血を流し腕を再び形成していく。繊維のような細い血が、複雑に絡み合って普段の腕と同じ大きさになっていく。その間もヴィランの苛立ちは募っているようで、首を掻き筆っている。

「お前のその目、俺らと同じ目だ…ああ…不快だ。お前は殺そう。脳無…やれ…」

死柄木が指示を発するとそれまでだらりと止まっていた脳無が急に動き出し一直線に突撃してくる。とんでもないスピードだが油断なく視界に捉えていたためギリギリで反応でき、その場で鋭く腕を振り上げる。

「死ね…血槍!!」

美亜の前の血溜まりから巨大な槍が突き出る、このまま脳無は自分のスピードを活かして正面から槍に突き刺さると思われた。

しかし脳無はその驚異的な身体能力にものを言わせギリギリで体を逸らす。それでも勢いを殺し切れず、左半身を貫かれ、大量の肉を撒き散らしながらバランスを崩し前のめりに倒れ込む。腕どころか左半身が槍で抉れ、消しとんだ。

回避されると言うイレギュラーはあったもののあれは即死だ、そう考えた美亜は脳無を無視して死柄木を殺すべく真っ直ぐ駆け出す。未だ動かない死柄木に迫り、右腕を刀の様に鋭く変える。道中の血溜まりを滑って加速するとそのまま飛びかかった。

不気味な青白い首に刃が迫り、振り抜けば今度こそ首を刈る。しかし刃が迫る中で死柄木は不敵に笑っていた。美亜は得体の知れない悪寒に襲われ、直感に従って咄嗟に両腕を左でクロスさせる。

左から脳無の拳が不可避の速度で振り抜かれる。巨腕とオールマイト並のパワーで殴られた美亜は体中からボキバキと嫌な音をたて右に吹き飛んだ。全身が軋み、一瞬で意識が刈り取られそうになる。口から吐き出された鮮血が死柄木に降り注いだ。

「なんだよ気持ち悪いな…だが死んだ。呆気ない」

吹き飛び、力を失った美亜は血を撒き散らしながら壊れた人形のように転がり続け、地面に投げ出される。そのままぐったりと動かなく

なった。体からは大量の血が流れ出し、瞬く間に地面に血溜まりを広げる。おそらくは全身の骨が折れ、肉が裂け、臓器はぐちゃぐちゃだろう。生意気なことを言ってきたが所詮はただのガキだったか、と興味を失った死柄木は周囲を見回す。

相澤の逃げた方へと向かおうとした時、黒いモヤが出現し黒霧が現れる。

「死柄木弔しがらきとむら、13号は行動不能に出来たものの散らし損ねた生徒がおりまして…その1名に逃げられました」

「は？はー。黒霧お前…お前が『ワープゲート』じゃなかったら今頃粉々にしていたよ」

死柄木は首を掻き筆り苛立ちを黒霧にぶつける、しかし突然動きがピタリと止まり、まるで散歩から帰るかの様な気軽さで言葉を発する。

「流石に何十人ものプロ相手じゃ敵わない、ゲームオーバーだ、あーあ、帰ろっか」

「時に死柄木、その浴びている血は何ですか？」

「あ？ああ、あそこに転がっている女、一人で突つかかってきたから脳無で殴り飛ばして殺した」

黒霧もすぐに興味を失う。ただの生徒が脳無に殴られたのだ、即死だ。

そしてワープゲートで帰ろうとした2人と脳無。

突如恐ろしい程の殺気が叩き込まれ、周りの血溜まりから無数の槍が死柄木に向かって飛び出す。ギリギリで反応した脳無が槍を体に受けつつも辺りの血溜まりから死柄木を抱えて距離を取る。空を切った槍はそのまま虚空で弾けて鮮血の雨を降らせる。苛立ちを隠せず首をガリガリと掻きむしりながら、夥しい殺気の発生源である死んだはずの女を睨む。

「おいおい、あの一撃で死なないとか本当に人間かあいつ！化け物だろクソが！」

「殺したんですよね、個性でしょうか？」

そこには両腕、口、腹の裂傷からおびただしい量の鮮血を流しながら

ら立ち上がる美亜がいた。紺桔梗の髪はすっかりボサボサになり血が大量に付着し重そうに垂れる。足は骨が折れている為かガクガクと震え、腕は力なくダラリと垂れる。背中も大きく丸め、まるでゾンビのようだ。そんな中、紅い眼だけが死柄木をじっと見据えている。

再び両腕に血が集まり今度は巨大な血腕が形成される。さらに腹の裂傷部分を血が覆い尽くした。死柄木を先程より更に燃え上がった紅い眼が睨みつけ、震える足で一歩、また一歩と距離を詰める。

「クソツ！脳無、今度こそあいつを殺せ！」

思わず一歩後ずさった死柄木は脳無に指示を出しつつ自身は血溜まりから離れる。

再び突撃する脳無、次々と血溜まりから槍が出現し襲いかかる。何本かが脳無に刺さり、その肉を抉って貫通する。しかし開いた穴は直ぐに周りの肉が集まって『再生』する。体中に無数の穴を開けながらもそのスピードは一切緩む事なく、美亜に肉薄した。距離を取ろうとするも折れた足では踏ん張りが効かず、振り抜かれた拳を両腕を犠牲にしてガードする。再び両腕が弾け血が撒き散らされる。体は吹き飛び、地面に転がり倒れ伏す。

しかし今度は脳無が攻撃の手を緩めない、確実に殺すべく倒れた美亜の身体に馬乗りになると上から拳を打ち込む。鈍い打撃音と共にバキッ！グシャッ！と何かを潰す嫌な音が広場に響く。一撃ごと血が噴水の様に飛び散った。

今度こそ確実に死んだ、ミンチだ。そう誰もが思う頃、脳無が死柄木のもとに戻る。拳には大量の血や肉が付着しており地面にボタボタと垂れる。

「おいーその血は振り払ってこい、クソツ！血の匂いで吐きそうだ……」

戦闘した広場の一角は元の白かった床が見えないほど紅く染まり、血の匂いが色濃く漂っている。惨状という言葉が生温いほどの光景に敵すらも顔をしかめる。

しかし今度こそ死んだ、そう思っていた死柄木の耳にあり得ない声が聞こえる。

「殺す、殺す！殺す!!」

そこにはかつての美しい姿は微塵も無い。全身は頭の上から爪先まで血で覆われ、血の赤の中で嫌に目立つ紅い眼だけが燃え上がる。もはや人間とはいえない姿をした化け物が立っていた。

あり得ない、あれは人間ではなくまだ脳無だと言われた方が理解できる。そう考え恐怖を覚えた死柄木は上擦った声で脳無への三度目の指示を与える。

「死んでいない、脳無と同じ『再生』の個性ですか!?!ではこの『操血』はいったい?」

「殺せ! あいつは危険だ! 殺せ!!」

脳無が超スピードで迫る。その動きに美亜は一切反応できず、そのまま両手に全身をつかまれる。美亜を握りしめて持ち上げた脳無は力を込める。骨が折れる音が鳴り響き、美亜の口や鼻、耳から血が溢れ、眼からも血涙が流れ出す。

「がっ! ああっ! ゲボオ:くおお! ガボオ!!」

「死柄木! 強力なレア個性かもしれないですよ彼女。先生が欲しがる可能性あります!」

「だとしてもあいつは殺す、そもそも気色悪い。脳無よりよほど化け物だ」

聞くに耐えないもはや声とも言えない音が美亜の口から発せられる。何かを叫んでいるが溢れる自身の血で溺れてわからない。脳無の指の間からも血が染み出してくる、今度こそ確実に命を奪わんと腕に力が入った。

「手を離せ!! S M A A A S H !!」

そう叫びながら緑谷が脳無に渾身の一撃を叩き込む。鈍い打撃音が鳴り響く。緑谷が『ワン・フォー・オール』を使い美亜を助けるべくたたき込んだ渾身の一撃だ。自身の100%の力を叩き込まれた脳無が吹き飛ばされると思った緑谷だったが、びくともせず緑谷を見下ろしている。

「えっ、効いて...ない?」

あり得なかった、『ワン・フォー・オール』はオールマイトの力、その100%はオールマイト程ではなくてもかなりの威力だ。それが

効かないと言うことは物理攻撃を無効化する個性の可能性が高い。緑谷にとって最悪の相性だ。

それを見て更に死柄木が苛つき首を搔く。

「クソ、邪魔者が次々と……！お前……スマッシュってオールマイトのフォロワーかい？まあいいや、そいつも殺せ脳無」

脳無の左腕がゆっくりと振り上げられる。緑谷は死を直感し足がすくんで動けなくなった。しかし振り下ろされた腕の動きが止まる。死にかけの美亜が強い眼で脳無を睨みつけながら壊れた様に叫び声を発し始めた。

「殺す……殺す……殺す、殺す！コロす！コロす！！コロス！！コロス！！」

狂気と殺気が撒き散らされる。無差別にぶち撒かれたそれはまるで実体を持つかの如き圧で迫る。その声に呼応するかの様に広場に広がった血溜まりが波紋の様に振動し、徐々に浮かび上がる。死柄木、黒霧は警戒して辺りを見渡す。脳無は美亜を放り出して死柄木を守るために側に着く。放り出された美亜は地面に力なく倒れ伏すが、その口からは呪詛の声が響き渡る。周囲の血が無数の糸のように伸び美亜へと向かう。

その時轟音と共にUSJの出入り口のドアが吹き飛んだ。美亜以外の全員の目が向けられ、土煙の中からノーヒーローが現れる。

「もう大丈夫。私 came」

「待ってたよヒーロー。社会のゴミめ。あーコンティニューだ……」

第12話 血濡少女と初めてのUSSJ：4

燦然と現れたオールマイト、その表情はいつもの笑顔ではなく憤怒に染まり圧倒的な威圧感を放っている。

その姿を見た麗日や瀬呂、砂藤らは待ちに待ったヒーローの到着に涙を流す。彼らは出入り口で黒霧にやられた13号を守っていたのだ。その姿を見てまだ広場に残っていた下っ端敵達がオールマイトを殺そうと動き出す。

その瞬間、オールマイトが掻き消えた。一瞬で残った敵達を昏倒させるとそのまま死柄杓に一撃を入れつつ美亜と緑谷を抱えて入り口の方へと距離を取る。

オールマイトは美亜をそつと地面に下ろす。余りにも無残な姿だった。意識はとうに失われ、体はぐしゃぐしゃに潰れ両腕は無く、足は折れているのか力なく投げ出されている。美しかった顔もボールの様に腫れ、辛うじて息をしている状態だ。全身の至る所が裂け、流れすぎた血でもはやコスチュームと肌の見分けが付かないほどになっていた。辺りを見渡すと一面に夥しい量の血が飛び散っている。美亜を救った自分の右腕にも夥しい量の血がべったりとついている。「飯田少年から聞いたよ、相澤君が一人で戦っていると。彼は今どこにいる？そしてこの千染少女はどうして…」

「オールマイト…相澤先生がああ脳無にやられた後、千染さんがしんがり殿になって逃げる時間を稼いでくれたんです。相澤先生は今頃蛙吹さんと峰田君が遠くへ連れて逃げているはずですよ…」

「それで…こんな傷を…」

その余りにも惨い惨状にオールマイトは怒りが湧き上がってくるのを感じる。この子はいったいどんな気持ちで一人で立ち向かったのか、皆を守る為に死地へ赴く、とても15歳の少女がやっていいことじゃ無い。怖かったはずだ、痛く、苦しく、きつと想像ができないほど傷つけられたのだろう。

だからこそ自分に腹が立った。自分がもつと早く来ていれば、守る力が有れば…

美亜の顔に自身の着ていたシャツを掛けると笑顔で指示を出す。

「緑谷少年、千染少女を頼んだ。かなり危ない、入り口まで背負って行ってくれ！」

「オールマイト、ダメです！あの脳無、僕の渾身の一撃が全く効きませんでした。恐らく衝撃を吸収します！」

それでも、だからこそオールマイトは再び笑ってピースサインをしつつ緑谷に答える。

「緑谷少年、大丈夫！」

そう言い残して脳無へと突っ込んでいく。

緑谷は美亜を担ぎ出入り口への階段へと向かう。背中にべったりと美亜の血が着くが構っていられない。

自分だけが知っているオールマイトの秘密、オールマイトは既に今日登校前に三件の事件を解決している。更にオールマイトが来れないと言う話の時に13号先生が相澤先生に見せた3本の指、あれはきっと活動限界が近いと言うことだ。オールマイトは今ピンチなんだ、だからこそ笑顔で僕らを安心させようとしている。

階段を降りて迎えてくれた麗日や砂藤に美亜を預ける。友人の余りの惨状に顔色を真っ青にして心配する二人を残して緑谷は脳無へ駆け出す。

2人の静止を振り切って向かうも黒霧に見切られてしまう。緑谷の前に黒霧が一瞬で現れ霧を広げて捉えようとする。

その時、爆音と共に爆豪が現れ黒霧を地面に押さえつけた。

「どけー邪魔だデク!!!」

更に切島が死柄木に斬りかかり、轟が脳無を凍らせて掴まっていたオールマイトを援護する。1-Aの最高戦力の2人だ。

「今のうちに、砂藤くん！美亜ちゃんを上!!」

麗日と砂藤は『無重量』で美亜を軽くして慎重に上へと運ぶ。運んでいる間にも血が止まらず流れ落ち、明らかに危険な状態だ。オールマイトが顔にシャツをかけたことから顔の状態も想像に難く無い。

上に運ばれ、慎重に下された美亜を瀬呂がテープで止血する。怪我をした所を全身をぐるぐる巻きにすると、まるでミイラの様な状態に

なった。

更に腕が両方とも無くなっている。

「な、なあ…千染、大丈夫だよな??」

「やばい…息が薄い」

美亜にテープを巻き、適切な処置を施した瀬呂もクラスメイトの惨状に絶望感を強くする。死にそう、というより既に死んでいてもおかしくはない。むしろ何故生きているのか不思議だ。変わり果てた姿の美しかったクラスメイトに障子、砂藤らも顔色を悪くし、麗日はもはや泣き出している。

轟音と共に天井を何か突き破る。広場を見ていた障子が脳無がオールマイトのパンチで吹き飛んだと皆に伝える。その直後、入り口の方から大勢の足音が聞こえ、銃声が数発響く。

「ごめんよ皆、遅くなったね。すぐ動けるものをかき集めてきた」

「1—Aクラス委員長飯田天哉、ただいま戻りました!!」

13号先生や皆の必死の頑張りで脱出に成功した飯田が、教員達を10人以上連れて戻ってきたのだ。スナイプが残った敵へと銃弾を正確に打ち込み、動きを封じる。

「あーあ、来ちゃった…ゲームオーバーだ。帰って出直すか黒霧」

そう言つてワープゲートで帰ろうとした死柄木の手足の関節を的確に銃弾が撃ち抜く。スナイプの個性は『ホーミング』遠距離の相手でも位置を正確に把握して狙撃を行える個性だ。更に13号先生が力を振り絞り黒霧をブラックホールで吸い込もうとする、しかし間に合わない。

「今回は失敗だったけど、今度は殺すぞ。平和の象徴オールマイト」

そう言い残して死柄木と黒霧はワープゲートの向こうへと消えた。

「なんてこと、こんな派手に侵入され主犯格と思われる2人に逃げられちゃうなんて」

「完全に虚を突かれたね、それより今は生徒の安否さ」

広場の惨状を見て嫌な予感を覚えた根津が生徒の安否を確認しよ

うとした時、その予感的中していた事が分かる。泣きじやくった麗日や真つ青になった砂藤らが必死に先生達に叫んでいるのだ。

「みつ、美亜ちゃんが！美亜ちゃんが!!」

そのただならぬ雰囲気駆け寄せた先生達は恐ろしいものを見る。全身に巻かれた止血用テープはすっかり赤黒く染まり、両腕は無く、足は添え木されているがそれが意味を為さないほどに潰れ、粉碎骨折しているであろうことは見れば明らかである。顔にはシャツがかけられ、恐らく見るに耐えない状態なのだろう。

そこには生きているのかすら怪しいほど重症の生徒がいた。

「おつ、おい！まさか千染か！嘘だろ!!!」

「生きているのよね？大丈夫なのよね!？」

流星の雄英教師陣も取り乱す。彼らの長いキャリアでもここまでの重傷者は見たことがない。駆け寄ったブラドキングにより息が確認されると急いで指示が出される。

「早く！最優先で病院へ運ぶんだ！」

根津校長の焦った声で美亜は運ばれていく。その後蛙吹と峰田によって運ばれてきた相澤と、両足を骨折した緑谷も救急搬送されると残る生徒達の安否確認が行われた。

土砂エリアに居た芦戸、上鳴、耳郎、八百万を採掘系の個性を持ち、土砂、山岳エリアの搜索に向いているパワーローダーと『分身』の個性を持つエクトプラズムが救出に向かう。大雨・暴風エリアに居た常闇、口田を鼻が効くハウンドドックとブラドキングが回収する。尾白は知らぬ間に怪我なく無事に戻ってきていた。

根津校長は千染、緑谷以外の生徒が無事だったことにとりあえず安心する。

（死者が出なくてよかった…なんてとてもじゃ無いけど言えないね。千染さん、果たしてこれは死んで無いと言えるだろうか）

根津校長の個性は『ハイスペック』、珍しい事にネズミに個性が発現し、言葉を話し人間以上に頭の回るネズミとなった。

そんな彼が頭を働かせるまでもないほど目の前には凄惨な光景が広がっていた。広場の一角が赤く染まっている。間違いなくあそこ

で戦闘が行われたのだろう。彼女の状態と相まってあれが全て彼女の血なのではないかと考えてしまう。常識ではあり得ないことだ、常人ではこの量の血は流せない。ただ相澤から聞いた彼女の真の個性、血を増幅させる力、それができるならこの惨状にも不可能では無い。もし本当にそうであるならばここでどの様な戦闘が行われたのか、何度死にかけたのか、もはや戦闘ではなく虐殺である。

予兆はあった。あのセキュリティが突破された事件、間違いなく敵連合が主導だ。マスコミに紛れて時間割と担当教員の情報を得る。校舎から遠く、生徒と相澤、オールマイトしかない隔離されたこの状況を狙ったのだ。

ここまで用意周到に作戦を遂行した敵連合、これで終わりなんてことはあり得ない。今はなによりもセキュリティの強化が必要となる、そう考えながら到着した警察の対応に向かった。

横浜の某所にある雑居ビル、その中に入っているバーの床にワイプゲートで現れた死柄木が倒れ伏す。

「つてえ…両手両足撃たれた…完敗だ…」

そう言いながら地面に転がる。苛つきが治まら無いが手が動かない。その苛立ちを一台のモニターを睨み付けることのでぶつける。

「脳無もやられた、手下どもは瞬殺、子どもも強かった…平和の象徴は健在だった…！」

話が違どうぞ先生…！」

『違うよ』

バーのカウンターに置かれたモニターから声が発せられる。『先生』そう呼ばれた男はモニター越しに死柄木をまるで教え、諭すかの様に語りかける。

『ただ見通しが甘かったね』

『うむ…舐めすぎたな、敵連合なんていうチープな団体名で良かったわい。ところでワシと先生の共作、脳無は回収してないのかい？』

そこにもう一人の年老いた声が重なる。『ドクター』と呼ばれる男だ。問いかけに対し黒霧がそんな余裕はなかったと言う説明と謝罪

を述べる。

『せっかくオールマイト並みのパワーにしたのに…まあ仕方ないか、残念』

まるで脳無の事をなんとも思っていないかの様にあっさり口にする。

死柄木は少しだけ冷静になると思い出したかの様に話す。

「そうだ、あの何度殺しても死なない忌々しいクソ女…それにオールマイト並みの速さを持った子供がいた…」

その話に興味を持った先生が続ける様促す。

『へえ…何度殺しても死なない?』

「あのクソ女がいなければ厄介なイレイザーヘッドを殺せた。あの女…脳無でボコボコに潰したはずなのに生きてやがった…何度も向かってきて、気味が悪い。思い出しただけでも吐きそうだ…」

それにあの地味な男…あいつさえいなければクソ女とオールマイを殺せたかもしれない…

ガキがつ…あのガキ…!」

『悔やんでも仕方ない!今回だって決して無駄ではなかったハズだ!我々は自由に動けない!だから君の様なシンボルが必要なんだ。』

死柄木弔!!次こそ君と言う恐怖を世に知らしめろ!」

そう言つて通信を切つた先生と呼ばれる男。

彼はオールマイト殺しが失敗したにも関わらず愉しそうに笑う。

彼は今回の作戦が成功するとは思っていないかった。死柄木弔は自分の後を継ぐ存在であると考えている彼は育成の為に今回の事件を起こしたのだ。敗北、失敗それは必ず成長の糧となる、今回は無事に帰ってきただけでも十分なのだ。

それに加えて何やら楽しそうな情報を持ち帰ってくれた。オールマイト並みのスピードとパワー、そして何度殺しても死なない女、実に興味が湧く。

闇に潜む巨悪は愉快そうに大きく笑った。

第13話 血濡少女と初めてのUSSJ：エピローグ

たった1人、鉄檻の中に居る。

そこは重厚な鉄の扉で閉ざされた地下室。窓は一切なく、辛うじてわずかな電球の明かりが照らす。床と壁は無機質な灰色のコンクリートが剥き出しで家具などは一つもない。あるものはこの自分を閉じ込めている鉄檻だけだ。

鉄檻が冷たくて思わず膝を抱き寄せる。身には薄絹一つまとっておらず、檻に触れた肌が凍りそうだ。当然暖房などあるはずもなく、冬の地下室は冷え切っている。

どれぐらいそうしていただろうか、10分の様にも1時間の様にもそれ以上とも感じる時間が過ぎ去った。地下室の鍵が無機質な音とともに解錠される。ビクツと体を震わせて入り口から離れようとする奥へと這って逃げる。健の切れた両足はまともに動かない。

ドアを開けて入ってきたのは醜悪な化け物、全身が真紅に染まり、ニタニタと笑うその口からは涎が垂れ落ちている。腕は力なく垂れ下がり、猫背でダラダラ揺らしながら近寄ってくる。真っ黒の眼は爛々と煌き喜色が感じ取れる。そして手に握られているのは先端が熱されて赤くなつた鉄の焼鏝、先からは外気との差で煙が上がっている。

化け物が檻の中へと入ってくる、必死になって檻の奥へと逃げようとするも狭い檻では限界がある。ハッハッと自分の息が恐怖で荒くなるのが分かる。

『寒いのかい？いま温めてあげよう』

この世のものとは思えない不気味な声で語りかけてきた化け物、その手が足首を掴む。引きずられ、仰向けにさせられる。馬乗りになつた化け物の涎が顔に垂れる。下から見上げた化け物は笑みをさらに深くした。そして手に持った焼鏝を左胸に近づけると……

「美亜ちゃん!!!」

自分の名前が大きな声で呼ばれ跳ねる様に起き上がる。何かが引つ張られる様な感覚がするも今は自身の荒い呼吸を宥めるので精一杯だった。汗が滝の様に流れ、全身がシャワーでも浴びたかの様に濡れている。肺は酸素を求め必死に喘いでいる。

「はあ…はあ…(ハハ)は?」

あたりを見渡すと病院であることがわかる。どうやら自分はベッドに寝かされていたみたいだ。開放感のある窓からは夕日が差し込み、今が夕暮れである事を告げている。

ベッドの脇では芦戸と麗日が今にも泣きそうな目で見つめていた。

「なんだ…?どうした」

「美亜ちゃん…!!」

大きな声でそう叫ぶと2人は号泣して抱きついてくる。

「おい、ここは病院だろう、静かにしろ！」

それに私は病人だぞ、安静にさせろ」

そう注意しつつ2人を離そうとすると自分の両腕が無いことに気付く。よく全身を見渡すと包帯でぐるぐる巻きにされていてまるでミイラみたいだ。そんな自分の姿に思わず自嘲気味な笑みが溢れる。

「美亜ちゃんよかった!!本当に心配したんだよ!!」

「もう起きないかと思ったたら今度は凄い魔され出して…本当に怖かったんだから!!!」

号泣して抱きついてくる2人を引き剥がすのを諦め、されるがままになりながら冷静に状況を整理する。

(助かったのか…記憶にあるのは脳無に殴り飛ばされて…それで…緑谷?確かあいつが突っ込んできて…だめだ思い出せん、今日日経った、それにあの敵達はどうなった?)

非常に断片的な戦闘の記憶に頭を悩ませる。

しばらくして落ち着いた2人、麗日は美亜が目覚めた事をクラスの皆やりカバリーガールに知らせに向かい、芦戸が残った。どうやらここは雄英高校の保健室らしく、もう少しでリカバリーガールが来るらしい。

少しだけ気まずい時間が流れ静寂に包まれる。芦戸も何かを言い

たそうにしている。

「芦戸、無事だったか…よかった」

「馬鹿…私より先に自分の心配をしてよ」

芦戸はどこか攻める様な視線をこちらに投げつけてくる。それを流して視線を窓の外へ向けて問いかける。

「そうか、ところであの後何があったか教えてくれないか？」

「私も土砂ゾーンに3人といたところをパワーローダー先生とエクトプラズム先生に救出されたから詳しくはわからないんだけど…」

美亜ちゃんが相澤先生を助けて、一人で主犯格のヴィランと立ち向かったんでしょ？その後やられているところをオールマイト先生が助けてくれて、飯田くんが呼んでくれた先生たちが制圧したの。

本当に危なかったんだよ！その時の美亜ちゃんもう血だらけだったらしくて…両腕も無くなって、死ぬかも知れなかったって…」

話しながらまた涙が溢れてきた芦戸、膝の上で震える拳は今にも血が流れそうな程に強く握られている。だが撫でる手は残っていないので泣き止むまで待った。こんな時美波ならどんな声を掛けるのだろうか。

（見られたか…これは、もう隠しきれないか…）

落ち着いた芦戸は少し攻めるような語気で美亜に聞く。

「美亜ちゃん、腕が無くなって…それに身体中傷だらけなんだよ…何でそんなになるまで無理したの？」

「さあな、私にも分からない。私にも何処かで引けないところがあったのかも知れないな。それと傷なら大丈夫だ、直ぐ治る。そう言う『個性』なんだ私は…」

「美亜ちゃん…？」

芦戸は意味がわからないと言った表情を浮かべる。当然だ、自分の個性は『操血』と言っているのだから。

「いい機会だ、どうせもう疑われているだろうし芦戸には言っておこう。ただ他の人にも私の口から言う、他言はしないでくれると助かる。」

私の個性は『操血』ではない」

突然告げられた衝撃の言葉に固まりながらも芦戸はどこか納得する。敵襲撃から僅か半日、リカバリーガールの治療があつたとしても明らかに異常な回復速度だ。

「私の個性は『血』そのもの。血の量を増やし、更に血で覆った自身の体を修復、再生する。だから腕は生えるし傷も残らない」

だから彼女はあの死地に飛び込んで行つたのだ、修復できる美亜なら最大限相澤先生を助ける時間が稼げるから。ボロ切れの様になりながらそれでも皆を守るために。相澤先生を圧倒する程の敵に立ち向かうのはどれだけ怖かつた事か。今も変わらず平穩で無表情な美亜の心がどれだけ傷ついているか。

自分の腕を失つたことに悲しみを見せなかつた理由も死にさえしなければ再生できるから。でもそれでは解決しない問題がある。

「でも……痛「はいはい安静にしてるかい？」

芦戸が何かを問いかけようとしてきたその時、ドアが開き、リカバリーガールが到着した。芦戸に何故かP E Tを渡しながら容態を聞いてくる。適当に大丈夫と相槌を打つと途端に真剣な表情で問い詰められる。

「あんた、本当に大丈夫なのかい？両腕を失つたんだよ、それに恐ろしいほどの怪我だ。今は包帯を巻いていてわからないかも知れないが体は傷だらけだ。今起き上がっているのも信じられない、生きているのが不思議なほどの重症だよ」

「ああ、私なら何も心配はいらない。治療をしてくれて感謝する、命を救われたよりリカバリーガール先生」

「でも奇跡的に内臓に損傷は無かつたよ。あれだけの怪我を負っているのに損傷無しってのはおかしいけどね。それと足、グシャグシャに折れてると聞いたんだけど見てみたら全く折れてないんだよ」

「それは何よりだ、運が良かったな」

「運が良かった？それでは済まないよ。何かあるね、理由が」

リカバリーガールの目が鋭く美亜に刺さる。その老体からは信じられないほどの気迫に芦戸は思わず息を飲む。

その目を正面から見据えた美亜の眼は言外にこれ以上詮索するな

と述べていた。リカバリーガールは一つため息をつく、最近の若い子は怖いねえと言ひ残して病室を去っていった。

「私にはくれないのか、PET…」

すると今度は入れ替わるように地味顔で長身のスーツを着た男が入ってくる。

「おい…乙女の病室にノックもなしに入ってくるとは失礼だと思わないのか？」

立て続けの来客に不機嫌になった美亜がジトつと睨み、暗に出て行けと不快感を示すもそれを逸らすように自己紹介してくる。

「それは失礼した。私は警察の塚内直正だ、今回は敵について聞きたくて来た、君は直接戦った最大の当事者だからね」

そんな塚内を今度は芦戸が睨む。当然だ、あれだけの怪我を負い、更には斃されていた美亜は恐らく相当な恐怖を感じ、トラウマとなつたに違いない。それなのに目覚めた瞬間に聞いてくるのは本来被害者への配慮が足りない。

しかし美亜はさらつと答える。

「ヴィラン…首謀者と見られる手だらけ男とは戦ってないから分からんな。だがあの脳無とか言うやつ、あいつは化け物だ。素でオールマイト並みのパワーとスピードを持ち、恐らく個性は『再生』か何かだ。私がヤツの左半身を消し飛ばしても直ぐに五体満足で殴りかかって来た」

「成る程、協力ありがとう千染さん。また何があったら連絡してくれ、私のアドレスを置いておく」

塚内は驚きをなんとか隠し平静を装う。あり得ない、衰えているとはいえオールマイトが全力で戦ってようやく退けられる程の敵だった。そんな敵の半身を消し飛ばしたという。再生されたとはいいが恐ろしい事だ。それを成した彼女がまだ1年生だという事も相まつて異常性が際立つ。

考え込んでしまった塚内は、美亜の眼がじつと此方を見ている事に気がついた。その眼はまるで全てを見通すように不気味に輝く。疑いを悟られない為に逃げるように病室を後にした。

アドレスの書いた紙を机の上に置き去っていく塚内、美亜はその背中を見て考える。

(それだけでいいのか？掘り下げてこなかったってことは私のはただの裏付けか…他に直接戦ったやつ、オールマイト辺りに聞いたか。そして私に対しては興味がない…助かったな)

しばらく芦戸と気味い時間を過ごしていると今度は廊下から騒がしい声が聞こえて来た。ノックもなしに制服姿のクラスメイト達が病室に流れ込んでくる。

「美亜さん、良かった、目が覚めたんですね!!」

「千染さん！大丈夫？無事？」

「無事…じゃなさそうか？いやミイラみたいだし…」

皆が口々に心配の言葉を投げかけて来る。なんと爆豪や轟までいるから驚きだ。最も爆豪は面白くなさそうにドアにもたれ掛かっているが。

「全く、次から次へと煩いぞ。ここら病室で私は患者だ。まったく静かにすることもできないのか」

そう言っただけを睨み返す。緑谷と芦戸、2人はあの時の美亜の狂気と怒りに染まった眼を見ていて、今は普段の気の強そうな眼であることに安心した。

入れ替わり立ち替わり色々な人が訪れている事など露も知らない生徒達は、突然向けられた理不尽な怒りに慌てて弁明する。

「い、いや俺達千染が心配でさー」

「そうそう！居てもたつてもいられなくなっちゃったの！」

「煩かったならごめん！」

「その声か煩い事に気付いてないのか…ただまあ…心配してくれて…その……ありがとう…」

一瞬皆が信じられないと言った顔で呆けているが、直ぐに花開いたような満面の笑みを浮かべる。茶化してきた峰田や上鳴が蛙吹と耳郎にボコされるのを見ながら、深呼吸して火照った顔を冷ます。

しばらく話すとどうやら半日しか経っていないことが分かる。その中でおずおずと砂藤が尋ねてくる。

「なあ…その…腕なんだが…」

「ふん、よく聞くな砂藤。乙女のデリケートな話をこんな場面でさせるとは。私を辱めたいのか」

「ちつちがう…！俺は心配になってだな…」

「冗談だ、悪かったな意地悪を言つて。気にするな明後日には驚かせてやろう」

美亜の重すぎる冗談で狼狽する砂藤に腕のない肩を回して答える。その後はさらにあの後どうなっていたかを一通り聞いて、もう帰れ、親も心配しているだろうと言つて帰らせる。

「そうだ、ちよつと緑谷に話がある。時間はあるか？」

「え…うん、大丈夫だよ」

緑谷だけを引き留め、病室に2人が残る。居心地が悪そうにキョロキョロと挙動不審になっている緑谷にベッド脇の椅子に座れと声をかけながら考える。USJで脳無と戦った時、朧げな記憶の中で緑谷が助けに来た気がする。緑谷は病室に入ってきた時から俯いて暗い顔をしている。もし本当に来ていたのなら何を見たのか聞かなければならない。

考え込んでしまった美亜に恐る恐る緑谷は声をかける。

「あの…千染さん、それで用事つてなにかな？」

「緑谷…お前…何を見た？」

端的で核心を突いた質問に、緑谷は慌てて手を勢いよく顔の前で振りながら言葉に詰まっている。しかしじつと見つめる美亜と目が合うと、次第に俯いて話し出した。

「僕が行った時には、千染さんは既に脳無に捕まっていた。怖かった…千染さんは僕達を逃す為に1人で戦っていたのに…。僕の本気のパンチが全く効かなかった時、怖くて足が竦んで…」

「それは仕方のないだろ、あいつはバケモノだった。恐怖を感じない方がおかしい」

「でも…千染さんが最後の力を振り絞って脳無を止めてくれなかったら…僕は死んでいた！助けに向かったのに、逆に助けられて、何にも出来なかった！」

どうやら先程から暗い顔をしていた緑谷の考えていた事は私の想像と違っていたらしい。緑谷は目に涙を浮かべながら、膝の上で拳を握っている。助けに来てくれたことは事実だが、どうやら緑谷自慢の超パワーが全く通用しなかったらしい。そしてそれにより怯えてしまい、助けられたことが悔しくて落ち込んでいる。

「でも私は生きているだろ」

「え？」

「私はこうして生きている、誰一人死んでなどいない。それでいいじゃないか。生きる事、それ以上に価値のあるものなど無い。」

お前は良くやった。緑谷：助けてくれてありがとう」

不安だった。自分達を逃すために一人戦い、凄惨な傷を負った美亜が自分の事をどう思っているのか。怖くて顔を見れなかった。今、彼女の言葉で顔を上げてようやく分かった。あの時脳無を前に振り絞った勇気が、その僅かな時間が彼女を助けたのだ。そう確信できるほどに、美亜は優しい微笑みを浮かべている。

思わず涙が溢れてしまったが、美亜は泣き止むまで何も言わずにじっと見守ってくれた。

「あまり遅くなると親が心配するだろう、今日は帰れ」

「ありがとう千染さん、それじゃあまた明後日！」

緑谷が落ち着いたタイミングで美亜は声をかける。少し気恥ずかしそうに顔を逸らしながらも、緑谷は元気よく病室を後にした。

病室を出る寸前、振り返る。俯いている美亜はとても儂く、今にも消えて無くなってしまうそうだった。

第14話 血濡少女と初めてのUSSJ：EXTRA

美亜の病室を去ったりリカバリーガールは真つ直ぐに校長室へと向かう。そこには真剣な表情をした根津と車椅子に座る包帯グルグル巻きの相澤が紅茶を2つ用意して待っていた。そんな相澤を視線で非難しながら座る。よくまああの怪我で動く、安静にしている欲しいものだ。

「あの少女、両腕はちぎれ飛び内臓はぐっちゃぐちゃ、体中の骨は粉々になり顔も頭も陥没骨折、全身の至る所に裂傷………と聞いていたんだけどね。」

両腕の喪失と裂傷こそあったものの内臓は無事、骨も折れてない。正直、何が起きてるのかさっぱりだよ。半日でそんな重傷が治るなんてことはあり得ないんだよ。いったいなんの個性なんだい？」

リカバリーガールは個性『癒し』をもつ雄英高校の屋台骨。体力を使わせることであらゆる症状を治療する個性である。雄英高校の過激な授業や行事は彼女の治癒能力あってこそであり、個性を使用するたびに怪我をする緑谷も度々お世話になっている。

リカバリーガールは大慌てで美亜を搬送して来た職員に怪我を聞いて、想像以上の重症に覚悟をしてシートを捲った。しかしそこに横たわる美亜は外傷こそ目も当てられない惨状だったが、内部に関して異常なほど無事であった。これには搬送した職員も首を傾げるしか出来なかった。

「そうだね、彼女の個性届では個性を『操血』と書いていたよ。でも以前相澤君が聞いた時に血液量を増幅させ操る『血』そのものだと思えた、だとしてもおかしいよね。異常な回復力もあるけど腕を失った人の雰囲気じゃ無い、まるでいつでも生やせるかのようだ。それで僕も気になって少し調べてみたら個性は分からなかったけどこんな情報が出てきたよ、正直驚いた、影のある少女だと思っていたけれどここまでだとは思わなかったんだ」

そう答えた根津は少し後悔したような顔をしながら資料の束を机

の上に置く。車椅子を横に止めている相澤も顔をしかめて苦々しい顔をしている。言いようのない不安に襲われながらも美亜の経歴をまとめた資料を手にとった。上から目を通すと直ぐに引つかかるものを見つけて目線が止まる。

「なになに、幼い頃に両親を亡くして孤児院に住んでるのかい。ん？熱田美波：どこかで聞いたことがあるような気がするねえ…」

「それはそうだよ、彼女はその孤児院の副院長、犬千代さんと共に雄英高校に在籍していたんだから。当時のトップ『慈熱の美波』、単騎でも無類の強さを持ち、その上後輩の犬千代とコンビを組んだらプロも手がつけられない程の実力を誇っていたんだ」

「私も熱田さんには随分お世話になりました。誰にでも等しく慈愛を注ぐ、それが伝波し彼女の周りは常に笑顔に溢れていると聞いていました。」

拳士：犬千代ですがあいつは暑苦しいやつで他クラスなのにマイクと共によくふざけていて、私も引つ張り回されましたよ。ただ、芯の通った気持ちいいほど真つ直ぐな奴と有名でした」

リカバリーガールはまるで母親と娘の様に仲の良かった2人を思い出した。体中に擦り傷をつけていつもニコニコしながら治療を受ける犬千代、「舐めれば治る！」と言っていた彼女は美波に引つ張られて保健室に来ていた。彼女達は頻繁に保健室に来ていたが、その度に自由奔放な犬千代、優しく見守る熱田の姿に暖かい雰囲気に含まれた。

「多くのプロヒーローから注目と期待を受けていた彼女は卒業後、当時のN08ヒーローの事務所にサイドキックとして入社したんだね、犬千代君も一年後追いかけるように入社したと書いてあるよ」

「2人は自分達で将来事務所を立ち上げるつもりだったらしいです。頼いぐらいよく話していました、『美波と一緒に多くの人を救うんだ！』と。あの事件の後、消息を絶っていたのですがまさか孤児院をやっていたとは…」

相澤は車椅子に体を預けると天井を仰ぎ見る。ヒーローを目指して眩しいほどの笑顔で頑張っていた友人、消息を絶った後マイクと共に

に探したが見つからなかった。それがまさかこんなに近くで孤児院を開いているとは思わなかった。

とりあえずは熱田さんと共に居て良かった、それならば彼女は不幸では無いはずだ。

「当時のN08は夫婦でペアを組んだヒーローだったね。優しく穏やかで実力も確か、相当な人気があったんだ：あの事件があるまでは…」

資料に記載されている事件に目を通し思わず顔をしかめてしまう。当時を生きてきたヒーローにこの事件を知らぬ者は居ない。

『N08ヒーロー夫婦惨殺事件』

7年前、当時N08ヒーローだった夫婦が自宅のリビングで惨殺死体となって発見される。

死因は2人とも左胸を鋭利な刃物で突き刺されており、顔は原型がわからなくなるほど切り刻まれていた。

実力と人気を兼ね備えたトップヒーローが何者かに惨殺される、衝撃的なニュースは世間を大いに騒がせた。後日、犯人は連続殺人犯の凶悪ヴィランであることが判明し、多くのヒーローの尽力によって逮捕された。

この事件後、多くのサイドキックの1人でありながら、N08と肩を並べるほどの実力者として事務所所属していた熱田と犬千代は、音信不通となり忽然と消息を絶った。

皆から愛と優しさを持った最高のヒーローになると期待されていた熱田、どこまでも真っ直ぐに純粹に多くを救いたいと願った犬千代、2人の夢はたった一つのヴィランによって儚く砕け散ってしまった。

「と、されていたんだけどこの事件にはもう1人の被害者がいたんだ。警察によって情報を完全に遮断され、その存在すら封印されたもう1人の被害者が」

根津校長の言葉に嫌な予感が的中したことを察した。

「それが被害者の里子、千染美亜君だったんだ。当時8歳だった彼女は2人が亡くなったりビンゴで心臓にナイフを突き立てられ、多くの血を流しながら倒れていた。左胸は抉られるように削り取られ、余りの出血量に半年も生死の境を彷徨ったが奇跡的に生還したそうだ。」

しかし事件のショックから1年以上精神病院に入院、初めこそ半狂乱になって寝ても覚めても泣き叫んでいたそうだ。それでも次第に落ち着きを取り戻し、日常生活を送れるほどに回復した」

「そこで引き取られたのが熱田と犬千代の立てた熱犬孤児院ってわけかい。優しいんだねえ、2人とも…」

2人はきつと美亜の為に孤児院を建てたのだろう、暗く閉ざされた彼女の心と未来を守るために夢であったヒーローを諦めたのだ。そうしてここまで5年間、親代わりとして必死に美亜を育ててきた。その子が今、ヒーローを目指して雄英高校に通っている。

だからこそ悔やんでも悔やみきれない。恐らく相澤と根津も同じ気持ちだ。そんな彼女をヴィランの餌食にしてしまったこと、あの2人が夢を賭してまで育て上げた大切な子を恐怖に晒してしまったことに。

幸いなことに彼女の容態は安定し、ボロ切れのようになっていた体も回復した。しかし広場のあの惨状を見るととてもじゃ無いが無事とは言えない、気丈に振る舞ってはいたが精神的にどんな影響が出ているか分からないのだ。

「相澤君、すまないが千染君を頼むよ。僕の方でも少し調べてみるけどやっぱり近くに居られるのは担任である君だ。」

個性は調べても申請されているもの以外は中々わからない、出来れば彼女から本当の個性を話してほしいんだけどね

それとこの話はオールマイト君には話しておく、後は他言無用だ。捜査協力してくれた塚内くんを合わせた5人の秘密だ」

「はあ、できる限りはやりますけど今の体では中々難しいですよ。それにあいつが自分の本当の個性を話してくれる気がしません。」

それと彼女を家に送る役目、マイクにやらせてください。色々と積もる話もあるでしょう、それに謝るなら私達面識がある奴らがやった

方がいい」
「分かった、マイク先生に頼もう。彼には辛い役目を負わせてしまっ
て申し訳ないね…」

第15話 血濡少女とUSJからの帰宅

美亜が目覚めると病室は既に真っ暗で日が暮れている。歩けるから帰るか、皆に心配をかけたから謝らなければ。そんなことを考えながら軽くひと伸びをしてベッドから降りる。その時ドアが軽くノックされ、入るわよという声に続きドアが開いて灯が付く。

「元氣かしら？」と言ってもそんなわけないか…あら、もう歩けるの？
車椅子はいらなかったか」

「えつと…誰だ？」

入ってきたのはスーツを着こなし、キリツとした目元をしたことができる女感溢れる女性、美亜は思い当たる人物がいなくて思わず問いかける。できる女風ミッドナイトは苦笑いを浮かべながら答える。

「18禁ヒーロー、ミッドナイト先生よ。いつもと服が違いすぎてわからなかったかしら…これで分かる？」

いつもつけてる目元を覆うベネチアンマスクでは無く、黒縁のしっかりとした眼鏡をかける。美亜はハツとした表情をすると納得して頷いた。

「貴方を家に送り届けるわ、流石にその状態で1人で返すわけには行かないわよ、特別に車で送って行ってあげる。いつもの格好じゃ流石に不味いかな…と思つて。荷物とかない？まとめて鞆に入れてあげるわ」

「いえ、特にないです。でも助かりました、腕がないものでバスの定期券も出せないですから」

わざと腕を大袈裟に振って肩を竦める美亜に苦笑いで返すミッドナイト、余りにも返しづらい冗談にオールマイイトならうまく返せるのかしらと考えてしまう。

「その様子だと元氣そうね、良かった。行きましようか千染さん」

並んで駐車場に向かう2人、腕が無くても背筋を伸ばし美しく歩く美亜に感心しながら歩いている。

「貴方の個性、『操血』だったわよね？」

「ああ、厳密には少し違いますけど大体同じです。USJの広場見ま

したか？あそこの血は大体私のです」

「それは…なんというか本当に大丈夫なの？」

ミッドナイトは心から心配する。駆けつけて目にしたのは広場を染め上げる血、もしあれが全てこの少女のものであれば生きていられるのが不思議だ。

「それは「H e y ! こっちだぜガール！」

答えようとした美亜を遮って大きな声がかかる。2人で声のした方を見ると車の横に立ち大きく手を振っているマイクを見つける。ミッドナイトは不思議そうに首を傾げる。

「マイク？私が送るんじゃないの？」

「呼ばれてますよミッドナイト先生、では私は用事を思い出したのでこれで」

「何言ってるの、私はガールって歳じゃないわよ…。なに？嫌なの？」
踵を返して何処かへ行くとする美亜を引き止め、自分の言った言葉に傷つきながら車の方へ連れて行く。

「いや…最初は気にならなかったが、あのテンションは苦手だ。単純にうるさいっていうか…」

「それマイクの前では言っちゃだめよ、泣いちゃうから」

そう言っただけで車に到着し、マイクが助手席のドアを開けて美亜を座らせてくれる。

「なに？送ってくれるの？」

「校長からのご指名だ、正直乗り気じゃないけどな」

「テンション低いわね…。千染さんをしっかり元気付けて上げなさいよ」

いつになくテンションの低いマイクの背中をバシッと叩いて喝を入れる。

マイクは運転席に座ると助手席の窓を開けてエンジンをかける。

「しっかり休んで、元気になって学校に来るのよ。くれぐれも無理しないようにね」

「ありがとう、ミッドナイト先生」

「マイク、後は任せたわよ。さっきはああ言ったけどあんまり騒がし

くしないようにね、彼女まだ本調子じゃないんだから」

「まかせな！俺のドライビングテクであつという間に家に着くぜ!!」

早速煩いマイクに呆れながら、邪魔にならないよう車から離れる。美亜が此方に軽くお辞儀をすると車が発進する。

「さてさて、熱犬孤児院だな！バッチリカーナビに入ってるぜ！」

「そうですか」

「気分転換に俺のラジオでも聞かか？最高の気分になれるぜ！」

「そうですか」

「No1ラジオDJと車に乗ってる気分は？」

「そうですか」

「シヴィーラー!!」

話しかけるなオーラを出している美亜にも臆さずに次々と話しかけるマイク。飄々としたテンションで話すが急にトーンが下がり真面目な声に変わる。

「と、冗談はこれぐらいにして：今回俺が行くのは謝るためだ」

あまりに真剣な声に思わずマイク先生の方を向く。そこにはいつものおちやらけた笑顔では無く、教師としての責任を背負い少し苦々しい顔をしたマイクが前を見据えていた。

「生徒がヴィランに襲われてるってのになにもできず、その上千染にこんな大怪我を負わせてしまった。それですまなかった、はい終わりではいけないんだよ」

「マイク先生…」

流石の美亜も言葉を失いその横顔をじつと見る。するとマイクは急に笑顔になって笑い出す。

「H A H A H A!!俺のクールな横顔にシビれたか！」

「このクソ声でかスピーカー野郎」

「シヴィーラー!!」

そんな会話をしていると孤児院の前に到着する。マイクはバックミラーを見ながら手櫛で髪型を軽く整え運転席を降りて助手席のドアを開ける。一呼吸おいて覚悟を決めるとインターホンを押す。暫くしてバタバタと走る音と共に女性の声が聞こえ、ドアが開く。

「美亜おかえり、遅かったじゃない……………」

ドアを開けた拳士は目線を後ろのマイクに向けた後、固まったまま動かなくなってしまった。

「Hey! 初めまして犬千代拳士さん!!」

「え…え? マイク…先生! と、とりあえず中に入れ!」

そう言っつてマイクの腕を引っ張つて玄関に入れる。その際、美亜の腕を引こうとしてその腕に気づく。

「美亜! どうしたの! まさか…」

「どうしたのワンちゃん!」

拳士の驚いた声に台所で夕飯を作っていた美波が駆けつけてくる。そして美亜の腕を見て何かを察したように俯くと顔を暗くする。

「美亜、一体なにがあつたの…まさか個性を」

「私は大丈夫だから、心配しないで」

「それについては私に説明させてください。今は千染さんをとにかく休ませてあげましょう」

笑顔で大丈夫という美亜といつに無く丁寧なマイクの声で美波は少し落ち着きを取り戻したようだ。そして今気づいたとばかりにはつとマイクの方を見ると、美亜に自室に休むように声をかける。美亜は二階に登る前に2人に声をかけておく。

「美波さん、拳士さん、マイク先生を責めないであげてくれ。悪いのは私だ、だからお願い、冷静に話を聞いて欲しい」

悲しそうな顔でゆっくりと頷く美波と、今にも泣きそうになっている拳士。流石にマイクがかわいそうに思うが、自分がいても逆効果にしかないと感じたので諦めて二階に登った。

熱犬孤児院を出て後ろを振り向くマイク、オレンジの暖かな灯りが漏れる玄関で2人が見送っている。

「熱田さん、拳士、今日は久しぶりに顔を見て良かった」

「私もよ、マイク君。ごめんなさいね、こんな遅い時間まで話してしまつて」

「マイク…久しぶりに会うのが、こんな機会になるなんて残念だ」

2人はとても申し訳なさそうな顔をしている。マイクとしても7

年ぶりに会った2人とこんな業務的な報告しかできないなんて本意ではない。7年間何をしてきたか、あの時何があったのか、美亜はどんな個性を持っているのか…聞きたいことは山ほどある。しかし責任ある教室として、敵襲撃事件とそれに伴う美亜の怪我、雄英高校の考える今後の対策などを説明しなければならなかった。

それでもこの2人の友人とは笑顔で別れたいと思う。雄英高校の教師である自分が暗い雰囲気だと余計な心配を掛けてしまうかもしれない。なにより旧友との久々の再会と別れがこれでは寂しすぎる。「オツケーオツケー、互いに話しにくいこともあるだろうよ。そんな暗い顔するなつて！じゃあな！お2人さん！」

キラリと白い歯を見せ、努めて明るい声で別れる。サムズアップも忘れない、これが有ると無いとは全然違う。急にテンションを上げたマイクに面食らったのか、美波はあの時のような優しい微笑みを、拳士は少しだけ楽しそうな苦笑いを浮かべている。満足したマイクは車に乗り込むと、熱犬孤児院を後にした。

「こんな時間まで起きてていいのかよ！ミイラマン！」
「婆さんの処置が大袈裟なんだよ。それでどうだった？」

スピーカーから響く相澤の声、珍しく緊張した声色だ。消息を絶っていた旧友との再会、それも何かを隠している。更には根津直々の任務まで有るとなれば緊張するのも無理はないだろう。

今回マイクが聞き出せと命じられたのは3つ。7年前の事件の日何をしてきたか、何故消息を絶ったのか、そして美亜の個性についてどこまで知っているのか。

「残念ながら何も聞けなかったぜ、ありや無理だ。拳士なんか今にも泣きそうだったからなー、あの空気でそんな重要な事聞けねえよ」

「そうか…仕方ない。2人の様子は？」

「元氣そうだった、熱田さんも拳士も相変わらずだ。孤児院もちよつとボロかったけどいい感じだったぜ」

「それなら良かった…」

相澤は見た目や言動に反して意外と面倒見の良いタイプで、消息を絶った2人の事も手を尽くして調べていた。だからこそ珍しく心か

ら安心したような気の抜けた声を出した。それを茶化しつつ、遅くまで頑張った自分に対して労いの言葉を求めたマイクであったが、無情にも切られてしまった。

「はー、やっぱ俺にはシヴィーだよなあー」

そう愚痴ったマイクだが、表情はとても嬉しそうな笑顔を浮かべていた。

第16話 血濡少女と体育祭：Prologue

「まふし…」

翌日、窓から差し込む強い日差しに鬱陶しそうに顔をしかめた美亜は布団を頭からかぶる。ベッドのそばにある机にモゾモゾと手を伸ばすと時計を掴んで時間を確認する。

「んー…11時43分………!?11時！遅刻だ！」

そう言つてベッドから飛び降りるとそのままガツクリと項垂れた。雄英高校は先日の敵襲撃事件による捜査、修復、そして生徒のメンタルケアの為1日だけ臨時休校となった。

かなり長時間寝てしまったため頭がぼーっとしている。立ち上がった足がふらついてベッドに倒れ、そのままぼんやりとした視界の中、頭が働き始めるまで座り込む。

徐々に霞が霧散し、覚醒していく意識が昨日の出来事を思い出させていた。少しでも油断すれば、その場で意識を失って倒れ込んでいただろう。

喉の渴きを覚え、パジャマのままふらついた足取りでリビングへと向かう。手すりを両手で持つて何とか階段を降り、冷蔵庫から麦茶を取り出す。グラスに注ぎ、喉を鳴らして勢いよく飲み干した。相当身体が水分を求めていたようで染み渡る冷たさが心地よい。もう一度グラスに注ぎ、ふらふらと吸い寄せられるようにソファアに向かうと、手足を投げ出してもたれ掛かる。

適当にテレビを付けると、テレビ局はこぞつて昨日の敵による雄英高校襲撃事件を取り上げている。画面の中で敵の専門家とかいう訳の分からない人が声高に雄英高校の警備の問題点や見通しの甘さを批判している。降つて湧いた敵連合の、それもワープ個性の襲撃をどう防ぐのか教えて欲しいものだ。

「はあ…糞つまらん、朝から気分が悪いぞ」

昼の騒々しいワイドショー達に悪態をつくところな時でも唯一ブレないテレビショッピング専用チャンネルに変える。美容ヒーロー

ところからも訳の分からない女が化粧品を紹介しているが、今の美亜にとっては遥かにマシだった。

しばらく気の抜けた表情でぼーっとテレビを見ながら麦茶をちびちび飲む。徐々に頭が働き始めるがそれでも霞がかったような気怠さが抜けない。30分ほどそうしていると二階で洗濯物を干していた美波が降りてきた。

「美亜おはよう、よく寝れた？」

「おはよう美波さん、夢一つ見ない最高の睡眠だったよ。やはり家は安心するな」

落ち着いた声で挨拶をする美波だったがその表情は心配しているのか曇っていた。しかし美亜の元気そうな声を聞いて安心したような笑みが溢れる。美亜と同じように麦茶をグラスに注ぎ、左に並んで座る。

「天気が良くてよかったわ、洗濯物がよく乾くもの」

「そうか、ありがとう美波さん」

少し無言の時間が流れ、2人でただテレビの画面を見つめる。この静寂が心地よい。しばらくそうしていると、ソファに投げ出された左手に美波の右手が重なる。

「美亜、マイク先生から話は聞いたわ。本当に大丈夫なの？」

「心配かけてごめん。でも私は大丈夫。ほら…この通り手もちやんと動くから」

そう言って空いている右手を握ったり開いたりして見せる。白磁のような美しい右手を、美波はとても悲しそうな目で見つめる。そつと美亜の右頬に左手を沿わせ目を合わせて語り掛ける。

「私は貴方の心が心配なの。傷が治ることも、腕が生えることも知っているわ。でもね、ありきたりかもしれないけれど心の傷は治らない。だから今だけは、私の前でだけは休んで欲しいの」

そう言って美亜の体を引くと膝枕をして頭をそつと優しく撫でる。ゆっくりと心を解きほぐすように、一回一回に想いを込めて。その手の暖かさに思わず頬が緩んでいることを美亜は感じた。

やはり美波には敵わない。恐らく私がかかり衰弱していた事を一

目見て悟ったのだろう。マイクや拳士には気付かれてないと思うが、この人なら不思議と納得できてしまう。

「聞かれたんだ、どうしてそこまで無理したのかって。正直自分でも分からない。ただ自分の中で憎しみが溢れて、抑え切れなかった。あの時、芦戸達と共に隠れる選択肢もあつたはずだ。それを衝動のままに突撃して、自分の命を危険に晒し、多くの人に心配をかけた：私にまだあんな感情が残っているとは思わなかった：私は自分が怖い、怖いんだ：」

美波は思いもよらぬ言葉に驚く。美亜がここまで弱音を曝け出したのは初めてだ。襲撃事件のショックで精神が不安定になっているのか、あるいはまだ寝ぼけているのか。

何れにしても言う事は変わらない。ずっと思っていた、伝えたかった。

「何も怖がる事はないわ。過程はどうであれ貴方は相澤先生や皆の命を救った、1人で命を挺して多くを守ったのよ。たとえ誰が何を言うともその結果は正しいの。」

大丈夫、私は：私達は貴方の味方であり続ける。美亜、よく頑張ったわ。本当に：本当によく頑張った：お疲れ様：今はただ、ゆっくり休んで……」

美波の暖かさと柔らかさに微睡ながらももう一度、美亜は深い眠りについた。穏やかな表情ですやすやと寝息を立てる彼女を、美波は何処か寂しさを感じさせる微笑みでいつまでも見守り続けた。

翌日、臨時休校が開けた雄英高校は通常登校となった。しかし校門の前では多くの警察、ヒーローによる物々しい警備が行われており、ガードされた記者が生徒達に話を聞けないと悪態をついている。そんな中バスを降りて、悠々と登校してきた美亜はドアを開けて教室に入る。何故か皆、目を丸くしてこちらを見ていた。

「美亜ちゃん！腕！腕生えてるー！」

「いやあれ冗談じゃ無かったんかい!!」

まるで漫才の様なツツコミをしてきた上鳴と切島に呆れながら、そ

ういえばそんな冗談を言った気がする。教室が騒々しくなり、皆が集まって来た。爆豪や轟すらも驚いた顔でこちらを見ている。

心配する声に適当に返事を返しながら席に着くと、その爆豪が乱暴に立ち上がってズンズンとこちらに向かってくる。見るからに苛立っているので、無視して鞆を開けて気付かないフリをする。

「おい、てめエ…てめエ！」

「私は『てめエ』ではない。名前も呼べんのか金髪ヤンキー」

「お前だつて俺の名前呼んでねえじゃねえか…！」

爆豪は肩を震わせると怒りを我慢して聞いてくる。

「おい千染、あの脳無とかいうバケモンと1人でやり合つたつてのは本当か…」

「本当だ。ただやり合つたと言えるのか定かでは無いが」

「ありえねえだろ！あれはあのオールマイトでやつと倒せるバケモンだぞ!!おかしいんだよ、なんでお前がやり合えるんだクソが！」

ブチギレた爆豪を見て思う。やはりこいつはモノをよく見て、考えている。何人かは気付いてるかも知れないが、他の奴らは治つて良かったね、すごい個性だね、で済ましてしまおうだろう。そんな事を考えている間にも苛立ちが募る爆豪は吠え続けている。

「お前の個性はなんだクソ野郎！体力テストの時も、戦闘演習の時も何で隠してやがった！俺を見下して馬鹿にしてんのかクソが!!」

きつと思う所があるのだろう。自分では戦う土俵に立つことすらできなかつた脳無に対し、殺されかけたとはいえ1人で耐え凌いだ私。それを知つて私が自分より上にいると思つたのだろう。

爆豪は性格こそ終わっているが、ヒーローに対する想いは人一倍強い。誰よりも強くありたいと願いその為の努力を惜しまない。だからこそ雄英高校に在籍しながら全力を出さない私や、脳無に手も足も出なかつた自分自身に苛立っているのだろう。

その苛立ちが近くに居る私に向かつている。理解は出来るが幾らなんでも八つ当たりが過ぎる、これではどんな相手でも正直に話すがない。そもそもここで話すつもりはないが…

他の生徒が爆豪を止めようとした時、相澤がのっそりと教室に入つ

てきた。その全身は包帯で巻かれている。あまりの復帰の速さに教室が驚きの声に包まれた。普通に挨拶こそしているが明らかにふらついており、不安の声も上がっている。

「俺の安否はどうでも良い。何よりまだ戦いは終わってねえ」

そんな相澤の一言で今度も敵か？と不穏な空気が流れる。

「雄英体育祭が迫ってる!!」

「クソ学校っぽい来たああああ!!」

『雄英高校体育祭』

個性の発現によって衰退したかつてのオリンピッククに代わる日本のビッグイベントの1つ。一般人以外にも全国のトップヒーローがスカウト目的で観るため、ここで注目されれば将来のプロ事務所へのサイドキック入りの際に名のあるヒーローにスカウトされる可能性が高まる。

今回の体育祭は敵襲撃事件があったため警備を例年の5倍に強化して行われる。開催する事で雄英の危機管理体制が盤石である事を世間に示す役割もあるらしい。

相澤は年に一回、合計で3回だけの大きなチャンス、将来ヒーローを志す者にとつて絶対を外せないイベントだと強く言い、あえて生徒たちに発破をかけた。

HR後、再び詰め寄ってきた爆豪に美亜は告げる。かおりが昨日の夕飯で騒いでいた雄英高校体育祭。身内が出る事が余程嬉しいのか、どれだけ凄い行事なのかを目一杯手を広げて説明してくれた。それもあって元々言うつもりは無かった。

「な?」

「何が『な?』だよ、ブツ飛ばすぞ千染エ!」

「せっかく手の内を隠せているんだ。そんなに私の個性が知りたければ体育祭で教えよう」

クソが…と呟いて不機嫌そうに音を立てて席に座る爆豪、緑谷が心配そうにこちらを見ていたのでサービスでウインクをしてやると顔を真っ赤にして背けてしまった。結局体育祭という特大の話題や、美亜が話したがないということもあり、敵襲撃の話がこれ以上される

事は無かった。

その後も一日中体育祭の話題で皆が浮き足立っていた。敵襲撃事件はあったものの、やはり活躍すればプロへの大きな一步を踏み出せる体育祭は皆の気合いが違う。麗日などは顔が引きつって決してうららかでは無い状態になっていた。

美亜は昼休みに緑谷、飯田と共に麗日がヒーローを目指す理由を聞いた。建設業を営んでいる両親は決して裕福では無い。それでも麗日が個性『無重力』を活かして手伝うことより、夢であるヒーローを目指すことを応援してくれた。だからこそ絶対にヒーローになつてお金を稼ぎ、両親に楽しませたい。そう語ってくれた麗日の顔はいつになく真つ直ぐで、眩しくて、美亜は思わず目を逸らしてしまった。

「I—A組千染美亜さん、職員室に来てください」

放課後、突然校内放送で呼び出される。特に用事もないので行こうとドアに視線を向けると沢山の生徒が此方を覗いている。どうやら体育祭前に敵と戦ったこのクラスを視察しに来たらしい。麗日や緑谷、飯田がそれを前に右往左往している中、美亜は気にせずには鞆を持つとスタスタと向かって行く。正面から堂々と近づいて来た美亜に騒めき立つ生徒達。一瞥して文句を言い放とうとした時、横から爆豪が美亜の前に割り込んだ。

「敵襲撃を耐え抜いた連中を見ときてえんだろ、意味ねエからどけ、モブ共」

その言葉を受けて、普通科やB組の生徒が宣戦布告をしに来たと挑発し返す。挑発して無駄に敵を増やした爆豪にクラスから文句が挙がるがそれを一言で黙らせる。

「関係ねえよ…上上がりや関係ねえ」

啞然とするクラスメイトを残し、生徒達の壁を無理やり掻き分けて帰って行く爆豪、美亜はその後を追う。爆豪にはわざと肩を当てる生徒もいたが、何故か美亜が通るとさっと道が開いた。無人の廊下を歩く爆豪に後ろから声をかける。

「爆豪、さっきの啖呵悪くなかったぞ。単純明快、実に分かりやすい答えだ」

不機嫌そうに顔だけを軽く後ろに向けて、睨みつけた爆豪が答える。

「そうかよ…、俺は負けねエぞ。お前だろうが轟だろうが…緑谷だろうが、全部ぶつ潰して俺が1位になる」

「成る程、それがお前の覚悟か」

話は終わったとばかりに早歩きで去って行く爆豪の背中を見て咳く。

さっきの啖呵も今の言葉も、傲慢でも自信過剰でも無い。あえて宣言することで自分にプレッシャーをかけ、追い込んでいるんだ。誰よりも強くなる為に…

「眩しいな、憧れるよ…」

遅れて職員室に着いた美亜は相澤に声をかける。相澤は何やらパソコンに向かって仕事をしている。包帯でグルグル巻きの両手でどうやって仕事しているのか分からない。気怠げに振り返って美亜を視界に入れると、作業の手を止め談話室へと連れて行く。明らかにフラフラとした足取りで歩くのが遅い上、普段から猫背気味の背中が余計に痛々しく、とてもじゃ無いが無事そうには見えない。

そんな相澤と美亜は談話室で対面に座る。

「単刀直入に聞こう。お前の個性、まだ出来ることがあるな？」

前回とは違い明らかに厳しい口調で問い詰められる。それもそうだが、前回明かした個性、それに加えてまだ隠していたとなれば責めたくなる気持ちも理解できる。今度は弱っている演技などせず正面から見据えて堂々と答える。

「私の個性は『血』、血液の操作と増幅、それに加えて血液を纏うことで欠損や怪我を治すことも出来る」

「そうか、それであの怪我が治ったのか。驚異的なスピードだ、リカバリーも驚いていた。それにしても…強力な個性だ…」

相澤は納得したように背もたれに体を預け天井を仰ぎ見る。そしてゆっくりと体を戻し、美亜の方へと顔を向けた。顔は包帯でグルグル巻きで、いつもの気怠げな視線は隠れていた。

「確かに俺はお前に助けられた、それに関しては礼を言いたい。だが、

いくら治るとはいえ異常な怪我だったそうだな。今回は敵が異常に強く、俺も大きな怪我を負った。だが俺はヒーローとして長く活動して来た。千染、お前は違う、たったの15歳だ。そんな戦い方をしていれば…いつか体は治っても心が壊れるぞ」

包帯の隙間から鋭い視線が覗いた。それは雄英高校の教師でA組の担任、ヒーロー『イレイザー・ヘッド』としての教え子、美亜への忠告だった。

「自分の戦い方を見つけろ。何も今直ぐ脳無と戦えと言ってるんじゃない。もし将来、お前がヒーローとなり脳無のような化け物と戦うことになった時、自分を守る為の戦い方を」

しばらく2人の視線が交錯する。イレイザー・ヘッドの鋭い視線を受けても美亜はみじろぎ一つせず正面から見据え続ける。

暫くして美亜は肩をすくめ、眉を下げて悲しそうな顔で答えた。

「ご忠告感謝します、ただ私は何分不器用なので」

「分かった、それならしょうがない。話は終わりだ、気をつけて帰れよ」

相澤は呆れたように大きいため息を吐いて美亜を出口へと促した。

話は終わったとばかりに席を立ち、ドアノブに手を掛けた美亜に相澤は最も聞きたかったこと問いかける。

「熱田さんと犬千代さんは元気か？」

バツと顔だけ勢いよく振り返った美亜は相澤を鋭く睨みつける。先程までのどこか飄々とした雰囲気は微塵も残ってはいない。全ての表情が抜け落ち、能面のような無に2つの紅い眼だけが熱を帯びているかのように激しく燃え盛っていた。

「何を……知っている……!!」

「何の話だ？俺はただマイクからお前の育ての親について聞いただけだが。あんな事があったんだ、気にするのは当然だろ。」

それとも…まだ何か隠しているのか？」

「チッ!!」

大きな音を立て、ドアを乱暴に閉めた美亜が立ち去る。普段の冷静な雰囲気からは想像も付かない行動が、先程の相沢の言葉を裏付け

る。相澤はソファにもたれ掛かって深く息を吐く。さっきの表情は明らかに平和に生きてきた人間が出来る顔ではない。まだ何かある、何か重大な事を隠している。

「はあ…孤児院で育った…か。想像以上に何かありそうだ…。あの2人が居るなら滅多な事にはならないと思うが…本当、何してるんだ拳士…」

顔をしかめながら合理的じゃねえなと呟いた。それが何に対してなのかは自分でも分からなかった。

第17話 血濡少女と体育祭：第一種目 前編

あつという間に2週間が過ぎ去った。

この2週間、美亜は課題の体力や筋力を底上げする為、拳士に鍛えしてもらいながら過ごした。

脳無相手に全く歯が立たなかった。距離が開いている内は槍で近づけまいとしていたが、あの再生能力の前では無意味、直ちに距離を詰められてしまう。近づかれてからは抵抗もできずに一方的に殺されかけた。もし相澤の言う「自分を守る為の戦い方」を考えるとすれば、拳が届く間合いでいかに戦う事ができるかが鍵となる。

美亜の近接戦闘能力は決して低い訳ではない。雄英高校の一年生の中でも中位に位置する程の実力はある。ただ相手が脳無クラスの変化物を想定している為、体育祭までの2週間で新たな個性の使い方を開発、実戦投入する事は不可能だと美亜は考えた。

それよりも基礎体力や体術を鍛えるべきだ。体育祭に興味は薄いが出ることには負けたくない。それにTVで見てもあろう熱犬孤児院の皆に、あまり心配をかけたくないという思いもある。

かなり厳しい特訓を受け、確かな充実感を持って体育祭を迎える。体育祭当日、雄英高校は厳しい入場検査を受けたマスコミやヒーロー、一般客で溢れかえっていた。

聞こえてくるのは1―A組を注目する声。例年ラストチャンスに賭ける三年生が注目されるが、今年は敵の襲撃を耐え抜いた1―A組がいる1年ステージも多くの熱い視線が向けられる。

出場者の生徒達は各々のクラスに分けられて控え室で入場の時を待っていた。

皆がそれぞれの方法で緊張を解きほぐそうとしている。芦戸も美亜に話しかけて気を紛らわせる。

「美亜ちゃんのチョーカー、可愛いねー。どうしたの？」

「ああ…これか。人に頼まれたんだ、着けたくなかったんだけどな…」
美亜はその白い首に巻き付いた黒のチョーカーを撫でながら嫌そ

うに返す。そんな2人の会話に尾白が入る。

「へー、そういうのって認められるんだな。コスチューム同様禁止されているのかと思ったよ」

「私も頭に何かつけてくればよかったかなー」

雄英高校体育祭ではコスチュームの着用は禁止されている。多くの注目が集まるこのビッグイベントで、コスチュームを着てアピールできれば更に多くの注目を集めることができるだろう。しかしそれではコスチュームを持たない普通科やサポート科など他学部が圧倒的に不利になる。

サポート科はアイテム製作を学ぶ科なので、例外として自分で作ったアイテムの使用が許可されている。この場を使って能力をアピールするためである。

「確かにそうですね。サポート科では無い私達はアイテムの使用は禁止されていますよね」

「申請したら特別に通ったよ。機能や不正の可能性を確認して勝敗に影響しないと判断したんだろう」

横に座った八百万の問いかけに美亜は答える。ヤオモモのコスチュームは刺激が強すぎるから着れないね、と芦戸に茶化されて不思議そうに首を傾げている。

そんな会話に耳を傾けて相槌を打っていると峰田が息を荒くハアハアしながら近寄って来た、目が血走って見開かれていて非常に気持ち悪い。

「チョーカーって…エロいよな…千染の白さを強調してて…」

「はあ、開会式前にそんなふざけたことを考えるメンタルだけは立派だな」

「だろーっ」褒美でもっと見せてくれ！ほらちよつと首を傾けて！見せつけるような感じで！その視線いい！オイラのリトル峰田がグハア！！」

蛙吹の伸びた舌が峰田を横薙ぎに吹き飛ばした。ビンタが炸裂して壁に激突した峰田は地面に転がり、追撃とばかりに女子にボコボコにされている。

「あんなのは早めに対処するのよ、美亜ちゃん」

「ありがとう梅雨、気を付けよう」

「あれ死んでないか？本番前に死んだら元も子もないだろ。いや本番でも死なないんだけどさ…」

生徒全員が峰田にドン引きしている中、苦笑いしながら尾白が呟いた。ボコボコにされた峰田は何故か幸せそうな顔で倒れ伏している。皆、準備は出来ているか!?もうじき入場だ!!」

控え室に飯田の声が響く。ふざけた事をしている間に入場時間が近づいてきたらしい。暇つぶしとしては良かったなと美亜が考えていると突然轟が緑谷を呼び止める。

「緑谷、お前には勝つぞ」

轟の突然の宣戦布告に切島が宥めようと肩を掴む。しかしそんな切島を無視して緑谷へと鋭い視線をぶつける。宣戦布告を受けた緑谷は弱々しく何かを呟いていたが、最後には強い覚悟を目に抱いて轟に返す。

「皆…他の科の人も本気でトップを狙ってるんだ。僕も本気で獲りに行く!」

強い覚悟で轟の宣戦布告を受けた緑谷に美亜は感心した。緑谷は普段こそ弱気でなよなよして居るが、戦闘演習の時も爆豪に真正面から受けて立ち、敵襲撃の際も脳無へと一撃をくらわせた。ここぞという時の肝が座って居る。2人を見ていた美亜は自分の用事を済ます為に席を立って出口のドアに手をかける。

「お前もだ…美亜」

「ん?ああ、私は少しトイレにだな…」

突然轟に声をかけられ思わず見当違いな事を答えてしまった。相変わらず緑谷と熱い視線を交わしていたので、まさかこっちに話しかけてくるとは思わなかったから仕方がない、と自分に言い訳をする。こちらに顔を向けた轟も思わずフリーズしてしまった。

一瞬静かになった後、控え室が爆笑に包まれた。

「いやー!最高!超おもしろーよ!」

「なんでそう返すの!カツコつけるとこでしょ!天然過ぎるって!」

「轟…ドンマイ…」

「美亜さん、あまり女の子がそういう事を言うものではありませんわ」
轟の宣戦布告に緊張感が高まった皆が笑顔に変わる。当の轟は少し顔を赤らめて恥ずかしそうに顔を背けてしまった。瀬呂と上鳴が仕切りに肩を叩いてドンマイと笑う。

美亜は先程までとはガラリと雰囲気が変わり、賑やかになった控え室を後にしてトイレに向かった。無人の廊下を歩いていると後ろからパタパタと足音が聞こえる。

「待って美亜ちゃん！」

美亜が後ろを振り返ると、芦戸が急いで追いかけてきたからか少し頬を上気させている。

表情が強張って、何かを言い淀んでいる。そんな芦戸から何かを待つように美亜もじつと動かない。やがてよし、と頷いて顔を上げた。

「私も…美亜ちゃんに負けないよ」

「その表情、嫌いじゃ無いぞ。そうだな…体育祭が始まったら…私達はライバルだ」

美亜は少しだけ眼を見開いた後、そう言い残してトイレに入った。控え室に戻ってきた美亜、肘丈のジャージから見える両腕は既に血腕と成っている。個性把握テストの時も、戦闘演習の時も右腕しか使っていなかった血腕を両腕に出した。それだけで皆美亜も本気だと感じる。

「時間だ！行こう、皆!!」

飯田の一声で皆が控え室から出る、皆一様に凛々しく引き締まった、本気の表情だった。

12万人が入る体育祭会場は満員に埋まり、今か今かと待ちわびる観客の喧騒が鳴り止む事を知らない。そんなスタジアムにプレゼント・マイクの声が響き渡る。

『さあお待ちかね！1年ステージ、選手の入場だ!!』

無数の視線やカメラが入場ゲートに向けられる。喧騒はより一層大きくなる。

『雄英高校体育祭!!ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る年に一度の大バトル!!どうせてめーらアレだろこいつらだろ!!?敵の襲撃を受けたにも拘らず鋼の精神で乗り越えた新星!!』

スタジアムへと繋がる廊下の先に眩しいほどの光が見える。一步近づくほどに聞こえてくる煩いほどの歓声が、自分達がどれほど注目されてるのかを認識させる。

皆の目に迷いは無い、ある者は堂々と、ある者は太々しく、ある者は余裕の笑みを浮かべながら歩く。

『ヒーロー科!!1年!!A組だろおお!!』

その言葉を合図にスタジアムへと出陣する。眩しいほどの無数のフラッシュが焚かれ、歓声が爆発する。360度どこを見渡しても客で埋まっている、想像以上の人数とその盛り上がりには皆再び緊張してしまう。

キョロキョロと辺りを見回した麗日が美亜に話しかける。

「わー、すごい人!緊張するね美亜ちゃん」

「確かに凄い客の数だ、流石に緊張するな」

「それ本当?表情変わってなさ過ぎるけど」

緊張すると言っているが美亜の表情はいつも通り何の変化もない。背筋を伸ばし堂々と歩いている美亜に耳郎が冷静に突っ込む。

「そうか:確かに顔に出づらいと良く言われるが」

「だろうね、似合ってるから良いんじゃない?一回ぐらい恥ずかしがっている美亜を見てみたいけどね」

体育祭とは全く関係ない話を始めた美亜と耳郎、まるで昼休みに喋っているかのような様子だ。そんな2人に周りの生徒は、耳郎も十分凄いが、と心の中で思っていた。

1年生が全員フィールドに整列する。その前の壇上にミッドナイトが登り、ムチを鳴らした。

「選手宣誓!!」

相変わらずとんでもない格好をしている。18禁ヒーローと呼ばれているだけあるなと美亜は思う。ただ、^Mレディー^tなんとも^レかもそう^{デイ}

だが恥ずかしくないのだろうか。そんな美亜の心境を代弁するように横の常闇が18禁なのに高校にいていいものか、と呟く。峰田がすぐさまいい、と答えている。

ざわつき始めた生徒をムチをもう一度鳴らす事で黙らせたミッドナイトは選手代表を壇上に呼ぶ。

「選手代表！1―A、爆豪勝己！」

「えー、かっちゃんなの!？」

「あいつ一応入試1位通過だからな」

意外そうな声を出した緑谷に瀬呂が答える。爆豪はそんな声を他所にポケットに手をつ突っ込んだまま気怠そうに壇上に上がる。あまりに太々しい態度に自然と皆の視線が集まり、どんな宣誓をするのと期待と不安が高まる。

「せんせー、俺が1位になる」

「絶対やると思った!!」

気の抜けた声で堂々と宣言する爆豪に切島の鋭いツツコミが響いた。それを皮切りに1年生から大ブーイングが上がる。他のクラスや科だけでなく、A組の面々からも敵を作るその態度に文句が上がる。それを睨みつけながら、せめて跳ねのいい踏み台になってくれ、と親指で首を掻き切る動作をしてさらに煽る。

壇上から降りてきた爆豪が美亜の横を睨みながら通る。

「良かったぞ爆豪」

声をかけた美亜の横をフンツ！とつまらなそうに鼻を鳴らして通り過ぎていった。

選手宣誓を終えていよいよ第一種目、壇上にスクリーンが投影されるとミッドナイトが高らかに発表する。

「さーて、それじゃあ早速第一種目いきましよう。いわゆる予選よ！毎年ここで多くの者が^{ティアードリンク}涙を飲むわ!!さて運命の第一種目!!今年は：
： 障害物競走!!」

スクリーンに映し出された障害物競走の文字、スクリーン必要なのか？と美亜が首を傾げている間に説明が続く。

「計1ークラスでの総当たりレースよ！コースはこのスタジアムの外

周約4 km！我が校は自由さが売り文句！コースさえ守れば何をしたらって構わないわ！

「さあさあ位置につきまくりなさい…」

スタジアム外へと繋がるゲートの1つが開く。生徒たちはぞろぞろと歩いてスタートラインについた。やはり皆少しでも前の方に陣取ろうと早歩きで向かう、美亜は悠々と歩くと後方のグループについてた。

生徒全員が位置についた事を確認するとゲート上の3つのランプの内1つが消える。

美亜は自分の両手を見下ろし、握ったり開いたりして感覚を確かめて首のチョーカーを撫でる。

（無様な姿を晒すわけにはいかない、きつとテレビの前で見ているはずだ。美波、拳士、風斗、かおり、心配しながらも送り出してくれた皆が…）

明かりがまた一つ消える。周りの緊張感が高まるのが分かる。

美亜は眼を瞑って大きく深呼吸し、腕の力を抜いてだらりと下ろす。思考が明瞭となり冴え渡る。皆がスタートの合図に身構え、前を見据えた。

そして最後の明かりが消える。

『スターーーーート!!』

合図とともに皆我先にと駆け出す。美亜も眼を見開くと両腕を後ろに引き絞り、全力で前方へと伸ばした。細く伸びた出口、その壁に爪を突き立てると全力で腕を縮めた。スリングショットの様に弾き出された美亜はそのまま出口の細道突き抜け、競技場から飛び出して行った。

第18話 血濡少女と体育祭 第一種目 後編

『さーて実況していくぜー!解説アユーレディー!?ミイラマン!!』
『無理矢理呼んだんだろうが』

1年の競技場、第一種目障害物競走が始まった。実況席に座るのはプレゼント・マイクと相澤、だが相澤は敵襲撃事件の傷が未だ癒えず、顔まで包帯でぐるぐる巻きだ。本領発揮とばかりにテンションが上がっているマイクに忌々しそうに抗議の声をあげる。それでもなんだかんだ付き合う辺り相澤も大概面倒見がいい。

勢いよく飛び出した生徒達だが、狭いスタートゲートに大勢の生徒が殺到した事で押し合いとなってしまう、後方グループは中々前に出ることができない。そんな中やはり最初に飛び出したのは轟焦凍、持ち前の身体能力を活かして先頭に飛び出ると個性『半冷半燃』で後方の道を纏めて凍結させた。塊になっている生徒達は、足元どころか足まで凍らされ、足止めを余儀なくされる。

『スタートダッシュに成功し、先頭に立ったのはやはりA組!轟焦凍だ!!そのまま凍結で後続を妨害するー!コレは決まったー!』

マイクがそう実況した時、黒い影がもの凄いスピードで飛び出してきた。弾丸のように射出された美亜はそのまま轟を上空から追い抜こうとする。

『まるで弾丸!飛び出してきたのは此方もA組!千染美亜ー!あの凍結攻撃を空を飛んで躲したぞ!更にその後ろからも次々と実力者が追いかける!!』

宙を舞った美亜と後ろを振り向いて走る轟の視線が交錯する。次の瞬間、轟が腕を振るうと氷の壁が地面から伸び美亜の進路を妨害する。自らの速さで壁に激突しそうになった美亜はそのまま空中で前転し、勢いをつけて地面にかぎ爪を立て、縮めて着地。壁を横から避けつつ轟の少し後方の2位で走り出した。美亜は轟の妨害によって勢いを失った上に、地面に着いて走らざるを得なくなってしまう。いきなりの個性を使用した熾烈な主導権争いに会場のボルテージが上昇する。

美亜は轟を追って駆け出すも、直ぐに爆風とともに抜かされる。

「どけや！千染エー！」

先頭の轟を猛追する爆豪、そして酸で滑る様に移動してきた芦戸や八百万、切島など次々と抜きさらされる。

『あーつとー！最高のスタートで2位につけた千染！しかし後続から2人に抜き去られる！』

『千染はあんまり運動神経は良く無いからな、平場で走れば当然個性持ちには抜かされるだろ』

相澤の冷静な解説で巨大スクリーンに美亜が映し出される。この映像は全国のお茶の間にも届けられる。美亜の端正な顔立ちに会場の主に男性人が騒ついた。

相澤の的を得た解説に軽く舌打ちをしていると、美亜を含む先頭集団の前に山の様な巨大ロボットが幾つも聳え立つ。これはヒーロー科の入試で使われたOPロボット、一体でもとんでもない迫力だ。しかし今、無数のそれが立ち塞がっている。

『さあいきなり障害物だ!!まずは手始め…第一関門ロボ・インフェルノ!!』

先頭集団もこれには思わず足を止めてしまう。その中で飛び出したのはやはり轟だ。

2体の巨大ロボが立ち塞がるも、轟が手を振り上げると足元から全身が凍結し動きが止まる。その間を走り抜け第一関門を易々と突破する。さらに、轟の作った突破口を同じく抜けようとした他の生徒を妨害するように、不安定な体勢で凍らせたロボが崩れ落ちた。

『I—A轟!!攻略と妨害を1度に!!こいつはこいつあシヴィー!!!すげえな!!一抜けだ!!アレだなもうなんか…ズリイな!!』

「お、おい！誰か下敷きになったぞ!!」

「死んだんじゃないか！死ぬのかこの体育祭!!?」

第一関門からいきなり2人が下敷きになった。これだけの重量を持つロボットの敷きになれば、良くて骨折、悪ければ死ぬことすらあり得てしまう。余りに激しい障害物競走に、皆が慌てふためいている。

「死ぬかあー!!轟のヤロウ!ワザと倒れるタイミングで!俺じやな
かったら死んでたぞ!!」

「A組のヤロウは本当嫌な奴ばかりだな...!俺じやなかったら死んで
たぞ!!」

倒壊したロボットの下から切島とヒーロー科B組の鉄哲徹鐵てつ
てつ てつてつが突き破って現れる。『硬化』の個性を持った切島と
『ステイル』を持つ鉄哲、互いに体を硬くする個性だ。ただでさえ地
味な個性で悩んでいる切島は、個性ダダ被りかよ!!とショックを受け
ながら先へ走り出す。

『1—A切島・B組鉄哲も潰されていたー!!ウケる!!』

残った生徒たちも一時的に協力して突破を図る。そんな中美亜も
第一関門に到着すると、そのままロボットに向かって走り出す。腕を
伸ばして突起を掴み、腕の伸縮を生かして上へと登っていく。しかし
背後から爆破音が響き、徐々に近づいてくる。下を見ると爆豪が個性
『爆破』の反動を使って宙を飛び、ロボットを飛び越えようとしてい
る。美亜と眼が合うと相変わらずの悪人面で睨みつけてきた。

「おいコラー!待てや!先行かれてたまるかよ!!」

叫びながら迫ってくる爆豪、その後ろから常闇と瀬呂も黒影とテー
プを使って追走してくる。やはり爆豪は頭がいいと美亜は感心する、
性格的には突撃しそうではあるが、臨機応変に戦闘を避けて先に進も
うとしている。大方瀬呂や常闇は、爆豪のアイデアを参考にして自分
の個性で代用したのだろう。そんな爆豪に美亜は空中で話しかける。
「爆豪、お前どうやって私が脳無と戦ったのか知れたがってたな。い
い機会だよく見ておけ」
そう言って大きく左腕を伸ばすと頭部に爪を掛けた。左腕を思
いつきり引いてロボットの顔の正面に飛び上がると右腕を全力で引
き絞る。先にロボットの頭頂部へと辿り着いた常闇と瀬呂は嫌な予
感がして呟く。

「何をするつもりだ、千染」

「碌な事じゃ無いだろうな...あれ?俺らまずくね」

次の瞬間、ロボットの頭部に正面から巨大な槍が叩き込まれる。凄

まじい破壊音を立てながら貫通し、頭部が爆散する。右手を巨大な槍へと変形させた美亜が全力で放った一撃は、いとも容易くロボットを粉碎した。

崩壊するロボットと共に落ちる常闇と瀬呂、爆豪は間一髪破片を躲して崩壊から逃れる。

「おおおいーやべえ！」

「流石だ千染、だが流石にこれは不味いな…」

「デメエ……クソが！」

そんな3人の声を無視して腕を本来の大きさまで戻すと、再び地面を掴んで着地する。しかしやはり爆豪は既に轟を追って先頭集団へと駆け出している。ここで怒りのままに美亜に飛びかかってくるのではなく、あくまで目指すのは1位、爆豪の本気が窺える。

『ヤベエー！なんだそれ!?正面からブチ抜いたのはまたA組、千染だ！ド派手に第一関門突破!!操血ってあんな事まで出来るのか!?崩壊するロボットに周りの生徒はタジタジだ、こっちもズリイな!』

「デキルノカ?」

「出来るか出来ないかで言えば出来る。ただあれだけの規模と質量、血の量がネックだな…なにより1年生であれだけの使い手とは見事だ」

教員用の待機室では、エクトプラスムに問われたブラドがテレビに映る美亜を見ながら苦笑いしていた。現時点でこれ程とは、一体この生徒は卒業する頃にはどこまで成長しているのか。

第一関門の突破者の中で、頭ひとつ抜けてトップを駆ける轟、先頭集団の中で猛追する爆轟、そこから少し下がった位置で美亜は走る。

スタートでも第一関門でもそうだが、突破こそ早いもののやはり身体能力の低さが大きなデイスアドバンテージとなってしまうている。息を切らしながら走る美亜に芦戸が追いつき、そのまま追い抜いていく。A組女子の中でトップの身体能力は伊達ではないようだ。

「美亜ちゃん!お先に!」

「はあ、はあ…、よくそんな走れるな…」

『現在のトップは轟、爆豪も後ろから猛追しているぞ!そんな2人に

は既に第二関門が見え始めた！お待ちかねの第二関門は、落ちればアウト!!それが嫌なら這いずりな!!ザ・フォーール!!」

コースはかなりの深さまで掘られており、断崖が生徒たちの足を止める。柱の様に残された僅かな地面の間がロープで結ばれていて、まるで綱渡りである。

しかし先頭の轟は臆する事なくロープを凍らせ、その上を滑る。更にはロープが凍った事で後方の妨害も同時にこなす。2位の爆豪も猛追すべく両手を『爆破』させ柱の間を跳躍する。この2人のハイレベルな争いに多くの観客が注目し、湧き上がる。

「1位の奴、圧倒的じゃんか。個性の強さもあるが、それ以上に素の身体能力と判断力がずば抜けてる」

「そりやそうだろ、あの子プロヒーロー『エンデヴァー』の息子さんだよ」

「ああ！道理で！オールマイトに次ぐトップ2の血か。早くもサイドキック争奪戦だなー！」

「それにあの爆豪、ヘドロ事件の少年だろ？やっぱり『爆破』は強力だよな」

先頭の2人が第二関門を突破する寸前で火花を散らし、それを追って多くの生徒が挑戦する中、ようやく息を切らしながら美亜も到着する。

(先頭はもうあんな先まで…常闇にも瀬呂にもいつの間にか抜かれているな。緑谷は何で鉄板を背負っている?)

余計なことを考えそうになった思考を振り払って、断崖から飛び立つ。紺桔梗色の髪を靡かせながら腕を伸ばし、柱の上に爪を突き立てた。次々と腕の伸縮を繰り返して先頭との差を詰める美亜、綱を渡っている生徒たちとの速度差は圧倒的だ。

『ここで先頭集団を猛追するのはまたまたこいつ！千染だー！その個性、応用力高すぎないか？まるで蜘蛛のように楽々と第二関門を進んでいく！あれだな！名付けるならスパイダーウーマンだな！』

『くだらないことを言うな。千染は身体能力こそ低い反面、判断力と機転で上手くカバーできている』

先頭の轟と爆豪は第二関門を突破した、しかし美亜も負けじと順位を上げていく。また一つ順位を上げようと爪を立てた時、突如その箇所が『爆破』し崩れ落ちた。柱の下を疾走していた美亜は何が起こったか分からない、ただ自分の腕が掴み所を失って空を切る。宙に浮いた体は重力を伴って落下を始めた。

あまりの突然の事態に瞬間、思考が止まった美亜であったが、直ぐに冷静さを取り戻す。柱の側面に爪を立て、身体を引き寄せ柱へと足をつく。

「くそっ、爆破音？爆豪の妨害か！いや…あいつは既に突破済み、今更戻ってきて妨害するわけがない。なら爆破系の個性を持った奴が他のクラスにも??いや…しかし…」

再び思考にハマりそうになった頭を振り払い、体育祭へと意識を戻す。どちらにせよ大きなタイムロスだ。ここまで目立った妨害が無かったことから完全に油断していた。

「誰かは知らないが…私に勝負を挑むか。面白い」

『おいおい！先頭を見ている隙に千染が消えているぞ！まさか落ちたのかー!!』

『さっきの爆破音、まさかここまでピンポイントに妨害するとは…』

ここまで度々レースの注目を集めていた美亜の脱落に多くの観客が騒つく中、地の底から柱に爪が掛かる。しかしその腕の巨大さたるやこれ迄の比ではない、爪を掛けるどころか柱の表面を覆い尽くしている。そして風を切る音とともに美亜が上空へと飛び出した。右腕のみが巨大化し、左右非対称な姿が逆光で暗く染まり不気味な影となって映し出される。

「見当たらないな…露骨に妨害した以上、そう易々と個性を使わないか」

太陽を背に飛び上がった美亜は全体を広く見渡し、先の爆破個性持ちを探す。しかし相手は用意周到なタイムミングで妨害を行う人物、容易く見つかるようなミスは犯さないだろう。そう判断すると、巨大な腕の一振りで残りの柱を飛び越え第二関門を突破した。

『轟や爆豪、美亜らA組の生徒はやはり見せてくれるぜ！個性がド派

手でカツコいいな！

現在先頭の轟が一足抜け、2位に爆豪、その下はダンゴ状態！上位何名が通過するかは公表してねえから安心せずに突き進めよ！

そして早くも最終関門!!かくしてその実態は…一面地雷原!!怒りのアフガンだ!!!」

先頭を追う美亜が最終関門に到着した頃には既に阿鼻叫喚の図が出来上がっていた。横に広がったコースの中であちこちから爆破音が聞こえる。どうやら音と見た目が派手なだけで殺傷能力はないらしいが、黒煙が上空へ勢いよく立ち昇る様を見て足を止めてしまう生徒も多い。

美亜が目を凝らして先頭を見ると、丁度爆豪が轟を抜き去って先頭へと躍り出ていた。先頭に立てば立つ程、足元の地雷が多く不利となる。その上爆豪は『爆破』を使って地面に触れずに移動できる。スピードの差は圧倒的に爆豪が勝るが、轟も咄嗟に腕を掴み氷結させて足止めを図る。

『ここで先頭が変わったー！喜ベマスメディア!!お前ら好みの展開だああ!!互いに妨害し合いながらも先頭2人が大きくリードだ!』

しかしその2人の横に鍵爪が突き刺さった。それは血腕、轟と爆豪がライバルとして強く意識している生徒のものだ。同時に後ろを向いた2人の目には遙か遠くへと伸びる血腕、その先で挑戦的に笑う美亜が映る。遠くからでもはっきりと分かる、あの両眼に紅が灯った。

「千染エー」「千染…」

「此処からが勝負だ…いくぞ」

先頭に向けて美亜が飛び立つ。その視界の片隅で、鉄板の上に腹這いになった緑谷が、積み重なった大量の地雷に向けて飛び込む姿が見えた。

「何!?!」

凄まじい爆発音と衝撃が競技場全体に響き渡る。吹き荒ぶ黒煙が立ち上り、それを至近距離で受けた美亜は吹き飛ばされて宙を舞った。

地面を掴もうと血腕を伸ばすも、衝撃で平衡感覚を失った頭とあ

り一面の黒煙だ、その腕は虚しく空を切る。マイクが何か興奮して叫んでいるが鼓膜がやられたのか全く聞き取れない。

「緑谷…クソ…やられた…」

地面に打ち付けられた美亜は、悪態をつきながらも楽しそうに笑みを浮かべていた。よろよると立ち上がって前を見据える。既に先頭はゴールに差し掛かっているようでその後ろ姿は見えない。今一度血腕を前方へ伸ばし、今度こそ集団を抜き去り最終関門をなんとか突破した。

視界に入ったスタジアムへの入り口を目指し駆けている中、回復した鼓膜が徐々に周囲の音を聞き取り始めマイクの実況が響き渡った。

『今一番にスタジアムへ還ってきたその男…緑谷出久の存在を!!』

爆発でもしたかのような歓声がスタジアムから鳴り響く。観客の注目は先頭でゴールした緑谷、轟、爆豪に集まっているようで、第二種目進出ギリギリの順位でゴールした美亜には興味を示すものは居なかった。

第一種目 障害物競走 千染美亜 37位

第19話 血濡少女と体育祭 第二種目：1

「千染エ!!」「千染…」

紅眼に見据えられ、肌が粟立つのが分かる。ザワザワとした不快感が背筋を登り、まるで強大な獣に相對しているかのようだ。爆豪と轟は互いへの妨害を止めると、右手に意識を集中させ、迎撃の準備を取った。

(千染の個性、操血だが…腕に血を纏って伸縮させているのか。攻守にも移動にも使える、確かに強いがそれでは俺の氷結は防げない)
(クソ女、確かにあの個性はやべえ。巨大化するのが厄介だ、とにかく攻撃が予測しずれえ。ただあいつの身体能力なら…よく見りや躲せる!)

2人が構えを取り、美亜が飛び立つ。その瞬間、轟音が響き地面が揺れる。凄まじい爆発は周囲を巻き込み、その中から飛び出してきたのは美亜ではなく緑谷だった。

『後方で大爆発!!?何だあの威力!?偶然か故意か!先頭へと何やら挑もうとしていた千染を吹き飛ばし、A組緑谷、爆風で猛追ー!!?』

『千染…あいつ思いつきり巻き込まれたな…』

緑谷は最終関門に辿り着き、状況を分析する。威力こそ弱い地雷だが、体制を崩し連鎖爆発を起こしてしまえばかなりのタイムロスになる。その為多くの生徒が速度を殺してでも慎重に避けて進んでいる。だからこそ警戒意識の高い入り口付近には地雷がたくさん残っているはずだ。

地雷を掘り起こしてかき集めると、第一関門で入手したロボットの装甲に乗って飛び込む。数多の地雷を同時爆発させる事で凄まじい威力を生み出し、その爆風を受け空を突き抜けた。

『っつーか!!抜いたあああー!!!』

緑谷が次々と前方の生徒を抜き去り、遂に轟と爆豪をも追い抜く。美亜に相對すべく構えていた2人は一瞬気を取られたものの、すぐさま意識を切り替えて緑谷を追う。宙を舞う緑谷は当然失速し、2人が

迫る。距離はあっという間に縮まり、3人が並んだ。

しかし緑谷は未だ不利、ここから更に着地のタイムロスも重なる。今追い抜かれたら二度と逆転のチャンスはない。必死に考えた緑谷が辿り着いた答えは一度掴んだチャンスを決して離さないこと。

(追い越し無理なら…抜かれちゃダメだ!!)

賭けに出た緑谷は、装甲を再び振り上げるとそのまま地面に叩きつけた。結果的に策は成功する。複数の地雷が同時に起爆、横を走る2人を妨害し、更に緑谷を地雷原の先へと吹き飛ばした。気を緩めるわけには行かない、瞬時に立ち上がった緑谷はそのままゴールへと駆け出す。

『緑谷、間髪入れず後続妨害!!イレイザーヘッド、お前のクラスすげえな!!どういう教育してんだ!』

『俺は何もしてねえよ。奴らが勝手に火イ付け合ってたんだろ』

『さアさア、序盤の展開から誰が予想できた!?今一番にスタジアムに帰ってきたその男…緑谷出久の存在を!!』

最高潮のテンションで実況するマイク、観客は総立ちで緑谷に歓声を送り、会場が爆発したかのような盛り上がりを見せた。対して冷静に解説している相澤だが内心は驚いていた。何しろ轟、爆豪、それに意図的か分からないが千染の3人を最終関門で一網打尽にした。A組の中でも明らかに突出している3人に勝ったことが緑谷の中で大きな自信となる事は間違いないだろう。

緑谷に続いて轟、爆豪がゴールする。爆豪は肩で荒く息をしながら拳を握りしめて悔しがっている。戦闘演習に続いて緑谷に再び敗北した事が最も悔しいことは違いない。だがあれだけ意識してきた千染が遂に自分に挑んでくる、それが未遂に終わった事も悔しくてたまらなかった。結局この競技では第一関門で力を見せつけられたまま終わった。緑谷の妨害が無ければ美亜に抜き去られていたかもしれない、という不安や疑念が付き纏って離れない。

轟は白い息を吐きながらも一見冷静に佇むように見える。しかし思考は最終関門、あの時一瞬だけ轟達に向けられた美亜の眼に囚われていた。あの眼、父親であるエンデヴァーの目とは違う。何かは分か

モニターを見ながら議論する中、一人の生徒に目が止まる。

「あれ？この千染って生徒、結局この順位なんだ。途中までかなり目立ってたよね」

「あー、派手に第一関門を突破してた生徒だね。実力は…この順位だからなあ…。でも端正な顔立ちだからアイドルヒーローとしていけるかも。カッコいい女性ヒーローは熱烈な人気が出やすいからね」

「轟や爆豪はともかくとして、緑谷や他の生徒もやっぱり材料が揃わない事にはマネジメントは難しいと思うよ」

多くのプロヒーローからも注目を集める轟、爆豪。緑谷は1位ながらも未知数、他の生徒達もこれから実力や才能が見える事で判断できるといふ結論に辿り着いた。

事実、この第一種目は唯の予選だ。ここを勝ち抜いた生徒による第二種目からが、いよいよ雄英高校体育祭の本番となる。

「予選通過は上位42名！残念ながら落ちちゃった人も安心なさい！まだ見せ場は残されているわ!!」

第一種目を終え、壇上のミッドナイトから予選を通過する人数が発表された。やはり予選を通過した上位42名の内40名がヒーロー科の生徒で、他の科の生徒はたったの2人しかいなかった。

(危なかった…30名とかだったら目も当てられなかったぞ。流石に予選落ちは恥ずかしすぎる)

「そして次からいよいよ本戦よ!!ここからは取材陣も白熱してくるよ！キバリなさい!!さーて第二種目よ！私はもう知ってるけど…何かしら!?言ってるそばから 騎馬戦よ!!」

ミッドナイトの背後のモニターに「騎馬戦」の文字が大きく映し出された。第二種目は騎馬戦、そう聞いて皆様々な反応を見せる。顔をしかめたのは上鳴、彼の個性は『帯電』。ワットこそ調整できるものの、周囲へと拡散する為、騎馬を組んでしまえばチームメンバーにも電撃が当たってしまう。

参加者が様々な反応を示す中、ミッドナイトは説明を続ける。

「参加者は2〜4人のチームを自由に組んで騎馬を作ってもらおうわ。

基本は普通の騎馬戦と同じルールだけど、1つ違うのが：第一種目の結果にしたがい各自にPが振り当てられること！」

つまりヒーロー科の入試と同じP稼ぎ方式である。組み合わせによって騎馬のPが違い、それを奪い合う競技となる。

「下から与えられるPは下から5ずつ！42位が5P、41位が10Pといった具合よ：そして1位に与えられるPは：10000万!!上位の奴ほど狙われちゃう！下克上サバイバルよ！」

3位の爆豪は200P、2位の轟は205P、しかしそこから1位だけ跳ね上がって10000万P。皆の視線が予選1位の緑谷に突き刺さり、顔を青くしている。

「上に行く者には更なる受難を、雄英に在籍する以上何度でも聞かされるよ。これぞPlus Ultra! 予選通過1位の緑谷出久くん、持ちP10000万!!」

確かに均等にPを振り分けて仕舞えば、予選1位の实力者を狙いに行くメリツトは限りなく低い。2位と5P差では、騎馬の組み合わせ次第で合計の順位が変わる。その為立場にそこまで差は出ず、必ずしも挑まれる者では無くなる。しかし10000万Pとなれば話は別だ。取ってしまえば他が何P稼ごうが確実に1位通過、何よりアピールしたい生徒達が狙わない筈がない。それに加えて今回の1位は实力が未知の緑谷、爆豪や轟と比べると奪取できる確率は非常に高い。

反面、守り抜くことが出来れば予選通過できる。尤も皆から狙われる立場になる緑谷と組んでくれる生徒がいればの話だが：

「制限時間は15分、振り当てられたPの合計が騎馬のPとなり、騎手はそのP数が表示されたハチマキを装着！終了までにハチマキを奪い合い保持Pを競うのよ。重要なのはハチマキを取られても、騎馬が崩れてもアウトにはならないところ！」

（ハチマキの奪い合いか：いいぞ、私に有利だ。腕を伸ばして遠くから安全に攻撃できる。騎馬にはなれないから騎手をやるとして：誰と組むかだな…）

美亜の体力では人を上に担いで走り回る事はできない。そんなことをすれば途中でバテて、崩れ落ちてしまおうだろう。それに騎馬にな

ると腕が塞がるため、十全に力を発揮できない。理想は遠距離から安全にハチマキを奪う事、そのためには敵を近づけさせない個性、それと戦線を離脱できる機動力が必要になる。

「個性発動アリの残虐フアイト！でも…あくまで騎馬戦!!悪質な崩し目的での攻撃等はレットカード！一発退場とします！それじゃこれより15分！チーム決めの交渉タイムスタートよ！」

「15分!!」

（何人が候補はいるが、両方を1人で兼ね備えているのはあいつだな…）

時間の短さに生徒達が困惑する中、美亜は目的の人物へと真っ直ぐに歩みを進めた。

「轟、私と組め。お前が前騎馬で後は飯田と芦戸、問題なく勝ち進める」

差し出された美亜の手を無言で見つめた轟は、顔を上げて答えた。

「悪いが千染…お前と組むつもりはない。爆豪と競い合ってるのは知っているが…俺もお前と戦いたい」

「そうか、残念だ。理由は知らんが随分評価してくれているみたいだな…ただ期待には応えられそうも無い。私ではお前に勝てないよ」

開会式前にライバル宣言された轟と組もうとした美亜、その誘いを断って立ち去る轟の姿を爆豪は見ていた。周囲では多くの生徒が自分を勧誘しようとして声をかけてくる。汎用性の高い個性と200P、絶望的な性格を差し引いても人気は肯ける。ただ爆豪は有象無象には興味はない。必要なのは頂点に立つ力、美亜や轟を潰し、緑谷の1000万Pをとるための力のみ。

そんな爆豪が選んだ1人目は切島。爆豪に向かって、緑谷を奪うために爆豪の個性に耐えられる、絶対にブレない馬が必要だろと言いつつ放った。確かに切島の個性『硬化』ならば非常に優秀な前騎馬となるだろう。

そしてもう1人は芦戸だ。

「爆豪！私と組も！私の個性が必要でしょ！」

「いつも千染という女か。お前の個性知らねえ、なんでてめえと組ま

なきやいけないんだ？」

「倒すんでしょ？美亜ちゃんを。私もライバル宣言したから」

その言葉を聞いて興味が湧く。やたらと出てくるあの女の名前は気に入らないが、それなら何か考えがあつて声をかけてきたに違いない。

「なんかあんだろ？言ってみろ」

「えっと…美亜ちゃんはああ見えて結構慎重だから敵を近づけさせない策を取るはず。個性を最大限活かす為に、必ず遠距離から血腕でハチマキを取りに来る。弱点は体力不足だから騎馬にはなれない、そもそも騎馬だと片手、最悪両手が塞がるし血腕が使えないから。恐らく轟に声をかけたのも前騎馬としての牽制の為、だとすれば…守りを固めた美亜ちゃんに接近する機動力は欠かせないでしょ？飯田は轟と組んだっぽいし、私の『酸』と『爆破』、後は…瀬呂を加えれば小回りが効く騎馬ができる。これなら美亜ちゃんに近づいて背後を取れる」

芦戸も色々と思うところがあるようで、プレゼンのように自身の有用性を述べる。一理ある上に生徒の中では美亜と最も親しい事もあつて、かなり考えを分析できている。

「それで…勝てんのか？」

「当然！負けると考えて勝負する奴はいないよ！」

「あ？」

爆豪は、何故かドヤ顔で返してきた芦戸にガンを飛ばし、瀬呂を加えて騎馬を完成させた。

一方、轟に断られてしまった美亜は他の面々に声をかけて騎馬を組むメンバーを決めた。騎手が千染、前騎馬に障子、左騎馬が耳郎、右騎馬が常闇の布陣となった。

「作戦はとにかく敵を近づけさせない事、出来るだけ距離を取って戦う」

敵を接近させない為に、周囲を警戒する役割を障子が担う。

障子の個性『複製腕』は両腕から生えた触手の先端に、自身の体を複製することができる。目を複製することで索敵、探知能力が格段に上がる。さらに身体能力が高く、体格もいい為前騎馬としても充分

だ。

「障子、爆豪と轟の騎馬には常に目線に向けておけ。それとは別に常に周囲に気を配り、接近してくる敵、危険となりうる強力な騎馬を確認するんだ」

美亜は障子に役割を伝えた後、少し声のトーンを落として話す。

「もしかしたらだが…この中に爆豪と似ている『爆破』系の個性を持っている奴がいるかもしれない…発見したら教えてくれ」

常闇と耳郎は周囲への牽制、攻撃を担う。遠距離で攻撃できる上、近付かれた際にも常闇の『黒影』なら問題なく凌ぐことが出来る。耳郎の個性『イヤホンジャック』は、耳たぶについている伸縮自在のプラグから自身の心音を爆音で流したり、周囲の音をキャッチすることができる。人や物に音を流し込みシヨックを与えたり、音で索敵が可能だったり汎用性が高い個性だ。美亜と常闇が攻撃を、障子と耳郎が索敵とサポートをするのがこの騎馬の作戦となった。

「ざっと考えた作戦だが…どうだ？異論があれば聞くが…」

「異論はない。この間は敵だったが今回は仲間だな。俺を使ってみろ、美亜」

「まさかウチを選んでくれるとはね。美亜が入れば百人力だよ、よろしく」

「いや…第一種目ではお前達の方が上だろう。本来ならば私が頼む側だ」

2人からの高評価に困惑しつつ、無口な障子に声をかける。

「このチームでは圧倒的にお前に負担をかけることになる。頼んだぞ、障子。お前の個性が私達を勝利に導くんだ」

口元を隠した障子の代わりに、触手の先に複製された口が話す。

「ああ、任せてくれ。全力を尽くそう」

その後は作戦の詳細を詰めながら、互いの個性の組み合わせで出来ることを模索する。途中で先の『爆破』個性持ちについて聞かれた為、美亜は第一種目の時に妨害されたと話す。色々な人に目を付けられてるな、と耳郎が呆れたような顔をしていた。常闇もそれが美亜の宿命なのかも知れないな、と頷いている。そんな宿命は御免だ。

「やあ、君が『操血』の個性を持っている千染さんだね」
「誰だ？」

残り時間も僅かとなり、指定されたスタート位置へと向かおうとした美亜達に声がかかる。声の方を向くと、男子生徒が愛想のいい笑顔を浮かべて近づいて来る。美亜の両眼にじっと見据えられながらも、少し戯けたように肩を竦め、敵意が無いことを示すように両手を肩まで上げた。

「僕はB組の物間だ。ものまねいと物間寧人、よろしくね」

「千染美亜だ、それで…何の用だ？」

「そんなに警戒しないで欲しいな。ただA組の有名人に挨拶しておこうと思っただけ。千染さんはブラド先生と同じ個性だから、B組でも有名なんだよ」

そう話しながら物間は常闇、耳郎、障子と順番に握手を交わす。次に美亜と握手しようとして手を差し出したが、制限時間が訪れミッドナイトからの指示が掛かる。

「15分たったわ、それじゃあいよいよはじめるわよ！皆位置に着きまくりなさい！」

「おっといけない、そろそろ始まりそうだ。それじゃあよろしくね、お互い正々堂々頑張ろう」

物間はそう言い残してチームメイトの方へと走り去っていった。耳郎がうちのバカ共にもあれぐらいの紳士さが欲しいよねと感心したように頷き、常闇と障子もそれに賛同している。

「残念だよ、でもいいか。流石に『操血』は使えないからね」

チームメイトと合流した物間は、軽く右手を上げ不適に笑った。

『15分のチーム決め兼作戦タイムを経て、フィールドに11組の騎馬が並び立った!!さア上げてけ鬨の声!血で血を洗う雄英高校の合戦が今!狼煙を上げる!!』

「障子、耳郎、常闇、頼んだぞ」

『準備はいいかなんて聞かねえぞ!いくぜ!残虐バトルロイヤルカウンtdown!3!2!1!……START!!』

雄英高校体育祭第二種目 騎馬戦 開戦

第20話 血濡少女と体育祭 第二種目：2

「実質^{1000万}そのの争奪戦だ!!」

「緑谷くん！いったくよー！」

開始早々複数の騎馬が緑谷へと突撃する。当然1000万Pを取ることがこの勝負においての最適解だ。緑谷の居る競技場中央部へと多くの騎馬が向かう中、美亜達は距離を取るために端へと走る。特に爆豪チームからは離れなければならない。あのチームには芦戸が入り、こちらを見ながら話し合っていた。何か策を講じてくる可能性があり、戦わずして突破することが最善だ。

「やはり皆1000万狙いか、奪取が早過ぎればリスクを負うだけだろうに」

「まあウチらは我関せず²に位以降を狙おうよ、そっちのが遥かに安全でしょ」

「爆豪だ!!右後方から来ている!!」

「は？」

振り返った美亜の視界には、単騎で空を飛び突撃してきた爆豪が映る。寸前で顔面への爆破を右腕で防ぐと、返す左腕で弾き飛ばした。空を舞った爆豪に牽制の黒影が迫り、爆豪はスタングレネードのように閃光を放って攻撃を防ぐ。さらに耳郎のイヤホンジャックが伸び、ハチマキを狙うも空中で身体を逸らし回避、騎馬から離れた爆豪を瀨呂がテープで引つ張り回収した。

「あつつぶな！あいつ空中で体捻るとかどんな運動神経してんだ」

「緑谷や轟、1000万Pを無視して此方に来るとは…千染…余程気に入られてるらしいな」

「はあ…障子、ナイスだ。まさかあそこまで作戦無しに突っ込んでくるなんてな…」

「千染エー！ぶっ潰す!!」

冷静に距離を取ろうとする美亜達に爆豪から怒鳴り声が投げ付けられる。作戦を無視して単身の突撃を決行した爆豪に、騎馬の面々からは抗議の声が上がっている。そんな声を無視して美亜を睨みつけ

る爆豪からは、闘志が目に見えると錯覚するほどの気が溢れている。

『騎馬から離れたぞ?!良いのかアレ?』

「テクニカルなのでオツケー!崩される以外で地面に足ついてたらダメだったけど!」

開始早々の爆豪によるド派手な戦闘に会場が沸く。騎馬戦か怪しい動きではあったが、ミッドナイトは面白い!とサムズアップして許可を出した。

「ほんと…美亜、あいつに何したの…?」

「知らん、勝手に私を過大評価しているだけだ」

爆豪達に対して冷静さを保ちながら少しずつ距離を取っていく。人はあまりにブチギレている他人を見ると冷静になれるらしい。そんな逃げ腰の美亜達に、更に苛立ちを募らせた爆豪は再び単身で突撃する。

「逃げんじゃねエ!」

美亜達の騎馬で近接戦闘を担う常闇、しかし彼の『黒影』は光に弱い。闇が深い程攻撃力が増すが制御が困難になり、逆に光が強ければ強いほど制御はし易くなるが攻撃性が落ちる。先程も爆豪のスタングレネードによる強い光で黒影が臆し、攻撃を止めてしまった。

戦闘演習の時か、それとも抜群の戦闘センスかは分からないが爆豪はそれに気付いている。だから防御は美亜が行うしかない。

「そんなワンパターンな攻撃が通用すると思うなよ」

再び単身で突撃してきた爆豪、意表を突くためか今度は顔面ではなく、腹部の辺りを狙ってきた。しかし巨大化させた右腕でガード、再び弾き返す。そしてできた隙を美亜達は見逃さない。テープで回収される爆豪、そちらに意識が集中している他のメンバー、その間騎馬は無防備に晒されている。

「耳郎!やれ!」

耳郎のイヤホンジャックが足元に刺さり、爆音と共に地面を砕く。足場を崩された騎馬は右に体制を崩し、右騎馬の芦戸と前騎馬の切島が膝をつく。

「やべえ!油断した!」

「爆豪！前方に注意して！美亜ちゃん達が来るよ！」

宙に投げ出されたままの爆豪は、騎馬へと向いた意識を美亜達に向けて不敵に笑う。自分ではなく騎馬本体を狙った、回収を担っていた瀬呂が崩れれば自力で騎馬へと戻らなければならぬ。そうなれば両手が塞がる上、空中では躲すにも限界がある、黒影と血腕でハチマキを奪う事ができるだろう。つまりは本腰を入れて勝負してくるといふ事、最も奪われる気など毛頭ないが。

「強えくせにいつつもスカしやがって気に入くわねえ！本気で……おい！逃げんな!!」

しかし美亜達は騎馬が崩れたのを視認すると一目散に逃げ去った。遠ざかる美亜の背中を目にしながら騎馬へと回収された。

「あいつ……舐めてんじやねえぞ！おい塩顔!!何でテープで足を固定してんだ！追えねエだろうが!!」

「まじで落ち着けて！こうでもしないとまた一人で突撃するだろう！」

「そうだぜ爆豪、俺らには作戦があるんだ。逃げに徹しているあいつらはお前1人じゃ崩せねえし、今使うのは早すぎんだろ」

「やるなら終了直前、初見で勝ち切らないと2度も通用する策じゃないよ。美亜ちゃんを倒すならここは我慢しないと」

3人の説得に流石の爆豪も気まずそうに顔を背ける。2度も身勝手に突撃した上、ガラ空きの騎馬を狙われチームを危機に晒したのだ。もし攻められていればハチマキを取られていたかもしれない。

頬を両手で打ち気持ちを切り替える。美亜は苛つくがまずは緑谷からだ。悪りいと一言呟くと緑谷達の方へと駆け出した。

「追ってきては……いないようだな……」

「全く……正に悪鬼羅刹、手に負えんな」

「でもやっぱ凄いな、戦闘力はずば抜けてる。ウチまじで怖かったよ」

美亜達は爆豪と轟の騎馬に近寄らず、他からポイントを奪う策に出る。上位4チームが上がるこの騎馬戦、無理に強い爆豪、轟と戦うよりは他から取るのが安全策。緑谷はあのメンバーならいずれ誰かに取られるはずだ。相手が爆豪か轟ならそのままスルー、他の騎馬な

ら1000万を狙えばいい。

近くにいる中で最も戦力が弱いのは普通科の生徒が騎手を務める心操チームだ。何のつもりかは分からないが、普通科の生徒が生き残れる程この体育祭は甘く無いだろう。経営科やサポート科ならそっちの進路を選びたいという可能性があるか、強力な個性を持ちながら普通科に入学するメリットは無い。ただ嫌な予感はある、何故B組の生徒はあいつを騎手に選んだのか、そして余裕があるような笑み、何か秘策を持っている可能性もある。ただ何があっても遠距離から攻撃し、最悪逃げればいい。

美亜が騎馬の面々に指示を出そうとした時、障子から声上がる。「左・四足歩行の騎馬が来ている」

獣のような咆哮が聞こえ、何かが此方に駆けてくる足音が聞こえる。左を見ると四足歩行で迫るB組のしただじゅうろうた穴田獣郎太と、その背に乗ったっのとり角取ポニーポニーが見えた。穴田は個性『ビースト』によって全身毛むくじやらで巨大化している、更には身体能力の強化もある為かそのスピードは相当なものだ。迫る騎馬に作戦を考えつつ警戒を強めていると何処かから峰田の声が掛かる。

「千染ー！オイラが来たぜ!!」

「いや何処だよ」

「角取の後ろ…ちいさくて見えない…」

耳郎の冷静なツツコミに対して、悲しそうに小さな声で伝える障子。しかしその声は聞こえてしまったようで峰田の声のボルテージが上がる。

「舐めるなよ耳郎！やっちまえ角取!!」

「結局他力本願かよ……」

再び耳郎がツツコミを入れるも今度こそ無視して突撃してくる。しかし指示を受けた角取は何も仕掛けてくる気配は無く、ただ此方を見ているだけだ。

「とにかく正面だ、あいつ中々速いぞ。それに獣化する個性…心当たりがあるが単純な肉体強化が最も厄介だ」

美亜の頭に思い浮かぶのは獣化ではないが、同じく強化系の個性

『犬』を持つ拳士だ。流石に拳士クラスの基礎体力や格闘術は無いと思うが、同じように力や速さ、視覚や嗅覚が強化されているに違いない。その上拳士とは違って明らかに巨大化している。単純な力押しができ、さらにその速さで距離を取りづらい為一対一でも相当難敵だ。

「千染！後ろだ！」

穴戸の突撃を防ぐ手段を考える美亜へと鋭い声が掛かる。後ろを振り向いた美亜の視界は後方から飛来する2本の角を見る。弾丸のような速度で襲い掛かる角にいち早く気付いた常闇が黒影で迎撃する。しかしたったの1本で弾き飛ばされてしまった。

「何て威力だ!!」

寸前に迫る残りの一本を血腕で横薙ぎにする。射線を逸らしたものの勢いを殺しきれずに体制を崩してしまった。傾いた体を左腕を地面について支える。

「やばー更に2本来てる!!」

「クソ、こんなデタラメな威力のくせに何本操れるんだ！逃げるぞー」
しかし騎馬の面々の足は動かない。いつの間にか峰田の『もぎもぎ』が足について移動を阻害していた。峰田の本命は角によるハチマキの奪取、穴戸の咆哮や突撃はもぎもぎから視線を逸らすためのブラフだ。苦し紛れに残された右腕を振り上げ、角を弾き飛ばす美亜だったが、捌き切れなかった一本が美亜の頭からハチマキを奪い去った。地面に崩れ落ちた美亜の横を駆け抜けた峰田は、角からハチマキを受け取ると大きくガッツポーズを決めた。

「どうよオイラの作戦！完璧な勝利だぜ!!」

『ここで番狂わせだ！A組と組めなかった峰田が千染らA組の騎馬から見事！ハチマキを奪取!!』

走り去っていく峰田達に対し、崩れ落ちた美亜達は騎馬を組み直すもその表情は暗かった。

「くっ！……完全に油断していた」

「完璧な作戦だったよ……B組の人達の作戦かな」

「いや……あの言い方……峰田の策だ」

「そっか…やるじゃん。皆必死でやってるんだよね…」

騎馬が組み直され、混戦となつている中央を見据えて美亜は思う。私は始めから脳無、^{ライラン}敵しか見えていなかった。敵襲撃事件で傷を負った私は、表面こそ平気だと取り繕つてはいたが、傷つく事を恐れてしまつていたのだろう。だから体育祭もリスクを負わずに、傍観者のような態度を取る事で、知らず知らずの内に自身を守ろうとしていた。そんな私を責める人はいないだろう、むしろ悲劇の少女として同情されるに違いない。ただどんな理由があろうと、雄英高校体育祭では恐れる者、挑戦しない者に勝利は与えられない。あの事件すらも乗り越えていく、それが”Plus Ultra”なのだろうか。

(正直…勝敗に興味などない…。生きることが出来るのならばそれで構わないのだが…。だが…この体育祭は孤児院の皆が見ている。あまり無様な姿は見せたくはない…かな。それに轟や爆豪、芦戸や妨害してきた奴に勝負を仕掛けられておきながら逃げ回るといふのも格好が付かない。全く…面倒だが仕方ない)

「はあ…やめだやめだ。2. 3. 4位狙いだとか、自分達の土俵に持ち込むだとか、リスクを負わないだとか、そんな事で勝てるはずなど無かつたな…。いい作戦を思いついたよ。立ち塞がる敵を全て潰す。目指すのは上のみ、全てを蹴散らして私達が頂点に立つ」

その言葉を聞いて落ち込んでいた皆が笑顔になる。見上げた美亜の眼は紅く、美しく燃え上がっていた。

「異存無し」

「いいねそれ、めっちゃロックだ」

「それがお前の選択か…暴れるぞ黒影」

美亜達は闘志を燃え上がらせ、一様に瞳を煌めかせながら混戦の中心を目指す。まずは峰田達、先程の汚名を返上するべく駆け抜けた。

第21話 血濡少女と体育祭 第二種目：3

『各所でハチマキの奪い合い!!早くも混戦混戦!1位は変わらず緑谷チームだ、なんとか猛攻を防ぎ切っているぞー!1000万を奪い取るのは誰だ!?それとも守り抜くことができるのか!』

美亜チームは混戦の中心部へと峰田達を追って突撃する。美亜が見据えるのは前のみ。

「止まって貰うよ千染さん。ハチマキをとられて悔しいのはわかるけど…殺気立ってて怖いよ」

正面に立ち塞がった凡戸チーム、その向こうでは爆豪チームが物間チームと対面している。どうやらB組の一部は協力してA組を潰す気にいるらしい。爆豪と物間の周囲にA組の騎馬を近づけさせず、一対一の状況を作り出しているのだ。

(くだらんな…そんな奴らにあいつが負けるはずもない)

「退け、A組だのB組だのに興味はない。だが…立ち塞がるというのなら…潰す!」

走り出した美亜達、その両腕が凡戸チームへと襲いかかる。しかし凡戸の個性『セメダイン』は顔にある穴から接着剤のような液体を噴出し、その場に固めることができる個性だ。接着剤で美亜の腕を固め、地面に落とそうと発射する。両腕を固めてしまえば戦闘能力を奪うだけでなく、騎馬全体の動きを封じることができる。

しかし、血腕は接着剤が纏わり付く寸前で分裂した。無数の枝の様に分かれ、間をすり抜ける。降り注ぐ数多の血腕に驚愕し、足を止めてしまった凡戸チームのハチマキを奪い取り、駆け抜けた。残された凡戸チームの周囲で、接着剤が付き、切り離されて落ちた腕がどろりと血液に変わった。

「あれが操血…怖あ…」

「ん」

「いやー！ワーってビックリして声も出なかったよ！声出さなきや意味ないよね!!」

一瞬で凡戸チームを抜き去った美亜達は爆豪と物間を無視し、緑谷

チームへと向かっていった峰田達を追った。そんな美亜チームに気付いたのか、峰田達も待ち構える様に反転し迎え撃つ。再び対面した美亜チームに、相変わらず小さくて見え難い峰田は声を張り上げる。

「何度やっても無駄だぜー！そのPもオイラ達が頂くー！」

「かかってこい…ではないな…私達がチャレンジャーだ。2度も負けるわけにはいかない、頼むぞ皆」

両騎馬が互いに駆け出す。再び左右から2本ずつ角が飛来するが、今度こそ警戒していた障子が気付く。この『角砲』^{ホーンボウ}が厄介だ。接近戦に対する戦力を『黒影』に頼る美亜チームは、当然防御の策も少ない。4本もの角砲を防ぐには常闇の黒影、それに美亜の両腕を使ってしまおう。峰田チームの狙いはそこにある。2本ずつ左右から角を飛ばす事で、黒影と血腕を角の対処にとられれば美亜達の騎馬の攻撃力どころか防御力まで皆無。そこに穴戸のスピードで正面からぶつかれば確実に鉢巻を奪うことができる。

(さあどうする！オイラの考えた最高の作戦！もう少し近づけばもぎもぎで足を絡めとってやるぜ!!)

思惑通り左右の1本ずつを常闇が両腕で弾き逸らす。しかし黒影が対処し切れなかった2本が襲いかかる。それでも美亜はこちらを見据えたまま動かない。幻覚かその迫力故か、その両眼が一瞬だけ真紅の炎を纏い、そして障子の目も紅く輝いた様に見えた。悪寒が走った峰田チームの目の前で、障子が触腕を伸ばし肉に突き刺すことで角を無理やり止めた。血飛沫が上がり、肉が潰れる嫌な音が聞こえる。勝利の為に両腕を躊躇なく差し出すあり得ない光景に角取は角砲を止めてしまう。

「障子!!」

「止まるな、駆け抜けろー！」

「当たり前だ。その両腕、無駄にしてなるものか」

痛みに顔を歪めつつ走る事を辞めない障子、その威圧感に穴戸、角取は気圧される。対して美亜チームはこちらを見据えたまま寸分の動揺もない。4人共がこうなる事を覚悟していたかの様に闘志を燃やし、その目に怯えや恐怖は微塵も無い。

B組は集団でA組を潰す策を取った。反対した生徒も居たが、穴戸と角取はその策に賛同した。彼らが狙うは2・3・4・5位、何故このハチマキにそこまで拘るのか。自分の両腕を犠牲にするなど狂気の沙汰だ、理解できない。

だが峰田には気持ちがあつた。障子、耳郎、常闇、比較的大人しく、闘志を前面に出す事はしない3人。どちらかといえば常に冷静な思考を持ち、暴走しがちな切島や緑谷らを諫める奴らだ。その3人もあの敵襲撃事件を経験し、千染が自身を犠牲にして相澤先生を守り抜く姿を聞いた。そしてA組には緑谷と爆豪がいる。あいつらは常態上を目指し、誰よりも真つ直ぐだ。性格は正反対、どう見ても仲が悪い2人が中心となつて高め合い、皆がそれに感化されている。

誰もがヒーローを目指す高い志を持ち、その為には千染、爆豪、轟ら程の実力が必要なことも理解している。これがA組とB組の差、目指す場所と覚悟の差だ。

しかし峰田だつて負けてはいない。A組の奴らとは組めなかつたが、A組と組むことを渋つていたこいつらをなんとか説得し、泣きついてまで組んでもらつた。だからこそ負けるわけにはいかない、そこまですたのだ、負けたくない。

「オイラだつて負けねえぞー!!!」

峰田が『もぎもぎ』を前方に放る。個性発動の限界量を超えて、頭から血を流しながらも投げ続ける。もぎもぎの壁を作り美亜達の接近を妨害し、『角砲』の装填と体制を立て直す時間を稼ぐためだ。角取に角を再度放てるよに、穴戸には一度距離を取る様に伝えようとする。

「全力でいくぞ!!!耳塞ぎなよ!!!」

だが時すでに遅し。『イヤホンジャック』を突き刺した『触腕』の特大のスピーカーから凄まじい爆音が響いた。皮膚によつて覆われ、指向性を得た音圧は凝縮されて峰田チームを襲い、もぎもぎが吹き飛び道が開けた。峰田チームは爆音と音圧を何とか耐えるが、脳が揺れ目や耳がやられたのか周囲の様子を掴めなくなつた。ぼやけた視界が明るくなる事で、もぎもぎの壁が吹き飛んだのが分かる。白飛びした

世界で2つの紅炎が揺らめき、急速に接近してくる。平衡感覚を失い、ふらつく穴戸の髪を引っ張り、鼓膜がやられたであろう耳に全力で叫ぶ。

「右だ!!!右に跳べ!!!」

聞こえたのか、それとも必死な思いが通じたのか、穴戸は右に飛びギリギリで美亜の突撃を回避する。風を切る音が耳を掠め、寸前で血腕を躲せた事に思わず安堵しそうになる。まだだ、あいつらがこれで諦めるはずがない。頭がガンガンと痛く涙が滲むが、それを置き去りにして後ろを振り向く。

「まだだ…千染の腕は伸びる!角取!!……え?!」

振り返った峰田の目の前には、右腕を伸ばし、今にもハチマキを取らんとする美亜が居る。真紅の両眼が峰田を見据え、勢いそのままに鉢巻を全て奪い取り疾風のように過ぎ去った。追った黒影に血腕を伸ばし、騎馬へと引き戻される再び美亜は、峰田達の上空を飛びながら見下ろして言う。

「峰田、それにB組の奴らも…見事だ」

その姿を見上げて峰田は思わず呟く。

「かつけえ……………」

そして天を仰いだまま3人とも地面に崩れ落ちた。

扇子によって風に指向性を持たせる風斗の個性を参考に、耳郎が放つ爆音の衝撃波をレーザーの様に射出する切り札を考案した。本来は爆豪チームとの対戦で使用する予定だったが、その策を使わざるを得なかった。それ程に強敵だった。

もぎもぎを吹き飛ばし、ハチマキ奪い取ろうとしたが穴戸の身体能力でギリギリ回避を許してしまった。右腕を躲された美亜は、素早く振り向くと穴戸に左腕を伸ばした。そのまま黒影に放り投げられ、自身の腕を縮める速度に加える事で峰田達に再び急接近、勢いそのままに鉢巻を奪い取ったのだ。

「よっしゃーやったね!!」

「まさに宿敵との決戦、この高揚感……」

先程までの緊迫感のある雰囲気は霧散し、満面の笑みの耳郎と、頷

きながら悦に浸る常闇の2人。そこに黒影によって美亜が引き戻される。

「よくやった皆、それで…大丈夫か障子?」

3人に顔を向けられた障子は、力なく垂れた両腕を見る。耳郎の『イヤホンジャック』を攻撃に使う為、自身の体にプラグを挿して簡易的なスピーカーとなった。爆音が体内を響き渡り、筋を切ってしまったのか腕の力が入らない様だ。皮膜も衝撃波を受け止めた為にポロポロになっていく。さらに角取の『角砲』を受けた傷からは血が止めどなく流れており、リカバリーガールの元へ行かねば腕が使えないことは明白であった。

「大丈夫…では無いな…だがまだ足は動く」

「いい覚悟だ。さて、次はどいつを潰す??」

障子の傷を自身の血で覆いながら平然と前を見据えた美亜。障子は自分の腕に纏わり付く血に驚きながらも、それが自分の傷を覆い、止血してくれている様を見て落ち着きを取り戻した。

この美亜という少女は本当に性格がコロコロと変わると3人は感じる。気紛れなのか分からないが、今の様に熱く燃え上がった時、かと思えば氷の様に冷たくなったりと不安定さが垣間見える。

今、体育祭の熱気に当てられた為か熱くなっている美亜は悪くないと思う。コロコロと変わる性格の中では1番様になっている。そして何より、この美亜と居ると心強く、覚悟が決まる。体の内から闘志が燃え上がる様に熱くなり、気持ち鼓舞されているのが分かる。

『千染チームが穴戸チームからハチマキを取り返したぞー!なんて執念、なんてプライド!生徒達の熱はドンドン高まつてるぜ!』

「派手な動きで見てるこっちも楽しいやなー!」

「敵と戦ったってだけでこうも差が出るかね」

『やはり狙われまくる1位と、猛追をしかけるA組の面々共に実力者揃い!アレだな、A組は派手で目立つな!!さて…現在の保持Pはどうなっているのか…』

「さて…爆豪がポイントを取られた」

『あら!? B組大躍進じゃねえか! 1位の緑谷に次いで2・3位がB組

だ!! ってか爆豪あれ……!?!?」

「千染、爆破個性持ちを探せと言ったな……見つけたぞ。爆豪からハチマキを奪ったやつ、物間だ……」

周囲を探っていた障子の目には、顔面に『爆破』を叩き込まれる爆豪が映る。しかしその直後、返す爆豪の『爆破』を顔面に受けながらも無傷で防ぎ切って見せた。同系統の個性で相殺したとも考えられるが何かがおかしい。

（相殺した?……ではなく防御したのか?だとすればまるで切島の『硬化』だ……）

爆豪チームを置き去りにし、物間チームは悠々と此方へ向かってくる。人の良さそうな笑みを浮かべる物間と、無表情ながらも鋭い美亜の視線がぶつかる。

「ああ、千染さんか。そんなに睨まれたら怖いじゃないか。それが敵襲撃を乗り越えたA組のBIG3ってやつの迫力かい?」

「私の邪魔をするのはお前か……物間……。相手が誰であろうと立ち塞がるのであれば……潰す!」

第22話 血濡少女と体育祭 第二種目：4

「見つけたぞ千染。個性『爆破』を持つ生徒…物間だ…」

「成る程、あの優男か。わざとらしく挨拶してきたのも挑発だったというわけだな…」

食い下がろうとする爆豪チーム、その足元に凡戸が『セメダイン』をつけて動きを固める。何か捨て台詞を残しながら悠々と此方へ歩いてくる物間チームは、今気付いたかの様にわざとらしく驚きの表情を浮かべた。しかしそれも一瞬で、また直ぐに人の良さそうな笑みを浮かべた。

「ああ千染さんか。怖い怖い…なんだいその表情は…。今に人でも殺めそうじゃないか。僕に何か用でも？」

「第一種目で妨害してきたのはお前か…改めて見ると不快な笑みだな」

美亜に睨み付けられた物間は、大袈裟に手をヒラヒラと振りながら戯ける。そして右手を見せつける様に軽く爆破させた。

「勘弁してほしいね、つい出来心だったんだ。僕だってヒーロー科の生徒だ、”格上”には挑戦したくなるものだろう？…どうだい？A組BIG3と呼ばれる気分は？」

「A組BIG3？…一体なんの話だ…」

「知らないのか…まあいいや。そうそう、君に聞きたい事があったんだよ。個性『操血』も持つにも関わらず、同じ個性のブラド先生が担任するB組に入れてもらえなかったんだよね…何でなのかな？」

「知らないな、私にとってはどうでもいい事だ。興味があるなら担任なり校長に聞いたらどうだ」

「それは君が『問題児』だからだよ。A組は高名な爆豪くんやいつつも怪我してる緑谷くん、他にも騒がしい人達ばかりだ。まったく同じヒーロー科として情けない限りだよ。

それに相澤先生でも大怪我を負う程の強力な敵と1対1で耐え凌いだというのも眉唾だよね…もしかしてなんだけど…」

「何が言いたい…：単刀直入に言え」

「君は『問題児』じゃなくて『化け物』なんじゃないのかい？ A組にいる理由は相澤先生の『抹消』が届く範囲に置きたいだけだったりしてね……」

「おつと！これは冗談だよ、本気にしちゃったかな？」

「よせ物間！言い過ぎだぞ！ごめん千染さん、こいつ A組の事になるとやたらムキになるから。多分ブラド先生と同じ個性って事に嫉妬してるんだと思うんだ」

美亜が黙り込んだ為^に執拗に煽り続ける物間、見かねた^{けんどういつか}拳藤一佳が駆け寄り、間に入って謝る。

しかし流石の美亜もブチギレている様で、俯いて肩を震わせている。無理もない、問題児ですら充分酷いが、『化け物』は度を超えて言い過ぎだ。騎馬の3人は恐る恐る美亜に目線を向け声をかける。

「あんまり気にするな…：安い煽り文句だ」

「なんなのあいつ！美亜に酷いこと言つて、さっさとブツ飛ばそうよ！」

「ああ…大丈夫だ。私は『化け物』なんかじゃない。成る程、あれがあいつの作戦か。怒りで冷静な判断を奪うとは非常に効果的だ」

直後、両血腕が物間へと襲いかかる。突然の強襲にも焦らない物間は、騎馬の先頭を務める円場に防御の指示を飛ばす。

円場^{つづらば}硬成^{こうせい}の個性は『空気凝固』、吐き出した空気を固める事で壁や足場を生成することができる。生み出された空気の壁は美亜の片腕を防ぎ、もう一本を物間が爆破ではじき返した。

「チツ！流石に奇襲とはいかなかつたか…：来るぞ！」

「あはは、散々煽られておいてやる事が奇襲って！陰湿だねえ！」

物間チームは両血腕と黒影の猛攻を爆破と空気凝固で防ぎながら、接近戦を仕掛けてくる。彼らは煽っている間にも少しずつ近づいて来ていた、突然の美亜チームとの会敵にも的確に弱点をついてくる。そう気付いた時には既に懐に入ることを許してしまった。爆破の光で黒影が勢いを失い、対応出来るのは美亜のみ、ギリギリで血腕での防御を続けるもその猛攻は止まらない。

「はははーこの程度かい!?爆豪くんも君もA組ってホントは大した事がないのかなあ!!」

爆破の嵐にもはや美亜は頭を抱えて防御することしかできない。物間は勝利を確信して笑みを浮かべる。残り時間も少ないこの時点で、千染チームからハチマキを奪う。それを拳藤チームか他のB組チームに渡せば、確実に2チーム、あるいは3チーム最終種目へと進出できる。B組の面目躍如、入学早々に敵襲撃によって悪目立ちしているA組との立場を逆転する事ができる。

そして爆豪や千染…1人でも『何でも出来る力』を持った2人と戦える事を証明してみせる。

「さあ乗り越えて見せてよ!強力な個性を持ったBIG3、将来のスーパーヒーロー!!………つつ!!」

防御に徹する血腕の間、そこから覗く美亜の視線と目が合った、合ってしまった。その眼は引き込まれたが最後、どこまでも堕ちて行きそうな紅に染まる。背筋がゾワリと泡立ち、不快感が全身を襲う。その不気味さを掻き消さんと、振り下ろした右腕は『硬化』していた。(何故だ!『爆破』じゃない!?恐怖でストックからの選択を間違えた?クソ…こんな時に!)

「隙ができたぞ煽り野郎!個性の限界か?それとも疲れたのか?致命傷だ!!」

直ぐに防御へと意識を切り換え、物間と円場の2人で『空気凝固』を前面へと展開する。両血腕と光が弱まり活性化した黒影がその2枚を破るも手数が足りない。物間はこの隙に後ろへ引いて体勢の立て直しを謀る。

「いやあ危なかった!ミスに躊躇なくつけ込む姿勢は見事だよ…でも残念、手数が足りなかったねえ!」

「物間、アドバイスだ。喧嘩を売った相手は良く覚えておくとい………後ろだ」

「待てやクソ野郎!!忘れてんじゃねえぞ!!死ねえええ!!」

突如物間チームの背後から滑る様に突撃して来た爆豪、空気凝固を破られ、美亜チームに気を取られていた物間の顔面に爆破を叩き込み

ハチマキを奪い取る。瀬呂のテープで進行方向を定め、芦戸の弱めの溶解液の上を爆破によるターボで一気に爆進する。美亜チームとの戦いで近接に持ち込む為に考えた作戦をここで使ったのだ。

『爆豪チームここで3本全てを奪取して3位に躍り出たぞ!!美亜チームの作った隙を突く見事なコンビネーションが炸裂!!さあ残り僅かな時間で……ってあれ?おいおい緑谷チーム1000万P取られてんじゃねえか!!』

「あああ、クソが千染エー!テメエと組んだ事になってんじゃねえか!俺のチームだけでも奪い返せてたぞクソが!」

「まさか……初めから爆豪に取らせるつもりで……何故だ、Pは手に入らないじゃないか?」

「確かにお前は私を脅かした……腹は立つが別に一騎討ちがしたい訳ではない。どんな形であれ破れるならそれで構わん。

それにPをどっちが取ろうと変わりはない。どうせ最後は一騎打ち……敗れた方がOPだ」

美亜はそう言い放つと爆豪へと視線を向ける。

「さあ爆豪チーム、これでお望み通りの一騎打ちだな。何やら緑谷が轟にPを奪われたらしいがそんなものは関係ない。お前らを倒して、1000万も取る。勝つのは私達だ」

「チツ!そういう事かよ……こいつらを餌に誘き寄せ、その上P取らせてお膳立てってか……上等だ千染エー!こいつらをブツ倒して1000万も頂く!俺らが獲るのは完膚なきまでの1位だ!」

『さあ残り時間はたったの20秒!ここに来て一気にPが動きまくってんな!!どのチームが最終種目まで進めるのか!そして1位は誰の手に!会場がヒートアップして収まらねえぜ!!』

爆豪が物間チームからハチマキを奪還する少し前、緑谷チームは窮地に立たされていた。

残り時間僅かになって相対した轟チームは、緑谷チームを狙う他の騎馬を上鳴の電撃によって足止めと凍結の合わせ技で無力化した。

上鳴の電撃を防ぐ手段を持たない緑谷チームは、直ぐにハチマキに

手が届く距離まで追い詰められる。皆の思いを背負う緑谷は最終的に『OFA』を使って振り払おうとした。その迫力に気圧された轟は左手の炎を咄嗟に発動してしまうが、寸前で緑谷によって振り払われる。しかし轟に生まれた隙を上鳴が電撃によってカバー、痺れた緑谷チームのハチマキを奪うことに成功した。

「まずい！取り返す！突っ込んで!!」

「でも緑谷！俺達には上鳴を防ぐ手段がない！他のPを狙いに行くべきだ!!」

「ダメだ！Pの散り方を把握出来ていない！ここしかない………!!」

尾白によって諭され、咄嗟に周囲を見渡した視線がグラウンドの中央に止まる。そこには爆豪チームと千染チームが一騎討ちの様相を呈していた。

「あそこだ！あの2チームからPを奪う！僕たちが入って乱戦になればチャンスはある!!」

確かに守りに入った轟チームは鉄壁だ。轟の範囲が広い氷結に上鳴の帯電、さらに飯田の移動速度と八百万の対応力を突破するのはかなり困難だ。緑谷の言う事は頭では理解できる。しかしその2チームの迫力に尾白と発目は思わず二の足を踏んでしまう。そんな騎馬に後ろから押す推進力が生まれた。

「よっしゃー！やろうよデクくん!!漁夫の利でも何でもいい、最終種目まで行くんだ！絶対!!」

背中を押したのは麗日、その必死な言葉と表情に皆の覚悟が決まる。既に1000万Pを失いこのままでは負けてしまう。ならばここでやるしかない。緑谷チームは決死の覚悟で中心部へと走った。

1000万Pを奪い取った轟チームは歓喜に包まれていた。しかしそんな中で轟だけが浮かかない表情を浮かべている。

「千染……」

第一種目で感じた悪寒ともいえる胸騒ぎが頭から離れない。あの時は父の目とはまた違う何かを感じたが、あれからずっと幼い頃抱いた父への怒りが沸沸と再燃しているのだ。緑谷と一騎討ちをしてい

た間だけは忘れる事ができたが、最後に使おうとしてしまった自分の『半燃』によって再び思い出してしまった。

(戦えばもう一度あの眼を見る事ができる…だが…)

轟チームは既に1000万1060Pを保有して断トツの1位に立ち、このまま守り抜けば最終種目へ進める。残り1分を切った今、無駄なリスクを負ってまでチームに迷惑は掛けられない…はずなのに…これが興味なのか恐怖なのかは分からないが戦いたいと思ってしまう。

「引くぞ、無理に戦う必要はない」

意志の力で誘惑に勝ち皆に指示を出す。しかし肝心の飯田が中心部を見据えたまま動かない。その様子に八百万が心配そうに声をかけた。

「大丈夫ですか？ここで迎え撃つという手もありますが…」

「いや、そうでは無いんだ…轟くん、今何を考えていた？」

「別に…何でもねえ」

飯田と目が合った。表情は真剣で、それでいて声色は穏やかだ。飯田はチーム、クラスの皆を本当によく見ている。先程までの自分ほどの表情を浮かべていたのか…

「なら…どうして苦しそうな顔をしているんだ。もしかして君は美亜くんと戦いたいんじゃないか？理由は何であれ今の彼女なら…もしかしたら全力で戦うかもしれないぞ…どうなんだ？」

「だが、それは俺の独り善がりだ。チームの皆に迷惑が掛かっちゃう」「そんな事ありませんわ轟さん、このチームは貴方のお陰で1000万Pを取ることが出来ました。感謝こそすれど決して迷惑などとは思いません。微力ながら私にも手伝わせてください」

「しゃーねーな…俺もここまで来たら最後までやってやるぜ！つっても次打ったらキツイけどな…」

「だそうだ、勿論俺も最後まで挑戦したいと思っっている。もう一度聞く…どうなんだ？」

此方を気遣いながら、真剣に答えてくれる八百万の言葉に嘘は無く、上鳴も軽口を叩きながら場の雰囲気明るくしてくれる。

再び目が合った飯田は笑顔で答えを待ってくれる。このクラスは、この面子は本当にいい奴ばかりだ。煩くて生真面目でバカだけど：懸命で真っ直ぐで眩しい。

「……俺は……あいつと戦いたい。何がここまで掻き立てるのか分からねえが、力を貸してくれ」

「やりましょう皆さん！」「よっしゃ!!」

「そうなれば時間がない!いくぞ!!」

『おいおい!轟チームまで中央に向かってんぞ!お前らマジか!1000万P持つてんだぞ!わけわかんねえけど：最高だ!!』

『だが距離が遠いな：間に合うか?』

既に残り時間は10秒を切った。千染チームは既に满身創痕、障子はまともに戦える状態では無く、常闇と耳郎も激しく動いたせいか苦しそうだ。それでも爆豪チームは容赦なく接近戦を仕掛けてくる。ギリギリで躲し防いでいるものの、美亜自身も動きが鈍くなり、個性の制御が上手く効かなくなっている。满身創痕の千染チームに対して体力に自信があり、未だ健在な爆豪チームの直接対決は一方的な展開になっていた。

「躲してばっかですまんねえぞ!そんなもんかよ!!」

(クソ!このままでは押し切られる!あれは……?)

一騎討ちに緑谷が入り混戦を極める。苛烈な争いの中、此方へと向かってくる轟チームが視界に入った。緑谷チームは漁夫の利を狙っている和理解できるが、轟チームに関しては目的が見えない。真っ直ぐに此方を見据え、明らかに美亜を狙っている。到底間に合う距離では無いが、向かってきて以上何か策があるのだろうか。

爆豪が、緑谷が迫る。考えている場合ではない。残り数秒何がなんでも耐え抜いてみせる。

(来い轟!『半冷』を使え!)

迫る2人を無視し、轟だけを見据えて血腕を襲い掛からせる。

『3!』

眼が合った轟は苦しそうに顔を顰めた。右手に冷気が集まり周囲の空気が音を立てて軋む。

「トルクオーバー！レシプロバースト！」

『2！』

ついに爆豪の左手が美亜のハチマキを捉えた。抵抗する力はない。

『1！』

視界が蒼に染まった。

「なっ!!てめ……」

『TIME UP!!』

「これが私の限界か……何とも情けない。だが……最終種目進出だ……」

巨大な氷塊と共に半身を凍らされた美亜は、寒さに震えながら自嘲気味に呟いた。

『な、なんかすげえ事になってるけど……とりあえず上位4チーム見てもよか!!乱戦の中1000万Pを最後まで持つ事ができたのはどのチームなのか!』

1位轟チーム!! 2位千染チーム、3位鉄て……アレエ!? オイ! 心操チーム!? いつの間にも逆転してたんだよオイオイ! そして4位爆豪チーム!! 以上4組が最終種目へ……進出だああああ!!』

第23話 血濡少女と体育祭 昼休み

『上位4チーム見てみよか!!乱戦の中1000万Pを最後まで持つ事ができたのはどのチームなのか!』

1位轟チーム!!2位千染チーム、3位鉄て…アレエ!?オイ!心操チーム!?いつの間に逆転してたんだよオイオイ!そして4位爆豪チーム!!

以上4組が最終種目へ…進出だああああ!!』

「千染、お前何でもいいのかよ。クソが…」

爆豪は美亜のハチマキから手を離し、そう吐き捨てて立ち去った。終了直前で美亜のハチマキを掴んだ。しかし轟の放った渾身の大水塊が美亜の半身を覆い尽くし、頭部のハチマキごと凍らせてしまう。結局頭部を離れることのなかったハチマキは美亜のPとなり、爆豪チームは4位という結果に終わった。

しかし4位という結果にもかかわらず、爆豪はかなり落ち着いている。普段の彼なら烈火の如く怒り狂う筈、そのギャップでチームメイトは困惑している。

しかし美亜には分かる、爆豪は怒りを通り越して呆れているのだ。騎馬戦とはいえ、いざ直接戦ってみれば一方的に追い詰められた。轟が来ていなければ、個性を使わなければ確実に美亜が敗北していただろう。やはり爆豪の戦闘に対するセンスには圧倒的なものを感じる。

だがどんな形であれ最終種目まで進めた、今はそれだけで充分だ。「なんとも言えばいい。とりあえず…寒いんだが氷を溶かしてくれないか?」

「あ…ああ、すまねえ。やり過ぎた」

堂々の1位に喜ぶ轟チーム、にも関わらず肝心の轟は右手を見つめて顔を伏せていた。あの時、個性を制御できなかった。溢れ出した負の感情が、混濁した思考が、絶対零度の水塊となって美亜へと襲い掛かった。半身で済んだのは奇跡だ、下手をすれば全身を飲み込んで氷漬けにしていただろう。

「何だ?私の顔に何か付いているのか?あまりじつと見るな」

氷を溶かしている間にまた考え込んでしまっていたらしい、気がつくとも目の前で千染が此方を睨んでいた。その眼からは何も感じない。あれ程の不気味さや不快感は鳴りを潜め、ただ透き通るほどに美しい紅色が煌めいていた。

氷から解放されて、伸びをして肩を回す美亜に一言伝えると足早にスタジアムを後にした。

「みんな……ごめん……僕が轟くんには負けなければ……もつと力が有れば……！」

涙が止まらず、申し訳なくて皆の顔が見れない。

緑谷チームは5位という結果に終わり、寸前で最終種目への進出を逃した。

敗因は自分だ。発目のアイテムと麗日の『無重量』で生み出された機動力は勿論のこと、尾白のフィジカルも見事で上鳴の『帯電』を一身に受けながらも動きを止めなかった。対して騎手の自分は何がしていたのか。爆豪、轟、千染、3人も騎手として個性をフルに使い大太刀周りを繰り広げていた。自分は譲り受けた個性を少ししか制御できず、終始活躍することもなく終わってしまった。

この第二種目の主役は間違いなく彼らだった。情けない……これではチームの皆に、そしてオールマイトに顔向けできない。

「ちよつといいかしら、大事な話があるの。千染チームの障子くんのことなんだけど……」

落ち込む緑谷、慰めようにも言葉が出ない他の面々にミッドナイト先生から声が掛かる。

「最終種目は棄権するそうよ、傷が『複製腕』を超えて腕まで到達していて、リカバリーガールからドクターストップが掛かったの。だから5位の緑谷チームから1人代わりに出場できる。いい？こんなチャンス滅多にないことよ、よく皆で話し合って決めなさい」

去っていくミッドナイト先生を啞然として見つめる。障子くんは大丈夫だろうか？リカバリーガールでも直ぐに治癒できないほどの怪我となると心配だ。

そしてもう1つ、突然降って湧いた可能性、このチームから1人だけ最終種目に出場できる。自分を除いた3人共貢献度でいえば差は無いように感じる。

(だけど…麗日さんの夢、ヒーローを目指す理由、この大会にかける想いを僕は知っている。尾白くんと発目さんには悪いけど…)

「僕は…麗日さんに出て欲しい。発目さんと尾白くんには申し訳ないけれど…この種目、僕は初めから最後まで麗日さんに支えられてきたんだ…だから…」

「ウチはデクくんに出て欲しいよ」

「ああ、俺も緑谷が出るべきだと思ってる」

「なんで?!と伏せていた顔を上げた。」

「緑谷、俺らを集めたのはお前だ。たぶん自分が足を引っ張ったと思っっているんじゃないか?違う、俺たちはお前とだから頑張れたんだ。お前の真っ直ぐな姿は見てると勇気が出るんだよ、俺も負けてられないぞってな。まあ結果は負けてしまったんだけど…」

「それに、デクくんは自分が最終種目に出る事を考えてなかったんじゃないかな?もしかして名乗り出れば出場できるかもしれない。それを人に譲ることは簡単な事じゃ無い。現にウチらは黙って何も言えなくなっちゃってたから…。そんなデクくんだから頑張れって、応援したくなるんよ」

完全に蚊帳の外だった発目も3人に意見を求められてやれやれと肩を竦めた。そもそも多数決で負けているのだ、仕方がない。

「仕方がありませんね!商機を逃さない事も素晴らしい発明家の条件ではあります。大企業の目にはしっかりと私のベイビーが入った事でしょう!それにこれからもベイビー達をアピールする機会はある!緑谷くん!頑張ってくださいね!!」

そう言い残すと颯爽とその場を立ち去ってしまった。発目も理由は違えど最終種目に出たかった筈だ。皆が譲ってくれた可能性、絶対に負けられない。緑谷は溢れそうになる涙を堪え皆と共に競技場を後にした。

「あの…話って…何？」

騎馬戦終了後、轟に話があると呼び出された緑谷は、学校関係者専用入り口の通路に来ていた。

壁に背中を預け此方を睨みつけてくる轟。その冷たい威圧感に気圧されて、緑谷も対面の壁にもたれ掛かった。そしてこの場に美亜が居ることに気づいた。彼女はスタジアムを出た角の壁に、所謂ヤンキー座りでもたれ掛かっている。見るからに機嫌が悪そうだ。

轟から睨み付けられながら語られた内容は先の騎馬戦、緑谷と対峙した際に本気のオールマイトと似たものを感じたのだという。

「なあ…お前オールマイトの隠し子が何かか？」

「違うよそれは…。隠し子だったら違うって言うに決まってるから納得しないと思うけど…とにかくそんなんじゃない…逆に分かるけど…なんで僕なんかそんな…」

緑谷は慌てて否定した。彼はオールマイトから個性『ワン・フォー・オール』を受け継いでいる。重大な秘密であり、絶対にバレてはいけない。

「その言い方は少なくとも何かしら言えない繋がりがあるってことだな。俺の親父は万年No. 2ヒーローのエンデヴァー、知ってるだろ。お前がNo. 1ヒーローの何かを持ってるなら、俺は尚更勝たなきゃいけない」

そして轟は自身の過去を語り始めた。

オールマイトを超えられなかった父が個性婚を行い、母の個性を手に入れたこと。そうして生まれた轟をオールマイト以上のヒーローに育て上げることで、自身の欲求を満たそうとしていること。

いつも泣いている記憶の中の母、そして心を壊した母は「おまえの左側が醜い」と轟に煮湯を浴びせたこと。

彼の顔の左側が焼けているのはその時の傷だった。その壮絶な過去に緑谷は絶句してしまう。美亜は空を見上げ、その表情は窺い知れない。

「クソ親父の個性を使わず1番になることで、奴を完全否定する」

その目には憎しみや怒りが滾り、気圧された緑谷は何も言い返すこ

とができなかった。静寂が包む廊下に、憐憫を含んだような凜とした声が響いた。

「不幸自慢は終わりか？呼び出されて何かと思えばそんな話だとは…。これなら芦戸達と昼飯を食べるべきだったな」

緑谷と轟の視線が一斉に美亜に向けられる。轟から殺意とも取れる程に睨まれながらも、美亜は一切表情を崩さずに外から通路に入ってくる。いつもと変わらない凜とした顔立ち、ただ緑谷にはそれこそがとても恐ろしく感じられた。

凍り付いたような空気の中、美亜は2人の目の前を通り過ぎ、そのまま立ち去ろうとする。その背中に痺れを切らした轟が声をかけた。

「千染…何が気に喰わねえ？」

その言葉に、立ち止まった美亜はゆつくりと振り返る。

「別に…殺せばいいのにと思っただけだ」

「は？」

表情は皆無、美しいが故に、能面のように張り付いた顔は不気味さを掻き立てる。ましてやそんな涼しい顔で恐ろしい事を言い放った。

「そこまで恨んでいるなら殺せばいい。炎を使い、母の個性と合わせ、てエンデヴァーを超えろ。」

その為にはあらゆる屈辱に耐え、己を殺して父親に師事しなければならぬだろうな。

だが…自分が自分である為に、真の意味で自由に成る為なら…容易い事だ。そうは思わないか？」

「な、何を言ってるんだ…」

「何も知らねえくせにふざけんなよ。」

あいつにも家族はいるんだ、姉さんや夏兄、お母さんが…！！

あいつが死んだら、俺が殺したら…悲しむ奴が大勢居るんだよ！」

轟の両手に氷と炎が渦巻き、怒りに飲み込まれてゆく。その殺気を正面から当てられた美亜は微笑んでいるが、緑谷には慈愛というよりはとても寂しそうに見えた。

「なんだ…お前には大切な家族が居るじゃないか。その家族への想いは父親への憎しみにも勝るのだろうか？」

なら正面から向き合え。どれだけ今が苦しくても、辛くても、決して憎しみで目を曇らせるな。お前が怨念に、過去に囚われるのをそいつらは望んでいるのか？

殺して全てを終わらせるのは…唾棄すべき愚かな選択だ」

美亜はそう言い切ると唾然としている2人を気にもしてないそぶり、踵を返して廊下の奥へと消えていった。

誰もいないスタジアム裏のベンチ、美亜は持参した弁当を膝の上に乗せ1人で昼食を取る。

普段から学食の美亜にとって初めての弁当である。美波が朝早く起きて作ったそれは彩り鮮やかにオールマイトをデフォルメしており、相当気合を入れたのは明らかだ。

(確か…体育祭は弁当を皆んなで食べるイベントなんだったかな…。もう皆食べ終わっているだろう)

呼び出した轟への悪態を頭の片隅に除け、美味しい弁当に舌鼓を打っていると芦戸から連絡が入った。どうやら急いで女子更衣室に行かなければならぬらしい。

よく分からないが昼休みも後10分程しかない。美亜は最後に残した苺を放り込んで足早に向かった。

「美亜ちゃん！レクリエーションの応援合戦の話聞いた？女子は全員チアリーダーの格好をしなきゃいけないんだって！」

「はあ…なんだその馬鹿みたいなイベントは。そんな話聞いて無い、誰が言っていた？」

更衣室では八百万が必死にコスチュームを作っている。全員分とこのだから相当大変らしく、額に汗が浮かんでいる。できたコスチュームを順次着ていつている為、皆慌ただしく動き回っている。

「相澤先生が言ってたんだって。美亜ちゃんも早く着替えて着替えて！」

「そうか…なら仕方ない。とっとと着替えるか」

そういえば風斗が中学で応援団の格好をしたと聞いたことがある、体育祭とはそういう余興があるのだろう。

『最終種目発表の前に予選落ちの皆へ朗報だ！あくまで体育祭！ちゃんと全員参加のレクリエーションも用意してんのさ……ん？どーしたA組!!』

お腹を大胆に晒したノースリーブのチアコスチューム、スカートは膝上どころか腿上、両手に黄色のポンポンを持ったA組女子はスタジアムに無表情で立ち尽くしていた。

「誰もチアの格好などして無いな。八百万、誰に伝えられた？」

ポニーテールで長い髪を纏めている美亜は、ハッキリと呆れた声色で問いかけるが、既に八百万は隣で肩を落としている。

「何故こうも峰田さんの策略にハマってしまうの私……」

A組女子のコスチュームを目に焼き付けている峰田と上鳴、興奮の面持ちで親指を立てている。相澤先生の話など全くの嘘で、ただチア姿を見たかった2人によって全員が騙されてしまったのだ。

「アホだろアイツら……」

「まあ本戦まで時間空くし、張りつめててもシンドイしさ……いいんじゃない!? やったろ!!」

「透ちゃん好きね」

赤面してポンポンを投げ捨てる耳郎だが、葉隠は楽しんでいるようで、飛び跳ねてはしゃいでいる。

『さアシア、皆楽しく競えよレクリエーション！それが終われば最終種目！総勢16名からなるトーナメント形式！一対一のガチバトルだ!!』

最終種目は一対一のタイマン勝負、例年もサシの勝負だが今年にはガチバトルだという。白熱するであろう最終種目を前に、観客から大きな歓声上がるのだった。

第24話 血濡少女と体育祭 幕間

USJ襲撃事件から3日後、マイクは熱犬孤児院に再び訪れていた。平日の昼時、学校があるため孤児院には美波と拳士しか居ない。リビングに座るマイクは、お茶を持ってきてくれた美波に軽く会釈をすると、対面に座る2人に向き合った。

「先ずは改めて謝らせてくれ、先日は本当にすまなかつた。美亜をあんな目に合わせてしまったのは此方の責任だ。」

その上で今年も予定通り体育祭が開催される。あんな事があつたんだ、セキユリテイなどバツチりするつもりだが不安があるのは重々承知してる。

だから今日は、美亜を出場させていいのか話をしに来た」

2人の顔を見ながら、ゆつくりと誠意を込めて話す。雄英高校としても敵襲撃という異例の事態で未だ混乱は収まっていない。マスクミは煩いし、保護者からも心配の連絡が来ている。

そんな中で危機管理体制の盤石さを示すために開催される体育祭、特に重症を負った美亜の家庭に許可を得るべきだろうという事で、再びマイクが訪問する事となった。

「うーん、勿論美亜のことは心配よ……。だけど体育祭がどれだけ子供達の成長に繋がるかは知ってるから……」

「やっぱ中止にはしないのか。まあ誰も亡くなっていないし、3年生はラストチャンスだからな」

美波は頬に手を当てながら、拳士は椅子に背中を預けて考え込んでいる。

「そうだな、3年のビッグ3は問題ないんだが、中止にすると他の生徒の進路に大きく響いちゃう。」

それにやっぱり中止にすると、敵に屈したやらなんやらで世間体がない……」

「ビッグ3?」

「とおがたみりお、はとうねじれ、あまじきたまき、現雄英生の中でトップの3年生
「通形ミリオ、波動ねじれ、天喰環、

だ。

「そういえば波動は個性もコスチュームも美波さんと似てるな」

「へえ…強いのか？」

「まあ当時の美波さん程では無いが、拳士になら余裕で勝てるぐらいは強いぜ」

拳士は高校生の頃からこの手の話が大好きで、それは今も変わっていないらしい。目を輝かせて話を聞こうとしている。

美波さんの方を見ると相変わらず優しく微笑んでこちらを見ている。

聞くなら今しかないとと思う。やっと会えるようになり、昔のように話すことができる。それなのに会うたびにモヤモヤするのはオレらしくない。

「なあ…本当に未練はないのか？…オレは2人なら最高のヒーローになれると思ってた。いやオレだけじゃない、皆が願っていた筈だ。2人だっけ？って言うってただろ…」

相澤は理由を知りたがっているがオレはそうじゃない。

オレが知りたいのは2人がどんな気持ちで今を過ごしているのか。共にヒーローを目指した先輩と友が何故か違う道に進んでいる。

消して今の彼女達を否定する訳ではない。

実力や素質が足りなかったのではなく、寧ろそれがトップクラスだっただけにそこに後悔は無いのか。

2人は突然の質問に面食らっているようで、少し間が空いて拳士が静かに話し出した。

「未練が無いといえば嘘になるな…私だっけヒーローになりたかったよ。」

でも…今は凄く幸せなんだ。ここには美亜、風斗、かおり、そして美波が居る。

未練はあるけど、後悔はしてないよ。私はこの選択が正しかったって信じてる」

「私もよ、今の生活はとっても楽しいから。美亜が…最近よく笑うようになったの。あの子は感情表現が下手で本当は恥ずかしがり屋だ

けど、きつと楽しんでるんだと思うわ。

雄英高校でできた友達が、護りたいと思える繋がりがある、あの子の心を少しづつ溶かしてくれる事を願ってる。

だから山田くん…美亜をよろしくね。あなたや相澤くん達が見守っててくれるから私達は安心できる」

いつの間にか目の前に立ち、目線を合わせて頭を撫出られていた。そういえばこの先輩には事あるごとに撫でられた、特に相澤は猫みたいと気に入られていたっけ…

「おいおい、俺はもう30だぜ。それと山田はNGだ、今の俺はプレゼント・マイクなんだからよ」

美波は一瞬残念そうな顔を見ると、そっかマイク君ね、と軽やかに笑った。爆笑する拳士を睨みつけ、本題から大きく話が逸れてしまつたと一つ咳をして空気を戻す。

（はあ…やつぱはこの人と話すと調子が狂うな。とりあえず後悔してねえって事だけは分かつて良かった。）

だけど理由を聞くのはマジで骨が折れるぜ。それだけ話せねえ秘密があることだけは分かったが…)

「とりあえず体育祭はどうすんだ？嫌だと言うなら無理は言わない。1番の重傷者の保護者なんだ、こつちとしては騒ぎ立てて中止にされないだけ御の字だからよ」

「私は出て欲しいと思う。もちろん心配だけど、美亜の将来の為に、変わり始めてるあの子をpushしえ付けたくないから。美波はどう思う？」

「そうね…あの子の将来のために…出場させましょう。」

でもお願いがあるの、私達がこれ以上は危険だと判断したら美亜を失格にして欲しい。

だから出来れば競技中の美亜の様子を見れるモニターと、瞬時に中止を伝える手段が欲しいわ」

「ん？確かにちよつと危ねえところはあるけど、生徒同士だしそこまでにはならないと思うが…親心つてやつか？」

まあそれぐらいなら全然OKだぜ！優勝させろーとか言われたらどうしようかと思つてたよ」

「美波がそんなこと言う分けないだろ。それでどうやるんだ…電話で伝えて止めてもらうとか?」

「うーん、出来れば直ぐ美亜本人に伝わるようにしたいのだけど…」
「分かった、その辺はパワーローダー先生に聞いてみるぜ…っと、もうこんな時間か。名残惜しいけど今日はここまでだ。オレっちも午後の授業があるんでな!」

玄関まで見送りに来てくれた2人は、バックミラーから見えなくなるまで手を振ってくれていた。

7年間、あまりにも長い間消息を断っていた。正直二度と会えない事も覚悟していた。それでも奇跡的に会えて、また昔のように話す事ができる。

「はあ…相澤も会いに行つてあげりゃあいいのによ。包帯取れたら引きずつてでも連れてくか!」

「美亜ちゃん凄かったね!カッコよかったね!!」

「うるせえな、同じ画面観てんだから分かつてるつて。まあ思ったよりやるじゃんか、美亜もちよつとは頑張ってるんだな。

にしても流石は雄英、一家に一台専用モニターとは…」

午前の競技が終了し、はしやぐ2人をリビングに残して昼飯の準備を始める。

今日の昼飯は美波と早起きして作った気合が入った弁当だ。2段のランチボックスにはおにぎり、ウインナー、卵焼き、アスパラのベーコン巻き、ポテトサラダなどが色とりどり飾り付けられている。

「今頃美亜は友達と食べてるのかしら」

「だといいな!せっかくオールナイト弁当にしたんだし、絶対会話のきっかけになるよ!」

あー、私達も美亜と弁当食べたかったなあ…」

せめて気持ちだけでも孤児院の皆さんで食べたい、そう提案したのはかおりだった。小中と学校に行っていない美亜は、運動会で家族揃つてお弁当を囲んだ事がない。

些細なことかもしれないが、そんな思い出が積もり積もって人を成長させていく筈だ。美亜にはそれが抜け落ちてしまっている。そこそが未熟なあの子の精神に最も必要なものだと思う。だから離れていても一緒に弁当を食べる。

それに初めて美亜に作ってあげたので変に気合が入ってしまった。出来上がったデフォルメされた可愛いオールライトを見て、久しぶりに2人して大笑いできて楽しかった。

「じゃあ今度ピクニックでも行きましょうか…」

ワンちゃん、先にお弁当持って上げて。お茶煎れたら私も行くから」

「了解！あー腹減った!!」

あ、そういえば…あのチョコカー結局使わなかったな。『爆破』で責め立てられている時に止めると思ってたけど」

美波の急須にお湯を注ぐ手がピタリ止まった。突然に訪れた静寂に、一瞬の筈がやけに長く、張り詰めて感じる。

果たして一拍もあつただろうか、ほんの僅かな間を残して美波が答えた。

「……………ええ、だって」誰も危ない目に合っていないもの」

「ん…割と苛烈な攻撃だった気がするけど…「ねーお腹減ったー!!」まあ美亜なら大丈夫だよな！今持つてくぞー！すつごい豪華だから待ってけ!!」

お弁当を落とさないように、でも早く食べたいという相反する気持ちを抱えているのだろうか。ゆっくりだけど大股という変な歩き方でリビングに向かう親友。

彼女は相変わらず明るくて眩しくて真っ直ぐだ。きっとその心は一点の曇りなく晴れ渡っているのだろう。

『慈愛』、それは皆を慈しみ、愛し、包み込んで護る崇高な精神。

私はずっとそう呼ばれてきた。私自身何も意識することなく、自然に振る舞っていただけなのに。気付けば後ろには沢山の親愛と切望の眼差しがあつた。

でも今だから思う、その言葉はきつと彼女にこそ相応しいのだと。

私は：最も護りたかつた彼女を：拳士を護れなかつたのだから。
今でも拳士を見るたびに時々幻視してしまう。彼女が人前で肌を
見せなくなつた訳、その焼け爛れた体を。

猛り狂つた業火、吹き荒れる爆風から私を護つた彼女。私の膝の上
で、既に何も見えてないであろう虚な瞳を此方に向けて大丈夫だと
言つたその笑顔を。

「ごめんね拳士。次こそは貴方を巻き込まない、もう二度と：傷つけ
させたりはしない。私が貴方を護るから…」

第25話 血濡少女と体育祭 最終種目：1

「それじゃあ組み決めにくじ引きしちやうわよ。組み合わせが決まったらレクリエーションを挟んで開始になります！」

レクに関して進出者16名は参加するもしないも個人の判断に任せるわ。息抜きしたい人も温存したい人もいるしね。んじゃ、1位チームから順に……」

「あの……少しいいでしょうか。僕達の棄権を認めていただきたいのです」

壇上でクジを持ったミッドナイトに声を掛けたのは、B組の庄田、鎌切、鱗の3人。プロに見てもらえる最大のチャンス、それを自ら不意にする提案に周囲がざわめく中、理由を話し出した。

心操チームの3人は騎馬戦の記憶が終盤ギリギリまでほぼ無いそうだ。そんな状態で気が付いたら勝利していた。皆が実力を出し合い争ってきた場所に、何もしてない者が上がるのは雄英体育祭の趣旨と相反するのでは無いか、と語った。

その男らしい理由に皆が感動する中、判断は主審のミッドナイトに任された。

「そういう青臭い話はさア……好み!!庄田、鎌切、鱗の棄権を認めます！」

（（好みで決めた……!!））

「繰り上がりは5位の緑谷チームだけど……そうね……終盤ギリギリまで高得点をキープしていた鉄哲チームにもチャンスを与えましょう！緑谷チームから1人、鉄哲チームから2人、繰り上がる人を決めなさい！」

ミッドナイトの指示により決められたのは、緑谷チームから麗日、鉄哲チームから鉄哲と塩崎。男泣きする鉄哲、深々とお辞儀をする塩崎、絶対勝つと表情を引き締める麗日、三者三様の感謝を譲ってくれた仲間へと送った。

「というわけでこの16名！クジの結果……組みはこうなりました!!」

| | | | |
|-----|----|---|-----|
| 第一戦 | 緑谷 | 対 | 心操 |
| 第二戦 | 轟 | 対 | 瀬呂 |
| 第三戦 | 切島 | 対 | 鉄哲 |
| 第四戦 | 飯田 | 対 | 耳郎 |
| 第五戦 | 爆豪 | 対 | 麗日 |
| 第六戦 | 常闇 | 対 | 八百万 |
| 第七戦 | 千染 | 対 | 芦戸 |
| 第八戦 | 塩崎 | 対 | 上鳴 |

「初戦は芦戸か…同じブロックには爆豪。緑谷と轟は別ブロックか、なら戦う事はないだろう」

スクリーンに映し出されたトーナメント表を見て美亜は呟く。先の騎馬戦で実感してしまった、今の自分では爆豪に勝つ事はできない。騎馬戦なら勝機は僅かに存在した、しかし一騎討ちとなると満に一つも無いと断言できてしまう。

「初戦から美亜ちゃん…っ！やっとな戦える…絶対勝つ！」

一方芦戸はトーナメント表を確認すると、美亜の名前を確認してニヤリと笑った。それは好戦的な笑みであり、不安を隠そうとするぎこちなさも同胞していた。

美亜は強い、それはここに居る誰よりも分かっている。敵襲撃事件で見た個性、皆が知らないあれが発動すれば、自分は近づく事すら出来ずに敗北するだろう。それでも挑戦したい。A組でトップクラスの實力を持つ美亜に、あの時助けられた彼女に自分が何処まで通用するのか。そんな思いを抱えながら、芦戸は闘志を滾らせるのだった。『よし、それじゃあトーナメントはひとまず置いてイツツ東の間！楽しく遊ぶぞレクリエーション!!』

レクリエーションが始まり、最終種目へと進出する生徒は殆どが姿を消した。各々が試合で全力を出す為に神経を研ぎ澄ませているのだろう。瀬呂や上鳴など数名は参加しているが、総じて借り物競争などの負担の軽い種目を選んでいようだ。

そんなレクリエーションを一層華やかにしているのはA組女子、生徒たちを応援して賑やかにしている。葉隠は元気よくジャンプして

応援し、芦戸は得意のダンスを活かした本格的なチアリーダーイングだ。麗日と蛙吹も慣れないながらに一生懸命応援している。

控え室に行こうとした美亜は、耳郎に巻き込まれてこの場に残留することになった。気合が入った4人と後ろで控えめにポンポンを振る八百万を、そのさらに後ろで美亜と耳郎は蹲み込んで眺めていた。

「なあ美亜、葉隠ってあれ中見えてていいのかな…」

「見えてもただの布だろ…いや…本当にどうなってるんだあれは…」

葉隠の食べた物や身に付けた物、老廃物などの消える対象について2人で考えを巡らせている内にレクリエーションは終わった。

セメントスが個性『セメント』でグラウンドに闘技場を作り出す。

そして会場にプレゼント・マイクの声が響き渡った。

『ヘイガイズ！アアユウレディ！？色々やってきましたけど、結局これだけガチンコ勝負！！頼れるのは己のみ！心・技・体に知恵知識！総動員して駆け上げろ！』

簡単な紹介とともに一回戦の緑谷と心操がステージに上がると、観客の歓声が一層膨れ上がった。

『ルールは簡単！相手を場外に落とすか行動不能にする、あとは「まいった」とか言わせても勝ちのガチンコだ！ケガ上等！こちとら我らがリカバリーガールが待機してっから！道徳倫理は一旦捨ておけ！だがまあもちろん命に関わるよーなのはクソだぜ！アウト！ヒーローは敵を捕まえる為に拳を振るうのだ！そんじゃあ早速始めよか！レディイイ、START!!』

試合が始まった瞬間、緑谷が何やら声を荒げて心操に向かった。しかしその直後、緑谷は立ち尽くし動かなくなってしまう。呆然と立ち尽くす緑谷の表情からは意識が感じられない。

「おい緑谷！どうした！何してんだよ！」

「デクくん…!？」

A組に割り当てられた観客席では、不自然に固まった緑谷に対して混乱と心配の声上がる。

心操の個性は『洗脳』。彼の問いかけに答えた者は洗脳されて彼の

言いなりになってしまう。衝撃で解くことが出来るが、一対一の状況では起こり得ない。

心操は試合が始まると直ぐに、自ら棄権した庄田らを馬鹿にした言葉を緑谷に投げかけた。緑谷が庄田達からアドバイスを受けていることを考慮し、確実に反応するであろう言葉で挑発したのだ。挑発に引かなかつた彼は声を荒げて反論してしまい、そのまま『洗脳』にかかってしまった。

「振り向いて、そのまま場外まで歩いていけ」

『ああー！緑谷！ジュージョン！』

耳を疑う様な言葉でも、洗脳されれば従わざるをえない。緑谷は心操の命令に従って場外へと歩き出した。A組の面々から止まれ！と声上がるも緑谷は進み続けてしまう。後一步で場外。誰もが結末を確信したその時、突如緑谷の指二本が弾ける様にへし折れ、その衝撃で洗脳が解けた。

『これは…緑谷！とどまったああ!?!』

「何が起きた？今ので緑谷に生気が戻った様な…」

「何にせよ指をへし折ったのか…全く無茶をするヤツだ…」

突然の事態に皆が目を丸くして驚く。心操の個性に思考を巡らせていた美亜も、緑谷の執念と度胸に思わず感嘆の声を上げた。

一方洗脳を解かれてしまった心操は焦っていた。一対一である為に誤魔化せる要素がなく、今のでネタは割れたと考えるべきだ。何とかして緑谷の口を開かせるしか無いと何度も問いかける。

「何したんだ…なんとか言えよ…！指動かすだけでそんな威力か、羨ましいよ。俺はこんな『個性』のおげでスタートから遅れちまったよ…恵まれた人間にはわかんないだろ…！」

挑発だった言葉が徐々に切望へと変わる。心操の焦りから生まれたい心情の吐露に緑谷の心も締め付けられた。その思いはずっと彼自身も抱いてきた物だったからだ。だけど緑谷は人に恵まれた、だからこそ負けられない。信じてくれた人の為に、託してくれた人の為に。

「誂え向きの『個性』に生まれて！望む場所に行ける奴らにはよ!!」
「んぬあああああ!!」

壮絶な組み合いの末に、緑谷は突き出された心操の右腕を掴み投げ飛ばした。心操の足が場外へと投げ出され、決着を告げるミッドナイトの声が響いた。

「心操くん場外！緑谷くん、二回戦進出!!」

俯いてステージから去っていく心操、その背中にかかる言葉を緑谷は見つけることができない。しかし普通科の仲間からの称賛、そして数多くのプロヒーローからの高評価の声を聞いた彼は決意を新たにした。

「今回は駄目だったとしても…絶対諦めない。ヒーロー科入って資格取得して…絶対おまえらより立派にヒーローやってやる」

そう言い放った心操。返事をした緑谷に置き土産とばかりに洗脳をかけるとニヤリと不適に笑って会場を後にした。

第二戦、轟対瀬呂の戦いは圧倒的な力を見せつけた轟が勝利を収めた。開始前から冷気を立ち昇らせた轟は、瀬呂の先制攻撃に全く怯む事なく大氷結で瀬呂諸共氷漬けにしたのだ。余りの威力に静まり返った会場からは、敗者に対するどんまいコールが沸き起こったのだった。

第三戦、切島と鉄哲の被り個性対決は前戦から一転、漢気溢れる熱い戦いとなった。互いに身体の硬化を個性に持つ彼らが選んだ戦い方は、真つ向勝負の殴り合い。スタジアムの中央で打撃音を響かせて殴り合う2人は最終的に両者ノックダウンの引き分け。回復を待つて腕相撲で勝敗を決める事になった。

第四回戦、飯田と耳郎の戦いは一方的な物となった。持ち前のスピードで速攻を仕掛ける飯田。掴まれるたびにイヤホンジャックを挿すべく奮闘する耳郎だったが、尽く躲され場外へと投げ出されてしまった。

「あーあ、負けちゃった。ぜんっぜん駄目だったよ…せっかく美亜のお陰で最終種目出れたのにな」

客席に帰ってきた耳郎は自身の敗北を朗らかに笑い飛ばしていた。しかし横に座る美亜は彼女の横顔、その目尻に残る涙の跡に気付く。「そうだな…どう見ても完敗だった。だが近接に強い飯田と違って、

お前は索敵や奇襲に特化した個性だ。それに……」

おそらく慰めてくれているのだろう。美亜は明後日の方向を向きながら言葉を選ぶ様に話し始めた。耳郎がその横顔を見つめて次の言葉を待っていると、勝ったはずの飯田が鎮痛な面持ちで近づき90度に曲がる見事な礼を見せた。

「耳郎くん……先程は申し訳なかった！試合とはいえ女性に乱暴に掴みかかるなどヒーローとして言語道断。僕に謝罪をさせていただけないだろうか!？」

「いや……既にめっちゃ謝罪してるじゃん……」

A組の生徒達から注目を集める飯田、耳郎が唾然としている間にも彼は微動だにせず頭を下げ続けた。

「まあ気にするなよ。ウチだってイヤホンジャック刺して爆音流してやろう！って思ってたからさ……寧ろ真剣勝負ができてよかった」

「そうか……君がそう言うならこれ以上は失礼だろう。言い訳では無いが、耳郎くんの個性は刺さって仕舞えば動きを止められてしまう。だからこそ反応できないほどの速さで勝負をかけるしか無かったのだ」
「そっか、ウチもちよつとは戦えてたのかなあ……よし！ありがとう飯田、元気出た。それに美亜もありがとう」

「何に対しての感謝か分からんが……次の試合が始まるな」

「相変わらず素直じゃないよね。それにしてもこの組み合わせ……うちなんか見たくないな」

第五戦は麗日対爆豪、その試合は凄惨な物となった。爆豪に触れるべく捨身の突撃をする麗日だが、爆豪の驚異的な反射神経と個性によって尽く阻まれてしまう。しかし真の狙いは爆破された瓦礫を空中に浮かせ、一斉に降らせる流星群。捨身の策を取って渾身の一撃を放つ麗日だったが、それすらも爆豪は一撃で爆破し尽くす。

万策尽きた麗日はそれでも諦めなかったが、疾う許容重量を超えた体は言うことを聞かず行動不能となり爆豪の勝利となった。

「そろそろだな……行くか」

「そうだね……!」

麗日の敗北を見届けた美亜と芦戸は席を立ち、試合へ向けてそれぞれ

れの控え室へと向かった。

第六戦、常闇と八百万の戦いは『創造』させる間すら許さずに『黒影』で圧倒した常闇の勝利となった。素早く力も強い黒影は一对一なら最強に近い。弱点は本体の常闇と光に弱い事だが、冷静な常闇はそれを突く隙を与えない。

そしていよいよ第七戦千染対芦戸の試合が始まる。

『クール&ビューティー！オマケにバイオレンス！その澄ました表情の内に熱い血が滾る！ヒーロー科、千染美亜!!』

対するは、表情豊かなハッピーガール！持ち前の身体能力で翻弄できるか!?こちらもヒーロー科、芦戸三奈!!』

大歓声に囲まれながらも美亜は相変わらず無表情で佇んでいる。その隙だらけの姿が、紅く染まった両腕が、芦戸には途方も無い威圧感を放って見える。この震えは武者震いか恐れか、それでも敢えて美亜の眼を正面から見据え闘志を燃やす。

(美亜ちゃん：絶対負けたくないよ。差があることなんて分かってる…でも超えるって決めたから!)

「よく考えるとあの2人って何かと一緒だよな」

「確かにそうだわ…演習の時も敵襲撃の時も協力してたのね」

「新しいライバル関係か！熱くていいじゃねえか!!」

砂藤の一言にA組の生徒達もそういえばと思い出す。そう考えると芦戸が美亜にライバル心を燃やすのも肯ける。もともと美亜がどう思っているかは理解不能だが…

『START!!』

芦戸は試合が始まった瞬間自身の前に弱酸を撒き、美亜へと突撃する。芦戸にとって警戒して悪戯に時間を経過させる事は愚策に他ならない。敵襲撃の時のように血溜まりが出来てしまえば近づく事もできずに勝ち目が潰えてしまう。

(接近戦に持ち込んで体術で押し切る！速く…もつと速く!!)

美亜の両血腕は正面に突き刺され裾野の様に広りは始めている。

芦戸が接近してくる前に防ぐ術を作るつもりなのだろう、だが…

「遅い!!」

あの時と違って出血していないためか血が広がる速度が遅い。勢いのままスピードに体重を乗せ芦戸が宙を舞った。僅かにできた血溜まりを飛び越えて空中で横薙ぎ一閃、美亜の右側頭部に蹴りが叩き込まれた。鈍い打撃音と共に美亜の身体が左に傾くが倒れる事はなかった。

『すげえ跳躍力！何て鋭い蹴り！』

『膝をムチの様に使う事で勢いを殺さずに威力を上げている。まるで鞭打、芦戸の身体能力が為せる技だな』

観客の歓声が頭に煩く鳴り響く。芦戸の一撃は相当な威力を持つて美亜の平衡感覚を奪い去った。咄嗟に突き刺した血腕を縮めなければ吹き飛ばされていた事だろう。しかし視界は火花を散らしたかの様に弾け、波打つ様に揺れている。回復まで数瞬を稼がなければならぬ。

本当に何て使えない個性だ、傷を負わなければ満足に戦う事すら出来ないとは。

「頭が千切れると思ったぞ、どうやら本気で勝ちに来ているようだ……っ！」

「まだまだああ!!」

芦戸が声を張り上げ再び美亜に襲いかかる。振り抜いた左脚をそのまま軸にするのとくると一回転、右脚の踵を再び右側頭部へと叩き込む。芦戸のラッシュはこれで止まらない、次々と美亜に怒涛の蹴りを浴びせていく。左脚のローキックが美亜の右膝に直撃し、体制を崩す。そのまま右脚の踵落としが右肩にヒット、体勢が大きく前のめりになった。そして顎に向けて渾身の一撃、重く鋭い蹴り上げが炸裂する。

『怒涛のラッシュが止まらねえ！まさかの千染が防戦一方だ!!これは芦戸いけちまうんじゃねえか！っ！かまだ意識あんのか!?!』

『よく見ろ、最後の蹴り上げを両手でガードしている。代償として地に刺さっていた血腕は切り離れたが、あれが入ってれば間違いなく勝負は付いてた……いや、それだけじゃない……』

吹き飛ばされ、ふらふらと立ち上がった美亜。血腕を解除し、蹴り

上げるを庇った右腕はへし折れてあらゆる方向に曲がっている。右側頭部から血が流れて美亜の白い肌を紅く染め上げ、それを残っている左手で抑えている。数多の蹴りを叩き込まれた胴も痛むのか前のめりになってふらついていている。

見るに堪えない惨状に観客の多くは思わず目を逸らしてしまおう。先の爆豪対麗日も凄惨な戦いであったが、それは個性『爆破』が炸裂したド派手な物であった。しかしこの戦いは更に生々しく、打撲音が響き渡り裂傷から鮮血が舞った。観客から見れば殆ど一方的な蹴り殺しに近い状況だ。

(美亜ちゃん…成長してる！私の蹴りに合わせて体を流すことで衝撃を受け流しているんだ！近接戦闘が苦手な筈なのに…この短期間で一体何が!?)

しかし美亜と相対している芦戸は驚愕と焦りを露わにする。手加減なしの最高速度で振り抜いた脚、それを見切られた上に受け流された。敵襲撃から体育祭までのたった2週間、強かった美亜は更に成長して強さを増しているのだ。

「だけど…いくら受け流せても効いてることはない！もう一度、次は気絶しても知らないよ!!」

芦戸は再び美亜に肉薄する、もはや立っているのがやっとなのか阻む手は無い。長く苦しまないようにこの一撃で意識を刈り取ってみせる、そんな思いも乗せた渾身の蹴り上げをその顎に向けて振りかぶる。

誰もがこの一撃で勝負がつくと確信したその時、芦戸は美亜の眼に炎が灯る様を見た。そして視界が紅に染まる。

突如視界を奪われたが、意に閑せず脚を振り抜いた。鋭い一閃は美亜を捕らえることなく空振り、そのまま宙で一回転すると着地して周囲に警戒の酸を撒く。

(これは…血!? そっか！頭を抑えていた左手はこの為に…)

芦戸は瞬時に機転を利かせ、超弱酸性の粘液で目を洗う。視界がパツと明るくなるも目の前にいた筈の美亜は消えている。素早く競技場全体に視線を走らせ、遠くに美亜の姿を発見した。

「この隙に攻撃せず逃げるなんてらしくない！向かって来ないならこつちから行くよ……っ!!」

視界に捉えた美亜は片膝をつき地面に左手を当てていた。そしてその左手の先の地面が夥しい量の血で紅く染まり、今も尚増え続けている。

(血が…なんで?!裂傷も右側頭部だけ、他に傷はない…)

「まさか…あの時の血腕!!」

「理解したか…やっとなんて形勢逆転だ」

血溜まりから現れた2本の触手が芦戸に向けて放たれる。しかし流石の身のこなしで躲しながら接近を図る。

「形勢逆転、千染さんの勝利だ…!」

「なんでだ緑谷、まだ芦戸だつて躲せてるじゃねえか?」

緑谷の呟きに瀬呂が反応して問いかける。確かに芦戸は驚愕の身のこなしで飛んだり跳ねたり、時には空中で体を捻って躲している。美亜は相当にダメージが入っているし、このまま隙を見て数発与えることが出来れば倒せるのではないか。

「元々芦戸さんの勝利条件はこの状況になる前に倒し切ることだったんだ。接近する以外に戦う術を持たない芦戸さんは、勝つ為に相手の懐に入る必要があるから…」

でも千染さんの懐に入るってことはつまりあの血溜まりを踏む事で…そこで脚を封じられてしまえばゲームオーバーになっちゃうんだ。

だとしてもこの状況では距離を取る事も無に帰する可能性が高くて……」

「あー、分かった分かった。それぐらいで…あぁっ!芦戸が捕まっちゃった!」

奮闘虚しく捕らえられた芦戸、その体が場外へと放り出されると共に主審のミッドナイトより『勝負あり!』と宣言が出される。

『芦戸場外!ボコボコからまさかの大逆転!まったくハラハラさせるぜ!勝者は千染美亜、これで2回戦進出!!』

マイクの声が響き渡り、歓声が一層大きくなってスタジアムを包み込む。

敗者の芦戸より勝者の美亜が圧倒的に傷を負っている異常な光景。未だ膝をついている彼女にすぐさま医療用ロボが近づくも、それを左手で制して立ち上がる。そして踵を返して出口へと歩き始めた。骨が折れてだらりと垂れ下がった右腕、そして左腕にも闘技場の血が纏わり付き血腕が形成される。歩きながら両腕の感覚を確かめている美亜に表情は無い。先程までのクラスメイトと白熱の大逆転劇を繰り広げた姿が嘘の様だ。

(やるじゃないか芦戸…、拳士さんに感謝しなければならぬな。2週間もの間ひたすら近接、それも躲すことだけを特訓してきた効果はあったみたいだ。以前より相手の動きが良く見える。

だが、やはり戦い方を考えねば…本当の戦いははよーいドンでは始まらない、今回の様に最初から力を使えなければ話にならないか……)

しかし無表情で歩く美亜だが、内心では2週間の特訓の成果を噛み締めていた。以前までの自分であれば、芦戸の蹴りをモロに受けて意識を失っていてもおかしく無かった。

(本当に大変な特訓だった。拳士さんは気分が乗るとんでもない速さで攻撃してくるし、美波さんは居れば止めてくれるものの、基本孤児院の管理で忙しいしな…それに風斗とかおりも…)

美亜がふと脚を止めて振り返ると、反対側の出口に芦戸が俯いて歩いていくのが見えた。

「仕方がない奴らだ…全く、慰めるのなんて苦手なんだがな。どいつもこいつも…そんなにヒーローへの想いが強いのか……」

そう一言呟くと未だ収まらない歓声を残し、通用口の暗闇へと姿を消した。

第26話 血濡少女と体育祭 最終種目：2

「あつ…美亜ちゃん…、やっぱり強かったよ！いやー完敗だった！私もまだまだ頑張らないと！」

芦戸と美亜は観覧席に戻る通用口でぼったり鉢合わせた。普段の様にニコニコと笑いながら話しかける芦戸に対して、美亜は無表情でじつと見つめる。

芦戸は佇む美亜に不思議さを感じながら、一緒に行こうと手を伸ばした。そしてその右腕が未だに血腕である事に気がつく。

「本当にごめんね、右腕だけじゃなくていっぱい蹴り飛ばしちやつて…。でも本当にリカバリーガールの所に行かなくていいの？」

芦戸は謝罪と心配の言葉を述べながら、佇む美亜に近づいた。すると突然、頭の上に美亜の左腕が優しく乗せられる。面食らった芦戸が目を白黒させてフリーズする中、その手がゆっくりとぎこちなく、撫でる様に動き出した。

「芦戸…お前は本当に強かった。先の試合、一つ違えば勝敗は変わっていただろう。正直敗北を覚悟したぞ…。」

自分が成長していないなんて絶対思うな、上ばかり見ても仕方がないだろう。何事も足元を見て一歩ずつ…だ。私もこの2週間そうしてきたのだから」

「美亜ちゃん…慰めてくれてるの…？？」

「ああ、その通りだ」

驚いた表情のまま呆けていた芦戸、その唇が噛みしめられ真一文字に結ばれる。目には涙が溜まり、それでも泣くまいと思うがせり上がる涙をどうすることもできない。一筋零れ落ちた涙が頬を伝い、堰を切ったように止めどなく溢れ出した。

「私…私…っ！勝ちたかった…!!美亜ちゃんに…後一歩で届くって…！強いからとか、憧れてるからとかいくら言い訳しても…：やっぱり勝ちたかった…。勝って横に並びたかった！」

美亜は声を上げて泣き出した芦戸をその胸で受け止め、あやす様に

背中をさすった。

「全く……やはり美波さんは凄いな、これは好き好んでやる事じゃないだろ……」

その表情は一見すれば無だ。しかしここに美波や拳士が居たのなら、その僅かに口角が上がった優しい笑みに驚いた事だろう。

「おー、お帰り美亜。三奈もお疲れ様、接戦でいい試合だったよ。怪我は大丈夫なの？」

「ああ、この程度なら問題ない。それより上鳴は？見たところ既に腕相撲が始まっているのだが……」

美亜と芦戸が戻ると、既に第三戦の延長戦である切島と鉄哲の腕相撲が始まっていた。

第八戦の勝者と戦う美亜としては、詳しく知っている個性の上鳴に勝ち進んでもらいたかったのだが……

美亜と芦戸は耳郎の横に座って試合の様子を聞いた。

「瞬殺だよ瞬殺、ほんつとなす術無くて感じ……」

第八戦、上鳴対塩崎の戦いは瞬殺で終わった。開始早々上鳴は全力の放電をするも、塩崎の個性『ツル』によって作られた盾に阻まれる。そのまま地を這うツルに拘束されあえなく試合終了となった。

「聞いた感じ塩崎さんってすごい強そうだね……美亜ちゃん頑張つて！私の分まで勝ち進んでね！」

『引き分けの末キップを勝ち取ったのは切島!!これで2回戦目進出者が出そろった!つーわけで……そろそろ始めようかあ!』

芦戸の応援に美亜が頷くと同時に、スタジアムにプレゼント・マイクの声が響き渡る。

2回戦の初戦は緑谷と轟。体育祭で好成績を残している2人の対戦に多くの注目が集まる。勝ち残った者も既に敗退した者も、これから始まる激戦を己の糧とすべく熱く視線を向ける。

『今回の体育祭、両者トップクラスの成績!緑谷対轟!START!!』

開始した瞬間、轟の強大な氷結攻撃が緑谷を襲う。対して緑谷も指を弾き、生み出された衝撃波が相殺しあつてスタジアムを揺らした。

しかし緑谷の個性は諸刃の剣、弾いた指はひしゃげて赤黒く腫れあがっている。

「うわあ……えぐいな……。美亜も言われてたけどさ、緑谷の個性もなかなかバイオレンスだよな」

「あ？」

緑谷は2発目の氷結攻撃を相殺する為に再び指を犠牲にした。その様を見た瀬呂が顔を顰めて呟くも、美亜に睨み付けられて慌てて話題を変える。

「怖ーい……いや違ってさ……。でも轟とか爆豪もなんだけどずるいな。強烈な範囲攻撃ポンポン出せるんだぜ」

まさに経験者は語る、苦し紛れの話題転換とはいえ妙に真に迫る表情で瀬呂は呟く。その哀愁漂う背中に上鳴や砂藤が同情する様に手を置き、ドンマイと慰める。

しかしそんな瀬呂に当の爆豪から徹しい反論がぶつけられる。

「ポンポンじゃねえよ、ナメんな。筋肉酷使すりゃ筋繊維が切れるし、走り続けりゃ息切れる。個性だつて身体機能だ。奴にも何らかの”限度”はあるハズだろ」

爆豪は自分の手のひらを見つめて考える。爆豪の”限度”は威力だ。あまりに強力な威力の爆破は自分の汗腺を痛める。先の麗日戦では、瓦礫の流星群を打ち砕いた大爆発で暫く手の痛みが治らなかった。

強力な個性には代償が伴うものが多い。だからこそヒーロー達もコスチュームやアイテムで欠点を補うのだ。彼は小手に汗を溜める事で、許容超過の爆破をノーリスクで打てるようにしていた。

「考えればそうだよな……。じゃあ緑谷はあの轟の相手に耐久戦を挑むつもりかー、でもきつくね？」

瀬呂はそう呟いて再び闘技場での激戦に視線を戻す。轟も緑谷の意図に気がついたようで、強力な氷結攻撃を次々と繰り出す。緑谷もそれを全て打ち消すが、既に両腕はボロボロの有様だ。

緑谷を圧倒する轟、しかし彼の動きに僅かな変化が現れ始めた。戦闘センス抜群の爆豪のみが気付いた僅かな変化、氷結の威力と身体能

力が徐々に弱まっている。

(そういうことか!?ちくしょう…)

それは轟と戦っている緑谷も理解した。そして距離が近いからこそ気付くことができた体の震え、それらを総合して導き出された結論は緑谷に火を付けた。

轟の放った止めの氷結、それをあろうことか壊れている指で相殺する。

「震えてるよ、轟くん。君自身冷気に耐えられる限度があるんだろう…!?それって…左側の熱を使えば解決出来るもんなんじゃないのか……?」

緑谷の鬼気迫る迫力に轟の足が止まる。

轟の”弱点”を看破した緑谷は、壊れた指を握りしめて叫ぶ。

「皆…本気でやってる。勝って…目標に近付く為に…っ!半分の力で勝つ!?まだ僕は君に傷一つつけられちゃいないぞ!全力でかかって来い!!」

緑谷の覚悟に、その言葉に皆が息を呑んだ。緑谷はボロボロになりながら、壊れた指を更に壊しながら轟に抗い続ける。

轟の脳裏に過去の情景が映る。オールマイトを越えるべく作られた自分、厳しい訓練に倒れた自分を庇ってくれた母はいつも父に殴られていた。しかしそんな優しかった母の精神は、いつの間にか壊れてしまった。最後に覚えている記憶の中の母は、化け物を見るような目で自分を見ていた。

だから…俺は親父を……

「君の!力じゃないか!!」

緑谷の叫びに、轟の脳裏に母の記憶が呼び覚まされた。血に囚われず、なりたいたい自分になっていいんだよと背中を押してくれた母。いつの間にか忘れてしまっていた大切な記憶。

轟の左半身から炎が吹き上がる。舞い上がる炎は、今にも泣きそうな轟の表情を照らし出した。

「焦凍オオオ!!やっど己を受け入れたか!ここからがお前の始まり!俺の血をもつて俺を超えて行き…俺の野望をお前が果たせ!!」

突如スタジアムにエンデヴァーの声が響き渡る。しかしそんな声を無視して、轟は緑谷と向かい合った。

「緑谷…ありがとな…」

轟は小さく呟くと、全力の炎を放つ。そして緑谷も渾身の一撃を放った。

散々冷やされた空気が瞬間的に熱され膨張する。緑谷の超威力と相まってとてつもない爆風が生み出された。

闘技場は砂埃と湯気が煙のように立ちこめ、何も見えない。徐々に煙が晴れる。そこには無残に崩壊した闘技場と、ステージに立つ轟。緑谷は場外へと吹き飛ばされ横たわっていた。

「緑谷くん場外…。轟くん、三回戦進出!!」

ミッドナイトが勝敗を宣言するとスタジアムは割れんばかりの歓声に包まれた。緑谷が担架に運ばれ、A組の数名が心配で救護室へと向かった。残った生徒も凄まじい戦いを振り返って何やら話している。

「轟…一つ過去を乗り越えたか。なあ緑谷…お前と戦えば私も……………」

そんな中一人控え室へと向かう美亜、彼女が呟いた言葉は誰にも聞かれる事なく喧騒の中へと掻き消えた。

切島対飯田の試合は飯田が勝利を収めた。短期決戦ばかりだった一回戦と違い、此方も再び長期戦となった。飯田は持ち前のスピードで翻弄しつつ蹴りを喰らわせるが、切島の個性”硬化”によって阻まれる。対して切島の攻撃も飯田を捉えることができない。互いに攻め手を欠く中で一進一退の攻防が繰り広げられる。

しかしこの試合では場外に押し出すことさえできれば勝利できる。飯田のレスプロバーストが解き放たれ、切島の正面から怒涛の蹴りが叩き込まれる。個性の限界を迎え徐々に押され始めた切島は、そのまま場外へと押し出されてしまった。

次の爆豪対常闇は爆豪が勝利を収めた。タイマンでは無類の強さ

を誇る『黒影』だがその弱点は光だ。爆豪は開始早々ひたすら攻め続ける。爆破によって巻き起こされる強力な光に常闇は防戦一方になってしまう。弱り切った黒影が最後の力を振り絞るも、爆豪の放った『閃光弾』で試合が決まった。

常闇の口から「まいった」という言葉が告げられ、スタジアムは爆豪の抜群の強さに大いに沸いた。

「嗚呼…千染さん、貴方は嘘をついていますね…。欺瞞は悲しみを、苦しみを、悲劇を生みます。さあ懺悔しなさい、これは貴方に与えられた贖罪の機会なのです」

次の試合は、千染対塩崎。塩崎は両手を組み、目を閉じて祈るような姿で美亜に告げた。それに対する美亜の反応は無い。いつもの様に無表情、紅く揺らめく眼が塩崎を静かに捉えている。

『さあ次の試合は千染対塩崎！B組はここで意地を見せたいところだ！いくぜ…START!!』

開始早々、美亜が仕掛ける。未だ目を閉じて天を仰いでいる塩崎に対して速攻を仕掛けた。姿勢を低くして最高速度で駆け出す。両の血腕は刀状に変化し、ツルが迫ってくることを想定した上で真っ向から両断するつもりだ。しかし…

「私のツルを前に、逃れる術など無いと知りなさい」

塩崎の目が薄く開き、美亜の姿を見る。次の瞬間、地を這い、空を舞い、四方八方から無数のツルが美亜を襲う。美亜の誤算はツルの速さや量を把握できていなかったことに有る。もし上鳴との試合を見ることができれば、自ら懐に飛び込むという愚策を取ることにはなかったかもしれない。

「なっ…くそ…っ！」

両腕を振るってツルを斬り飛ばすも限界がある。殺到するツルに飲まれた美亜は全身を捕われて行動不能となった。最早一歩たりともそこから進むことはできないだろう。

余りにも呆気ない結末にプレゼント・マイクの驚きの声がスタジアムに響く。

『まさかの瞬殺——！千染行動不能により塩崎の…『待て、まだまだ』
ミシ……ミシ……と微かな音が静まったスタジオムに響く。ツルに締め上げられた美亜が強引に引きちぎろうともがき、ツルが軋む。力技で懸命に脱出を図る美亜に対し、塩崎は涼しい顔で遠くからその姿を眺める。

美亜の個性は『操血』、B組の担任ブラドキング先生と同じだ。しかしこの体育祭を通して見てきた彼女の個性はとて『操血』には見えない。唯一まともに戦闘した物間は競技終了後に頭を悩ませていた。彼曰く「操血…のはずなんだけどねえ…僕にはそれだけでは無い気がするんだよ」だそうだ。

「おやめなさい…貴方に出来る贖罪は己が欺瞞を恥じて告白することです。私も悪戯に貴方を傷つける事は本意ではありません。さあ、降参しなさい」

美亜は激しくもがいてツルを引きちぎろうとしている。ツルの棘が肉に喰い込み、ぶちぶちと凄惨な音が鳴る。じわじわと血が隙間から溢れ、ツルを紅く染めていく。

「貴方は…なぜそこまでして」

「欺瞞…贖罪…罪を告白しろだど？なら教えてくれよ。ここで罪をぶちまけたとして……お前の信じる神とやらは私を赦してくれると思うか？」

塩崎は美亜の鬼気迫る姿に思わず後ずさる。鼻を吐く鉄の匂いと、ドスの効いた声が不気味さを増す。

しかし塩崎も負けるわけにはいかない。ヒーローを志す者として、B組最後の一人として。頭を振り払って恐れを克服すると憐憫を含まない目で美亜の眼を睨み返す。

「嗚呼千染さん、何と罪深き方。穢れし者には裁きを……ッ!!」

美亜を拘束していたツルに一瞬綻びが生じた。縛り上げていたツルが力を失った事で、両腕が動かせる程の隙間が開ける。その一瞬の隙を美亜は逃さない。血腕を刀状に変化させて一閃、ツルを両断して塩崎へと駆ける。

「B組の奴らはどいつもこいつも…勝負の間に気を緩めるとは愚かな

！」
呆けたように立ち竦む塩崎、その目は恐怖によって見開かれている。しかし直ぐに己を取り戻すと美亜を再び封じられるべくツルを放った。

迫るツルを回避する為に、血腕を地面に叩きつけ美亜は大跳躍を見せる。しかし空に逃げ場はない、地を覆ったツルは竜巻の如く渦を巻いて立ち登る。美亜は血を撒き散らしながら、血腕を素早く変化させ自身を囲う球体を作り出した。球体状の盾ならば体とツルの間に空間を作り出し、行動不能となる事を防ぐことができる。

しかしこの最終種目のルールは、単純な戦闘と違い相手を場外に押し出せば勝利となる。そのルールにおいて、空中で相手に捕らえられる事は敗北に直結する。

渦巻くツルに絡みとられた美亜は、自身の作り出した球体諸共捕らえられ、そこには巨大なツルの柱が聳え立った。

今度は完全に封じた、塩崎は額に流れる汗を拭って呼吸を整える。あろう事か勝負の最中に気を抜いてしまい、危険な距離まで詰められてしまった。一度は破られてしまった拘束だが、今度は気を緩めない。もし彼女が策を講じるべく球体を解けば、今も万力の様に締め上げ続けるツルが直ぐに絡みつく。

「千染さん…：貴方の希望は潰えました。嗚呼…：悲しいことです…。ですがいつかご自身の本当の個性を告白してくださいさることでしょう。我がツルよ！謀る者に裁きを!!」

美亜を捉えたツルが場外へとその頭を垂れる。しかし万策尽きたのか、中で球体が解除される気配はない。

「あーこれは決まったな…：塩崎って子は要チエツクだ」

「うーん、千染も頑張ってたけど…：やっぱり攻撃手段が乏しすぎるよね。操血？だっけ、愚直さも悪くないけど…。突進一辺倒では流石に勝てないよね」

このツルが地面に着く時こそ決着、にも関わらず観客の視線はその先に無かった。客席後方の全体を見渡せる位置で観戦していた者、そして一部の目敏いヒーローが見ていたのは塩崎の背後。

「あの子は視野が狭まってしまったな。警戒する気持ちもわかるが：戦況を見渡せる目はヒーローに欠かせないぞ」

突如塩崎の胴を巨大な腕が掴む、それは千染の血腕。目の前でツルの柱に囚われている筈の美亜が、あろう事か塩崎の背後から血腕を伸ばしていた。

「なっ……どうして!」

「はあ……、悪いな塩崎。どうやら勘違いのようだ。すれ違いつて怖いよな?」

(くっ! ツルを……だめ! 柱に使い過ぎた! 間に合わない!)

美亜の血腕が場外へと振り抜かれる。全身を掴まれた塩崎は抵抗すら許されない。想定外の事態に、塩崎は思考を立て直す間も無く場外へと投げ出された。掴まれたままの塩崎が地面に叩きつけられ、主審のミッドナイトが「勝負あり!」と宣言した。

『塩崎茨、場外! 千染美亜、またまた大逆転で3回戦進出だ!!』

『千染の気迫が勝ったな。ツルが残っていれば千染本体を狙うなり出来たのだろうか……「反対側」つまり美亜のいる筈だった方に塩崎はリソースを割き過ぎだ。無意識の内に警戒してしまったんだろう』

一瞬の静寂が流れ、状況を飲み込んだ観客達からの大歓声スタジアムを包んだ。担架を持ったロボットが、かなり勢いよく叩きつけられた塩崎の元へと駆けていく。

勝者の美亜は、大歓声を意にも介さずスタジアムを立ち去った。力を失ったツルから現れた血の球体が糸のように解け、美亜の後を追うようにその両血腕に吸収される。全身に残るトゲの傷が痛々しいが、その表情は相変わらず涼しげでまるで何事も無かったかのようだ。

そんな涼しげな美亜の表情だが、分かる物が見れば呆れたような疲れたような、そんな微妙な表情をしていることが分かるだろう。

(はあ……、何かと思えば『個性』のことだったとは。杞憂に終わって何よりだが……何か知られたのかと思っただぞ。まったく、無駄に疲れた)

通路を歩く美亜は、天井を仰ぎ大きくため息を吐く。

塩崎の言っていた欺瞞、罪とは恐らく明かしていない個性の事だっ

たのだろう。B組の誰か、物間辺りが気付いて入れ知恵したに違いない。冷静になって考えてみれば、面識もない唯の高校一年生が知ってるはずがないのだ。きつと敵襲撃事件のせいで疑心暗鬼となり、余計な事を考え過ぎてしまっている。美亜は「疲れた…」と眩き、ふらついた足取りで皆の元へ向かった。

「成る程なあ…あの球体はブラフだった訳か。注目させておいて、後ろから抜け出した自分は背後に回り込む。そりゃあ目の前で作られたら中に居ると思うよな」

「あの一瞬での判断力は見事だな。ただやっぱ攻撃手段が乏しいよなあ。今の所、予め腕に血を纏って準備してるみたいだけどき」

「血を流さないと戦えないだと困るわね。その時には既に行動不能ですじやあ戦力にならないわ、『操血』だから仕方ないんだけど」

プロヒーロー達は先の試合を分析している。負けてはしまったが、範囲・速度共に優れている塩崎は非常に高評価を受けている。的確に相手を追い詰めていく試合運びも見事、さらにツルによる拘束が可能という点も注目されている。ヒーローは敵を殺すのではなく拘束しなければならぬのだ。

対して、勝った美亜の評価は微妙なものが多い。二試合共奇襲による掠め手などによる勝利で、真っ向からぶつかって捻じ伏せる圧倒的な戦いを見せていない。最終種目のベスト4まで残っているのだから弱くはないが、他の面々と比較すると特段注目する程ではない。可能性があるとすればコスチューム次第で化けるかも。というのが大半のヒーロー達から見た美亜の評価だ。

しかし一部のヒーロー、より実力のある者は美亜の違和感に気づいた。

「へー、あれが例の千染くんですか。どう思いますエンデヴァーさん」
「黙れ、あんな奴に興味はない。炎を使うショートに敵う奴などいな
いからな。そもそも何故お前がここに居る、ホークス」

一般観客席の上にある招待席、そのテラスに降り立ったホークスは、エンデヴァーからの視線に肩を竦めて戯けた。

「そんな暇まないくださいよ、暇だったから来てみただけです。そしたらエンデヴァーさんが見えたから挨拶でもと思いましたが……」
「それでわざわざ福岡から来たというのか？くだらん嘘をつきおつて……」

No3ヒーロー、ホークス。今年のヒーローチャートJ.Pで、21歳にしてトップ3入りを果たした最注目ヒーローだ。性格はマイペースで不遜、雲を掴むように何を考えているのか理解ができないと同業者からは言われている。突然来訪してきた彼に、エンデヴァーは呆れたような冷たい視線を送った。

「ねえエンデヴァーさん、あの子、血を操る”だけじゃないですよ。まさか……気付いてないです？」

「茶化すな小僧。もしかしたら操血と増幅のハイブリット個性やもしれんが……ショートの足元にも及ばんザコ個性だ」

エンデヴァーはそう言い放つと、試合前の轟に声をかけるべく席を立った。残されたホークスは退場する美亜の背中を見て呟く。

「あれが敵襲撃事件の……。成る程ねえ、あり得るなら『再生』やろか？……だとしたら相当な強個性だと思ふんよなあ」

ホークスが聞いた情報では、信じがたい事に彼女は脳無と一対一で耐え凌いだらしい。オールマイトと撃ちあえるパワー、再生など、複数の個性を有する「改人」。渡り合う彼女は一体どれほどの実力なのかと思つて見に来たが、とてもそんな実力があるようには見えない。

しかしそれも操血に再生が合わさった個性であると考えれば納得できる。つまり渡り合ったのではなく、ただ死ななかつただけなのだ。一通り試合を見てきて、確信は持てないが荒唐無稽な説では無い筈だ。先程救護室の助手に聞いたが、美亜は第一試後に折れた腕を治しに行っていない。ならばこの短時間の間に、骨折とあれだけの全身の打撲をどうやって治したのか。

「話……聞くべきなんかねー。インターンか……ヤなんだよな、ああいう死生観がぶっ壊れたやつは」

相変わらずだらりと立ちながら、ホークスは空を見上げる。個人的には最高に関わりたく無いタイプの人間だ。死なないとはいえ、勝て

るはずも無い脳無に突撃してる時点で精神的に何処かおかしい。いくら雄英高校の生徒とはいえど、まだ15歳の高校生だ、死地に躊躇なく飛び込むなどあつてはいけない。ヒーローは自己犠牲で死にかけることが仕事では無い。生きて、背中を見せて、多くの人を安心させる者こそ真の……

「おっと、考え過ぎたな。オフなんだし気楽にいかんと疲れるわ」

悩んでも考えても、どっちにしろ私情など要らない。より良い世の中を、ヒーローが暇を持って余せる、そんな世の中を作る為なら何だつてする。それが俺の役割なのだから。

第27話 血濡少女と体育祭 最終種目：3

「チツ…オイ黒霧…。なんでこんなクソ茶番を見なきゃならないんだ」

とある一室、電気も付けず、カーテンが締め切られた窓からは光も刺さない。そんな真つ暗な部屋には爛々と輝く一台のテレビ、その前に一人の男が座っていた。

「そういわずに…先生からの指示です。雄英高校体育祭、それも一年の部を見ると」

「ああクソッ…特にこいつだ。顔見るだけでイライラするんだよ」

テレビの前に座る男、死柄木弔は忌々しそうに首を掻き篦りそう吐き捨てた。

画面に映るのは、雄英襲撃事件の際に邪魔をしてきた化け物女だ。名は千染美亜というらしい。あの女は原型を留めないほどズタズタにした筈だ、にも関わらず2週間後には元気に体育祭に出場している。見たところ傷や後遺症など何処にも感じられない。あの時と同じ、何故か見れば見るほど不快感を覚える顔と目を携えて。

(『再生』、全く…キモい個性だゼクソが…)

「やあ弔、すっかり見ていてくれるようで何よりだ。それで千染美亜…、この子が脳無と戦った”死なない少女”だね？」

「先生…ああそうだ、あの時の傷はどれも間違いなく致命傷だったはず。それなのに痛みに叫ぶ事も、恐怖する事も無く、何度も何度も立ち上がってきやがった。個性も精神もイカれてるクソ女だ」

テレビの横のモニターが点灯し、SOUND ONLYの画面から音声^Aが流れる。その声の主は彼らが”先生”と呼ぶ人物、オール・フォー・ワン^Fだ。かつて裏社会から日本を支配していた「悪の帝王」「究極の悪」と呼ばれる存在。彼は5年前オールマイトに打ち倒されるが、生命維持装置を付けながら今も生き延びている。

「弔、彼女をよく見ておくんだよ。

それにしても…運命かな？まさか雄英高校に居るとはね。少し残念になってしまったけど、それでも充分だ」

「あ？先生…話が見えねえ。確かに『再生』は厄介だが、あの程度なら脅威じゃねえ。そもそも関わらなければいいだけの話だ。何故そんなにあの女に拘る」

美亜の事を話す先生はいつになく上機嫌だ。それも死柄木の苛立ちをより一層掻き立てる。剣呑な雰囲気を感じそうともせずに関わられられた質問に、AFOは諭すような優しい声色で答えた。

「そうだね、話しておこうかな。彼女は将来君の優秀な右腕と成るだろう。その時の為に、部下のスキルを把握しておくべきだとは思わな
いか？」

「ちよつと待つて下さい。彼女は敵側のスパイなのですか？もしやヒーローの内情を探らせているとか…」

黒霧は慌てて先生に問いかける。もし彼女がAFOの部下であるならば、USJの襲撃で相対したのは失態かもしれないからだ。彼女はこの体育祭を見る限り、明らかに意図して個性を隠している。だがUSJの戦いで彼女は様々な個性、戦闘能力を晒してしまった。恐らくあの場を見ていた者はいないと思うが、それでもリスクを生んでしまったことは事実だ。

「それでもあるし、”まだ”それでも無いとも言える。弔ならわかる筈だ：USJで相対した時に、千染美亜から何を感じた？」

AFOは優しく、まるで教えるように問いかける。死柄木は天井を見上げ、少し考えこんだ。そして思い出したようにポツリと呟く。

「ああ…眼…だな、こっち側の人間がする…あるいはそれ以上かもしれないねえあいつの眼…。あの女の本質は敵だ、それが無理やりヒーローの皮を被っている…そういうことか先生」

「素晴らしい、素晴らしいよ弔。まさにその通りだ。そうだな…ご褒美に少し彼女の過去について教えようか」

AFOはいつになく上機嫌に、そして饒舌に話し出す。死柄木から雄英高校襲撃事件の報告を聞いたAFOは、気になった「不死身の化け物女」を調べたのだ。

「千染美亜、本当に可哀想な少女だよ…。戸籍上彼女の出生は不明のままなんだ。分かっているのは1歳でNo.8ヒーローの元へ引き

取られたという事、そして5年前、10歳から熱犬孤児院で暮らしているという事の2つ。

そして調べて判明した事だけ……彼女は、No. 8ヒーローの元で常人なら死に至る程の虐待を受けていたようだね。一糸纏わぬ姿で地下室に閉じ込められ、半死半生の状態で8年間も過ごしていたらしい……”お前は危険だ”、”化け物”と言われ続け、尊厳を踏みにじられ、人間らしく過ごした日々は人生の半分にも満たない”

「成る程……であればあの驚異的な再生速度にも納得がいきます。幼少期から幾度となく傷つく事で、個性を無理矢理鍛えざるを得なかった訳ですね」

黒霧は興味深そうに頷きながら、考えを巡らせる。しかし死柄木はつまらなそうに肩を落とすと、深いため息を吐いた。

「はあ……何かと思えばくだらねえな先生。同情でもしたのか？虐待されてたからヒーローを怨んでいる、だから敵側に寝返るかも……って……。四流マンガ家でももうちよいマシな話書くぞ」

一瞬、虚を突かれたような静寂が訪れる。機嫌が悪くなってきた死柄木を宥めるように、そして心底愉快そうにAFOは言葉を続ける。

「違うよ、むしろ逆さ。No. 8ヒーローが正解なんだよ。彼女は危険で化け物だから、ヒーロー達は虐待程度で済ませるべきでは無かつたんだ。成長し、取り返しがつかなくなる前に息の根を止める。これが最善だった。」

しかしあろう事かヒーロー達は彼女を救い、愚かにも雄英高校に入学させた。彼らは自らの手で巨悪を育んでいるんだよ。ああ……本当に面白い、実によく出来た喜劇だ。彼女はね……」

画面の向こうからくつくつと、AFOの堪え切れなくなった笑みが聞こえる。異様な様子の先生に、次の言葉を待つ2人は画面に顔を向けた。

AFOは親が子供に向けるような、暖かく慈しみのある声色で言葉を紡ぐ。

「彼女は……僕とドクターが”創った”最高傑作、改人『ラミア』……脳無の始祖だよ」

「まさか……」「おいおい……まじかよ」

「だから……」今度は、僕達が救ってあげる番だ。やっと見つけた、今も尚ヒーロー達に囚われている哀れな僕の娘^美を……」

試合を終えた美亜は、クラスメイトの待つ観客席に戻る事なく控え室へと向かうことにした。

（轟と飯田の試合は直ぐに決着がつくだろう、少しぐらい休む時間を稼いでくれるといいんだが……）

その足取りは勝者には見えない程に重い。全身が鉛の様に怠く、少し頭に鈍痛が響いている。ここまで一日中連戦に次ぐ連戦、最終種目は二試合ともかなり激しく消耗してしまった。

美亜はフラフラとした足取りで控え室に着くと、ドアを開けた。

「あ?」「ん?」

何故か美亜の控え室に爆豪が座っている。視線が交差し、微妙な時間が流れる。ドアを開けた状態で固まっていた美亜は、一度控え室のプレートを確認し、ここが自分の控え室である事を確認して深くため息をついた。

「オイ、間違えたのは俺だけだよ……その反応はムカつくなあ……!」

その反応が間に触ったのか、爆豪は乱暴に席を立つと美亜に詰め寄る。しかし美亜は黙ったまま横をすり抜け、椅子に座ると背中を預けて天井を仰ぎ見た。露骨に疲労が溜まっている事をアピールしている。仮にも勝利を宣言した相手の、あんまりな有様に爆豪の苛立ちが募る。

「次の相手はオレだぞ。そんな状態で勝つ気あんのかよ?」

「んー、まず勝てないだろうな。たがまあ……自分でもここまでよくやったと思う。まさかベスト4まで勝ち上がれるとは思ってもしなかった」

美亜は机の上に伏せ、もぞもぞと腕枕の位置を調整している。何かあったのかすっかり気が抜けており、こっちの話など欠片の興味も無いようだ。

試合前にも関わらず、これだけ気が抜けている美亜に腹が立つ。そして何より、初めから負ける事を受け入れているその態度が気に喰わない。

「あんな雑魚供に勝っただけで何満足してんだ、腑抜けてんじゃねえ。テメエが本気出せば瞬殺だろうが！」

「雑魚…？それは聞き捨てならんぞ。芦戸も塩崎も、私に勝つべく策を巡らせ必死に戦った。その努力をなんだと思っっている」

うつ伏せになっていた美亜の頭が動き、枝垂れた髪の間から紅の瞳が覗く。片眼だけでも分かる、さつきまでの腑抜けた雰囲気霧散しつつある。

「あ？違わねえだろうが！雑魚は雑魚！とにかくテメエは、とつとと本気出してオレとやればいいんだよ！どいつもこいつも…いつまで舐めプしてやがんだ！クソ!!」

爆豪は雰囲気の変わった美亜を一瞥すると、乱暴な言葉を残して部屋を去った。怒りに任せて叩きつけられたドアを見て、美亜は呟く。「お前の高い志は、称賛されるべき美德だと思うが…。なんだろうな、すこしムカつく…。」

困惑する美亜の心境とは裏腹に、紅い眼の中に炎が揺れる。静かに、けれども確かな獰猛さを含んで。

ストレッチをしつつ静かに体力を回復させていた美亜の耳に、湧き上がる歓声が聞こえる。恐らく先の飯田対轟の決着が付いたのだろう。爆豪との戦いに冷静さと僅かな興奮を抱きながら、一つ伸びをして控え室を出た。

『轟対飯田のハイスピードな戦いに会場もオーバーヒート！このまま次行っちゃおうか、準決第二試合！ここまで逆転に次ぐ逆転！クールな表情の内に、意外と泥臭いガッツがあると見た！千染美亜!!対するは圧倒的な実力で勝ち抜いてきた優勝候補筆頭！相変わらずの悪人面！爆豪勝己!!決勝に進むのはどっちだ!』

(あれだけ煽っても澄まし顔かよ…だが今はそれで良い。とつとと個性暴いて、嫌でも本気にさせてやる)

美亜と相対する爆豪は、寧猛な笑みを浮かべて思案する。部屋を間違えたのはわざとだ。戦う前に発破をかけたかったのも理由の一つ。いつまでも舐めプをする美亜は見てて苛つく、脳無と戦ったとされるその実力を十全に発揮させ、その上で完全に勝利する。

脳無とオールマイトの戦い。それを一番近くで見ていた爆豪は、彼らが立つ遙かな高みを実感した。しかしオールマイトと打ち合える程のパワーとスピードを持つ脳無を相手に、立ち向かい時間を稼いだクラスメイトが目の前にいる。己が遙か高みを超えるためにその実力を目にしたいし、何よりも負けたくない。

(芦戸戦で見せた触手は厄介だ、アレをやられたら流石に俺でも苦勞するかもしれないねえ。やるなら速攻、最速で懐に飛び込んで……奴の個性を暴く！)

爆豪にとって1番以外はゴミだ。また与えられた1番もまたゴミに過ぎない。全身全霊をかけて立ち向かってきたヤツ、それを完膚無きまでに叩きのめして1番になる。それこそが彼の望む1番、トップなのだ。

だからこそこの戦いも先ずは美亜の本気を引き出す事から始まる。個性を暴き、使わせる。それこそが部屋をわざと間違えた真の理由。あの時得た推察を確かめるために、接近戦を仕掛ける。

『それじゃあ行くぜ!!レディーS.T.A.R.T!!』

開始の瞬間、爆豪は手の平を後ろに向け、爆破の推進力で美亜へと突撃する。初速を最大火力で一気に加速、その後は足の動きに合わせて爆破のタイミングを調整し、効果的に最大速度を引き出している。その速度はプロヒーローですら目を見張るほど、使いこなす彼のずば抜けたセンスがなせる技だ。

『爆豪ーいきなりすげえ速度で突撃ー速すぎるぜ!!』

対する美亜は迫る爆豪に向け、両血腕で襲いかかる。爆豪の並外れた加速、しかしそれは諸刃の剣でもある。爆破によって生み出された加速は簡単には止められない。確かに機動力も抜群ではあるが、それはあくまでそれを想定した速度を出しているからだ。だからこそ、馬鹿正直に最高速度を出す爆豪を正面から捉えるのは難しくくない。

巨大化した美亜の血腕が爆豪に迫る。鋭く尖った指先が爆豪を捕らえんとしたその時、流水のような動きですり抜けた。僅かな手の平の向きと加速が弱まった瞬間を狙い、速度を殺さず、かつ最小限の動きで推進力を維持したまま回避をして見せたのだ。

「なに!?!」

「遅えんだよクソが!!」

爆豪は止まる事なく、寧ろさらに速さを増して向かってくる。伸びた血腕を地に落とし、防御の為に通常よりサイズまで戻した美亜は、彼我の実力さをふつつつと思いい知らされていた。これ程の速度を出しておきながら、それでも自在に動き回る。相当に個性を使いこなして、そこに抜群のセンスが加わらねば、この年でこれ程の芸当は無理だろう。正面から迫る爆豪に対し迎撃の準備を整える。爆豪が目の前で腕を振りかざした瞬間、血腕を変化させ盾を作り出す。とにかく勢いを殺さねば話にならない。彼の攻撃の中で最も単純な正面からの初撃を何としても防ぐ。

しかし振り上げられた右手は美亜に向かう事なく、地面に叩きつけられ強力な爆破を起こす。衝撃で飛び上がった爆豪は、空中で一回転すると、美亜の頭を押さえつけるように上から爆破を叩き込む。衝撃で前のめりになった所に、着地して追撃で顎に爆破。カチ上げられた美亜は状態を大きく逸らしてのけ反った。

『怒涛の連撃がヒット!!これは痛え!?!つかなんて機動力だよ!流石の千染も爆豪の速度に対し手も足もでねえか!?!』

がら空きの腹部に渾身の一撃を叩き込もうとした爆豪は、美亜の体から鳴るぶちぶちと何かが切れる様な音を聞く。そして上から迫るものを感じ両手の平を空へと向ける。

「押しっ……潰れる爆豪!」

爆豪を覆った影は、美亜の両血腕を合わせた巨大なハンマー。仰け反った体勢から、敢えて後ろに叩きつける事で反動を生み出した。筋繊維を引きちぎるほどの力で踏ん張り、渾身の速度で血鎚を振り下ろす。

「だから……甘えつつてんだろクソが!」

爆音が鳴り響き、眩い閃光が柱となって立ち上がる。凄まじい爆風、砂埃と共に美亜の血腕が千切れ飛び空を舞う。

『マジかよ爆豪！麗日戦と同じ？いやそれ以上の渾身の爆破で、美亜の一撃諸共その血腕をブツ飛ばした!!っーか砂埃で見え辛すぎんぞ!』

渾身のカウンターを正面から打ち碎かれた美亜は、砂埃の中で離脱を図る。しかし足の筋繊維の再生が間に合わず、動くことができない。

血腕を再び生成しようとしたその時、爆豪の手が右腕の断面を掴んだ。

「テメエ…：やっぱりかよ…」

手の平に伝わるのは美亜の肌の感触ではない。生暖かい血と生々しい肉の感触。美亜の二の腕から先は無く、剥き出しの肉から赤々とした血が滴り落ちる。

「この…：離せ!!」

常人なら思わず手を離すであろう異常事態。だが爆豪は更に強く掴むと、美亜を引き寄せる。砂煙の中から現れた美亜の表情には、痛みや苦しみなどは感じられず、ただ爆豪を強く睨みつけ怒りを爆発させている。

「再生…：ハッ！やっぱりそう言うことかよ。『操血』に『再生』、マジでどうなってやがんだテメエの個性は！まるで複数個性持ちじゃねえか。いや…：それよりも痛くねえのかよ。

痛みを感じなくて個性も複数…：そんなマジで…：脳無みてえじゃねえか！」

第28話 血濡少女と体育祭 最終種目：4

「テメエ……マジで脳無みてえじゃねえか！」

「離せと……言っ……はず……！クソっ!!」

振り上げられた美亜の左血腕が、爆豪の脇腹に鋭くめり込む。怒りに任せた乱雑な拳、ただこれまでの彼女とは違う全力の一撃は、爆豪に相当な衝撃を与える。肋骨がミシミシと軋む不快な音を体内から感じ、酸素が肺から吐き出され視界が揺らぐ。美亜は思わず力を緩めた爆豪を振り解き、距離を取るべく全力で後ろへと跳躍する。

観客の視界に、ようやく土煙の中から美亜が姿を表した。その両腕は既に血腕が形成されており、観客に驚きはない。それでも会場がどよめいたのは、その人間離れた大跳躍。まるで羽根のように軽々と、ひとつ飛びでステージの端まで飛んでみせたのだ。

「その足……ハッ！そんなこともできたってわけかよ！」

すっかり遠くに逃げられてしまった美亜の足は、太ももまで赤黒い血で染まり、血管のような真っ赤な線が無数に走っていた。まるで鎧のように足に纏った血が、他に劣る美亜の身体能力を大きく補強する。

（一体どこまで隠してやがる……後は何ができる……？今のは脚部の強化、そもそもアイツはどこまで強化できる、まさか全身までいけんのか？）

爆豪は慎重に美亜を見据え、次の手を思考する。強力な個性を持つ美亜の、圧倒的な弱点であった身体能力の低さ、それが脚部のみとはいえ補強されている。もし素早く動けるなら？あれが血腕と同じく伸縮するのだとしたら？それどころか全身を補強できるのなら？

（何考えてんだオレは！わかんねえ情報ばっか考えてもどうせキリがねえ、アイツ隠し玉が多すぎんだよ！それよりもっと重要なことがあるんじゃないか）

立ち込める砂埃の中、爆豪だけがみた光景。両血腕をちぎり飛ばさ

れ血を撒き散らす美亜には、痛みや苦しみ、それらを我慢する素振りすらなかった。そもそも両腕を千切られるなど、我慢できる痛みではない筈だが……。美亜の血腕は腕を覆っているものだと思っていたが、その実は腕を切断し、そこから流れる血を腕状に形成していた。

（つーことはあれか？今まで血腕使うたびに腕切り飛ばして、再生してたってことか？やべえな……イカレてやがる）

考えられるのは無痛、あるいはそれに準ずる感覚の欠如。それが『再生＋操血』という肉体的損傷を伴う個性由来のものなのか、生まれつきの疾病なのか、あるいは別の外的要因によるものかは判別できないし、この試合においてする必要もない。

重要な事は、『再生＋操血』という強力な個性。それと先の無理な体制からの鎚撃の様に、痛みを感じない事で、身体構造の限界を超えて得られる常人離れた筋力。その2点、それだけを頭に入れて作戦を組み立てる。他の事は臨機応変に対応すればいい。爆豪にはそれが出来るだけの機動力と突破力があるし、先程のダメージは痛むが深くはない。

確実に美亜の本気を引き出しつつある、その実感に爆豪は、その笑みを更に獰猛にして獲物を睨みつけた。

「黒装？いや……鮮血の鎧か……」

「互いに動かないわね、様子見かしら？」

「無理もねえよな。千染ってあんな身軽に動けるのかよって感じだろ」

「引き出しの多さにも驚嘆ですが、美亜さんは咄嗟の対応力もありますのよね」

開始早々の激しい攻防、美亜の渾身の鎚撃、それを正面から打ち砕く特大の爆破。土埃でその後の様子は見えなかったが、聞こえた爆破音から、激しくぶつかり合っていた事は想像に難くない。

だが再び現れた美亜と爆豪は、距離を保ちながら膠着状態にある。急激な温度差に首を傾げるクラスメイト達、唯一常闇だけが何やら浮き足立っている。

皆の意見は、膠着状態も仕方がないという爆豪への同情が大勢だ。なにしろ相手は千染、思考が表情に出辛く、何をしてくるか分からない不気味さが常に付き纏っている。何より個性の全容が未だ不明なのだ。新たに見せた脚部の増強が彼女の全力だ、と思ってしまう程爆豪が楽観的な筈はない。伏せ札を多く持つ美亜から仕掛けない限りは、警戒して攻めあぐねてしまうのは必然だろう。

「美亜ちゃん…?」

相手を鋭く睨みつける爆豪、対して美亜は俯いたままダラリと腕を垂らしている。一見無防備に見える彼女に、臨戦体制の爆豪は攻めるタイミングを図る。再びぶつかり合う時には、どんな激しい攻防が観れるのだろうか。

多くの観客が固唾を飲んで見守る中、芦戸は一人胸騒ぎを感じていた。纏う雰囲気、その姿が、あの時の彼女と重なって映る。

USJで、無数の敵を前に見せた狂気に濡れた姿に。

「爆豪………に…逃げろ……」

「あ? 何で俺が逃げんだよ! こっからだ、こっからが本当の勝負だ! 種明かしは済んだぜ、本気出してかかって来いや舐めプ女!!」

俯く美亜の口から微かに紡がれた警告、それを爆豪は足蹴にして更に挑発する。

(そういう所がムカつくんだよ、この女はいつもそうだ。分かったよ。うな態度を取って、内心では見下してやがる。優勢なのはオレだ、テメエはオレが叩き伏せてやる! 待ってやがれ、今その澄まし顔を屈辱に歪めてやる!)

「さっさと…本気で全部ぶつけて来いや! どんな狡い手だろうがねじ伏せてやるからよオ!」

突然、美亜が首を掻き始めた。爆豪の挑発を受けて何を感じたのか。その表情は伺えない。チョコカーからガリガリと硬質な音が鳴り、流れる血で白磁の肌に紅の線が走る。掻き鳴らす不協和音の中から、微かに何かを呟く声が聞こえて来る。掻き掻く力が徐々に強まり、もはや首を抉っているのではないかと錯覚する程だ。

「舐めプ…本気…マジ…ああ五月蠅い。煩わしくて堪らない。いいのか…いいよな……」

突如、首を掻く手がピタリと止まった。そして呪詛のように何かを呟き続けながら、ギクシヤクとした動きで顔を上げる。

（くっそ、なんだコイツ…。明らか雰囲気が変わりやがった。なんだか分からねエがこれ以上はヤベエ！さっさと潰す！）

爆豪を襲う悪寒、頭の中で警鐘が鳴り響く。それを振り払うように一発、両手の平で爆破を起こし、発生源の美亜に向けて足を踏み出す。

だが、たった一歩でその足は止まった。否、止められた。彼女と眼があつてしまったから、その紅く燃え上がる眼に見入られてしまったから。溢れる狂気と恐怖で、絶対零度に晒されるかの如く全身が凍りついた。

「……………失せろ」

天に掲げられた血腕が刀状に変形し、美亜の首を切り裂いた。

「美波！チョコカーが!!」「止めて！相澤くん!!」

鮮血が空に迸る。切り裂かれたチョコカーが地に落ち、一瞬の静寂の後、状況を飲み込んだ観客達から悲鳴が上がる。

「相澤！」「クソ！分かつてる!!」

相澤の最悪の予想が的中してしまった、まさか美亜の方が暴走するとは。パワーローダー先生が言っていたチョコカーに搭載された機能、締め上げる他に高圧電流を放つことが出来る。美波さんが危険な目に遭うと言った対象が、美亜では無くその相手だともいうかのようだ。

だがその可能性があるのではないかと薄々考えていた。慎重で計算高い美亜が、USJで敵の首魁を前に、たった1人で立ち向かう事など特に妙だった。何がトリガーかは不明だが、彼女の『個性』は暴走する。そして彼女の精神はそれに大きく影響されてしまう。どんな変化を遂げるにしろ、見る限り良いものではないのだろう。

「セメントス先生!!」

美亜の四方に壁が聳え立ち、その姿を覆い隠す。セメントス先生の

個性『セメント』が、暴走する美亜を長方形の箱の中に閉じ込めた。相澤は先のUSJで負傷しているため、『抹消』が本調子とは程遠い。効果範囲や持続力などを考えれば、近くで彼女の個性を消しつつ、速攻で捕縛する必要があるだろう。その為の時間稼ぎとして、とりあえず観客からの視線は遮ることができた。

雄英高校体育祭に多少の怪我はつきものであり、流血や打撲、場合によっては骨折すらも想定の内だ。その為にリカバリーガールを含めた優秀な医療班が準備している。それでも首から血を吹き出す女子生徒というのは、テレビや観客に見せても良い範疇を超えている。「相澤先生、この壁はそう易々と破れない筈です。落ち着いて降りて来てください、それから捕縛しましょう」

セメントス先生の冷静な指示、そして一先ずは封じ込めたという事実を胸を撫で下ろす教師達。観客達は未だ騒ついているものの、状況を把握すべく美亜を注視する。

その時、静まり返ったスタジアムに、鈍い打撃音、何かを壁に打ち付ける音が響き渡る。初めは弱々しく断続的に、しかし徐々に強さと連続性が増していく。まるで無数の拳が打ち付けられているかの様な異音、発生源は明らかに箱の中だ。

「中で…何が起きているんだ…?」

「急いで下さい! 千染さんが危険な状態かも知れません!!」

そんな事は分かってる。本来ならなんてこと無い距離、万全では無いこの体が恨めしい。横でマイクが「俺が抱えてやる」と言っているが、たいして変わらないので一蹴する。いつその事飛ぶか?もしかしたら着地出来るかもしれない。例え出来なくとも『抹消』が使えればそれでいい。

相澤の思考が危険な発想にかかり、窓を突き破ろうと拳が振り上げられ――

「もう大丈夫だ相澤くん! 私が来た!!!」

「オールマイト先生…遅いですよ」

オールマイトがドアを勢いよく開け放って現れる。悪態をついたが、この状況に最適な人物だ。いじけて人差し指をつんつんしている

オールマイトに、構わず端的に指示を飛ばす。

「オールマイト先生、俺を抱えて箱の上まで飛んで下さい。どうなってるか分からない状況で壁を開ければ、生徒たちや観客に被害が及ぶ可能性がある。それに…あの状態の千染を見せるわけにはいかない。上からなら大丈夫です、俺が『抹消』で千染を止めます」

「了解した!!しかし…大切な友人達の為かい?全く…君も無理をするね」

「今はあの2人は関係ないでしょう。早く飛んで下さい」

相澤を抱えて、開け放たれた窓枠に足をかけたオールマイト、包帯から除く鋭い視線にやれやれと首を振った。

「H A H A! 誰とは言っていないんだけどね…。さあ行くよ! 千染くんを助けに!!」

次の瞬間、凄まじい衝撃波と風圧を残してその姿が掻き消える。たった一蹴り、弾丸のように射出されたオールマイトは空を飛び、既に箱の上空へと到達していた。重力に従って落下しながら、セメントスへと指示を出す。

「箱の上を開けてくれ! 私と相澤くんが彼女を助ける!」

「オールマイト先生!? 相変わらず無茶をしますね…分かりました、彼女をお願いします!」

セメントが粘土のように動き、上部が開いていく。恐ろしい打撲音の正体は、そして美亜は一体どうなってしまったのか、緊張が走る。オールマイトは不測の事態の為に、相澤は決して見逃すまいと痛む目を目一杯開いた。

「千染は…:…っ!!」

視界に飛び込んできたのは無数の触手、蠢いてセメントの壁を殴打している。さらに鼻をつく鉄の匂い、ヒーローなら嗅いだ事のある匂い、濃厚な血の匂いだ。

上空から刺す日の光に気付いたのか、触手の動きが止まる。その隙間から中央で佇む美亜が見えた。切り裂かれた首から、千切れた両腕からも大量の血が噴き出し、箱の中に血の池を作っている。

「相澤くん…いけるか?」

「ああ、この距離なら……!!」

『抹消』を使おうとしたその時、美亜が顔を上げた。その紅眼からは、血の涙が止めどなく流れ落ちていた。

相澤の脳を過ぎる無数の記憶。

騒がしくも悪くなかった、楽しかった学生時代。

助けられなかった、目の前で失った大切な親友。

もう二度と失わないように、必死で鍛えた駆け出しのプロヒーロー時代。

そう願っていた矢先、再び失った尊敬する先輩と親友。

あの日は不穏な空気が漂っていた。朝方、強盗事件が立て続けに2件起き、昼頃、町外れの廃工場が大爆破を起こした。そして夕暮れ、惨死体が発見され2人は姿を消した。必死で探したが、自分には何もかもが足りなかった。結局、手掛かり一つ掴めないまま真相は闇へと消えた。

誰も守れない、誰も救えない、自分ではダメなのだ、誰かを引っ張っていけるヒーローを、失いたくない、もう二度と…誰も……。

「……んー……くん！イレイザーヘッド!!」

自分を呼ぶ声で現実へと引き戻された。全身は汗だく、呼吸は荒くなり、心臓が煩いほどの鼓動を繰り返している。

「オ……オールマイト…一体何が……?」

しかしそんな隙は許されない。相澤が意識を飛ばした間に、美亜が血のドームで自身を覆い隠してしまう。これでは『抹消』の視線が届かない。そして無数の触手がオールマイト達に向けて殺到する。

「SHIT!!説明は後だ！上に投げる、安心してくれ！絶対にキャッチするから!!」

次の瞬間、思考がまとまらない相澤は浮遊感と風圧で意識をハッキリとさせる。自分が放心してしまったせいで、遙か下にいるオールマイトに触手が襲いかかる。

(何やってんだ俺は……クソ!!だけど……)

「千染を…お願いします! オールマイルト!!」

「まったく…後輩にここまで応援されたら…やるしかないよな!!」

マッスルフォームの余力は残り少ない。無理をすればするほど削られてゆく己の力、それでも、無理をしてでも助ける理由がある。あの無表情が、そこに揺らめく目が、助けを求めていたから。暴走してしようと、此方に敵意を向けていようと、数え切れないほど見てきた守るべき人達と同じなのだ。

振り上げた拳に力が漲る。迫る触手、遮る球状の盾、それら全てを跳ね除けて相澤の『抹消』を届かせねばならない。ならばやってみせよう、これから悩み苦しむであろう彼女を、我々が良き方向へと導けるように。

「見ていてくれ、そして目指してくれ千染くん!!?! 命を賭けて人を助ける、ヒーローの姿を!!?! DE T R O I T S M A S H!!!」

振り下ろされたオールマイルトの拳が、衝撃と爆風を持って触手を消し飛ばしてゆく。コンクリートの壁が栓となり、爆風が天へと螺旋状に舞い上がる。美亜を守っていた盾は、全方向からの圧を受けひび割れ砕け散った。怯えたように蹲り、頭を抱えている美亜の姿が露わになる。怖かっただろう、未知なる力に己を失うのは。寂しかっただろう、闇の中で唯一人取り残されるのは。

「もう大丈夫…! 相澤くん!!」

「分かっています…! 今度こそ…!!」

上空から落ちてくる相澤をキャッチしたオールマイルト。今度こそ失敗しないよう、これ以上苦しめないように、相澤が全力で目を見開く。ついに『抹消』が発動した。

蹲る美亜の両手と、さらに溜まっていた血が霧散して消え去る。手を失った美亜は、うつ伏せの体勢からそのまま地に倒れ伏した。着地したオールマイルトが慌てて駆け寄る。

「千染くん! 私に来たぞ、もう大丈夫だ!!」

どう見ても大丈夫ではない。手は二の腕から先が無く、切断面から血が溢れるように流れている。迸るような勢いではなく、ドロドロと

粘性を持って、それでも確かな量が地に溜まる。

「オール……マイト……？ 私は……何を……？」

「相澤くん!! ヤバいぞ! 彼女死にそうだ!!」

美亜は正気に戻っているようだ。『抹消』によって増幅されていない本来の血が流れたのだろう、顔面は蒼白になっているが何とか受け答えはできている。だがこのままでは失血死をしてしまう。

相澤が『抹消』を解除すると、腕の切断面から流れる血が量を増し、繊維状に絡み合って血腕が形成された。

「とりあえず医務室に行くぞ。お前は暴走したんだ、ここまで来たらもう隠すなよ。個性について全て話してもらおう」

変わらぬ表情から美亜の心境は何えない。それでも、地に伏せるその瞳が微かに揺れ動いた。

「そうか……、やはり私は……」

そして諦めたように瞼を閉じると、一言、そう微かに呟いて意識を失った。

第29話 血濡少女と体育祭：最終話

「ん……んこは……？」

臃げな意識を手繰り寄せ、鉛のように重い瞼を無理矢理こじ開ける。蛍光灯の白光が眩しく、思わず目を閉じてしまいそうになった。どうやら此処は雄英高校の保健室らしい。周囲を仕切るカーテンも、寝かせられたベッドも眩い純白で、自分が酷く重症の病人のように感じる。

美亜は気怠い体を起こし、霞んだ視界で身体を見下ろす。血に塗れた体操着は病衣に着替えさせられ、両手腕は二の腕まで包帯でぐるぐる巻きにされている。ただ、手腕の内部で素の腕は『再生』されているため、外傷は全く無い。

それでも意識が朦朧とし、頭には鈍痛が響く。精神的なものか、あるいは個性の暴走の代償か、何にしろ油断すれば再び気を失いそうだ。

「私は——」

あの時、黒く塗り潰され、侵されてゆく意識の中で、脳裏にフラッシュバックした無数の記憶。記憶と呼ぶにはあまりに断片的すぎるそれは、忘れたかった、封印していた過去。

「結局私は——あの時から何も、何一つ変わらないのか」

表情は変わらなくとも、その声には落胆の色が隠しきれない。乱雑に体をベッドに預け、真っ白な天井を見上げる。

「気分はどうだい？まさかまだ正気じゃない、なんて言わないだろうね」

カーテンが開き、リカバリーガールが顔を出した。こんな事態に慣れているのか、心配と呆れの混じった表情を浮かべている。その背後には、全身を包帯で巻かれた相澤が車椅子に座っている。

「リカバリーガール、相澤先生……今、どうなっているんですか？」

相澤は誰かにメールを送りつつ、ボソボソと事の顛末を話し出した。

「お前は棄権による敗退、決勝は爆豪と轟で爆豪の優勝だ。お前と飯

田が三位だが……悪いな、表彰式はもう終わったよ」

「そうか、中止にならなくて良かった。体育祭は皆の目標だったから」
心から安心した自分に少し驚く。どうやらいつの間にか、体育祭に
対して、それなりに思い入れを抱いていたようだ。だが、それも仕方
のないことだろう。真っ直ぐに、懸命に上を目指す皆の、輝く眼差し
を見てしまったのだから。

「相澤先生、大事な話がある。私は——」

その時、勢いよくドアが開かれ、オールマイルトが飛び込んで来た。
慌てたように周囲を見渡し、起き上がる美亜の姿を視界に入れると、
分かりやすく安堵の笑顔が浮かべる。漫画やアニメのような彼の動
きに、呆れた様な空気が流れ、場の雰囲気少し和む。

「オールマイルト先生、遅いですよ。呼んだらすぐ来てくださいと念を
押したはずですが」

「いやあ、すまない相澤くん。A組の皆を宥めるのに時間がかかって
ね。君からのメッセージっただけで、千染君の件だと気付くなんてい
い感をしているよ」

嬉しそうに笑うオールマイルトは、ベッドの脇に相澤と並んで座り、
美亜にもその笑顔を向けた。

「さて——千染君、気分はどうだい？見たところ怪我などはして無い
みたいけど……。すまなかつたね。何分緊急事態だったから、多少
荒技を使ってしまった」

「大丈夫です、見ての通り傷一つありません。私なんかの心配よりも
……すみませんでした。暴走して、発狂して、皆に迷惑をかけた。先
生が止めてくれなければ、私が体育祭をぶち壊すところでした。謝っ
て済むとは思いません。ですが本当に……本当にすみませんでした」
頭を下げた美亜に、思わず2人は面食らってしまった。口から漏れ
出た言葉は、感謝ではなく謝罪。後悔と苦難。競技中の暴走で多くの
人に迷惑をかけた。当然謝罪して然るべきだか、彼女の性格上、ここ
まで正直に謝られるとは思わなかった。

「まあ……あまり考えすぎるなよ。勿論反省は必要だ、明らかにお前
の責任なんだからな。でも今は、二度と繰り返さなければそれでい

い。幸い負傷者はゼロ、騒ぎもマイクがうまく抑えてくれている」
「そうだよ千染くん！それにこんな時は、ごめんなさいじゃなくて、ありがとうって言うものだよ」

美亜が下げていた頭を上げた。相変わらずの無表情だが、その眼が困惑で揺れ動いている。自分を許していいのか、オールマイト達の好意に甘えてもいいのか悩んでいるようだ。

「ですが——」

「ですがもだがもナシだ！いいかい、君達が未熟なのは当たり前なんだ。ついこの間まで中学生、個性もまともに使用したことがないんだから。だからこそ、そんな君達を支える為に私達教師がいる。もつと言えば、私達の背中を見てヒーローに憧れてくれたら、これに勝る喜びは無いんだけどね……。だから今回の件はこれでお終い。ただ未熟な生徒がちよつとお茶目をして、それを先生達が諫めた。後は……そうだね、千染君が今後の糧にしてくれたらそれでいいんだ」

やはりこの人こそNo.1ヒーローだ、相澤は改めてそう実感する。ユーモラスで常に笑顔を絶やさない。多くの人を救い、導いて来た太陽のような存在。誰もが憧れる、正に平和の象徴と呼ばれるに相応しい傑物である。

だからこそ、素晴らしい人物からの素晴らしい言葉だからこそ、美亜の心は晴れない。寂しそうに、何かを諦めたかのように目を瞑る。
相澤には美亜の気持ちがあつてしまふ。彼女とつて、彼の放つ光は眩し過ぎるのだ。そして彼に続こうとするA組の生徒達もまた、彼女とつては余りにも眩しく、その心を焦がすのだろう。

「本当に——ありがとうございます。おかげで気分が軽くなりました」

ほんの僅かの間で思慮を巡らせ、開いた瞼から眼が覗く。きつと誰が見ても、今の言葉が本心でないと分かるだろう。たとえ無表情であつても。それ程迄に美亜の眼は哀しい光を放っていた。

いつの日か、オールマイト達の放つ輝きが、千染の心の闇を照らし尽くしてくれるのかもしれない。けれど自ら諦め、悟ってしまったている。このまま彼らと共に過ごす事で、その熱に心を焼き尽くされ、翼

を失い地に打ち据えられる未来を。

(諦め、悲観、恐怖……こいつはもう……)

「オールマイト、相澤先生、本当にありがとうございました」

美亜が深々と頭を下げる。数拍の後に上げられたその眼には、覚悟の色が宿っていた。

「私は、雄英高校を退学します。短い間でしたがお世話になりました」
「なっ！どうして!？」

「私は——これ以上皆と共に居られない、居てはいけないんだと思います。ここで過雄英高校ごして分かったんです。私にはヒーローになりたいという理想もなければ、憧れもない。皆にはなりたい自分が、ヒーロー像があつて、それに向かい直走っている。その目には、私には無い希望の光が輝いているんです」

茜色の夕日が俯いた美亜の表情に影を作る。静寂に包まれた保健室で、彼女の独白がポツポツと静かに続いた。

「私が雄英高校に入学した理由は、自分の為だから。誰かの為に、多くの人を守りたくてヒーローを志している皆とは違う。私はただ……今の安寧を、平穏な生活を二度と失いたく無かった。強くなれば失わない、二度と奪われる事もない。だから私は雄英高校に入学した。皆とは違い、ただ自分のためだけに——」

美亜の表情が苦しそうに歪み、言葉が途切れる。ただ今の平穏な生活を守りたくて、その為の力が欲しくて。未来には一切目を向けず、ただ停滞を望む、その入学理由は余りにも異質で、他の生徒達の志とは明らかに違う。彼女の過去には、そんなことを願わざるを得ない何かがあつたのだろう。

だからといって、相澤には必死に引き止めるつもりなど無い。結局、ヒーローの適正などは本人の意思によるものが大きいからだ。自らを危険に晒し、名も知らぬ誰かを守るために戦う。望まない人間がなつても、そこにはただ辛さと後悔だけが生まれるだろう。

「——ありがとう千染くん。君の本心が聞けて本当に良かった」

しかし意外にも、オールマイトが発した言葉は感謝だった。慰めでも悲しみでも無い返答に、思わず美亜は顔をあげる。そこにあるの

は、オールマイトの満面の笑顔だった。

「自分には憧れも夢も無い、そう言ったね？」

「ああ、何も無い私は……この場所にいるべきじゃない。それは貴方も分かっているはずだ」

「——あるよ、あるんだ千染君。胸を張って誇れる立派な目標が、輝かしい憧れが君にはある。ヒーローになりたい、それが全てじゃ無いんだよ。平穏な生活を守りたい、それだって立派な夢なんだ」

「その何処を——何が誇れる！」

声を荒げた美亜、しかしその眼をじつと見つめ、オールマイトは笑顔を崩さない。優しい声色で語りかける。

「だって——君に救われた人がここに居るだろうか？ 芦戸くんや緑谷くんから聞いたよ。あの時、命を賭して敵に立ち向かった君のことを。目的が何だったにせよ、あの時君が抑えてくれたから私が間に合った。そうだろ？ 相澤くん？」

オールマイトからの催促する目線に、相澤は溜息をつきながら答える。

「そうだな、確かにあの時は助かった。それに俺だけじゃ無い、生徒達もだ。お前がいなかったらどれ程の被害が出ていたか……」

その言葉に、オールマイトは嬉しそうに笑って美亜に向き直る。

「それに、平穏な生活を守りたいと願う君が、危険を承知で立ち向かったんだ。雄英高校での学校生活も——既に君の中で、守りたい大切な日々なんじゃないか？」

美亜の目がはつと見開かれ、湧き上がる困惑に視線が泳ぐ。自分は何故、あそこまで激昂し、必死に戦ったのか。未だはつきりしない感情の中、それでも一つだけ浮かんだ想いがある。

「そう……なのか……？ 私はあの場所で……。ただ力が欲しいだけじゃなくて、もつと何か別の物を求めて……」

美亜から紡がれる、本心へと繋がる言葉の欠片。笑顔で聞いていたオールマイトは、いい終わるや否や、より一層の笑みを持って返した。

「よし！ その言葉が聞きたかった！ いいんだよ、まだ分からなくて。本心はそうじゃないかもしれない。でも唯一分かることは、君はここ

雄英高校

に居てもいいってことだ！もしかた暴走しても、私達が止めてみせる。その為に私達がいる。だから安心して。君は真つ直ぐ前を見て、君だけの未来を探して欲しいんだ」

千染の表情から、その眼の色から、徐々に諦めが去っていく。呆れるほど真つ直ぐな人だ、そう思つて溜息を吐く。俺の溜息をどういう意味で取つたのか、オールマイトが恐る恐る、同意を求めようように此方を振り返つた。

「はあ……本当にあなたつて人は。別に構いませんよ。雄英にいるからといって、必ずヒーローを目指せつてわけじゃ無いですから。沢山のことを経験して、自分の道を探せばいい」

頭を撫でようとするオールマイトの手を、美亜が鬱陶しそうに払い除けている。だがその表情、わずかに緩んだ口元と赤味がかつた頬。ほんの僅かな変化だが、それでも彼女の心に、僅かでも希望が差し込んでいる筈だ。

(強力な個性に不安定な精神……オールマイトが居てよかった。それに家に帰ればあの二人もいる。良い方向に向かつている筈だ、そうだよな……)

「美亜ー!」「美亜ちゃん!」

相澤がそんなことを考えていると、病室にその2人が飛び込んできた。よつぽど急いできたのだろう、息が切れて肩が上下している。

「みつ、美波さん、拳士もどうしてここに?」

「よつ、よかつたああああ!」

相変わらず煩い拳士が、美亜に飛びつくと大声をあげて泣き出した。怪我人に飛びつくのもどうかと思うが——やっぱり学生の頃から、何も変わっていないようで安心する。そんな2人をそつと抱きしめる美波さんも、夢を諦め、7年間音沙汰も無かつたこの2人。何を経験したのか分からないが、それでもあの頃と何も変わらない。人情に熱く、人を想える2人のままなのだ。

「本当に」迷惑をおかけしました。美亜が無事にいられたのは先生方

のお陰です。ありがとうございます」

校門前、美波と拳士が深々と頭を下げる。美亜の傷は既に『再生』しており、精神面のケアのために家に帰す事になった。疲れているのか、美亜はひとしきり泣きじゃくる拳士をあやした後、気絶するかのよう深い眠りに入ってしまった。今も迎えの車の後部座席で、呑気に熟睡している。

「大丈夫！全然迷惑だなんて思ってないよ！」

「まあ……美波さんには世話になった借りがあるからな」

「そっか……、ありがとね相澤くん！オールマイルト先生！」

頭を上げた美波が、輝くような笑顔を見せる。学生の頃から思っていたが、この人の笑顔は個性なのではないだろうか。黄金色の瞳に見据えられ、美しい笑顔を向けられてしまえば、心を許してしまいそうになる。事実、オールマイルトは照れ臭そうに顔を背けているし、俺の顔も包帯で隠せてはいるが、間違いなく赤面している筈だ。

(はあ……やつぱりかなわねえな……)

ひとしきり謝罪と感謝の言葉を述べ、走り去っていく車を見送る。

「オールマイルト先生、さっきの話は真実だと思いますか？」

美波達から伝えられた千染の『個性』、当の本人が眠っていた為真偽は確認できないが、千染がああ2人に隠し事をするとは思えない。

しかし、その個性は思わず疑念を抱いてしまうほどのものだった。

「うーん、結局は本人にしか分からない事だからね。いや、もしかしたら——本人ですら理解していないのかもしれない……か？」

「それはどういう事です？」

「いや、何でもない。いいんだ、僕達に出来ることは信じること、導くこと、守ること、それだけだから」

曖昧な言葉を残し、校舎へと戻るオールマイルト。明らかに何かを隠している、千染の個性を聞いて何を考えたのか。

(はぐらかされたな……オールマイルトも、ああ2人も、何を知っている。俺は何を知らない?)

「少し調べてみるか——はあ、めんどくせえな……」

そう呟いた相澤の声は、夜の空へと消えていった。

第30話 血濡少女とヒーローネーム

「へー操血、増幅、おまけに再生かあ……っていやいや！まじかよ！」

教室に皆の驚きの声が響き渡る。小君良いノリツツコミを決めたのは上鳴だ。

体育祭後の2日間の休校が明け、今日からまた通常授業の始まった。そんな朝礼で突如美亜が教壇に立ち、その個性を明かした。

当然、体育祭で暴いた爆豪はつまらなさそうにしているが、轟や八百万など薄々勘づいていた生徒も何人かいるようだ。

「すげえ個性だよなあ、羨ましいぜ。なあ緑谷？」

教室がざわめきに包まれる中、峰田は緑谷へと共感を求めるべく、その背中に話しかける。

「操血、増幅、再生……凄いシナジーじゃないか。メインウェポンとなる操血のデメリットを他二つが完璧にカバーしている……。血の量や流血を気にしなくても良いから、個性の幅が広がるんだ。いや、そもそもこれはなんの個性なんだ？余りにも出来ることの幅が広すぎるような？個性婚？超レア個性？すごいや……手腕だけじゃなく………僕なら………」

「緑谷のそれ、もはや伝統芸能だよなあ………」

自分の世界に入ってしまった緑谷を見て、峰田は瀬呂と共に呆れかえる。

思い思いに話し合い、騒めきが収まらない生徒達に対し、相澤はひとつ咳払いをして場を収める。

「ていうわけだ。混乱するとは思うが……まあ変わりなくやってくれ」

「はいはい、一個だけ質問。再生してもそれって痛くねーの？」

「ちよっ！上鳴っ！何聞いてんのよー！」

皆何となく気になっていたけど、デリケートな問題だけに聞きづらかったこと。ケロッとした顔で質問した上鳴の頭を、次郎が鋭くしばいた。

「いや、いいんだ耳郎。もう隠さないって決めたから。私、痛みを感じないんだ。多分個性じゃないと思う、生まれつきだから。理由はわからないが何かの病気なんだと思う」

いわゆる無痛症というやつなのだろうか。かなりイレギュラーな事態ではあるが、無痛ならば今までの行動にも納得がいく。教室中が納得したような、どことなく気不味そうな雰囲気にも包まれる。

「はあ……もう良いか千染？席に戻れ、授業始めるぞ。今日のヒーロー情報学はちよつと特別なんだ」

相澤はそんな雰囲気を通り切るように、多少強引に話を変えた。突然の特別授業の知らせに、小テストかと生徒達が息を呑む。

『コードネーム』ヒーロー名の考案だ」

「胸ふくらむヤツきたあああ!!」

生徒達は皆立ち上がって歓喜の声を上げた。しかし、相澤は即座に睨みを効かせて黙らせる。すっかり包帯が取れて元気になった為、個性まで使つてのガチである。

「というのも、先日話した『プロからのドラフト指名』に関係してくる。指名が本格化するのには経験を積み、即戦力として判断される2・3年から……つまり今回来た指名は将来性に対する興味に近い。卒業までにその興味が削がれたら、一方的にキャンセルなんてことはよくある」

「頂いた指名がそのまま自身へのハードルになるんですね!」

芦戸の言葉に相澤が頷く。体育祭とはあくまでパフォーマンスを見せる場であり、通過点に過ぎない。あくまで最後に目指すのは、プロからのスカウトである。

「で、その指名の結果がこうだ」

相澤はそう言いながら、後ろの黒板に白い用紙を貼り出した。そこには各生徒毎の指名件数が記載されている。

A組指名件数

轟 4, 1 2 3

爆豪 3, 4 2 6

飯田 3 0 1

| | |
|-----|-----|
| 常闇 | 283 |
| 上鳴 | 272 |
| 八百万 | 108 |
| 切島 | 68 |
| 麗日 | 20 |
| 芦戸 | 18 |
| 瀬呂 | 14 |
| 千染 | 2 |

「例年はもつとバラけるんだが、二人に注目が偏った」

一覽を見た生徒達は思い思いの声を上げるも、やはり落胆の声が多い。圧倒的な実力を見せた体育祭トップ1・2位に票が集中し、約半数が一票も貰えない状態なのだから当然だ。何とか票を得た者も、上位二人の桁違いの票数に驚いている。

「だー！ー！、白黒ついた！」

「1位、2位逆転してんじゃん、表彰台で拘束された奴とかビビるもんな……」

「チツ！ビビってんじゃねーよプロが!!」

「さすがですわ轟さん」

「ほとんど親の話題ありきだろ……」

美亜がそんな周囲の反応をぼーっと眺めていると、前の席に座る瀬呂が後ろを向いて話しかけてきた。

「お、千染2票入ってんじゃん。よかったな指名もらえて。正直千染の戦い方ってすげー怖かったからさ」

「ん？ああ……そうだな。まさか票を貰えるなんて思わなかったよ。でもお前も14票なんて凄いじゃないか。一瞬で凍らされてたクセにな」

「お前なー、俺だって何気に傷つくつての」

瀬呂としては何となく話しかけたつもりだったが、まさか茶化されるとは思ってもいなかった。「少しだけだけど、何となく雰囲気は柔らかくなった気がするな」瀬呂はそんなことを思いながら、朗らかに笑って抗議の声をあげた。

「これを踏まえ、指名の有無関係なく、いわゆる職場体験つてのに行つてもらう。おまえらは一足先に経験してしまったが、プロの活動を実際に体験して、より実りある訓練をしようってこつた。それでヒーロー名が必要になる、まア仮ではあるが適当なもんは——」

「付けたら地獄を見ちゃうよ!!この時の名が世に認知され、そのままプロ名になつてる人多いからね!」

「ミッドナイト!!」

待ち構えていたかのようなタイミングで、ドアが勢いよく開き、18禁ヒーロー『ミッドナイト』が入ってくる。そのまま教壇に上がるのと、相澤は役目を終えたとばかりに寝袋に入り出した。

「その辺のセンスをミッドナイトさんに査定してもらおう。俺はそういうのできん。将来自分がどうなるのか、名を付けることでイメージが固まりそこに近付いていく。それが『名は体を表す』ってことだ」
(ヒーロー名……ヒーロー名か、考えた事もなかった)

配られたホワイトボードを手に取り、自分のヒーロー名を思案する。しかし、笑つてしまう程全く思い浮かばない。どうやら自分にこいういったセンスは無いらしい。皆真剣に考えているのか、ホワイトボードに書いては消す音や唸り声が響く。しかし遂には15分が経過しても、一つの候補すらも出すことが出来なかった。

「じゃそろそろ、出来た人から発表してね!」

ミッドナイトの言葉に、教室がざわめきに包まれる。まさか皆の前での発表形式だとは思っておらず、尻込みしてしまっている。

「はいはい!アタシ出来ました!リドリヒーロー、エイリアンクイーン!」

「血が強酸性のアレを指摘してるの!?!やめときな!!」

積極的な芦戸がトップバッターを買って出るも、まさかのミッドナイトからNGが出てしまった。しかも最初に変なのがきてしまったせいで、大喜利っぽい空気になってしまった。そんな雰囲気吹き飛ばしてくれたのは蛙吹だ。ヒーロー名はFRッOPロッPYビー、可愛くて親しみやすい、お手本のようなヒーロー名をミッドナイトも絶賛する。

その流れに乗って切島が手を挙げる。尊敬するヒーロー

クリムゾンライオット
紅頼雄斗をリスペクトし、烈怒頼雄斗レッドライオットと名乗りを上げた。憧れの名を背負う、その重圧を覚悟の上と言いのける辺りに、彼の漢気が感じられる。

「皆良い感じね！この調子でどんどんいくわよ！」

その後、他のクラスメイトのヒーロー名も次々と決まり、最後には緑谷、飯田、美亜と再考組の爆豪が残された。そして悩みに悩んだ末、飯田は自身の名前である『天哉』と名を決めた。緑谷も『アク』というヒーロー名を、自信に満ち溢れた顔で発表した。

「美亜……まだ決まらないのか？」

未だに真っ白なホワイトボードを見つめる美亜が心配になったのか、後ろから常闇が話しかける。

「ああ、そうだな。皆目見当もつかないとは正にこの事のようにだ」

自重気味に言い放つ美亜に、常闇だけではなく周囲の生徒達も美亜のために意見を出し合い始めた。

「やはり個性から連想するのが良いと思いますわ」

「千染の個性かー。血？増幅？再生……いやむずいぜこれは。それよりもっとスタイルとか、美人さを全面に出してさあ！」

「峰田ー？ヒーロー名だぞ、自重しろよ」

美亜の周りが俄かに騒がしくなった。そんな生徒達を相澤は黙って見つめる。相澤自身もヒーロー名に拘りがある方ではなかった。今の『イレイザーヘッド』もマイクが提案したものを、そのまま使った。個人的にはそういうやり方もありだと思う。自分のことを一番見えているのは、実は他人だなんてよくある話だ。特に千染は自分自身に興味がなく、今のところ理解する気もない。友人に付けてもらったヒーロー名が、ヒーローとしての千染を形作ってくれるのかもしれない。

「血を司り、傷は再生する。吸血鬼なんてイメージはどうだ？」

「吸血鬼……ヴァンパイアは安直ですわね……！閃きましたわ美亜さん！『ラミア』なんてどうでしょうか!?ラテン語で吸血鬼を指す、と本で読んだ記憶がありますわ。美亜さんの名前も入っていますし——」

「ストップストップ、千染が引いてるぞー」

良い案を閃いた喜びからか、八百万はいつの間にか美亜の両手を握り、目を輝かせながら力説していた。瀬呂に諭された八百万は顔を真っ赤にすると、何やらモゴモゴと言いながら恥ずかしそうに席に戻った。

「美亜さん……すみませんでした。わたくしとした事がつい……」

「いや……『ラミア』……か。良いんじゃないか。他に案もないし、何よりせつかく八百万達が考えてくれたんだ」

落ち込む八百万に対して、美亜の声は明るい。すらすらとホワイトボードに文字を書くと、そのまま教壇へと向かう。

「私のヒーロー名は『ラミア』だ」

美亜は胸を張り、自信に満ち溢れた表情でヒーロー名を発表する。そんな美亜と、嬉しそうに満面の笑顔を作った八百万を見て、ミッドナイトも思わず微笑む。

「いいんじゃないかしら？とつても貴方らしくてね」

「どういう意味だ？」

意味ありげにニヤニヤするミッドナイトを見て、美亜は不思議そうに頭を傾げる。ただその疑問は、対抗心を燃やしてきた爆豪の発表によつてかき消されてしまった。

そして、幾度かの再考の後、爆豪のヒーローネームも無事に決まった。命名の時間も終わり、もともと寝袋から這い出た相澤は本題の説明を始める。

「職場体験は一週間。肝心の職場だが、指名のあった者は個別にリストを渡す。その中から自分で選択しろ。指名のなかった者は、予めこちらからオフアーした全国の受け入れ可の事務所40件。この中から選んでもらう。それぞれ活動地域や得意なジャンルが異なる。よく考えて選べよ」

相澤がそう言ってプリントを配り終わると、一限目終了のチャイムがなった。相澤は「今週末までに提出しろよ」と言い残して教室を退出していく。今日は水曜日、何と後2日しかなかった。

「ねーねー、美亜ちゃんどこから指名来たの？」

「それぞれ、ウチも気になるわ。選ばれし2件はどこなの？」

美亜がぺらっぺらのリストを眺めていると、芦戸と耳郎が声をかけてきた。リストとは名ばかり、たった二つの事務所の名前が書かれた一枚の紙である。

「あんなバイオレンスな戦いしてた千染を指名するとは、度胸あるよなあ」

「峰田くん、傷口に塩を塗るのは感心しないわ」

首を突っ込み、余計な事を言った峰田が蛙吹によって遠くに放り投げられた。そんな軽い騒ぎに気づいたからか、瀬呂や切島、上鳴も面白そうに集まり出した。

「ああ、こんなの見たって何にもならないとは思うが……」

美亜から放り投げるように渡されたリスト見て、芦戸達は突然驚愕の声を上げた。

「え!!ラビットヒーロー『ミルク』！ウイングヒーロー『ホークス』!?」
「マジかお前！2分の2でトップ10ヒーローからの指名じゃねえか！」

新進気鋭のNo. 3ヒーロー、ホークス。女性ヒーロートップのNo. 6ヒーロー、ミルク。たった二件の指名ながら、その両者が超有名人、とんでもなく豪華な指名リストである。

そんな超豪華なリストに興奮冷めやらぬ瀬呂や芦戸達であったが、当の美亜はまるで興味が無さそうだ。もちろん指名が無いよりはマシだと思う。それでもこの二人は自分との相性が致命的に悪い気がする。

トップ10ヒーローという事もあり、実力や知名度共に懸念はない。ただ、武闘派であり近接を得意とするミルク、圧倒的な速さを武器にするホークスは、美亜とは全く対極の存在といえる。そこに行つて果たして学びはあるのか、より強くなれるのか。そう考えると易々と決めるわけにはいかなかった。

(それに……何故私を指名した？まだランク下位のヒーロー達なら分かるが、よりによってトップヒーローが、優勝してもいない私を?)

「んっふっふー、悩んでいるようだね美亜ちゃん！」

明後日の方向を見ながら考え込んでいた千染に、何やら意味深な含み笑いをしながら芦戸が話しかける。

「どうした芦戸？」

「いやー、なんか美亜ちゃん、ちよつと明るくなつたかなつて」

「そうか？そんな事ないと思うけど……」

「いや、絶対変わったつて。少しだけかもしれないけど前を向いてるつて、なんとなくそんな気がするんだ！」

芦戸は満面の笑みを浮かべて、自信満々に言い放つ。その笑顔と、真つ直ぐな瞳に、少し照れ臭くて美亜は顔を背ける。

「いや、芦戸は自分の先をちゃんと考えないとでしょ。18件も貰つて……羨ましい……」

耳郎はやたらとテンションの高い芦戸を諫めようと、肩に手をかけ声をかける。しかし、自分の指名数ゼロに気落ちしてしまい、次第に声が尻すぼみになっていく。

「うーん、私はいつぱい動ける事務所がいいなあ。それこそミルクなんて最高だよ！」

「あー、あんたじつとしてるの苦手だし、それに運動神経いいからね。近接で美亜をいいところまで追い詰めてたぐらいいだし」

「本当だな、あの時は本当にヒヤヒヤしたぞ」

美亜がそういうと、芦戸は嬉しそうに目を輝かせてピョンピョンと喜びを爆発させた。そんな分かりやすい芦戸を、二人は暖かく見守る。

「それで、耳郎はどうなんだ？」

「ウチ？音系個性か偵察系のヒーローかなあ。どっちにしろリストから探さないとね……指名0だから……」

再び気落ちしていく耳郎、美亜はその肩をドンマイの気持ちを含めてぽんぽんと叩く。「馬鹿にしているでしょ」と言わんばかりの恨めしげな目線を受けるも、涼しい顔で受け流す。

その後も三人で色々と話していたが、始業のチャイムと共に耳郎と芦戸は席へと戻っていった。美亜もペラペラのリストがカバンの中

でぐしやぐしやにならないよう、クリアファイルに入れて鞆にしま
う。

しかし、その後の授業も色々な考えが頭を巡り、あまり集中出来な
いまま放課後になってしまった。

(はあ……復習しないと。流石は雄英、授業内容も難しい……)

第31話 血濡少女と職場体験先

「はあっ……はあっ……、私の負けだ」

広いトレーニングルーム、その中心で一人が仰向けに、そしてもう一人が馬乗りになって拳を振り下ろしている。その拳は顔の横に振り下ろされ、床にめり込み亀裂を作っている。

馬乗りになった女性、ラビットヒーロー『ミルコ』は、大きく息を吐くと拳の力を抜き、天を仰いだ。

「ったく、どこが衰えてるんだよ。思わず全力で殴りそうになっちゃった」

ミルコはカラカラと笑いながら立ち上がる。もう一人の女性もゆっくりと立ち上がると、背を伸ばしたり肩を回して体の傷を確認する。

「いつったー！これは明日筋肉痛かも……。しかしめちやくちや強くなつたな！流石No.6ヒーローだ！」

朗らかで太陽のような笑みを浮かべる女性、ミルコが知っているあの頃と何も変わらない。熱くて優しく、強い彼女がそこにいる。

（数年のブランクを開けて、私相手に食い下がれるアンタも相当ヤバいんだがな——鍛えてるのか？そんな様子があるってのは聞いてないが……）

「ミルコ？聞いてるー？」

「ん？ああ、どうした」

いつの間にか目の前に彼女の顔があり、沈み込んでいた思考が引き戻される。年上の筈だが、相変わらず人懐っこく、誰にでも好かれる、そんな明るい顔をしている。

そんな彼女はミルコの顔をじっと見つめ、深くため息を吐き、寂しそうな表情を浮かべた。

「息も乱れず、汗もほぼかかずか……。悔しいなあ。流石に無理だと分かっても、ミルコには負けたくなかったよ。随分力の差がついちやったね、私なんて汗ビツビツだよ。ここシャワーない？」

「シャワールームなら出て右にあるぞ。ここは貸切にしてるから好きに使え」

「おい、流石No. 6ヒーロー！お金持ち！」

ミルコを茶化しながら、女性は嬉しそうにシャワールームへと向かっていく。そんな彼女の背中を見ていると、昔の記憶が鮮明に蘇ってくる。

自分と似たような個性の女性ヒーローがいる。それを知って学生の頃から散々挑み続け、毎回ボコボコにされてきた。一度だって勝つたことは無い。それどころか、一撃を入れた回数も数える程だ。こつちがどれだけ鍛えて力をつけても、彼女は更にその何倍も上を超えていく。

井の中の兎である事を教えてくれた師匠、とでも言うべきか、拳を合わせた親友か。そんな彼女との数年ぶりの手合わせ。初めて勝利することができたが気持ちは晴れない。身のこなしや反応には、確かに過去の面影はある。ただ、あの時のような圧倒される感覚、何一つ通用しないような無力感を感じない。自分の成長以上に、彼女がヒーローを諦めた事、もう超えてはくれない事を痛烈に実感してしまった。

（もし……もしあのままヒーローを続けていたら、どんだけ強くなっていたんだろうな）

「あー、ウジウジ悩むなんてらしくねえな。そういえばボディーソープねえんだった。届けにいくか」

シャワールームに行くと、久々の戦闘で機嫌がいいのか、小君良い鼻歌が聞こえる。ミルコはズンズンと歩みを進めると、シャワーが止んだタイミングを見計らって勢いよくドアを開けた。

「おい、ボディーソープねえだろ？これつか……え……？」

続くミルコの言葉は、衝撃の光景によつてかき消されていく。視界に入った裸の彼女、その胴には凄惨なまでの火傷の跡が、広く刻み込まれていた。あまりの衝撃に、時が止まるような感覚に陥る。永遠とも思われる時間の中、ゆつくりと女性が背後を振り返り、そこに衝撃で固まるミルコを視認した。

「みつ、ミルコ!?見るな!見ないでくれ!」

「悪い!ボディーソープを渡そうと……」

急いで扉を閉めたミルコは、フラフラと歩き、シャワールームのベンチへと腰を下ろした。気不味い雰囲気の中、彼女がタオルで拭う音だけが響く。

なんだあの傷は、あの火傷は明らかに普通じゃない。日常生活で負うものではなく、何らかの事件、事故に巻き込まれた結果だ。幾度か共に風呂に入ったことはある。数年前の彼女に、こんな火傷はなかった筈だ。

「——なあ、その火傷は何だ?何があった?」

恐る恐るミルコが問いかけるも、返事は返ってこない。当たり前だ。先の慌てようからして、余程隠したい傷なのだろう。

「それが……ヒーローを辞めた理由なのか?」

タオルの擦れる音が止まる。思案しているのか、言い淀んでいるのか、僅かな静寂が生まれる。

「——違うよ。この火傷は誓いの証なんだ。まあ……名誉の負傷つてやつかな」

僅かな時間を開け、混乱していた思考がまとまったのだろうか。少し明るい声で返答が返ってきた。しかし、彼女から発された言葉はそれだけ。長い沈黙が続き、空気を読んだミルコはそのままシャワールームを後にした。

「あー、マジでやり合うとこんなに疲れるんだな……。でも昔を思い出して、なんだかんだ楽しかったよ!」

夕日が照らす帰り道、ミルコの少し前を歩く彼女は、ぐっと背を伸ばして朗らかな声をあげた。ヒーローでは無い彼女は、すっかり日常の中に溶け込んでいる。手合わせをしていた時に感じた、肌がひり付くような威圧感が嘘のようだ。

「本当にごめんね、無茶なお願いしちゃって。頼れるヒーローがミルコしかないなくてさ——」

確かに、手合わせは終止自分が圧倒していた。連撃に次ぐ連撃で優

位に進め、彼女は防戦一方になっていた筈だ。だが、一瞬でも油断すれば食いちぎられそうな威圧感、垣間見えた武術のキレ、そして燃え上がるような瞳、それらは戦う事を放棄した一般人のものでは無かった。だから、彼女が実力面でヒーローを諦めたなんてことは考えられない。恐らく今だに鍛えてるし、何より戦うことに対して嫌悪を感じていなかった。

あの大火傷が、ヒーローを諦めた要因であることは間違い無いだろう。敵に敗れたか、事故に巻き込まれたのか。いずれにしろ、今回の彼女からのお願いが、この謎の糸口になるのかもしれない。

「ミルコー？聞いてる？おーい！」

彼女の呼びかけで、ミルコは自分がまた考え込んでしまっていることに気付く。今度は目の前に顔があるというような事はなく、少し前を歩いていた彼女が、こちらに振り返って腕をブンブン振っている。そんな無邪気な彼女を見て、悩んでいる自分が気恥ずかしくなる。そんな気恥ずかしさを発散するように、大股で歩き彼女の横に並ぶ。「なあ、こつちからお願いしておいて何だけど、お返しが私との手合わせなんかで良かったのか？」

「いいんだよ。私がどこまで強くなったのか試してみたかったからな。負けっぱなしで終わるのは性に合わねエ！」

彼女はその言葉を聞くと、心底嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

「そっか……なら良かった」

「散々ボコられたからな、そりややり返したくなるわ」

何度も何度も挑み、その度にボコボコにされた。勝つために散々試行錯誤して、色々な技を開発した。自分に強いヒーローの背中を見せてくれた。そんな恩人であり師匠のような存在の彼女が、何を隠しているのか検討もつかない。

それでも、何があってもこの人は悪人では無いと確信できる、だから、過去についてはもういい。信じられるから、もう聞かなくて良い。「なあ拳士、私はもう過去に何があったのかは聞かない。ただ一つだけ聞かせてくれ。ヒーローを諦めて……未練はないのか？」

別れ道に立った二人が向かい合う。拳士の表情は真剣そのもの、そ

の目には力強い決意が宿っていた。

「未練……無いと言えは嘘になるな。ヒーローはずっと憧れてた夢だったから。でも今は、大切な人がいて、守りたい人がいて、毎日笑顔になれる。だから未練よりも、もっともっと——今が幸せだよ」

そう言い終わると、白い犬歯を覗かせながらニコニコの笑顔を咲かせた。

「そうか、じゃあもう何も聞かぬエ」

「ありがとうミルコ。私達の大切な美亜を……よろしくお願いします。不器用だけど、きつと今が変わる時なんだ。あの子にヒーローの背中を、希望を見せてあげてほしい」

深々とお辞儀をする拳士、その背中にはどれほどの想いを背負っているのだろうか。

本当は職場体験なんて受け入れる気もなかったが、拳士にここまでお願いされたらやるしかない。

「あんま期待すんなよ、私は後輩の指導とか苦手なんだよ」

「ミルコなら大丈夫だよ。だって私が憧れてるヒーローなんだもん！」

余りにも真っ直ぐな眼差しと笑顔に、背を向けて歩き出す。今、私の顔は赤くなっているのだろう。

「ああ、任せとけ。じゃあまた会おうな！」

「うん！またね!!」

「それで、ホークスとミルコから指名を受けたんだが……」

「悩んで決められないと……」

熱犬孤児院の応接室。普段は美波の仕事部屋として使われているが、時として客人をもてなしたり、こうして相談を受ける部屋としても使われる。最も、一番の使い道は美波と拳士の晩酌会場としてである。

そんな応接室にて、美亜が美波に相談を持ちかけていた。美亜は指名先のリストをもらってから、休み時間や昼休みを使ってしばらく考えた。しかし、たった2つの選択肢のほすが結論は出なかった。美亜

は家に帰った後もしばらく考えたが、諦めて美波に相談することにしたのだ。

「うーん、普通なら自分の個性に合った事務所に行くんだけど……。正直に言うけど、この2先ならどっちも合っていないと言わざるを得ないわ。ホークスは飛行能力持ちで、ミルコは動物系個性、どっちも機動力重視の俊敏なタイプ。美亜とは正反対ね」

「ああ、何故指名がきたのか不思議なほどにな」

美波の言葉に、美亜も頷いて同意する。

美亜は何度も考えたが、本当に相性が悪すぎる。ただでさえ機動力に難がある上、ホークスは飛べるし、ミルコは跳べる。あの体育祭で、何があったら私を指名しようと思うのか。

眉を顰めた美亜の表情を見て、美波は微笑みながら頷く。

「——でもね、最後に決めるのは貴方よ。自分で考えて、自分の意思で決めなさい。私達にそれを縛る権利はないわ」

この言葉は本心だ。ここで美波がどちらかの事務所を薦めれば、美亜は必ずその事務所に決めるだろう。それ程までに、美亜にとって美波達の言葉は重い。

確かに、美亜は将来ヒーローになりたい訳でもなく、また別の夢があるわけでも無い。しかし、夢、目標、理想、たとえ叶わなかったとしても、それらを考えることで見えてくるものがある筈だ。

美亜は美波達に依存している節がある。だからこそ美波は、出来るだけ美亜自身に考えさせ、力になりたいと思っている。雄英高校に入り、沢山の同級生が出来て、^{ライオン}敵とも遭遇した。ずっと熱犬孤児院に籠っていた美亜にとって、非常に大きな転換期が訪れている。今こそ自主性を育む良い機会なのだ。

「それでも……それでもあえて言うのであれば……貴方の夢は何？ ヒーローとしての姿勢、経験、知識。職場体験で学べることは何も強さだけじゃない。美亜のクラスメイトだって、夢や目標の為に何かを学びにいくのよ」

「私の夢……か」

美波の言葉に美亜は目を伏せた。そんな美亜を慰めるように、美波

は優しく微笑んで言葉を続ける。

「ごめんね、大袈裟に言っちゃって。夢なんてまだ分からなくても大丈夫。でも、せっかくの機会だから、少しでも目的を持って行って欲しいの。数年後、何十年後を見据えろなんて言わないわ。職場体験後、どんな成長をしたいか。いわば目標かしらね」

「私の目標……そうだな、今は——ただ力が欲しい。強くなければ何も守れない、何も成すことはできない。立派な心構えも経験も、根底にあるものは強さだ」

だが、美波とつて、夢や目標、将来を美亜に考えさせることよりも遥かに大切な事がある。それは、美亜を護る事だ。

USJ襲撃の際、美亜は脳無と呼ばれる敵サイランによって、激しく傷つけられた。相澤から聞いた話によると、半狂乱のような状態になってまで戦っていたそうだ。そして体育祭での暴走。美亜にとって雄英高校で得たものは多いが、悪影響を及ぼしている側面もある。

日常生活に支障をきたしている訳ではないが、それでも心配で堪らない。職場体験で1週間も離れるとなると尚更だ。もし、職場体験で再び敵サイランに害されてしまったら……。美亜は無表情で、感情こそ見えないが、その精神は脆く、不安定だ。心の奥底で負担になっている可能性はある。

「そう……強くなりたいなら、私はミルコの元へ行くべきだと思うわ。貴方にとって、空を飛べて、羽という特殊な要素を扱うホークスは参考になりにくい。拳士と似た個性のミルコであれば、まだ近接面で参考になるかもしれない。勿論、最後に決めるのは貴方だから、あくまで参考にね」

美波は美亜に優しく微笑みかけながらも、自分に対して嫌悪感と不快感を抱く。美亜の自我を育てたいと思いつつながら、美亜を守る為と言いつつながら、結局は自分の身勝手の為にこうして美亜を縛るのだ。

体育祭の後、美波と拳士は、信頼できるヒーローの1人であるミルコにあるお願いをした。それは美亜に指名をだして、職場体験に迎え入れて欲しいというものだ。職場体験やインターンなど、後輩の指導を受け入れていないミルコだったが、拳士との手合わせを対価に領い

てくれた。ミルコ程の実力者であれば、そう易々と美亜が傷付けられることは無いだろう。

「そうか……美波さんがそういうのであれば、ミルコの事務所に行こう」

少し考える素振りを見せた後、顔を上げた美亜と視線が合う。紅く、そして強く輝く、本当に綺麗な眼だ。願わくば、その眼で自分の未来を見据えて欲しい。本当なら無限の可能性と数多の希望に、一層眼を輝かせて欲しい。

だが、それはできない。また失う事が怖いから。あの頃憧れ、目指した理想のヒーロー像が、幾年経とうとも美波を縛り付ける。

「美波さん、背中を押してくれてありがとう。私はどうも決断力が足りてないらしい。これからも頼る事があると思うが……」

「大丈夫よ、いつでも頼っていいの。美亜は私達の家族だから。例えば血は繋がってなくても、それだけは胸を張って言える。不安がることなんて何もない、私達はこれからも共に生きていくの」

美波はそう言って、優しく微笑む。少しだけ俯き、不安そうな顔を見せていた美亜は、その言葉を聞いて顔を上げた。そして、少しだけ晴れやかな表情を見せると、礼を言って退出していくのだった。

「私……最低ね……」

美亜が退出したドアを見つめながら、美波はポツリと呟く。

雄英高校に入学してから、益々美亜の表情が分かるようになってきた。未だに他人が見れば、能面のような無表情に見えるだろう。ただ、眼の奥や頬の動き、口角から感情が溢れている機会が増えているのだ。

そして今、美亜は本気で悩んでいる。あのヒーローに興味などなかった美亜が、職場体験に対して少しは前向きになっている。例えどんな理由であれ、大きな成長だ。そんな時に家族が何をしてあげるべきか。寄り添って、共に悩み、道を見つけさせるべきではないのか。

自身に対する不快感と嫌悪感が心を埋め尽くし、それが引き金となり、益々自分が嫌いになっていく。

美波はそんな思考の悪循環を断ち切るため、すっかり冷えたお茶で喉を潤す。そして徐に携帯を取り出し、電話をかけた。

「あつ、ワンちゃん？まだ買い物中？うん……そうそう。ちよつとね……お酒多めに買ってきて。今日は付き合ってもらおうよ」

電話の向こうから、拳士の呆れたような声が聞こえる。どうせ、また愚痴に付き合わされるとか思っているのだろう。まあその通りなのだが……

第32話 血濡少女と職場体験

迎えた職場体験当日、美亜はミルコから指定された場所に行くために電車のホームを探していた。やっとの思いで見つけ、安堵した視線の先に見慣れた人物がいる。

「飯田、奇遇だな。お前もこっち方面だったのか」

電車を待っている間も背筋を伸ばして直立不動、流石は優等生である。そんな飯田は美亜の声に振り返り、少し笑顔を見せた。

「ああ、美亜くんこそこっち方面なのだ。確か……ラビットヒーロー『ミルコ』の事務所だったか？彼女は特定の拠点を持たないと聞くが……」

そこに電車が到着する。幸いにも、郊外行きの電車とあつてか車内はガラガラであり、2人も並んで座ることができた。

「ああ、あんまり遠いところに行きたくないし、人混みは苦手だから、むしろ郊外でありがたいぐらいだ」

美亜の言葉の通り、電車が走り出ししばらくすると、住宅街、のどかな河川敷が車窓に映り出す。その間も2人の取り留めのない雑談は続く。

「しかし立派じゃないか！No. 6ヒーローからの指名なんて！良き先達として美亜くんを導いてくれるんじゃないか？」

「別に導いてもらわなくてもいいんだが……強くなる為のアドバイスぐらいは期待してる。お前こそどうなんだ、300件ぐらい指名来てた。何でまたマイナーヒーローの所なんか……確か……誰だったか？」

美亜がヒーローの名を思い出そうと頭を悩ませている時、飯田に影が差し、思い詰めるような表情を見せる。しかしそれも一瞬で、いつものように凜々しい飯田は美亜へと笑顔で話しかけた。

「ノーマルヒーロー、マニュアルさんだよ。彼はどんな地道な仕事にも手を抜かないと聞く。俺はヒーローとしての在り方を教わりたいんだ」

「ふーん、ちゃんと色々考えてるんだな」

飯田が拳を握り、目を輝かせて熱く語る。美亜はその優等生すぎる回答に興味を失ったのか、車窓を眺めながら上の空で返事をした。

『保須ー保須ー』乗車ありがとうございます』

「それじゃあ美亜くん、俺はここだから。互いに多くを学べるように頑張ろう！」

そう言いながら立ち上がった飯田は、同じく立ち上がった美亜を見て首を傾げる。美亜はそんな飯田を見て、気不味そうに笑った。

「私もここなんだが……」

(それにしても飯田のやつ、何をそんな心配してるんだ？まるで親みたいだったぞ……)

美亜は飯田と別れ指定された場所へと向かう。意外にも人通りの多い保須市を歩きながら、別れ際の飯田の変な様子について考えていた。

「いいかい千染くん。路地裏には絶対入らないように。後、パトロールの際にはミルコさんから離れては行けない。僕たちはあくまで職場体験に来た学生だ。それを忘れないように……」

「分かった分かった、互いに頑張ろう。じゃあな」

飯田の話が長くなりそうだったので、無理矢理打ち切って別れてきた。やけに真剣な表情と、僅かに目の奥に感じたドス黒い何か。前者だけならば、委員長として張り切っているだけなのだろうが、後者が分からない。

「まあ、人の事考えてもしょうがないか。飯田にも色々あるだろうしな……」

体育祭後、飯田の兄であるターボヒーロー『インゲニウム』が、ヒーロー殺し『ステイン』に襲われ重傷を負った事を聞いた。その為に兄の事務所職場体験が出来なくなり、落ち込んでいるのだらうと納得する。

「この辺だと思っただが……いや……ここか？」

ミルコに指定された場所にあったのは、郊外都市には似合わないス

タイリツシユなホテルだった。15階建てぐらいだろうか、1・2階部分は全面がガラス張りになっており、中はフロントやカフェなどがモノトーンで統一されている。

ミルコは事務所や相棒サイドキックを持たない、革新的なスタイルで全国を跳び回るヒーローだ。保須市に何か用事があり、現在はこのホテルを拠点として活動しているのだろう。

慣れない外観に美亜は思わず尻込みしてしまうが、意を決して建物の中へ入っていく。

「千染様、お待ちしております。ミルコ様よりこちらのカフェでお待ちいただくようにと申し付けられております。どうぞこちらへ、ご案内いたします」

「はあ……ど、どうも」

雄英高校の制服か、持っているコスチュームで気が付いたのか。受付の女性がにこやかな笑顔で此方へ歩み寄り、深々と頭を下げる。洗練された動きと、年下相手にも完璧に対応する女性に気圧され、思わず間の抜けた返事をしてしまった。

顔を赤くしたまま案内された美亜は、出されたコーヒーを飲みながらミルコを待つ。ソファは柔らかめで心地よいが、いかんせん全面ガラス張りが落ち着かない。やっぱり私は、熱犬孤児院のような地味だけれど温かみのあるところが好きだ。

美亜がそんな事を考えながら、出されたコーヒーを半分程度飲んだ時、1人の女性がホテルに入ってきた。

小麦色の肌に白く長い髪、両目は赤く好戦的に輝く。白く長い兎の耳が特徴的なヒーロー、ミルコである。白いバニー服のようなヒーローコスチュームを身にまとい、その鍛えられて引き締まった体軀は、自信と実力を感じさせる。

ミルコは当たりをキョロキョロと見回し、美亜を視認すると早足で歩み寄る。

「お前が千染だな!？」

「はじめまして、雄英高校1年の千染美亜です。よろしくお願いします」

威勢良く声をかけてきたミルコに対し、美亜も立ち上がり挨拶の後に一礼する。そしてドカリと腰を下ろしたミルコに続き、座って向かい合った。

「ふーん」

ミルコの視線が、見定めるかのように遠慮なく美亜へ向けられる。何となく気まぎれになった美亜は、緩くなったコーヒを飲んでただ過ぎ去るのを待った。

「良いぞー！生意気そうなツラだ！」

「は？」

ミルコが発した罵倒されたんだから褒められたのか分からない言葉に、思わず素っ頓狂な声をあげてしまう。そんな美亜に対して、ミルコは何でもないと伝えるように手をヒラヒラと振る。

「早速だがヒーロー名はなんだ？職場体験とはいえコスチュームを着るんだ、ヒーロー名で呼ぶからな！」

『「ラミア」です』

「ラミアか、短いし呼びやすく良いな！」

笑顔でそう言い放つミルコ、勿論、ラテン語がどうのこうのを理解しているわけではないだろう。それでも、美亜は少しだけ嬉しさを感じ、そんな自分に驚く。

「それで……職場体験つても何するんですか。パトロールについて回るとか？」

素直な疑問と、僅かな照れ隠しで問いかけられた美亜の疑問。ミルコは待つてましたとばかりに、不敵に笑って答えた。

「まずは……タイムマンだタイムマン！全力でぶつかってきな！」

「は……？はあ!？」

「闘ってみないと何にもわかんねえだろ！私の事なら安心しな、寧ろ全力でかかってこないとお前死ぬぞ！」

「ええ……」

ビシッと指を刺された美亜は、思わず困惑の声を漏らす。

2人はホテルから保須市某所にあるトレーニング施設に移動した。

ここは地下一階に設けられた、開けた運動場のような空間であり、確かにタイマンには最適な場所と言える。

あまりの急展開に唾然とする美亜を横目に、ミルコは距離を取ると、ひとつ伸びをして伸脚を始めた。どうやら闘^ヤる気満々らしい。訳もわからず連れてこられ、言われるがままにとりあえずコスチュームに着替えたが、どうも気持ち乗らない。

美亜は、「流石にいきなりすぎるだろ」と訴えるような、不満を込めた眼でミルコを睨みつけた。

「よし、じゃあこのコインが落ちた時が開始の合図な。全力でかかってこい、お前の力を見せてみる！」

視界に映るミルコの立ち姿はあくまで自然体だ。しかしニヤリと笑う好戦的な表情からは、隠しきれない獰猛さを感じる。立ち昇る威圧感、気迫が尋常ではない。

美亜の頬を一筋の汗が伝い、全身に鳥肌が立つのが分かる。引つ張り回されて困惑していた思考を、始まるであろう闘いに集中させる。不平や不満は一旦捨ておけ、間違いなく本気でやらなければ殺^ヤられる。

先程までの気の抜けた表情から、覚悟を決めた真剣な表情に変わる。そんな美亜の表情の変化を確認したミルコは、満足したかのように笑みを深めコインを指で弾いた。

コインがくるくると宙を舞い——地面に触れた——

瞬間、美亜の鳩尾に前蹴りが叩き込まれた。

「ゴッ！がア!!」

目にも留まらぬ速さで叩き込まれたミルコの前蹴りが、美亜の骨を砕き、内臓を潰す。美亜は反応すら出来ずに宙を舞い、吐血を撒き散らしながら地面に叩きつけられた。

「……おい、死んでないだろうな？」

ミルコは追撃せず、呆れたような声で美亜に問いかける。しばらくピクリとも動かなかった美亜は、横たわったまま顔だけをミルコへ向けた。口から大量の血が流れ出ているが、そこには見るからに不満げ

な表情が浮かんでいた。

「ゴボツ……おえ……そこまで……やるヤツがあるか……」

「今のをくらって喋れるってことは、本当に痛みを感じないんだな。ってそんな事より何寝てんだ。立ち上がってこい、悠長に待ってくれる敵サイランなんざいねエだろ！」

「無理を言うな、今の前蹴りで骨が折れた。内臓も潰れてるし……おえ……吐血が止まらない」

美亜の口から体力の血が飛び散る。しかし気にする素振りもなく、大量の血を吐きながらフラフラと立ち上がった。

ミルコはその予想外の再生力を見て僅かに目を見開く。勿論職場体験先として、美亜の個性が『再生』の要素も持っていることは聞いている。それでも、前蹴りをくらってから僅か数秒で、立ち上がれる程に再生出来るとは。唯の再生ではなく『超再生』と呼ぶべきではないだろうか。

「はあ……お待たせしました、もう一度お願いします」

美亜の両腕に血液が絡みつき、赤黒い腕を形作る。無数の紅い線が血管のように張り巡らされ、凶々しさを感ずる。そんな姿を見てミルコはニツと笑った。

「血の腕か、面白そうじゃねエか。よし、もう一回戦だ！」

ミルコは一つ伸びをして、美亜を見据える。先程の丸腰とは違う、体育祭の映像で見た主武器メインウェポンである両血腕の準備ができている。先程は実力を試すために、そこそこの力を出した。次はもっと手加減をして、引き出しの数や機転を探る。

「先手は譲ってやる！来な！」

腰を低く落とし半身で構えるミルコを見て、美亜も再戦の意図を悟る。先程は気付くことすらできずに瞬殺された。先手を譲ってくれるなら是非もない。一撃でもやり返すために何が最善か。数多の策が思い浮かんで消えていく。視認することすら許さない速度、一撃で骨を砕く力。強すぎる、これがトップヒーローか。

だが、負けっぱなしはプライドが許さない。確かに相手はトップ、学生如きが到底かなう相手ではない。だが腐っても雄英生、おまけに

かなり手加減されている。一撃でいい、全てを捨てた一撃を入れて認めさせてやる。

「瘡に触るが……胸を借りるぞヒーロー!」

美亜の右血腕が蛇の如くミルコに襲いかかる。そして迫る程に巨大化していく。しかし――

「おせエー!止まって見える!」

ミルコからすればただデカいだけ、動きもトロク躲すのは容易だ。最短ルートで正面から突破すべく、真つ直ぐ血腕に突っ込む。

「当然……そう来るよな!」

正面突破を図るミルコ、その眼前に迫っていた巨大な血腕が数多に分裂する。一本は通常の腕程度のサイズ、速度も何ら変わらない。しかし余りの数の多さに、思わず舌打ちをする。

「バカみたいに腕をデカくしたのはこれが狙いか!」

ミルコの油断を誘うため、正面突破をさせるための策。だが、それでもまだ足りない。無数の血腕がミルコに降り注ぐが、跳び回り、体を捻り、次々と躲され掠ることすら出来ない。

(クソ!これで擦りもしないのか……しかも接近してきている!)

距離を詰めたミルコは血腕の雨が止むと、更に加速して一直線に美亜に襲いかかる。美亜の右血腕は先の攻撃で伸び、戻ってきていない。ならば次の策は左にあるはずだ。

振り上げられた美亜の左血腕が、盾状に変化しミルコとの直線上に振り下ろされる。地響きとコンクリートにめり込んだ盾は、相当な分厚さと強度を誇るだろう。この盾で時間を稼ぎ、次の策を練る魂胆か。

「甘めエー!」

だが、ミルコの足は止まらない。一直線で盾に迫ると、目前で上空へと跳躍。そして空中で一回転、盾に向けて渾身の踵落としを叩き込んだ。

「踵^{ルナ}半^{アーク}月輪!!」

ミルコのスピード、全身の体重、回転の勢い、全てを乗せて叩き込まれた大技。美亜の自慢の盾は、たった一撃の踵落としで無惨に砕け

散った。

攻撃を易々と躲し、防御を一撃で砕く。圧倒的な差を見せつけられた人は、ヒーローも敵も関係なく、得てして戦意を失い諦めるはずだ。破片が宙を舞い、隙間から美亜の顔が見える。しかしその眼は、獲物を狙う獣のように鋭く、爛々と闘志を燃え上がらせていた。

「ありがとよ、油断してくれて……」

「は？」

ミルコの全身に悪寒が走る。個性が、経験が、全力で警鐘を鳴らす。(成る程……こいつ！)

美亜の策に気付き、ミルコはニヤリと笑う。視線を向けた先、破片の隙間から見える右腕は、槍状に変形しミルコに照準を合わせていた。

全てはこの一撃のために。デカくてとろい初撃は、ミルコの油断を誘い正面からの接近戦を選ばせた。更に、無駄に派手な攻撃は、「右腕を伸ばしきってしまった、右腕からの攻撃は時間がかかる」という先入観の植え付け。切り離し、再形成出来ることは知らされていた筈なのに。

巨大な盾は、一撃で砕いてやろうという思考に誘導するため。空中に誘い出し、ミルコの機動力を奪い、回避不可能な状態を作り出した。おまけに破片での視界妨害、右血腕を隠すことまで用意周到に織り込んでいる。

格下のみに許された、油断や手加減を利用した作戦だ。プライドを捨て、弱者の闘い方が出来るヤツは伸びる。

(良いじゃねエか！拳士アイツが自慢してただけはある)

「この一撃、躲してみろ！」

美亜の右血槍が、未だ宙を舞うミルコへと襲いかかる。ミルコは地に足がついておらず、踏ん張ることは出来ない。おまけに距離も目の前、当たるまで1秒も無いだろう。この一撃は躲せない、美亜は確信を持って腕を振り抜いた。

「確かに良い策……だが！」

槍が突き刺さる寸前、ミルコの左手が添えられる。軌道を僅かに逸

らし、更に自身の体も捻り、空中で見事に槍を受け流して見せた。

渾身の一撃が空を切り唾然とする美亜、その脇腹にミルコの右足が一閃、叩き込まれる。着地したのち、回転を乗せて振り抜かれた一撃は、美亜を容易に吹き飛ばした。

「これでもダメなのか！クソ！」

仰向けに転がった美亜は、悔しさに思わず床を叩く。一撃に懸ける、聞こえはいいが失敗してしまえば一方的にボコられたただけ。時間にしてみれば1分程度か。自ら選んだ作戦だが、終始防戦一方で、最後の逆転を狙う事しか出来なかった。そんな策しか取れなかったのは、全て力が足りないからだ。

「へエ、お前聞いてるより熱いやツなんだな」

ミルコはカラカラと笑いながら、悔しがる美亜の側にしゃがみ込む。

「まあセンスは悪くねエと思うぞ。15歳にしてはやる方だ。個性も強力で機転も効く。でもな——

ミルコは立ち上がり、横たわる美亜を置き去りにし再び距離を取る。そして美亜の方へ振り向くと、再び戦闘態勢に入った。

「それじゃダメだ。お前がもつと強く、もつと高く跳びたいと願うならな。だがあいにく人に教えるのは苦手なんだ。だからかかってこいよ、気付くまでボコボコにしてやる！」

美亜もよろめきながら立ち上がる。

「つたく……根性とか気合いとか苦手なんだよ。まあいい、付き合ってくれるってなら……遠慮なくやらせて貰おうか！」

垂れ下がった前髪をかき上げた美亜、その眼は闘志と興奮で爛々と燃え上がっていた。

「お願い………しますー！」

第33話 血濡少女とラビットヒーロー

「ホークス、何故俺を選んだのです?」

常闇に尋ねられたホークスは、虚をつかれたような表情を見せる。しかしそれは一瞬で、直ぐに軽快に笑って常闇に顔を向ける。

「鳥仲間」

「お巫山戯ふざけで……?」

破竹の勢いでトップに上り詰める新進気鋭のヒーローホークス。彼の事務所から指名が来た時は本当に嬉しかった。しかし、切望した職場体験は、速すぎるホークスをひたすら追いかけて、彼が解決した事件・事故の後処理に終始する日々だった。育成する気など全く感じられない。ならば何故俺を指名したのか。

勇気を出して聞いた常闇だったが、帰ってきたのははぐらかすような軽い言葉。

「いや2割本音、半分は1年A組の人から話を聞きたくて。君らを襲ヴァイランれんごうった敵連合とかいうチンピラのね」

成る程、そつちが本心か。沸々と悔しさが込み上がる。

「だから千染も指名したのですか?」

「その目的」の為ならその通り。後進育成なんかする気ないんだけど。直接戦千染美亜った当事者の話は聞いときたいから」

俺は伝書鳩じゃないぞ。悔しさを噛み締める常闇の耳に、ホークスの言葉が聞こえた。

「でもやっぱり断られた、流石に警戒されちゃったかもね。ミルコの所で今頃何してるのかな……」

「ヒュー……ヒュー……カハツ……」

職場体験1日目、昼間からミルコとの戦闘訓練を続けてきた美亜は、息も絶え絶えに仰向けに倒れていた。

「はあ……はあ……おえ……」

限界を超えた運動量に吐き気を催す美亜、対してミルコは息一つ乱

れず涼しい顔をしている。

それもそのはずで、昼間から5時間程度ぶっ続けで訓練している。しかしミルコに対し一撃も与えることができず、美亜はひたすらボコされていた。正直、後半はヤケになりワンパターンの特攻を繰り返していたのだが……

「水分とれよ、本当に死ぬぞ」

起き上がらない美亜に近づいたミルコは、腕を掴んで無理やり上体を起こさせ、スポーツ飲料水を渡す。

「今日はこんぐらいにしとくか。それ飲んで、落ち着いたらメシ行くぞ！」

「おえ……メシって気分じゃ無いんだが……」

火照った体に染み渡る冷たさが心地よい。背を向けて歩き出したミルコについて行くため、美亜はふらふらと立ち上がった。

余りにも遠い背中だ。ミルコは確かに美亜の戦い方をダメだと言った。しかし結局一方的にボコされただけで、何がダメなのかは分からなかった。ミルコの身体能力は確かに驚異的だ。明らかに手加減している状態であれ程のレベル。身につけることができれば最早敵無しだろう。だがそんな事が不可能なのは百も承知だし、ミルコが言いたいこともそんな事では無いだろう。

あの戦い方はミルコの個性あつてこそだろうし、そもそも時間も実力も余りに足りていない。

結局、いくら考えても何のヒントも得られず、ただ実力差を思い知らされただけで、職場体験初日の訓練は終わった。

「……だ！」

「……!？」

店に向かいながら考え込んでいた美亜は、ミルコの突然の大声に驚く。

「まだ潰れてなくて良かった！——よお、久しぶりだな婆さん。2人いけるか？」

No. 6 ヒーローのおすすめ店、一体どんな高級店に連れて行かれ

るのだろうか。作法とか礼儀とか全く知らないが大丈夫だろうか。今更聞くのも恥ずかしい。

頭の片隅でそんな事も考えていた美亜だったが、意外にも店は大衆向けの地元の定食屋だ。どちらかと言えばボロい店構えで、どこか熱犬孤児院に似た空気を感じる。

「ミルコ、この店は来たことあるのか？」

「ああ、前に保須に用があった時にな。それから気に入ってこの辺に来る時には必ず来てる。婆さん、にんじんステーキ定食2つ！」

人の良さそうなお婆さんが注文を聞き、これまた人の良さそうなお爺さんが調理を始める。客は自分達しかおらず、TVからはどうでもいいバラエティ番組が流れている。

「にんじんステーキ？2つ？」

「このにんじんステーキは美味いぞ。この辺だとこの店にしか無くてな。にんじんは嫌いか？騙されたと思って食ってみろ」

「いや、そうじゃなくて……まあいいか」

このタイプの人間はよく知っている。正に拳士さんがこういうタイプなのだ。人の話を聞かない。猪突猛進で周りの人を振り回す。

ただ、こういうタイプに助けられる人もいる。美亜自身、自分が積極的なタイプではない事は分かっているし、ぐいぐい引つ張ってくれる所に憧れを感じることもある。だからといって、人の夕飯を勝手に注文するのはどうなのか……そもそもにんじんステーキってなんだよ……

「なあ、お前どうしてヒーロー科に入ったんだ？ヒーロー志望じゃないって聞いたぞ」

美亜が取り止めのない事を考えていると、突然ミルコから質問された。

「確かにヒーローに憧れは無いし……なりたいわけでもなくて……やっぱり強くなりたいからだな。強ければ選択肢も広がるし、護れるものも増えるから」

一瞬驚いたような表情を見せたミルコは、直ぐに満面の笑みを浮かべ、美亜の頭を乱暴に撫でた。

「強くなりたいか、潔くて良い！うだうだ悩まなくて分かりやすいな！じゃあ明日はもつと厳しく行くか！」

「やめろ、あれ以上は再生があっても死ぬ」

そつぽを向きながら手を払い除ける美亜、面白がって追撃を加えようとするミルク。トップヒーローだけあって払いのけるのも一苦労だ。

「はいお待ちどうさま、にんじんステーキ定食2つね」

「おい、飯来たぞ。いい加減大人しく——」

いい加減鬱陶しく感じた美亜が視線を向けると、ミルクは既ににんじんステーキを切り、口へと運んでいた。

マイペースというより傍若無人なミルクに呆れながら、美亜もにんじんステーキを切り分ける。

(何となく流してしまっていたが、そもそもにんじんステーキって何だ。ステーキって普通肉だろ……白米もついているし、にんじんで白米を食べるのか……？なんかべちよべちよしてそうだな……)

見た目は丸々一本のにんじんをただ焼いただけ。熱々の鉄板の上でステーキソースがいい音を立てているが、それでもその存在感は消せない。

切り分けた一片を恐る恐る口に入れる。

「……美味しい」

「な！美味しいだろ!？」

グラッセのようにべちやつとしていているかと思っただが、口に入れてみると意外にもカリッとした歯触りだ。表面はサクツと、中はしつとりホクホクで、肉とは違うがこれはこれで美味しい。焼いた事でにんじんの甘さが際立ち、ステーキソースの濃い塩味とよく合う。

「最初にわざと水分を飛ばしているの、それで多めのオリーブオイルでカリッと焼くのだよ。食感がしっかりしてた方が食べ応えあるでしょ？」

美味しそうに食べるミルクと美亜を見て、笑顔を浮かべたお婆さんが話す。

「うちは元々にんじんステーキなんて出してなかったんだけどねえ。」

そのこの兎さんが無茶を言うからさ、作ってやりたいと思ってね」

何となく想像がつく。いきなり来店し、メニューにないにんじん料理をリクエストして、人の良い二人が作ってあげたのだろう。なんて迷惑な話だ。

「本当大変だったのよ。にんじんだし、思いつきり丸齧り出来るようにしたくてね。表面をカリカリにするのかポイントさ。柔らかすぎると持ち上げた時に枝垂れちゃうのよ」

それでも、お婆さんは心から楽しそうに話している。「兎さん」と呼ばれたミルクも、口いっぱいに頬張りながら、抗議の意味で睨みつけているがそこに険悪さは一切ない。

いわゆる愛されキャラというやつなのだろうか。騒がしくて実直、思った事ははつきりと声に出す。美亜とは正反対の性格だ。憧れはしないが、それでも少しだけ羨ましく思う。

そんな事を考えながら食べていると、いつの間にか完食してしまっていた。どうやら予想以上の美味しさに、箸が止まらなかつたらしい。

「美味かっただろ？お前意外と食うんだな」

「うるさい……」

既に完食していたミルクが、満面の笑みで美亜に問いかける。美亜は思わず恥ずかしくなり、顔を背けて気不味そうに答えた。

天邪鬼さに呆れるミルクだったが、帰り際に美亜が婆さんに呟いた言葉は聞き逃さなかった。

「ごちそうさまでした。——美味しかった……です」

思わず笑顔になったミルクは、店を出るとグツと背伸びをして美亜へと振り返った。

「よし、初日は終わりだ。腹一杯だし帰って寝るか！」

第34話 血濡少女と苦難

「痛ってエ……くそ……」

体が動かない。たった一撃くらっただけのはず。それなのに全身が軋む、立ち上がることもすらできない。

いつものファイトクラブ、喧嘩に明け暮れていた時にその女と目が合った。コスチュームの上からでも分かる細身ながら筋肉質な体、立ち姿は重心が安定しまさに骨で立っているかのよう。一目で分かる、この女は強い。

人差し指で挑発すると、女は意外そうな顔をした後、好戦的な笑みを浮かべてリングへと上がってきた。頭部の犬らしい耳に加え、真っ白な歯には発達した犬歯が2本、こいつも私と同じ動物系の個性らしい。

そしてタイマンが始まる。女は腕を組み、どっしり構えたまま動かない。舐められているのか、それとも実力を試しているのか、どちらにしろ気に食わない。

地面を蹴り上げ、跳躍して一気に距離を詰める。勢いそのまま上空から踵落としを繰り出したが、女は反応する素振りすら見せない。脳天をカチ割り地面に這いつくばらせてやろう、そう思った次の瞬間、私の足はまるですり抜けたかのように空を切った。

(個性か?!いや……!)

空を切り着地した右足を軸に回転、遠心力を乗せ左足を横薙ぎに振るう。しかしそれも虚しく空を切る。その後も全力の足技で連撃を加えるが、掠りすらしない。それどころか女は楽しそうに笑みを浮かべたまま、腕を組んだままだ。

目にも止まらぬ連撃に、会場のボルテージが上がっていく。今でこそ女は躲せているが、圧倒的な速さと手数の前になすすべなく敗れることを誰もが確信していた。そんな熱狂の渦の中、私の思考はやけに冷静だった。

(違う、個性じゃない。この女はただ躲しているだけ。当たるか当たらないかのギリギリで、僅かに重心だけをずらして……!信じられ

ねエ、武術かなんかかよ！)

「——良い」

決めにいった大振りの踵落としが躲された瞬間、女の声ははっきりと聞こえた。地面に足が着くまでの時間がスローモーションのように過ぎていく。女が左足を前に半身に構え、膝を曲げ重心を低く低く落としていく。組んでいた腕が解かれ、右手が後ろへと引き絞られる。私の思考が全力で警鐘を鳴らしているが、未だ地面に足はついていない。躲せない——そして、振り抜かれた拳が私の腹部に直撃した。

大砲にでもぶち抜かれたような衝撃が襲う。肺の中の空気が全て吐き出され、無惨に吹き飛ばされた私は、宙を待ってリングの金網に叩きつけられた。

「お前強いな！」

「は？」

地面に這いつくばったまま痛みで動けない私に対し、女が何故か満面の笑みで褒めてくる。

「手合わせすれば分かる！重心の移動、卓越した足技、戦い慣れてるな。その年齢では考えられない程強かった！」

先程までの威圧感は何だったのか、女は底抜けに明るい声色で話しながら、無用心に近づいてくる。

「だからこそ惜しい。そのままではいつか限界が来て壁にぶち当たる時が来る」

「今言うと皮肉だぜ……お前クソ強いな。何したらそんな強くなんだよ」

女は顎に手を当て、うんうんと唸りながら考え出した。そして、何を思いついたのかパツと表情が明るくなった。

「私は強くないよ、まだまだ未熟者で学ぶことも多い。でも……そうだな、何かの為に、誰かの為に、そんな思いが私を奮い立たせてくれる。どんなに辛くても苦しくても、限界を超える力をくれる。敢えて言うならそんなところだ」

そう言つてにつこり笑い、女が手を差し伸べる。太陽のように眩し

い笑顔だ。

「だから一緒にヒーローを目指そう！君はきつと凄いヒーローになれる、そんな気がするんだ！」

私は女へと手を伸ばす。この手を掴めば、私はもつともつと強くなる。知らない世界や見たことのない景色を見られる。

しかし、手が触れそうになったその時、女の体が力強く引つ張られ私から引き剥がされた。

「こんな所で勧誘なんて、精力的だね拳士ちゃん。私は目立たないでつて言ったつもりだったんだけどな……」

現れた女は悲しそうな表情をしているが、拳士と呼ばれた女は後ろから襟を掴まれたまま青い顔をして震えている。

「ごめんね、痛かったよね。大丈夫、もう痛くない、貴方は頑張れるわ」
痛みで未だ立ち上がれない私へと近づいてきた女は、目の前でしゃがみ込むと、頭を撫でながら優しい口調で話しかけてきた。

すると痛くて動かせなかった体から痛みが引き、今までにないほど力が漲ってきた。

「効果はあくまで一時的なものだから、ちゃんと医務室に行きなさいね。それじゃあお騒がせしました〜」

呆気に取られたミルコの前で、拳士と呼ばれた女は襟を掴まれ、そのまま引き摺られて去っていった。

「あー……悪かったって、流石にやりすぎた」

職場体験2日目、昼食を食べに来たサンドイッチ屋でミルコは美亜に謝っていた。

事の発端は、前日に引き続いて行われた実戦形式のタイマンだ。流石に2日目という事もあり、ミルコはある程度教えながら戦おうと思っていた。しかし何度ボコされても立ち上がってくる美亜について熱くなり、思いつきりボコボコにしてしまったのだ。

「別に気にしてないから」

そう言っつてサンドイッチを頬張る美亜だったが、頑なにミルコに視線を合わせない所を見るに明らかに拗ねている。

ただ拗ねるのも分からなくはない。戦い方がダメだとか言っておきながら、教える事もなく、学ばせる間もなくボコボコにしたのだ。(ガキのお守りはむずいな……孤児院やつてる拳士さんや美波さんはすげえわ)

初めての職場体験受け入れという事もあり、教える事の難しさにミルコは頭を悩ませる。たった1人でも2日間での有様だ。これが複数人いて、生活の面倒を見なければいけない。私には絶対出来ない。勿論子供は好きだがそれとは別の問題だ。

「はあ……まあいいか。そんな事よりずっと手合わせしてるけど、パトロールとかしなくて大丈夫なのか？」

美亜は海老とアボガドが詰まったサンドイッチを食べ終え、ようやく一息つく。再生に加え無痛があるとはいえ、脳が揺れて普通に気分が悪かった。冷静さを取り戻し、気になっていた事をミルコに問いかける。

ミルコは事務所を持たないヒーローであり、全国各地を転々として活動している。この保須市に由来する理由も何か用事があるからだろう。今日の午後もまた手合わせをすると聞き、パトロールに出なくていいのかと疑問が湧いた。

「ああ、お前もここに来る時見たろ。今この街にはヒーローが多いんだよ。だから多少私がいなくて大丈夫なんだ」

ミルコの言葉に美亜も心当たりがあるようで深く頷く。確かに、ここに来るまでやたらとパトロールしているヒーローを見かけた。お昼時で一般人の人出も多いので、そんなもんかと思っていたが、言われてみると違和感を感じる。都心なら分からなくもないが、保須市は郊外都市で人通りもそこまで多くない。

「確かに多かった気がするな。なんだ、凶悪な敵サイランでもいるのか？怖い怖い」

美亜は茶化すような口調で言ったが、神妙な顔で頷いたミルコを見て目を見開いた。

そして徐に身を乗り出したミルコは、周囲の客に聞こえぬよう声を潜めて話し出した。

「敵の名はステイン。巷では“ヒーロー殺し”なんて呼ばれてる。17人のヒーローを殺害し、数多のヒーローを再起不能にしたマジモンの殺人鬼だよ」

ステイン、ヒーロー殺し、美亜はどこかで聞き覚えがある名に思慮を巡らす。確かニュースや新聞では無かったはずだが……

「そいつがこの街にいるのか？」

「ああ、奴はこの街で1件事件を起こしたが、上は次も此処に現れると踏んでるようだ。だから私が呼ばれたんだよ」

「あ……」

その時、もやもやしていた美亜の思考がストンと腑に落ちる。

何故、向上心が高い飯田が、もつと上からの指名があつたにも関わらず中堅のマニユアル事務所を選んだのか。何故、路地には気をつけろだの、ヒーローの側を離れるなだの、あんなにも私にしつこく注意してきたのか。

飯田は気付いている、ヒーロー殺しが再び保須市に現れる事を。飯田の兄、インゲニウムがヒーロー殺しに襲われたのは保須市だ。何故気付いたかは分からないが、それでも確信しているからこそここに来た。兄の仇を討つために。

「どうした？」

「いや、何でもない。セットにしてポテトも頼んどけばよかつたなつて」

しかし飯田の目的を理解して尚、美亜はそれを止めようとは思わない。当然緑谷や他のクラスメイトなら必死で止めようとするだろう。雄英高校生とはいえ唯の高校一年生。ヒーローを何人も殺している殺人鬼への仇討ちなど自殺行為に等しい。自らの命を投げ打つ行動を、兄や残された者達は喜ぶだろうか。

だが、そんな綺麗事では済まない感情がある事を美亜は知っている。復讐、怨念、激情、理屈では抑え込めない心の奥でドス黒く蠢く怪物が、意思や理性とは裏腹に足を止める事を許さない。

外野が如何なる言葉をかけようと、自分自身が生み出した怪物に人ごときには敵わないのだ。

もしそんな怪物を打ち倒せる者がいるのなら、きつとより強き光を持って、強引に照らし尽くしてくれる、そんな者なのだろう。

——だが、私にはそんな者は現れなかった。

「お前って意外と食い意地張るよな。ほら、私の食っていいぞ」

美亜は胸騒ぎを覚えながら、ミルコから差し出されたポテトを食べるのだった。

美亜達は昼食を食べ終わり、軽くストレッチをして午後の訓練に入った。

しかし、どうも美亜の動きがおかしい。キレが悪いのか、心ここに在らずというべきか。午前中より明らかに覇気を失ったその姿にミルコも首を傾げる。

（もしかしてボコし過ぎたか……？ いやでも機嫌治ってたっぽいよな。表情に出ないからわかりずれえな）

生意気な態度でいつの間にか敬語も取れている美亜だが、所詮まだ高校一年生の子供だ。勢い余ってダメ出した上ボコボコにしてみましたが、予想以上に精神的にキているのかもしれない。

「なあ、お前の個性の強みって何だ？」

蹴り碎かれた肋骨は再生しているはずだが、仰向けに倒れたまま動かなかつた美亜は、ミルコからの問いかけにゆつくりと体を起こした。

「強み？」

「ただでさえお前の個性はできることが多いんだ。これだって強みを見つけて、それを軸にした戦い方を見つける。未熟で若いお前にとって何より重要な事だと思うぞ」

それを聞いた美亜は、その場で胡座をかくと顎に手を当て考え出した。

千染美亜の個性は非常に優秀だ。そもそも能力が1つの個性であると思えないほど多い。それに加えて思考能力も高く、冷静な判断力を武器にさまざまな作戦を考える事もできる。この歳で既に相当なレベルに到達している。それがミルコから見た美亜の評価だった。

だがその反面、粗も非常に多い。多様な能力は裏返せば扱いが難しいという事だ。なまじ思考力が高いが故に、戦い方に迷いが生まれてしまっているのだろう。更に冷静すぎるのも問題だ。無意識の内に自分には出来ないかと決めつけている。客観的に見ているつもりだろうが、自己肯定感の低さと相待って、己の可能性を大幅に狭めてしまっている。

「強みか……操血ではないな。どちらかと言えば再生の方が重要といえる。再生がないと今の戦い方は出来ないしな。使う機会も1番多い」

美亜はそう言って血腕を見つめる。操血単体では、どうしてもブラドキングのように血液を溜めて放出する戦い方になる。コストュームも重くなるため、血液量が少なく体が貧弱な美亜には不向きだ。だからこそ『再生』の恩恵は大きい。まず、出血を前提とした戦い方を取ることが出来る。勿論血液量を増やせる『増幅』は必須だが、躊躇なく腕を切り落とせるのは、死地に飛び込めるのは全て『再生』あってこそだ。

「確かに再生も強力だが、もっと根本的な所だ。強みってのは、大体無意識で当たり前のように使ってるものが多い。それこそ息をするかのように自然とな、そこまで突出してないと強みとは言えねえ」

少しヒントを与え過ぎたかもしれないが、丸投げというのも酷だろう。それに、拳士さんが褒めちぎっていただけあってセンスはいい。正しい方向に成長さえすれば、かなりの実力を持ったヒーローになれるだろう。

だからこの職場体験は何かの縁だ。かつて増長していた自分に背中を見せてくれた拳士さんの頼みであれば、少しぐらいアドバイスしやってもいい。だがこれ以上はだめだ。後は美亜自身が気付き、それをどう活かしていくか次第だ。

眉間に皺を寄せ、再び頭を悩ませ始めた美亜を残して、ミルコは飲み物を買いに運動場を後にした。

「これでいいか……」

独り言を呟いた美亜は、ベッドに携帯を放り投げると自分も仰向けに寝転がった。幸いにも痛みを感じないため、気怠さを感じるだけで済んでいるが、痛みを感じる体であれば、今頃は筋肉痛でのたうち回っているだろう。それぐらい激しい手合わせを2日間も行なっている。

だがその甲斐もなく、何がダメなのかは未だに分からない。今日も強みは何かとか聞かれたが、どうやら『再生』の事では無いようだ。言い方からして、個性の新たな使い方、戦い方を模索しろと言う事なのだろう。そのための軸となる強みを認識させようとしている。

美亜は仰向けのまま拳をベットの叩きつける。拳はスプリングによって跳ね返され、ベットが軋む。成長しない自分に、答えを見出せない自分に腹が立つ。

「強み……無意識で使っているもの。多分痛みを感じないことだよな……個性じゃ無いけど」

強みに関しては何となく目処がついている。ミルコのアドバイスは、殆ど答えを言っているようなものだった。

確かにいくら再生があろうと、生物は本能で痛みを避けようとして脳にリミッターをかける。それを感じないという事は、生物の無意識のリミッターを解除できるという事だ。通常なら足踏みする場面で死地に飛び込む、筋繊維を酷使し限界を超えた力を発揮するなど心当たりは多い。

それが何だというのか。無痛を軸にした戦い方なら既にやっている。無痛があるから腕を切り落とせるし、出血の為に傷を負うことができる。だがミルコが言いたい事はそういうことではないはずだ。勝てはしなくても、少しでも戦えるアイディアを出す。そこに成長のヒントがあるはずだ。

余りにも濃い2日間を思い出し、美亜の頭に天啓のようにアイディアが閃いた。

「ああ……そうか、そういうことか……」

美亜は弾かれたように起き上がると、運動着に着替えて外出の準備を始めた。

「まったく、初めての一夜漬けだな」

第35話 血塗少女と初めてのパトロール

『心配してくれてありがとう。でも俺は大丈夫。お互いに職場体験頑張ろう！それではおやすみ！』

緑谷と麗日にメッセージを打ち終え、飯田は深くため息を吐いた。マニュアル事務所に職場体験に来てから2日目が終わった。クラスメイト達の職場体験の感想でグループチャットが賑わっている。和気藹々としたやり取りを見ていると、申し訳なさや罪悪感で押し潰されそうになる。

そんな中、緑谷さんと麗日くんから個別に心配しているとのメッセージがきていた。いつも通り振る舞っていたつもりだったが、表情や態度に出ていたのだろうか。

「私怨で動くのはやめた方がいいよ。我々ヒーローに逮捕や処罰をする権利はない、もし私刑と捉えられればソレはとても重い罪となる。あ！いやヒーロー殺しに罪がないとかじゃなくてね。君、真面目そうだからさ！視野がガーツとなっちゃってそうで案じた」

今日の昼、マニュアルさんに言われたことを思い出す。ヒーロー殺しを追っている事を気付かれてしまった。それでも決して怒る事はなく、寧ろ優しく僕の身を案じてくれた。本当にありがたい忠告だと思う。

「しかし……じゃあしかし……!!この気持ちをどうしたらいい!?!」

苦悩に濡れた独り言が、誰もいない夜の部屋に溶ける。無謀である事など百も承知だ。それがいけない事だということも。けれど頭では分かっている心も心が止まることを許さない。どす黒い感情が今も沸々と湧き上がり続ける。

その時、通知音が響き沈みかけていた意識が引き戻される。緑谷くんか麗日くんからの返信だろうか。

『死ぬなよ』

画面を見た飯田の目に入ったのは、美亜からの非常に短いメッセー
ジだった。

美亜くんとは業務的な連絡をこちらから一方的にしているだけで、その返信も『うん』『わかった』などの簡素なものばかり。初めて向こうから送られてきたメッセージ、内容と簡素さのギャップに思わず笑みが溢れる。

「美亜くんには……気付かれてしまったか……」

死ぬなよという言葉、間違いなくヒーロー殺しの件に気づいたのだろう。考えてみれば当然だ。色々言ってしまったし、職場体験中にヒーロー殺しが再びこの街に現れることを聞いたのだろう。その情報があれば、冷静な美亜くんなら気付くに決まっている。

それにしても、友が死地に飛び込もうとしているのに何ともあつさりしているものだ。普通なら必死に止めるか話を聞こうとするだろう。初めからヒーロー殺しと戦うことを前提にした忠告をするあたりが実に彼女らしい。

でも、今はそれがありがたい。どんなに優しい言葉をかけられようと、どれだけ熱く説得されようと、どうせ止まることなどできないから。寧ろ、俺自身の醜さと比較してもつともつと自分が嫌いになってしまう。

「ありがとう美亜くん……」

夜の闇に押しつぶされそうだった心が、ほんの少しだけ軽くなった。飯田はアプリを閉じて眠りにつくのだった。

——明日こそ、ヒーロー殺しに会えることを願って。

「お前、昨日ちゃんと寝たか？」

職場体験3日目の朝、宿泊するホテルの朝食バイキングでミルコが美亜に問いかけた。

向かいに座る美亜は、緩慢とした動きで白米を口に運んでいる。目の下には隈がはつきりと刻まれ、瞼も半分ぐらいいしか開いていない。ミルコの問いかけにも答えることなく、黙々とご飯を口に入れている。

「おい、聞いてんのか？」

ミルコが頭を軽く小突く。美亜は今気付いたかのように顔を上げ、

周囲をキョロキョロと見回しだした。

「ああ……すまない。あまり寝てなくてな」

「大丈夫かよ」

予定では今日も手合わせをやるつもりだ。こんな注意力散漫な状態でやつても何の成長もない。職場体験も3日目に入りそろそろ何らかの成長を見せて欲しいが……この様子では難しいかもしれない。だがそれも仕方がない。何せちよつと前までまともに個性すら使っていないかった中学生だ。それでいきなり戦えと言う方が無茶だろう。勿論例外はあるが……

「そんな事より今日もやるんだろ？ちよつと考えている事があるんだが……とりあえず見てくれ」

その言葉を聞いて、ミルコは面白そうにニヤリと笑う。まさかこの短期間で何らかの答えを出してくるとは。良い悪いは別としてその姿勢は称賛に値する。

3日連続でトレーニング施設に移動した2人は、慣れた様子で準備すると向かい合った。

「さて、それで何を見せてくれたんか？」

「ああ……ずつと考えてたんだ。どうすればもつとマシな戦いになるのか。私にしか出来ない戦い方ってなんだってな」

美亜は声に出しながら自分の考えを纏める。

「私の個性は傷を負うこと、攻撃をくらうことが前提だ。だがミルコのように、理不尽にも一撃で行動不能にしてくる奴らがうじゃうじゃいることを知った」

職場体験とは名ばかりの手合わせ。幾度となく骨を砕かれ、筋肉を潰され地面に這いつくばった。いくら『再生』があろうと動けなくなつては何の意味もない。

「必要なのは身体の強化ではなく補強。骨を砕かれようと、肉を潰されようとゾンビのように戦い続ける。敵は再生など待つてくれないから」

USJでの脳無戦、再生の隙もなく一方的に屠られた。私には強靱な体も躲せる瞬発力も無い。だからこそ倒れてはいけない、膝をつい

てはいけない。

「考えすぎて思考が固まっていたんだ。血腕に執着する余り、そこからの派生にしか考えが及ばなかった」

槍、盾、鎚、刀、千差万別に変化する血腕が武器だと思っていた。だが違う、この個性にはまだまだ可能性がある。

美亜の手首が裂け鮮血が溢れ出す。溢れ出した血液が腕に纏わり付き、その腕を赤黒く染め上げる。床に流れ落ちた血が足に絡みつき、膝から太腿へと覆い尽くしていく。

（成る程、一夜漬けにしてはよく考えたじゃねえか。体が脆けりや外骨格を作ればいい、シンプルだが理に叶ってるな）

ミルコは大胆だが考えられた進化に笑みを深くする。美亜の致命的な弱点である身体能力の低さ。『再生』の能力を持っていても、初撃で行動不能にされてしまえば再生している間にボコされるだけだ。だからこそ行動不能にされないように立ち回るべきなのだが、美亜にはそれが出来ない。

ならどうすればいいか。簡単だ、壊されても倒れなければいい。外骨格を形成することで、折られても潰されても無理矢理立ち上がるこゝとができる。勿論、痛みを感じない美亜だからこゝとできる戦い方だ。（だが、こいつ倫理観ぶち壊れてんなあ……痛くねエとはいえ、1日でそんなグロいやり方を考えてくるかよ）

「——おい、どうした？」

美亜の体を覆いつつあった血液が肩や腰で止まった。そして突如、美亜が膝から崩れ落ちた。ミルコは駆け寄ってその体を支える。その顔色は青ざめ、額に大粒の汗を浮かべ呼吸も荒い。

「いい考えだと……思ったんだがな……」

美亜は昨晚、この戦い方を思いついてから何度も試してみた。しかし覆う箇所が多くなればなるほど不快感と悪寒が増していくのだ。それでも無理に進めようとして、何度もぶつ倒れたし吐いた。まるで体が『個性』を拒絶しているかのように、その侵食を阻むかのように反応するのだ。

「ったく、それで寝不足だったんだな」

美亜から倒れた理由を聞き、ミルコは呆れたようにため息を吐きながら乱暴に腰を下ろした。

「あのなあ、そんな一朝一夕で身に付いたら苦労しねえよ。ついこの間まで個性まともに使ったことないガキだったんだぞ。失敗して、アホみたいに時間を掛けて身につける。それで当然だろ」

確かに立ち塞がる壁を易々と超えていく奴らは居る。いわゆる『天才』と呼ばれる奴らだ。僅かな時間で恐ろしく成長し、それでも満足しない化け物。美亜の通う雄英高校といえば天才共の巣窟だ。クラスメイトや先輩、そして私らヒーローと比較して焦る気持ちは分からなくはない。ミルコの脳裏に、拳士のアホみtainな笑顔と戦闘時の真剣な顔が浮かぶ。

「まあ、私がちよつと煽り過ぎたところもあるが……えつと……そんな焦んなくて良いだろ。少なくともお前は良くやってる方だ」

まだ学生の頃、拳士にボコされた後にこんな事を言われた気がする。当時はうるせえとしか思っていなかった。強いからって見下すな、お前に勝たなきゃ意味ないんだ、そんな反骨心がミルコを突き動かしてくれた。思い返すと意外に支えられていたかも知れない。

「——まさか励ましてくれてるのか？」

柄にもなく慎重に言葉を探したミルコに対し、美亜の返事は困惑を含んだものだった。勿論、この返答に煽る意図がない事は分かる。単純に普段のキャラとの違いに困惑しているのだろう。それでも恥ずかしい、やはり慣れないことはするもんじゃない。

「うるせえーとりあえずその技は忘れる。昼飯までは手合わせするぞ！」

ミルコは照れを隠すかのように乱暴に立ち上がり、美亜から離れる。その視界の端で、疲れた顔の美亜が一瞬だけ笑ったような気がした。

午前中一通り手合わせをしたミルコと美亜は、夕方のパトロールに向け一度休憩を取り、16時に再度ホテルのロビーに集合した。流石に3日目もぶつ通しで手合わせは気が詰まると思ったのか、気分転換

を兼ねてパトロールをする事になったのだ。

美亜が昼飯を食べながらうとうととしていたからか、気を利かせたミルコが昼寝をする時間をとってくれた。実際、昨晚無理し過ぎたせいも眠かったし驚くほど熟睡できた。すっかりリフレッシュした体を伸ばし、コスチュームに不備がないか確認する。

「よし、じゃあパトロール開始だ! といつてもお前は見学な。私から離れるなよ、気晴らしだとも思ってた気軽に見てる。よし! じゃあいぐぞ!」

ホテルから出ると、街は夕暮れに染まりかけていた。流石にまだ人通りも多く、家族連れや学校帰りの学生が集団で歩いている。

こんな中をコスチュームで歩くのは恥ずかしい。いつかテレビで見たMt.レディとかいうヒーローを思い出す。あのヒーローやミルコほどボディラインを強調する衣装ではないが、それでもこの魔女のようなコスチュームは目立つ。

「おい、あれって……!」

「ミルコ!? ミルコだ! 保水市にいるって話マジだったんだ!」

「ファンです! 握手して下さい!」

街に出ると、周りの通行人が一気に騒がしくなる。流石はNo.6ヒーローミルコだ。実力は勿論、そのサービス精神の高さから人気もある。そんな彼女を一目見るべく次々人が集まってくる。

しかし流石はトップヒーロー、慣れた様子で写真を撮る人にはポーズを決め、子供の頭を撫で笑顔を向ける。その間も歩みを止める事なく、隙なく周囲を見渡してパトロールを怠らない。美亜は人混みに遠慮しつつ、ミルコの少し後ろを恐る恐る着いて歩く。

「あれ? あの後ろの女の子、どこかで見たような……まさか……ついにはミルコにサイドキックが!」

「いや、あれ雄英高校の子じゃね?! なんかテレビで見た気がするぞ!」
「千染美亜だろ! 一年生だよな、結構良い感じだった子じゃん!」

しかし、ミルコの後ろを着いて歩くコスチュームを着た存在に気付かないはずもなく、美亜もあっけなく注目の的となってしまった。

雄英高校体育祭から一週間程しか経っておらず、生徒達の活躍はま

だまだ記憶に新しい。特に注目の一年A組、そこそこ活躍した美亜を見つけた彼らのテンションが上がる。

「テレビで見てたけど、リアルだともっと綺麗かも！お人形さんみたいー！」

「これで将来有望なんだろう？俺、今のうちから応援しちやおうかなー！」
「こつち向いてー！」

いつの間にか大勢に注目されてしまった美亜は、助けを求めるようにミルコを見る。

ただでさえコミュニケーションが苦手な上、こんな熱狂した人達を上手くあしらう自信なんて無い。どう考えても面倒くさい、ここは先輩ヒーローに何とかしてもらおう。

「へえ、お前意外と人気あんだな。ちようどいい、これも経験だと思つてファンサービスしてみな！」

「ファンサービス!?!いや……何すればいいんだ」

しかしミルコは面白そうに笑うと、立ち止まって美亜を促すように顎をしゃくつた。

「深く考える必要なんてないぞ、応援に応える気持ちが大切なんだよ。後は手を振るでも握手するでも何でもすればいい」

ファンサービスは人気ヒーローになる上で必要なスキルの一つだ。だが学生の身では大々的にやりずらい上、余程のことがないと注目されない。そういった意味では非常にいい体験なのだろうが、美亜からすればありがた迷惑だ。そもそもヒーローになるかすら分からないし、仮になったとしても愛想を振りまくつもりもない。

しかし、にやにやとこつちを眺めてくるミルコがいる以上やらないわけにはいかない。ミルコに促され、美亜は人だかりへと向かう事にした。近づくと歓声が大きくなる。もうどうにでもなれ、と半ば自暴自棄になりながら歩を進めた。

「わー！すつごい綺麗！頑張つてね！」

「体育祭見てたよー！惜しかったねえ」

「……ありがとうございます」

次々とかけられる声や、差し出される手に握手や軽い会釈をして答

えていく。流石に何人もの人に注目され、緊張のあまり動きがぎこちなくなり何度か噛んでしまった気がする。それでも何とか対応し、一通り挨拶し終えてようやく落ち着いてきた。話す内容も、応援メッセージ的なものからプロフィール的なものに変わり、美亜もそろそろ引き上げようとした。

そんな中、人だかりの端の方に俯いて遠慮がちにしている少女を見つけた。先程から声をかけるでもなく、握手を求める事もしていない。ちらちらと視線は感じていたから、少なくとも応援してくれている人の1人なのだろう。美亜がその少女の方を見ると目が合ったが、すぐに俯いて逸らされてしまう。不思議に思った美亜はその少女へと歩を進めた。美亜の目的を察したのか、周囲の人たちも自然に空間を開け少女を前へと誘導した。

「よお、そんなに俯いてどうした？」

中学1年生ぐらいだろうか、意外に小さかった少女に屈んで目線を合わせ声をかけた。黒髪ミディアムヘアの前髪には金色のメッシュが入っており、垂れ下がって目元まで覆い隠している。俯いてもじもじしているが、どこぞのロッカーのようなパンクな格好をしている。美亜はそのチグハグさに首を傾げながら少女の返事を待った。

「あ……あのー！」

少女が両手を強く握り意を結したように声を張り上げる。急に大きな声を出したせいか声が裏返ってしまい、顔がみるみる赤くなっていった。美亜はそんな少女の様子に表情を変えず、じっと次の言葉を待った。

「あの……好きです、応援してます。体育祭かつこよかったです。あたし、その、最初に見た時から綺麗だなんて思ってた、それで……」
「分かった分かった、とりあえず落ち着け。私は逃げないし時間もあ
るから」

美亜は矢継ぎ早に言葉を続ける少女の頭を少し乱暴に撫でる。話したい事に口がついていかない感じは、どことなくかおりに似ている気がした。だからいつもの癖で頭を撫でてしまったが流石に迷惑だったんじゃないか。少し不安に感じたが、少女は嬉しそうに目を細

めてナデナデを受け入れていた。

「あたし、ヒーローとか全然興味無かったんだけど……千染さんを見てかっこいいなって、あんな風に活躍できたらなって思ってた……」

「そうか、ありがとう」

美亜は内心首を傾げる。皆体育祭での活躍を誉めてくれるが、そもそも活躍していただろうか。体育祭なんて、爆発に巻き込まれ、半身を氷漬けにされ、暴走して制圧された記憶しかない。まあかっこいいと言ってくれているならそういう事にしておこう。

「それで……雄英高校……目指したいなって。今更遅いかもしれないけど。2年生だし、学校行ってなかったから……」

少女の声が次第に小さくなる。雄英高校ヒーロー科は国内最高峰、当たり前だが入学難易度も相応に高くなる。実力と学力共に優れているか、実力が余程突出していないと門前払いだろう。不登校というのは余りにもアドバンテージが大きい。

「そんなこと言われてもな……私も学校なんて行ってなかったぞ」

だが、美亜は中学生はおろか小学校にすら行っていない。五十歩百歩かもしれないが、状況は少女より最悪といえる。勿論家庭環境に差はあって、そこに問題があるのかも知れないがそこまではフォロー出来ない。

「それも小学校からだぞ、こんな私でも雄英高校に入れたんだ。必ず……とは言わんが、目指しちやいけない理由にはならないだろ」

少女は驚いて顔を上げる。まさか雄英体育祭で3位になるような人が、中学はおろか小学校まで行ってないとは。

「とりあえずやってみろよ。駄目だったとしても、雄英志望ならどっかのヒーロー科には受かるだろ。そこでまた努力すれば良い、どうせ将来は同じヒーローだ」

やっぱりこの人には芯があるんだ、少女はそう実感する。自分と同じように学校に行っていない千染さんが雄英に入学し、雄英体育祭で3位に輝きあのミルコの元で職場体験をしている。その事実が少女を勇気づける。

「あの……あたしも……ヒーロー目指します！駄目かもしれないけ

ど、それでも頑張ってみます！」

「そうか、まあ好きにすればいいさ。駄目だったからといって私に文句を言いにくるなよ」

急に恥ずかしさを感じたのか、口元を手で隠した美亜が空いた手で少女の頭を乱暴に撫でる。そして群衆に向かって一礼すると、早足でミルコの元へと立ち去っていった。

「よかったなあ嬢ちゃん、頑張れよ！」

「そうだよ！いつか雄英体育祭で見れるのを楽しみにしてるね！」

少女の決意に感動した人達が、次々と激励のメッセージを送る。少女も先程までの暗い表情と一転し、花が咲いたような笑顔でそれに応えるのだった。

「へえ……お前って意外と熱いやツなんだな、見直した！」

「うるさいぞー！はあ……何であんなこと言っただんだ私は……」

一方美亜は、ミルコに散々茶化されながら、自分の恥ずかしい言動に頭を抱えパトロールに戻る。少女の煮え切らない態度に熱くなつてしまい、つい色々と話しすぎてしまった。一刻も早く忘れよう、そう割り切った美亜はパトロールへと集中する事にした。

出鼻を挫かれた形となったパトロールだったが、その後は特に大きな事件もなくのんびりと進んでいった。流石にヒーローが多数集まった保須市で暴れる敵などおらず、お婆ちゃんの荷物を持ってあげたり、子供と遊んであげたりと、美亜でさえも平和なまま1日が終わると思っていた。

それが嵐の前の静けさとは知らずに――

第36話 血濡少女と保水事件：1

「ねー美波、気にならないの？」

「何のこと？」

美亜が職場体験3日目を通り越している時、熱犬孤児院では穏やかな時間が流れていた。

拳士はソファーに仰向けに寝そべりながら、編み物をする美波へと視線を向ける。熱犬孤児院の懐事情は決して暖かくない。穴の空いた靴下は縫って補修するし、どうしても着れなくなった服は巾着や雑巾などにリサイクルされる。

基本的に手先の器用さを要する仕事は美波の担当だ。一度挑戦してみたがどうにも上手くいかずぐちゃぐちゃになってしまった。その時に作った下手くそな巾着袋は、何故か未だに美波が愛用している。恥ずかしいから捨ててくれと何度頼んでも聞いてくれない。意外と頑固な先輩なのだ。

編み物をする美波、垂れ下がる髪、差し込む日の光、一枚の宗教画のような光景をこのまま眺めていたいと思ってしまう。でも今は他にやりたい事があるのだ。

「美亜のことだよ。今何やってるのかなーとか、ミルコがどんな風に教えてるのかなーとかさ」

拳士がそう聞くと、美波は裁縫の手を止めて考え込んだ。

「気にならない……と言えば嘘になるわね。確かにこんなに長い間離れちゃうと心配、メッセージでも送ってみようかしら」

そう言って携帯を取り出した美波を慌てて止める。連絡を取られては意味がない、せつかくの作戦が台無しだ。

「だったらさ、こっそり見にいっちゃおうよ！もしかしたらパトロールとかしてるかもだし、美亜に気付かれなければ大丈夫だよ！」

私達が見にくるなんて絶対に美亜は嫌がるだろうから、連絡を取らずにこっそり見に行く。

そんな拳士の提案に、美波はため息を吐いて裁縫を再開した。

「はあ……そんな事したら美亜が嫌がるでしょ。それにミルコにも迷惑よ、ただでさえ美亜の引き受けを頼んでるっていうのに……」

だが、ここで易々と引き下がる拳士ではない。今日は風斗が避難訓練で学校に、かおりも友達の家泊まる。つまり2人のことを気にせず孤児院を離れることが出来るチャンスなのだ。この日を逃せば、ヒーロー活動をしている美亜を見る機会は暫く来ないだろう。

「頼むよーいっしょに行こうよー。大丈夫ばれないって、遠くからこっそり見守るだけだからさー」

美波の背後から手を回し、じゃれつく拳士はふとある事に気づく。美波の裁縫がいつもより遥かに遅いのだ。思い返してみると、昨日あたりからぼーっとしていたり、何かを考え込んでいる事が多かった気がする。

「もしかして……美亜のことめっちゃ考えてた？」

拳士の問いかけに沈黙を貫く美波だったが、その赤く染まった耳が何よりも物語っている。

「ほらやっぱり！気になるなら素直に言えばいいじゃん！」

「で、でもダメよ！迷惑になるし絶対嫌がるわ！」

付き合いの長い拳士には分かる。本当は行きたくて堪らないのだろうが、年上の意地、院長として騒ぎ立てるのはみっともないから、そんな理由で我慢している。

「行こうよー！お願い！この通り！」

そんな時は理由を作ってあげればいい。後輩がどうしてもというから仕方なく、そんな言い訳を作ってあげれば意外と推しに弱い美波はコロツと落ちる。

「はあ……何でそこまで見たいのかしら……まあ後輩の頼みを無碍にはできないわよね……」

頬に手を当て悩むような素振りを見せてはいるが、その表情はとても嬉しそうだ。

「しよがない、行きましようか。でも遠くから見ただけだからね、絶対大声を出したり近づいたりしたらダメよ」

美波はそう言いながら準備のために自室へと向かう。その足取り

はスキップしそうな程に軽く、鼻歌まで歌い出す始末だ。きっと本人は気付いてないんだろう。

「本当に……可愛い先輩だよなあ」

「しっかし平和なもんだな」

「当たり前だろ、こんなにヒーローがいる中で犯罪を犯すバカはそういないぜ」

職場体験3日目、ミルコと美亜はファン達と別れパトロールを続けていた。時刻は6時に差し掛かり、夜の闇に染まった街は平和そのものだ。

それもそうだろう。先日のヒーロー殺しによるインゲニウム襲撃事件により、今この街には平時の何倍ものヒーローがいる。勿論ヒーロー殺し本人による再犯も警戒しているだろうが、どちらかといえば模倣犯や愉快犯による犯行を抑制する意味があるように感じる。

そもそもヒーロー殺しはインゲニウムを倒す程の実力者だ。有象無象がいくら集まろうと意味がない。本命は横で欠伸しながらも周囲への警戒を怠らないミルコだろう。多くのヒーローを配置することで、少しでも早くミルコを呼ぶ事ができる。

「なあ、こんだけいれば私達のパトロールは充分じゃないか？そろそろ帰ら——」

美亜が歩くだけのパトロールにも飽き、帰宅の提案をしようとした時、突如爆発音が街に鳴り響いた。

「なっ!!爆発だど!どこから……」

「頭上に注意しろ!!美亜!血腕を出しとけ!」

遠くから聞こえた音だった為、何の音なのか、どの方向から聞こえた音なのか、美亜の判断が遅れる。対してミルコは瞬時に聞き分けており、音の方向へと臨戦態勢を取る。頭上への注意は美亜だけではなく、周囲のヒーローや一般人に向けたものだろう。爆発による振動や衝撃で物が落ちてくるかもしれない。そんな時一般人を守るのは個性が使えるヒーロー達なのだから。

立て続けに爆発音がなる中でミルコは油断なく周囲を見渡すが、幸い物が降ってきそうな気配はない。

これはヒーロー殺しの仕事なのだろうか。奴は基本的に騒ぎを起こさず、裏路地などで目立たず犯行に及ぶ。だとしたら別の敵サイランによる事件、或いはただの事故。何にせよ、遠くで立ち登る大量の黒煙から見ると、敵だった場合相当な手だれかもしれない。その場合こちらのヒーローでは足手纏いになる。

「おい！ヒーローは一般人の非難誘導だ！現場には私が向かう！」

そして瞬時に周囲へと指示を出す。サラリーマンや学生、家族連れなどまだ人通りが多い。パニックになって遠くへ離れようとしたり、その場で立ち止まってスマホを向ける人達が出ている。被害が広がれば危険だ。ヒーローの声ならば聞くだろうし、ヒーロー達は周囲の避難マップぐらい頭に入れているはずだ。

「美亜、てめエも非難誘導に加われ！非難マップはこれだ。その個性で人を護れ、頼んだぜラミア！」

美亜は既に血腕を展開し戦闘態勢充分だが、ここで連れて行くわけにはいかない。勿論どんな敵だとしても護り切つて勝つ自信はあるが、万が一の際にあの2人に顔向けできない。面食らっている美亜の頭を乱暴に撫で、脱兎の如く駆け出した。

『保須市中心部広場にて大男2名が暴れているとの事。個性不明、現在複数名のヒーローが交戦中』

ミルコは全速力で駆けながらヒーロー専用の情報アプリを確認する。大男2名、やはりヒーロー殺しの仕事ではなかった。未だ鳴り止まぬ爆発音を聞く限り、数名のヒーローでは抑えられない程の敵なのだろう。一刻も早く駆けつけるべく人混みを避けビルからビルへと壁を蹴る。

一方、取り残された美亜は途方に暮れて佇んでいた。突然の爆発やパニックに陥る一般人に混乱してでは無く、非難誘導という訳の分からない指示に対して途方に暮れているのだ。

とりあえず渡された地図を広げてみる。緊急避難場所が赤でマー

クされていたが、そもそも自分が今どこに居るのが分からない。そんな状態で非難誘導なんて出来るはずもない。

「あの……私職場体験してて……」

「ああー君はミルコのとこの子か！とりあえず周りの安全を確認しつつ、皆に避難場所を説明してあげてくれ。多くの人はこんな時の避難場所なんて分からないから。後は声掛けをして、怖がってしまった人を安心させてあげてくれ。頼んだよ若きヒーロー君！」

近くにいたヒーローに聞いてみたが感心する程的確な指示が返ってきた。非常事態でも冷静に、職場体験生でも出来そうな指示を当てがう判断が出来ている。ここで私を避難させる方が安全なのだろうが、それではヒーローとしての経験にならないと考えたのだろう。

とりあえず指示に従い、逃げようとしている人に避難場所を教え、へたり込んでしまった人を励まして避難するよう声をかける。これが中々難しく、特に避難を促すのが大変だ。怖がって動けなくなった人にどんな言葉を掛ければいいのか。しばらく悪戦苦闘しながら、美亜は様々な人に声をかけ続けた。

爆発音がしてから1分経たずして現場に到着したミルコの視界に、脳をむき出しにした筋骨隆々な2匹の怪物が大暴れする光景が飛び込んだ。その内1匹が倒れたヒーローに向けて拳を振り下ろそうとしている。

^{ヴィラン}「敵はテメエだなあああ!!」

次の瞬間、ミルコの飛び蹴りが脳無の胸部へと突き刺さった。ただの飛び蹴りだが、ミルコのと速度と跳躍力が合わされば大砲の如き威力を持つ。極大の衝撃に脳無は吹き飛ばされ、ビルを粉碎して瓦礫の下敷きとなった。

「知ってるぜエー！テメエら脳無ってんだよなあ！とりあえずぶっ飛ばす!!」

もう1匹の脳無は、突如吹き飛ばされた仲間と現れた脅威に暴れる手を止める。

筋骨隆々な体、人間とは思えない顔と骨格、何より剥き出しになっ

た脳味噌。コイツらは英雄高校を襲撃した『脳無』と呼ばれる敵と特徴が類似している。

ミルコが事件後に聞いた情報では、オールマイトと互角に撃ち合い壮絶な殴り合いの末捕らえられた筈だ。その脳無が持っていた個性は『シヨック吸収』と『超再生』の2つ。

反則級の個性に素の身体能力もオールマイト並となれば化け物級の敵だ。そんなヤツを2体も同時に相手取るのは流石に苦しい。

だが今の蹴りで吹き飛んだ所を見るに、少なくとも『シヨック吸収』の個性は持っていないようだ。確かUSJの脳無は現在、『タルタロス』に収監されているから同一個体では無いのだろう。もしかしたら個体ごとに個性が違うのかもしれない。それならば私1人で何とかなる可能性がある。

「お前らも非難誘導に行け！コイツらは私がやる!!」

ミルコの言葉に対する周囲のヒーローの反応は早かった。ミルコに敵の特徴を伝えながら、傷ついた仲間を救助してその場を離れる。

敵を制圧するのもヒーローの役目だが、それ以上に一般人を守る事が大切だ。敵の制圧はNo.6ヒーローミルコに任せ、数が多い自分たちが救助に回る事が最適解だ。

ミルコはヒーロー達の言葉を聞きながらも、脳無へと向けた意識は逸らさない。瓦礫の中から起き上がってきた脳無は、体を潰す勢いで蹴り入れたにも関わらず全くの無傷。やはり『再生』を持っている事に舌打ちをするが、あえて不敵に笑う。

「まあいい、最近ガキのお守りばっかだよオ、体が鈍ってんだ!『再生』してくれるってなら丁度いい!サンドバッグになってもらうぜ!!」

「ん?」

美亜が移動しながら逃げ遅れた人を探していた時、携帯の通知音が鳴った。画面には緑谷からのメッセージが届いた通知が来ている。

「これは……位置情報か?何でこんな場所を……」

緑谷からクラス全員に送られたメッセージ、それは保水市の裏路地を示した位置情報だった。このタイミングで謎の位置情報、緑谷のこ

とだから何らかの意味があるんだろう。そして、美亜は直ぐにその意図に気づいた。

「まさか……ヒーロー殺しか!？」

大規模な爆発、暴れる敵、この騒ぎに乗じてヒーロー殺しが犯行に及ぶ可能性は高い。ミルコを初めとしたヒーロー達の視線が逸れたこの状況は、ヒーロー殺しにとって絶好のチャンスの筈だ。

そして、何故か分からないが緑谷は保水市にいる。もし、緑谷も飯田の目的に気付いていたとしたら。その事実気付いて飯田を、ヒーロー殺しを探しに行くのではないか。だとすればこの位置情報は、ヒーロー殺しと遭遇した緑谷からのSOSではないのか。

美亜は手元の地図に位置情報の場所を記し、近くにいたヒーローに押し付けるように渡す。そして強いヒーローを見かけたらこの場所に来てもらうよう頼み、駆け出した。

相手がヒーロー殺しの可能性がある以上、半端なヒーローが助けに来てても犠牲が増えるだけになる。時間なら死なない私がいくらでも稼げる筈だ。この場所なら3分程度で着くだろう。それまで死なない方がいいが相手が相手だ、覚悟はしておくべきだろう。

「自ら命を危険に晒すとは……あいつはアホなのか!」

美亜は悪態を吐きながら駆ける。この位置情報がヒーロー殺しの居場所だとすれば、現場には緑谷と飯田がいる可能性は極めて高い。

飯田なら緑谷1人を抱えて逃げる事ができるだろう。だが他に襲われているヒーローがいたら、他のA組のクラスメイトが来てしまつたら面倒だ。轟か爆豪なら何とかなるかもしれないが、他の面々は危険すぎる。

正直、飯田が危険に晒されても仕方のない事だと美亜は思う。自ら復讐という道を選んだのだ。あいつもバカでは無い。兄が敗れる程の敵を相手に、まさか五体満足で帰れるとは思っていないだろう。例えばその結果が死であろうとも自分の意思が招いた結果だ。

だが緑谷は、他のクラスメイト達は違う。死地に飛び込む事は阿呆としか言えないが、死んでも仕方がないとは考えられない。

様々な思いを巡らせ走り続ける美亜は、大通りの真ん中で泣いてい

る女の子を見つけてしまった。

「嘘だろ……次から次へと何て面倒な……」

見なかったことにして無視したいが、そうもいかないだろう。膝を抱えて泣いている女の子を無視できるほど腐ってはいない。年は小学校低学年ぐらいだろうか。怯えさせないように目線を合わせ、最大限優しい声色で話しかける。

「大丈夫か？こんな所で泣いてたら危ないぞ」

女の子の両手を握り立ち上がらせ、わざとコスチュームを見せることでヒーローであることをアピールする。それだけで少し顔色が明るくなるんだから、ヒーローの影響力も馬鹿に出来ない。

どうやら少女は避難場所へと向かう途中に両親と逸れてしまったらしい。美亜は地図アプリを起動し、1番近い避難所を少女へと見せた。

「分かるか？避難所はここだ。きつとパパとママもここにいます。気をつけて行くんだぞ」

美亜はそう言い残して立ち去ろうとするが、裾の辺りに違和感を感じて立ち止まる。振り返ると、目に涙を浮かべた少女がコスチュームの裾を引っ張っていた。

（おいおいマジか……こんなことしてる場合じゃ無いのに……）

今も上がり続ける黒煙、小さな爆発音も鳴り止まない。被害の全容も敵も不明な状況では、流石に放っておく事は出来ない。しかし緑谷と飯田がヒーロー殺しと対峙している可能性がある以上、呑気に手を繋いで歩くわけにもいかない。

「しようがないか……ほら、行くぞ」

「あ、ありがとうヒーローのお姉ちゃん」

（ヒーロー……か、まさかそんな風に呼ばれる日が来るとはなあ）

美亜は少女を背中に背負い駆け足で避難所へと向かう。ここから走れば2分もかからない。幸い緑谷の位置情報からは多少逸れる程度、5分あれば彼らの元へ辿り着ける筈だ。不安に震える少女の背中を軽く叩きながら、はやる気持ちを抑えて走る。

2分程走っただろうか、次の角を曲がれば後は真っ直ぐ避難所だ。その事を少女に伝えると、ずっと不安そうに歪んでいた表情がパツと明るくなる。この少女が状況を理解しているとは思えないが、立ち登る黒煙に逃げる人達、その上に両親と逸れたら誰だって不安になるだろう。

美亜の脳裏にかおりの姿がよぎり、何故か励ましたくなった。

「怖かっただろ、よく頑張ったな。もう大丈夫——」

「どうしたの？」

突如美亜の足が止まる。美亜は不思議そうに聞いてくる少女を無視してゆっくりと地面に下ろした。

「いいか、後ろを向くんじゃ無いぞ」

「え？」

「見るんじゃねエ!!」

思わず後ろを向こうとした少女がビクツと怯えて動きを止めた。美亜は屈んで少女に視線を合わせるとその両肩をしっかりと掴む。

せつかく笑っていたのに思わず怒鳴ってしまった。怖がつて泣きそうになっている。だが許して欲しい。咄嗟の対応ではこれしか出来なかった。

「怒鳴って悪かった……こっから先は1人で行ってくれ。その角曲がったら後は真っ直ぐ行くだけだから」

しかし、少女は涙目で首を横に振った。不安と困惑、懇願が宿った繚るような目が美亜に向けられる。

「やだ……ヒーローのお姉ちゃんと一緒にじゃなきゃだよ。いっしょじゃないと怖いよ……」

こんな時どんな言葉をかければ良いのだろうか。当然美亜には人を慰めた経験などない。参考にするならあの2人、美波さんや拳士さんならどんな事を言うだろう。

「大丈夫、大丈夫だ。私の事をヒーローだと思ってくれているのなら、今度はお前がヒーローになる番だ。きつとお前のパパとママは心配してるから、お前が行って安心させてやれ」

少女は言っている意味が分からないのか、美亜を見つめたまま黙っ

てしまった。不気味な程の静寂の中、美亜は慎重に言葉を絞り出す。「実は私はヒーローじゃ無い、まだ見習いの高校生なんだ。正直今も怖いしこんな状況になって混乱してる。だから……そうだな、一緒にヒーローになろう。怖いからこそ勇気を出して踏み出してみないか」最後にオールマイトっぽさが混じったのが癩に触るが、何とかそれっぽく励ませただろうか。

美亜は恐る恐る少女の顔を見る。目に涙を浮かべてはいるものの、先程までの不安に塗れた表情と違い、僅かだが前向きな感情が見える気がする。

「お姉ちゃん、怖いのに頑張ってるんだ……すごいな……私も……頑張りたい！」

「転ぶなよ、ほら行ってこい」

美亜が少女の背中を軽く叩くと、少女は後ろを振り返る事なく駆け出した。

「頑張れよ……小さなヒーロー」

しかし美亜がその背中を見送る事は無い。決して少女に興味がないとか、飽きたとかでは無い。視線を外せない相手が眼前に居るからだ。

「——さて……待っててくれてありがとう。お前意外と物分かりが良いなんだな」

しかし相手からの返事は返って来ず、遠くから僅かな爆音が聞こえるのみ。

大きく溜息を吐いた美亜は、ゆっくりと立ち上がり背伸びをして身体をほぐした。

「そうか……ならば殺すしかないな。貴様に感情があるのかは知らんが……2度も私を邪魔した事を、後悔しながら死んでいけ」

美亜の燃え上がる双眼に見つめられ、その殺気を受けて尚、脳無はじつと佇みその虚な目で美亜を見つめていた。

第37話 血濡少女と保須事件：2

「よお！遅かったじゃねエかエンデヴァー！」

中央広場に駆けつけたエンデヴァーはミルコを一瞥し、現場の有様に深くため息を吐いた。

息子の轟焦凍と共に職場体験で保水市をパトロールしていたエンデヴァーは、突如この事件に遭遇した。

ヒーローとして活動する父親の姿を焦凍に見せるチャンスだと思気込んだが、肝心の焦凍は携帯を見ると、路地裏の住所に応援を求めた後走り去ってしまった。

本来なら自分が応援に行き、焦凍にかっこいい父親の姿を見せたい所だ。だが責任あるNo.2ヒーローとして、気持ちを押し殺して被害が甚大な中央広場に駆けつけたのだ。勿論念の為に、道中遭遇した脳無を撃退したヒーローらしきご老人に応援に行くよう頼んではいるが……

エンデヴァーが断腸の思いで駆けつけた現場は酷い有様だった。2体の脳無の内、1体は頭から地面に突き刺さり萎びたネギのように手足を投げ出している。もう一体の脳無も、うつ伏せに気絶しミルコの椅子と成り果てていた。脳無の上に座り、呑気に足をぶらぶらさせているミルコは傷一つ無い。

「ふん！俺も道中でそいつらの仲間を撃退していな。まあ所詮は雑魚敵サイラン！容易に蹴散らしてやったわ！」

「ふーん、コイツらまだ他にもいんのかよ。気持ち悪いいな」

ミルコは此方の言い訳を気にする素振りすら見せない。心ここに在らずと言った表情で反応し脳無から飛び降りると、その場から駆け出そうとする。

「おい待てミルコ！俺はこれから焦凍の加勢に行かねばならん！コイツらをほつとかれると厄介だ、お前はここに居ろ！」

「焦凍……？あぁ！美亜のクラスメイトか。お前の息子だもんな。良いじゃねエかよ此処はサイドキックに任せとけば。私も美亜を無事

に連れて帰らないと駄目なんだよ」

冗談じゃない。このエンデヴァーヒーロー事務所で職場体験をしている以上、焦凍に万が一の事があってはならないのだ。俺だけでも充分だろうが、万が一、万々が一の為にサイドキック等も連れて行くつもりだ。

エンデヴァーがミルコに言い返そうとした時、一人のヒーローが大慌てで向かってきた。

「良かった！エンデヴァーさん、ミルコさん！あの、千染美亜と名乗る少女から、この場所に実力があるヒーローを連れてくるようにと言われてまして！」

そのヒーローが持ってきた地図を見ると、そこには焦凍が言っていた住所と同じ場所が印されていた。その事実には首を傾げる二人だったが、次のヒーローの一言で空気が一変する。

「ここに『ヒーロー殺し』がいるかもしれないと言ってまして！本当かどうか分からないのですが——」お前達！この場は任せる！収まったら至急この住所に来るように！」

ヒーローの言葉を遮って、エンデヴァーがサイドキック達に指示を出す。とつくに跳んで行ったミルコの後を追うように、全速力で地図の場所に駆けつけるのだった。

「待っててくれてありがとう。お前、意外と物分かりが良いんだな」

苦し紛れに皮肉を発しながらも、美亜の思考はフル回転で打開策を考えていた。

身長は2 m程度だろうか、色こそ違いが灰色の皮膚に剥き出しの脳、筋骨隆々な身体を見るに脳無である事に間違いは無いだろう。ただUSJで見た脳無とは差異があり、目は琥珀が埋め込まれているかのよう、尖った嘴ではなく下顎が発達し目の下まで覆い隠している。まさかあんな化け物に親戚が居たとは思わなかったが、この違いは個体差なのだろうか。

問題はこいつの強さがどれ程なのかということ。最悪の場合はUSJのアイツ並みの強さであるという事だ。そうなれば最早美亜に出来る事など何も無い。逃げる事も立ち向かう事もできず一方的に蹂躪され、助けが来るのを待つだけになる。

だが、目の前の脳無は様子がおかしい。目の前で子供が背を向けて逃げ出したというのに、一切動く気配がない。こうして暫く観察しているのに今も腕をだらりと下げてただ佇んでいるだけなのだ。

(もしかして……コイツ等は死柄木とかいうヤツの指示がなければ動かないのか？ならば……)

USJ襲撃事件の際、あの脳無は何をするにも死柄木の指示を受けて動いていた。美亜を迎撃するのも、死柄木を守る為にすらも命令を必要とする程だ。理由は分からないがそういう生き物、或いは洗脳を受けているのかもしれない。

美亜は一縷の望みを掛けて慎重に一步引き下がる、脳無に反応は無い。決して油断せず、脳無から目を離さずにもう一步――

美亜の鳩尾に脳無の拳がめり込む。体内に内臓と骨が潰れる不快な音が響き、口から大量の血液が吐き出された。ゴムボールのように吹き飛ばされた美亜は、そのままビルの壁を破壊して床に倒れ込んだ。

「ガッ！オエッ！ゲボオ！」

最悪だ。美亜は口から大量の血を吐き出しながら、必死に思考を回転させる。

考えうる限り最悪の想定が当たってしまった。それはあの脳無の狙いが私であるということ。少女が逃げた際には反応すらしなかったというのに、美亜が逃げる素振りを見せた途端にこの一撃、間違いなく私を逃がさないつもりだろう。

そもそも考えてみれば、騒ぎの中心である広場からかなり離れたこの場所に脳無がいる事がおかしいのだ。敵連合がUSJの時のように混乱を巻き起こしたのであれば、尚更人的被害を起こそうと考えるはず。周囲に戦闘の形跡もなく、ヒーロー達もいなかった。まるで

突然そこに現れたかのように気配を感じたのだ。

脳無が出現したタイミング、場所、様子、全てに辻褄が合ってしま
う。唯一狙われる理由だけが分からない。

「ちいつークソがアー！」

仰向けに倒れていた美亜の視界に拳を振り上げた脳無が現れる。
咄嗟に血腕を伸ばして柱に捕まり、縮める事で拳を躲す。振り下ろさ
れた脳無の拳は、コンクリートを容易く砕き地面に突き刺さる。やは
りパワーやスピードはミルコ並みかそれ以上、まともにやり合えば勝
ち目は無いだろう。

美亜は脳無を無視してビルの外に出ると、周囲を見渡しある人物を
探す。それは敵連合の黒霧と呼ばれていた男と死柄木。

周囲の戦闘跡の無さ、突然感じた気配からして黒霧の『ワープゲー
ト』が使われたと考えるのが自然だ。そして脳無に指示を出す為に死
柄木も近くにいるはずだ。勝ち目のない脳無と戦うよりかは、大元を
叩くほうがまだ可能性がある。

「上か！呑気に鑑賞してんじゃねエぞー！」

周囲で最も高い建物に接近し、壁に両血腕を交互に突き立てて登
る。そして屋上に爪をかけて、全力で縮小させ空へと飛び上がった。

「居た……今度こそ殺す！」

屋上にいた死柄木と目が合う、黒霧も横にいる。殺意が膨れ上がり
血腕が槍状へと形を変える。

「早くも気付かれましたね、聡い娘です」

「ああ……忌々しい女だ。おい！脳無！」

死柄木に襲い掛かろうとした美亜の頭を、背後から脳無が鷲掴みに
する。そのまま腕を振り抜き、反対側のビルへと美亜を叩き込んだ。
そして屋上に降り立つと、ひとつ飛びで美亜の居るビルへと跳躍し
た。

「クソっ！あいつ速すぎるだろー！」

ガラスを突き破り、再びビルの中に放り込まれた美亜は、悪態を吐
きながら頭を押さえて立ち上がる。脳無は此方に向かって来ている、
とにかく距離を取らなければ。だが頭を強打した影響だろうか、ふら

ついでその場に崩れ落ちてしまう。

(やばっ——)

そう思った時にはすでに遅かった。脳無の拳が振り下ろされ、美亜の体とともにビルの床をぶち抜く。6階から5階へと叩き落とされた美亜に追撃の拳が降り注ぐ。

美亜は肉片と血を撒き散らしながら、次々と床をぶち抜き一階へと叩きつけられる。全身の骨や筋肉が木っ端微塵になり指ひとつ動かさない。

舞い上がる砂塵の中脳無が眼前に降り立ち、無機質な琥珀色の目と視線が交錯する。その右腕が振り上げられる。これまでには床をぶち抜きながらだったから、衝撃は分散されていたしギリギリ再生の時間もあった。だが此処は一階、これ以上逃げ場は無い。

しかし己の凄惨な状況とは裏腹に、美亜の思考は酷く冷静だった。常人であれば絶望する光景を前に、自分でも不思議に思う程落ち着いているのだ。眼に写る光景がスローに流れていく。

何だこれは、余りにも理不尽ではないか。こんな短期間に2度も襲われ、それがトップヒーロークラスに強力な化け物達で、今度は何故か私を狙っている。そんな事あり得るか？ヒーローだとか、敵を殺しまくってる奴らなら理解できるが、私はただ平穩に生きたいだけなのに……

襲われなければ反撃もしないし、関わらないでいてくれれば、わざわざ此方から関わる気もない。オールマイトを殺すだとか、ヒーロー社会を転覆するだとか、そんな事は他所でやってくれ。

私はただひっそりと、熱犬孤児院で過ごしたいだけなのに——

脳無の拳が美亜の頭部目掛けて振り抜かれる。例えば『再生』を持つていようと、個性を司る脳が潰れてしまえば2度と個性を使うことは出来ない。『美亜を殺す』明確な殺意を持った一撃だった。

「あれは……いけません脳無!!」

しかし、その一撃は不発に終わる。地から生えた無数の触手が脳無に向けて殺到したのだ。その先端が鋭利に尖っている事を視認した脳無は、大きく飛び退いて距離を取る。追撃は来ない。無数の触手は

美亜を取り囲み、球体状のドームとなってその姿を覆い隠した。

「はあ……危ない危ない。いつの間にか雄英に入った目的を忘れていたようだ」

美亜は暗闇の中で立ち上がる。不完全に再生していた腕や臓器が千切れ落ち、肉塊や大量の血が足元に溜まる。僅かに不快感を感じるが、それを遥かに凌駕する感情が心を覆い尽くす。

どうやら私は気付かぬうちに浮かれていたらしい。熱犬孤児院、雄英高校で過ごし大切な事を忘れてしまった。

それは『強さ』への渴望。皆が『個性』という強大な力を持ち、ライオン敵とかいうイカれた連中が蔓延るクソみたいなこの世界で、ようやく見つけた平穩を守る為に必要な物。最後に頼れるのは自分自身だ。美波さんを、拳士さんを、風斗を、かおりを護りたいなら私が強くなればいい。誰にも負けないように、もう二度と倒れないように。

「苦しい？辛い？……知らんな……知ったことか……そんな理由で立ち止まる訳には……いかねえんだよ！」

血溜まりから伸びた無数の繊維が足元から美亜の体に絡みつく。交差を繰り返し、徐々にその体を覆っていく。

視界が揺らぐ。まるで体が崩れ落ちるような感覚、体を構成する細胞が粉々になりそうだ。脳は全力で警鐘を鳴らし、吐き気と悪寒が全身を襲う。

胸部まで到達した時、遂に幻聴すら聞こえ始めた。誰だか知らない女の叫び声が脳に響く。必死に何かを訴えるようなその声は、限界が近い美亜の精神を削っていく。

「……めて!!おーい!!」

これ以上は危険だ。美亜の直感が全力でそう訴えかけてくる。最早意識を保つ事で精一杯。手足の感覚もなく、自分が立っているのか倒れているのかすら分からない。まるで底無し沼に沈んでくような感覚、痛みを感じぬ美亜に不快感を超越した死の足音が聞こえる。

それがどうした。やれなければどうせ此処で死ぬんだ。あの日決めた筈だ、生きる為に強くなると。

「ぐうウウ……——せエ……ウルセエ!!クソがああアア!!」

美亜の咆哮が響き渡る。突如現れた血の球体をじつと観察していた脳無は、その足を一步踏み出す。そして直ぐにその足を止める事になった。

球体が崩れていく。そこに立つのは黒の怪物。赤黒い血で染め上げられたその全身には、血管のような無数の緋色の線が走る。全身が鎧の様に覆われ、節々に生えた棘が禍々しさを増大させる。もはや化け物、それが美亜であることなどだれが分かるだろうか。兜の隙間から覗く紅の眼と、靡く藍がかつた髪が辛うじてそれが美亜であった事を認識させる。

「ああ……良い気分だ。何だろうな……今までは個性を使う度に違和感を感じてたんだ。まるで銃やナイフの様な武器を使ってる感覚が。だが今は違う。手足を動かすように、呼吸をするように——これが……

美亜はぶつぶつと呟きながら手足を動かし、全身の感覚を確かめる。個性が体に浸透していく感覚。得体の知れない気持ち悪いモノだった個性が、体の一部へと変わっていく。

「ヴオオオ!!」

脳無が吠える。遠くから美亜の変化を観察していた脳無は、恐るべきスピードでその距離を詰め美亜の鳩尾に拳を叩き込んだ。ミルコと同等、或いはそれ以上のスピードを乗せて振り抜かれた拳は、美亜の上半身を容易く吹き飛ばす

——筈だった。

脳無の拳は美亜を吹き飛ばすことも、その腹を貫くことも無い。美亜が6本の血腕を背から生やし、地面に深く突き立てることでその衝撃を分散させたのだ。

鎧の中の美亜本体には大砲でもくらったかの様な衝撃が襲っていた。余りの衝撃に僅かに後退りするが歯を食いしばって耐える。当然、美亜の体がそんな衝撃に耐えられるはずもなく、血の鎧の中では肉は潰れ骨は砕ける。それでも倒れることはない。鎧のおかげで人の形を保っていられるから、もう倒れたりしない。

「先程までより速い……か。貴様本気を出していないんだな。答える、貴様らの目的は何だ？何故こんな騒ぎを起こした？何故私を狙う？」

紅の両眼が脳無を射抜く。表情も無く黙して語らない脳無だが、纏う雰囲気は驚愕に染まりその動きを止める。その隙を美亜は見逃さない。引き絞った右腕に、背から生えた血腕が絡み合って巨大な拳となる。

「答えない……答えられないのか？まあいい！お前を排してアイツに吐かせればいいだけのことだ！」

巨大化した美亜の拳が動きを止めていた脳無に直撃する。筋繊維が千切れ骨が碎ける不快な音が響き脳無が吹き飛ばされる。殴り飛ばされた脳無は壁を突き破って道路の反対側のビルに突っ込む。ビルが倒壊し、瓦礫がその姿を埋め尽くした。

しかし美亜に油断はない。その場から大きく跳躍し脳無に接近、空中で祈る様に両手を組み、大きくのけぞって振り上げる。両血腕と背中の血腕が絡み合い巨大な鎚を作り出す。再びブチブチと音が鳴り、限界まで引き絞られた両腕が瓦礫諸共脳無に向けて振り下ろされた。

轟音が鳴り響き瓦礫と砂埃が宙を舞う。更に振り下ろされた両血腕を切り離し、瞬時に新たな腕を生やす。背から生えた6本の血腕が、追撃とばかりに瓦礫に埋もれたままの脳無に降り注ぐ。一撃一撃が爆発でも起きたかの様な轟音を鳴らし、次々と地面が抉れていく。それでも追撃の手が止まる事はない。

美亜の眼は紅く紅く爛々と輝き、脳無が居るはずの一点を見つめ続けていた。

「おい黒霧……先生が言ってたのはあれか？」

美亜と脳無の戦闘をビルから観察していた死柄木は、興味などないかの様に平坦な声色で問いかける。目下の戦闘は一方的なものとなっていた。爆撃の如く降り注ぐ血腕、脳無が突っ込んだビルは最早跡形もなく、粉塵が舞い地面が抉れてしまっている。

「あれが先生の言っていた……成る程、そういう事ですか……」

死柄木は明らかに劣勢にも関わらず、余裕の態度を見せる黒霧に苛立ちを覚える。

最近ずっとだ、ずっと僅かな苛立ちが蓄積している。黒霧は何か俺の知らない事を知っている。最近、先生と何かコソコソと話している事が多い。そして先生も先生だ。口を開けばあのクソ女の^美ことばかり。今回の作戦だって元々死柄木自身は納得していない。果たしてあの女に先生に目を掛けられる程の価値があるのか。

「ああ……クソクソクソ……気に食わねエ……何もかも……気に食わねエぞクソが……」

一方黒霧は首を掻きむしり始めた死柄木に気付かず、眼下で繰り広げられる戦闘に集中していた。

流石は特別な脳無というべきか、あれだけの猛攻撃を受けてもその隙を縫って抜け出し距離を取る。再生能力によりその体に傷は無い。しかし美亜も追撃の手を緩めない。背中の血腕を飛ばして絶えず攻撃しながら脳無を追いかける。その姿は正に縦横無尽、地を駆け、跳躍し、壁を蹴り最短ルートで脳無に肉薄する。再び脳無が捉えられるのは時間の問題だろう。そしてタイムリミットもそろそろだ。

今回、美亜が保須市にしていると知った先生から黒霧に命じられたミッションは2つ。1つはあの脳無を1対1で美亜と戦わせること、そして2つ目は脳無を確実に連れて帰ることだ。その為に中心部で騒ぎを起こし他のヒーローを引き付けた。だが、そろそろ騒ぎを聞きつけたヒーローが駆けつけて来てもおかしく無い。エンデヴァーやミルクが来ると面倒だ。

黒霧が脳無を回収しようと動き出したその時、その首を4本の指が掴む。

「ムカつくよなあ……イラつくよなあ……おい黒霧、知ってる事全部話せ。そうしねエと……殺すぞ?」

黒霧は背後から刺す様な殺気を感じ思わず冷や汗を流す。戦闘に意識が集中し全く気付くことが出来なかった。死柄木がブチ切れており、今にも個性『崩壊』を使いそうな程腕に力がこもっている。

しかし今はそれどころではない。眼下では刻一刻と脳無が追い詰

められている。美亜の攻撃は苛烈さを増し、周囲の建物や地面を砕きながら力を奮っている。このままでは脳無が殺されるかもしれない。「どうか落ち着いて下さい、事が済んだら全て話しますから。このままではまずいのです。あの脳無が失われれば先生の計画に支障が出てしまう」

だが、死柄木はその手を離そうとしない。やはり先生の計画を知らされていない事、先生の注目が千染美亜に移っていることが気に食わないのだろう。

勿論、ある程度ならばここで話す事に問題はない。だが今は一刻の猶予もないのだ。黒霧の想像以上に特別な脳無は弱く、そして美亜が強くなり過ぎた。

「よく考えて下さい。先生の計画は全て貴方のため。ここで頓挫すれば将来困るのは死柄木、貴方自身なのです。怒る気持ちも分かりません。ですがここはどうか……どうか堪えて下さい」

死柄木の手が緩んだ隙に美亜達に視線を向ける。脳無は四肢と胴体を掴まれ最早逃げる事はできない。そして歩み寄る美亜、その両腕が混じり合い一本の巨大な太刀と化す。

「まずい……い……」

黒霧は個性『ワープゲート』を使い脳無の救出を図る。だが間に合わない。美亜の両腕が振り上げられる。脳無は抵抗する事なく、その琥珀色の無機質な目で美亜を見つめていた。

そして、赤黒い太刀が脳無を両断すべく振り下ろされた。

「は………」

呆然としたどこか間抜けな声が、荒れ果てた戦場に響いた。

第38話 血濡少女と保須事件：3

「待て！逃げるなクソ敵！」^{サイラン}

ビルの壁から壁へと飛び移り脳無を追い立てる。肉体の限界を超えた出力にブチブチと筋繊維が切れる音が体内に響くが気にしない。どうせ痛みなど感じないのだ。着地した美亜はコンクリートを踏み碎き跳躍する。

背から生やした6本の血腕は自在に動き脳無を追い立て、跳躍した衝撃によって千切れた筋繊維は瞬時に再生する。6本の血腕を自在に動かしながら自身の再生能力もフルに活用する、少し前の自分なら考えられない程の個性の出力だが何故かそれが出来る。

血で全身を覆った時に感じた壁を壊した感覚、不快に感じていた自分の個性がよく馴染む。

（なんととしても……なんととしてもアイツは殺す！私の直感が告げている、殺さなければならぬ！）

血腕の一本が脳無の右腕を掴む。驚いたのか脳無の動きが止まった一瞬の隙を見逃さない。残った四肢と胴を次々と掴み、遂に捕縛に成功する。逃げる事はおろか最早腕一本すら動かす事はできないだろう。

ミルコ並みのスピードとパワーを持つ脳無を捕縛したことは、本来学生である美亜にとって驚くべき成果である。しかし今の美亜にそんな事を考える余裕など無くなっていた。

（殺す……殺す……殺す……殺す、こロス、こロス）

内から沸々と湧き上がる衝動。得体の知れないそれに突き動かされるように一步、また一步脳無へと歩み寄る。一方脳無はじつと美亜を見つめ、その姿が眼前に迫っても諦めたかのようにただ跪いている。その姿はまるで懺悔する敬虔な信徒のよう。

両血腕が巨大な太刀へと変わり、脳無の頭蓋を目掛けて振り上げられた。

もう逃がさない。いくら『再生』を持つ脳無だろうと脳を真っ二つ

にされれば無事では済むまい。鋭く、より鋭く、確実に命を奪う為に薄く強固に形成された血太刀が、淀んだ曇り空の下紅く煌めく。

内なる衝動が突き動かす。能面の様な美亜の表情に紅の両眼だけが爛々と輝き色を放つ。

『殺せ！』

そこには何の躊躇も無い。突き動かす衝動のままに、美亜の血太刀が脳無の頭蓋を目掛けて振り下ろされた。

「は……………？」

致命の一撃が空を切る。美亜の両血腕が作った太刀は宙を舞い、遙か後方にドサリと音を立てて落ちた。

驚愕に開かれた眼で自分の腕を見る。手首から先が消え失せ、美しい断面からは今にも吹き出しそうな血と肉が見える。

美亜の思考が瞬時に動き出す。切り飛ばされた……………誰に？いや、一人しか有り得ない。目の前の脳無だ。脳無の右腕が鋭利な刀へと変化し、捕まえていた血腕諸共切り飛ばしたのだ。

「お前ッ！」

想定外の事態に悪態を吐いた美亜は、袈裟斬りに振るわれた追撃を躲し脳無から離れるべく強く地を蹴り上げた。

やはり個性を隠し持っていた。体の一部を鋭利な刀へと変形させる個性だろうか。今はそれによって両腕が刀へと変わっている。

だが、美亜が驚愕した理由はそれでは無い。この個性『刀』に見覚えがあるからだ。勿論同一、あるいは類似する個性など幾らでもあるだろう。しかし先程から美亜を突き動かす得体の知れない衝動が、直感の様な何か、最悪の可能性を想起させる。

(まさか……………いや……………あり得ない！あり得るはずがない！あの時、確かに私が……………この手で！)

美亜が距離を取るため宙を跳びながら思考を巡らす僅か1秒、全力を出した脳無にとっては十分過ぎるほどの時間であった。

脳無の姿が掻き消え、次の瞬間には美亜の首を掴む。そのまま美亜

に反撃する隙も与えず地面に叩きつける。コンクリートが砕け破片が宙を舞う。

美亜に馬乗りになった脳無は、両腕を刀へと変形させ美亜の肩口へと突き立てる。刀は血腕を切断して地面へと深く深く突き刺さった。これでは断面に密着した刀が邪魔になり再生が阻害されてしまう。

「ぐっー」

叫ぼうとした瞬間、脳無が右脚の足裏から刀を生やし血の鎧ごと美亜の鳩尾を貫く。脳無の全体重を受けた鎧は砕け、肋骨が粉碎し内臓が潰れる。内臓が傷つき逆流した血液が喉を塞ぎ、一瞬のうちに反撃どころか声を出すことすら封じられる。

（強すぎるー！力も速さもミルコ並み……それ以上か？完全に見誤った……クソっ！動けない！再生もできない！どうする……どうする！）
ありったけの憎しみを込めて脳無を睨みつけるが、そこに違和感を感じる。脳無から追撃する気配を感じないのだ。僅か数秒の内に美亜の動きを完全に封じた脳無は、その琥珀色の目でじつと美亜を見つめているだけ。

その違和感の正体を探るべく、美亜は思わずその目と視線を合わせてしまった。脳無の無機質な琥珀色の目に朱が混じる。

「……………ア……………」

脳無の顎が僅かに上下に動き、そこからテレビの砂嵐のような不快感を掻き立てる音が漏れる。

「ミ……………ア……………ミア……………美亜……………」

瞬間、美亜の全身を悪寒が駆け巡った。ずっと感じていた違和感が、衝動が、予感が、全てのピースが一致する。そこから導き出されたのは最悪の答え。

「お前……………っ!!お前はッ!!」

No. 8 ヒーローの片割れにして美亜の里親。7年前、世間を震撼させた「ヒーロー夫婦虐殺事件」^{ちぞめ つるぎ}によって死んだはずの男の名は――

「何故お前が生きている――千染 剣ー」

脳無――千染剣の拳が唸りを上げて美亜の顔面に振り下ろされた。幸か不幸か、美亜の意識は恐怖を感じる間も無くここで途切れた。

「いや……いやだよお………」

漆黒に包まれた地下室に少女のすすり泣く声が響く。それは抵抗や反抗の意思を感じさせない、媚びるような、心の折れた人間の発する泣き声だった。

少女は分かっていた。ルーティンのように幾度となく繰り返される暴力の時間、その時がそろそろ訪れる事を。冷え切ったコンクリートと自身を囲む檻しかない空間で、繰り返されるその時間だけが少女の意識に強く刻まれている。

だから泣く。僅かでも、ほんの僅かでも、あの2人に同情の心が残されている可能性に縋ることしか出来ない。

4歳の少女にとって異常な環境、だが他に何も知らない少女にとってはこれが世界の全てだった。悔しさは感じない。恨むのは常に自分自身、悪いのは無力な自分自身なのだから。

もつとも、虐待の度合いは同情の心に依らず、彼等の表の仕事による疲れに左右されているのだが……それを少女が知る術はない。

鋼鉄のドアが不快な金属音を響かせながら開く。漆黒の地下室の全容をランタンが明るく照らし出す。

少女の目は暗闇に慣れすぎてしまい侵入者の姿は眩しくて見えな
い。だが足音は1人分。ここに単身で来るのはあの人しかない。

「――始めるか」

地下室に男の声が響く。無機質で、冷徹で、何の感情も籠っていない声だ。

「やだよお……どうして……どうして………」

これから起こる凄惨な光景を想像した少女の口から、絞り出すように悲痛な声が漏れる。

「……何で？変なことを聞くなよ。いいか、全ては正義の為、より良き世界の為。お前は危険だから、使えるようになるまで調教しなければならぬ。はあ……こつちの苦勞もわかって欲しいな」

男が天を仰ぎ見る。これから行われる残酷な行為が義務であるかのように真面目な顔をしているが、その両目だけが赤く爛々と猟奇的な輝きを放っていた。

「まあいい、いつかきつと今日の日々を振り返って感謝する時が来るだろう。いいか、その力を正しき目的のために、善の為に振るうんだよ。おつと……話しすぎてしまったな。それじゃあ始めようか……私の美亜化け物よ」

「ぐすつ……うう……いやだ……やめて……」

振り上げられた脳無の拳が止まる。美亜の目から大粒の涙が溢れ出す。意識はとうに途絶えた筈だが、まるで悪夢に唸れているような苦しげな声が聞こえる。

脳無は不思議そうに首を傾げると再びその拳に力を込める。今度は確実に意識を奪う為に。万が一のことがあってはいけない。

目の前の美亜に夢中になるあまり、脳無は自身の脇腹に当てられた拳に気付く事が出来なかった。

「犬千代流拳術——」

踏みしめた両脚がコンクリートを踏み砕き地面に沈む。その衝撃を体の内に残し、全身の筋肉を使い体内で増幅させる。膨れ上がる衝撃に筋繊維が膨張し筋肉が軋んで悲鳴をあげる。感覚を研ぎ澄まし衝撃を外に逃さないよう筋肉をコントロールする。

連綿と受け継がれてきた犬千代流拳術の中でも、奥義とも呼ばれる超高等技術を要する一撃。長すぎたブランクによって本来であれば扱える代物では無い。それでも美亜家を救う為に、そう思うと力が溢れる。

この技は破壊に特化した型。踏み砕いて得た衝撃を自身の筋肉によって増幅させ、拳の一点に集めて放つこの技は世間一般では発勁と呼ばれる。だが、発勁も彼女の異形型個性によって強化された力を使

えば恐るべき威力へと変わる。衝撃が解放された時に放たれる轟音が、まるで咆哮のように聞こえることから名付けられた技の名は――
「吠咆!!」

轟音が鳴り響き、衝撃で地が揺れる。発勁が脇腹に直撃した脳無は吹き飛ばされ、遙か遠くのビルに突っ込んで砂埃を上げた。

「お前ツ……!お前!!ウチの美亜に何してんだ!!」

熱犬孤児院副院長、犬千代拳士の怒りの咆哮が響き渡った。

第39話 血濡少女と保須事件：4

「美亜っ！大丈夫か!?……おい！」

脳無を吹き飛ばした拳士は慌てて美亜に駆け寄り声をかける。

幸い生きてはいるようだが美亜の状態は最悪だ。顔面蒼白で呼吸は非常に荒い。何かになさされているかのように眉間に皺がより、呻き声を漏らしながら涙を流し震えている。

意識はないようだが幸いにも個性は機能しており、再生とはいかないが切断された腕の断面や貫かれた傷は塞がりつつある。

心配なのは精神面だ。明らかに異常な怯え方をしている。ヴァイラン敵と接近したことで過去のトラウマが掘り起こされた可能性がある。病院に連れていかなければまずい。

「ワンちゃんー危ない!!」

「——え？」

拳士は美亜に気を取られすぎていたのだろう、拳を振り上げ飛びかかって来る脳無に気付く事ができていなかった。

現役時代の拳士であれば絶対にあり得ないミス、目の前の敵から意識を逸らしてしまった。7年前の現役時ならば、並外れた戦闘センスと個性による嗅覚、聴覚によって隙など無かった。だが長年のブランクがその勘を鈍らせ、致命的な隙を生んだ。

自分一人なら躲せる速度、だが美亜がいる。咄嗟に拳士は美亜に覆い被さった。

体の芯から燃えるような熱を感じる。久しぶりの感覚に恐怖を覚えるが躊躇はしない。生み出された熱が血管を通して右手に集まっていく。

右手から発する熱波を緻密に操り、脳無と拳士の間に僅かに視認できる透度のバスケツトボール大の球体を生成する。

熱の外殻によって凝縮された大気が、球体の中で暴風の如く渦巻く。熱波の温度や位置を微調整し更に圧縮していく。

(もつと……もつと速く！もつと圧縮を！)

1秒にも満たない一瞬の時が途方もなく永く感じる。

現役時代とは違いサポートアイテムは無く、腕が燃えるように熱い。要求される個性の精密動作に脳をフル回転させる。

(圧縮……圧縮……今ッ!!)

迫り来る敵に向け熱殻に穴を開ける。渦巻いていた膨大な大気が外へと殺到し、必殺の槍へと姿を変える。

『熱核生成——風槍！』

研ぎ澄まされた一閃が脳無に直撃しその体を吹き飛ばす。

暴風が生み出す轟音を聞いた拳士はそれが誰の個性かを瞬時に理解する。現役時代幾度となく隣で聞いていた美波の技だ。

「助かった、ありがとう！」

「油断大敵よ、私達にはもうあの時程の力は無いんだから」

駆け寄ってきた美波の右腕がだらりと垂れ下がっている。熱を持って赤みがかかったその腕は先程の技による反動だろう。コスチュームの冷却機能が無いとはいえ、昔なら数十回は打てた筈だ。拳士自身の『吠砲』もそうだが7年のブランクは想像以上に大きいようだ。

「そうなんだけど……とはいえ全身の骨バキバキにする覚悟で打ったんだけどなあ……なッ！」

その時、瓦礫を持ち上げながら脳無が立ち上がる。吠砲と風槍が直撃した筈だが傷一つない。

「おいおいマジか……まだ立ち上がってくるのかよ」

「あれがマイク君が言ってた脳無ワイランって敵じゃないかしら。見た目も似ているし、異常な耐久力も『再生』を含めた複数の個性を持っているなら納得できるわ」

拳士の頬を汗が伝う。だとすれば相当不味い状況だ。マイクの話ではオールマイト並みのパワーとスピード、更に『再生』『衝撃吸収』を含めた複数の強力な個性を持った怪物のはず。

気を失っている美亜を護りながらそんな怪物と戦うのはあまりに無謀。だが逃げたとしてもオールマイト並みのスピードがあれば直

ぐに追いつかれてしまうだろう。

ならば打つ手は一つ。

「一緒に守るぞ！美波!!」

腰を低く落とし脳無を睨みつけ覚悟を決める、何としても美亜を守り抜く覚悟を。

並び立つのは最も信頼している大親友、美波となら何だつてできる気がする。昔からそうだ、どんな困難も二人で乗り越えてきた。

7年前味わった己の無力さを噛み締める。5年前に硬く結んだ近いを奮い立たせる。魂を失い抜け殻となった少女を見た時に誓ったんだ、もう二度と同じ過ちは繰り返さない。

「ワンちゃん……美亜を連れて逃げて。ここは私が時間を稼ぐから一刻も早く美亜を安全な場所へ。それとその後ミルコを此処に呼んで。多分何処かで別の敵と戦ってるか救助してると思うから」

「ちよ、ちよと待て！何で!?!」

淡々と指示を出す美波の言葉を思わず遮ってしまう。頭ではそれが最善策である事など分かっている。恐らく私と美波で脳無を退けるのは不可能だろう。あくまで最終目的が美亜を守ることならば、身体能力が高い自分が逃げて美波が時間を稼ぐのが最善策だ。

けれど心はその策を受け入れられない。美波のそんな言葉は聞きたく無かった。どんなに無謀でもいいから「一緒に戦おう」と言っただけ欲しかった。

「美波！私も——お願い、私を信じて」

こちらを見ることなく、脳無から目を離さない美波の真剣な眼差しが、覚悟が決まった横顔が、最高のヒーローを目指していたあの日々を想起させる。

(その言葉は……ずるいじゃないか……)

そして美波がその言葉を言う時はどんなピンチだつて乗り越えてきた。誰よりも強く優しい美波がそう言うんだ、他ならぬ私がそれを信じられないはずがない。

(いや……違うな。分かっているから言ったんだ。美波は誰よりも……優しいから)

だとすれば私に出来ることは一つだ。美波が少しでも安心できるように、敵に集中できるように一刻も早く美亜を逃す。

「分かった、美亜は任せてくれ！……必ず戻る！」

やはり脳無の狙いは美亜なのだろう。脳無は立ち塞がる美波の横をすり抜け、美亜を背負った拳士に襲いかかってくる。

だが立ち止まりはしない、必ず大丈夫だから。最も信頼できる友人が任せてと言ったのだ。私はただ美亜を逃すことに集中していればいい。

拳士は迫る脳無を一瞥することもなく、避難所へ向けて駆け出した。恐るべきスピードで拳士に迫った脳無が刀を振り上げる。

「貴方の相手は……私よー！」

脳無と拳士の間生成された熱核が解き放たれる。

『風槍』が直撃した脳無は大きく吹き飛び、地面に叩きつけられ膝をついて着地した。

美亜を追うことは不可能だと考えたのか、美波を脅威と認識したのか、感情の見えない瞳からは判断できない。だが、その視線が初めて美波の方へと向けられる。

脳無の無機質な瞳から途方もない威圧感を感じる。先程までは本気でも何でも無かったのだろう。理由は分からないが手加減をして美亜と相対していた。だが、遂にその力を解放した。

間違いなく今まで相対した敵の中でも最上位の相手だろう。少しでも気を抜けば命を失うかもしれないのだから。

当然死ぬ覚悟など出来ているはずもない。足は震え心臓は恐怖で高鳴っている。

それでも戦う理由ならある。覚悟など出来ていなくても力が湧いてくる。

「私は決めたの、あの子たちだけは絶対に守るって。だから……ごめんなさい、貴方をここで倒させてもらおうわ！」

「おい黒霧……誰だよあいつらは、ヒーローか？」

「誰でしようか……コスチュームを着ていませんからヒーローではないかと。何方にせよ良かったです、あの2人が止めなければ美亜が死んでしまっていたかも知れませんが」

「で、どうすんだよあいつら。面倒くせえ……殺すか？」

「それもいいかもしれませんがね。あの脳無は特別らしいですから、その全力を知って損はありません」

死柄木の眼下では美亜を担いだ1人が戦線を離脱し、残された1人が脳無に立ち塞がっている。

大方負傷者^美を逃すために時間を稼ぐつもりだろう。学生である美亜が死ななかつたのだから脳無を侮っているのかもしれない。

死柄木の口角が楽しげに歪む。ただの一般人が人命を救出するために敵に相対する。吐き気がする程に崇高な精神だ。

だが飛び込んだ先が死地だと気付いた時、何を叫び、何を思い、何を呪って死んでいくのか。

「決まりだな……脳無、そいつを殺せ」

第40話 血濡少女と保須事件：5

「っ!!熱核生成——風槍!」

美波の放った不可視の槍が脳無へを吹き飛ばす。何度も何度も繰り返し突っ込んだビルが崩壊し、大量の瓦礫が脳無を埋め尽くした。

「お願い……もう立ち上がってこないで……ぐうっ!」

両腕に激痛が走り、美波は思わず膝から崩れ落ちる。熱を持ち過ぎた腕は燃えるように赤く染まり、湯気が立ち上るほどの温度に達している。

無理もないだろう。恐るべき再生能力を武器に何度も何度も襲いかかってくる脳無に対し、既に20発以上の風槍を打ち続けている。その間排熱することもなく熱され続けた腕に限界がきてしまった。

美波の個性『熱波』、その最大の弱点は熱が体内を駆け巡ることにある。特に熱波を発する腕や手には膨大な熱による負荷がかかってしまう。

恐らく後1・2発、それ以上個性を使ってしまうえば神経が焼き切れて両腕が再起不能になるか、或いは溶解して原型を失うかだ。

しかし、そんな美波の祈りを嘲笑うように瓦礫の中から脳無が立ち上がる。風槍を受け続けたにも関わらずその身体には傷一つない。

並みの敵であれば一撃で意識を刈り取り、再起不能にするレベルの攻撃を数十発受け続け尚も無傷。それは美波の攻撃では到底敵わない敵である事を鮮明に物語っていた。

必殺技を除いて——

「そう——これでも駄目なのね……」

涙声で呟いた美波は両手を脳無に向ける。

今から使う技は私が忌み嫌ってきたこの個性の最強にして最凶の用法。

その技の名を

『命核融解』
メルトダウン

特別な訓練や技術など必要ない、ただ全力の熱波を対象に叩き込むだけの技だ。

人体は42℃以上で10数時間程度、44℃を超過すれば更に短時間でその生命活動を終える。生きている以上、人間だろうが脳無だろうが限界体温は必ずある。そんな生命体にコンクリートすら容易く溶解する全力の熱波を叩き込めば、結果は明らかだ。

あらゆる生命は瞬時に絶命し、その痕跡すら残さず溶解し蒸発する。

それこそが美波の文字通りの必殺技、不可視の熱波によって行われる不可避の虐殺は英雄には相応しくない。

幼い頃に個性が暴走し、目の前で溶解していく命が美波の心に深い傷を負わせた。

だからこそ美波は強い誓いを立てた、決してこの個性を生命に向けないと。その誓いを守るために血が滲むような努力を積み上げてきた。『熱核生成』もその一つ、あれ程の精密動作を成すために何度も気を失い、血反吐を吐きながら修得した。

そうして歩み続けた私に皆は期待と羨望の眼差しを向けてくれた。気が付いた時、後ろには沢山の憧れてくれる人達が居た。『慈熱の美波』そんな二つ名で呼ばれ出したのもその頃だった。味方を守り、敵すらも無傷で無力化する、そんな私を高潔な精神の持ち主だと誰もが称えた。

「ごめんなさい、それでも貴方をここで止めなきや行けないの。貴方を生かしたら……きつとまたあの子を襲う」

皆に慕われる度に人を容易く殺せるこの個性が怖くなっていた。本当はただ怖かっただけなのに、この個性から逃げ続けただけなのに。それでも期待に応えたい、そんな自己中心的な思考で個性を磨き続ける自分が嫌いで、誰かに横に並んで歩いて欲しかった。

そんな時に拳士と出会った。あの真っ直ぐさに、私には無い眩しい程の情熱に照らされて、私は前を向くことが出来た。

今、私にはずっと守ってきた誓いを凌駕する程の覚悟がある。

(だから……もう見たくないのよ。貴方が剣さんと戦い、傷つけ合う

ところを)

脳無と戦う内に気付いてしまった。あの脳無は私達の師である劍さんだ。戦い方、体の動き、『劍』の個性、そして何よりこの胸騒ぎ。英雄高校在学時からサイドキック時代の7年間、ずっと憧れ続け背中を追い続けたヒーローを見間違えるはずなどない。

7年前、『ヒーロー夫婦惨殺事件』で命を落としたはずの劍さんが、何故生きているのか、何故あんな姿になっているのか。理由は分からないがやるべき事は決まっている。

「だから今度は止めるだけじゃない……殺す！もう二度と貴方に人は傷付けさせない！」

(変よね。あんな酷いことをしていったっていうのに、あんな事をした筈なのに……私はまだ貴方を尊敬している。だからせめて私の手で

――)

美波は真っ直ぐに脳無を見つめる。その目には憎しみや敵意は宿っていない。あるのは悲しみ、そして感謝のみ。

美波の両腕が真っ赤に輝き出す。膨大な熱が体内を駆け巡り手のひらへと集中していく。

「さようなら劍さん……」

『命核融』
——

『月弓砲!!』
ルナブラスト

一線、弾丸のように飛び込んできたミルコの跳び蹴りが脳無に突き刺さる。

吹き飛ばされた脳無は建物をいくつか貫通し、崩壊して降り注ぐ瓦礫に埋もれた。

「……え……ミルコ？」

「てめエ……美波さんをよくも傷付けやがって。覚悟しろよクソ敵
がよオ!!」
ライラン

「美波！遅くなつてごめん!!もう大丈夫だ！」

突然の乱入者に困惑する美波の視界に、懸命に駆け寄ってくる拳士が見える。

一歩間違えれば絶命する緊張感の中で戦っていたからだろうか、親友の顔を見た瞬間全身の力が抜け倒れ込んでしまった。

優しく抱き止めてくれた拳士の暖かさに包まれながら、徐々に意識が遠のいて行く。

「良かった……今度はちゃんと……守れたかなあ……」

「ああ……ああ！今度こそ守れたんだ！だからしつかりしろ！すぐ病院に連れて行くから！」

涙と汗でぐちゃぐちゃになった拳士の顔を見ながら、美波の意識は闇の中へと沈んでいった。

「潮時でしよう死柄木、撤退です」

「はあ……おい、本当にアイツは特別性なのか？見ろよ、あんなど素人1人殺せねエ」

死柄木が露骨に不機嫌になっている。当たり前だ、黒霧自身も驚いている。先生が特別性と呼んでいた脳無がヒーローでも無い女性を殺せなかったのだ。

驚くべきはあの女性の強さか、脳無と1対1で10分以上もの間を凌ぎきり、ミルコが到着する時間を稼いだのだから。

「それでも目的は達成できました。ミルコが脳無を捕獲する前に戻りましょう」

美亜とあの脳無を戦わせる、その目的は達成できた。後はヒーローに捕まる前に脳無を無事に返せばミッション完了だ。

「クソが……クソツッ！気に入らねエ！」

（あの2人……何でしようかこの胸騒ぎは）

首を掻きむしる死柄木と瓦礫に埋もれた脳無を『ワープゲート』に無理矢理入れながら、黒霧は味わったことの無い胸騒ぎを感じたのだった。